

ヘステイアファミリアが最強になるのは間違ってるのだろうか

ぐれむりん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

迷宮都市オラリオに元日本人の少年が来た、彼は持っていた地図を手掛かりにヘステイアファミリアの本拠地へ向かうのだった

本来公開する予定は無かったのですが、設定ミスで一部が公開されて運営から必須タグの警告メールを見て初めて公開されている事に気が付き全て公開する事にしました

最終話まで予約投稿済みで順次公開していきます

めんどくちやいので修正などはしません、誤字脱字は脳内変換でお願いします

目次

ファミリア	1
恩恵	5
衝撃緩和のリング	18
亀裂	30
リリルカ・アーデ	38
借金返済	70
魔法	80
レフィーア	93
ロキファミリア	106
Lv2前編	120
Lv2後編	134
大魔導士	143
クエスト	160
黒いゴライオス	167
後処理	192
ひまわりの神様	205
修行の成果と宴	219
小遠征という名の超修行	233
大魔王降臨	253
マフィファミリア発足	259
決着	277
新たな世界へ	287
永年の旅	305

フアミリア

「この角を曲がった先かゝ・・・」

迷宮都市オラリオの町を、簡単な地図を片手に移動するのは、地球から転生者の男

彼に手渡された簡易地図は転生時に貰っていた物の1つだ・・・とはいうものの他に貰ってきたのは数日をどうにか過ごせる貨幣と身に着けている衣類などだけ、普通は特殊な装備やスキルなんか貰ったりなんかしてヒヤツパー転生者人生とおもいきや、世の中そう甘くはない

本人も数日過ごせるだけの貨幣があるだけでマシだと無理やりに気持ちを抑え込んでいた

「ノックしてもしーしー!」

簡易地図に載っている建物の前で立ち止まり、扉に触れることなくノックする、今にも崩れ落ちそうな建物に触って方が一にも壊れてしまわないようにする為の対処法だ

「うゝ・・・ん留守なのかな?」

何度か声をかけたが反応がない、目を改めようとしたその時

「あ・あのゝ?」

振り向くと声をかけて来る少年がそこに居る、俺は心の中で「やっとか」と思わざる得なかった

「すいませんお尋ねしたいのですが、えゝと・・・」

地図に書いてある内容をもう一度確認して話を進める

「へ・・・す・・・ていあふあみりあ? って本拠地はここになるのでしょうか?」

俺がそう尋ねると、彼は不思議そうな面持ちで

「はい、本拠地って呼べるのか分かりませんが神様に用事ですか?」

「そうなんですよ、えゝつとふあみりあとか言うのに加入試験つてのを・・・受けさせて貰いに来たのですが取り次いで貰えませんか?」

「なっ!!」

「な?」

「本当ですか?!待っててください今すぐ呼んで来ますー!!」

彼は扉を勢いよく開けるとドタバタと中へ入って行くと、ものの数秒で小柄目の彼を遥かに凌ぐ、小さな少女を連れて来てくれた

「君かい?!僕達のファミリアに入りたいという子供は?」

子供に子供って言われるとは・・・なんなんだ、気にしたら負けなんだろうしエターナルロリーターの可能性だってある、なんとって地球とは違うんだしね

「はい、この街に来たばかりで手がかりがコレしかなくって、よろしく願います」

「なんだいこの文字は、地図らしき物は分かるけど君は随分遠くから来たみたいだね」

「はい、それで加入試験するのは受けさせてもらえそう何ののでしょうか?、資金もヤバいので出来れば近日中にして貰えると助かるのですが・・・」

ここで白髪の少年は彼女に

「うちって試験ないですよ?神様」

あーやっぱこの女性が女神ヘステイアなんだく本当に見た目人間だよなあ〜などと不敬な事を考えていると

「君は誰にボクの事を聞いたんだい?こういつては何だけど僕は結構マイナーな神なんだ遠くの地にまで轟くような神じゃないんだ」

「あー神様く自分でそういう事を言うのは自滅なんじゃ・・・?」

白髪の少年は必死に女神を庇っている、なぜか彼の苦勞がたったこれだけで垣間見えた気がしてしまった

「俺の所では女神ヘステイアといえばオリュンポス12神が1柱で有名ですけど、ここでは違うのです?」

「なんですかそのオリュンポス12神ってのは」

「全部が全部知ってる訳じゃないけど、ゼウスとかヘレとかアテナとか・・・なんか格の高い神の称号だったような、あんま俺も信仰心うっすいからアレだけど、そんな俺でもヘステイアの名前なら知ってるくらいだぞ」

「ええええー神様ってそんなすごかったんですか?!」

白髪の少年は女神を見てのけぞりながら驚きまくってる、こいつも結構アレなんだな・・・そう思うのだった

「そのオリュンポスってのは分からないけど、見た通り僕はそんな大層な神なんかじゃないんだ、ヘル君と2人でなんとかその日暮らしをしてる神なんだ」

「それはベルさんでしたっけ?彼のせいであつて事なんですか?」

「はうろう・・・ボクだって・・・」

「ちがうさベル君!君のせいなんかじゃない、君言い方つてもんがあるだろう」

「申し訳ありませんでしたベルさん」

「いいですよ気にしないでください、それより立話もなんですから中へ来ませんか?」

ベル君の一言で案内された部屋?地下牢獄?な感じの部屋へ案内される、スラムと言つてもいいような内容の部屋だが気にする事無く床に座り

「それで試験は何時になりそうですかねえ??」

少し機嫌が悪そうな女神に、恐る恐る聞いてみると、ベル君が

「特別試験なんか無いですよ、ボクだって神様からそう言った事は無かったですし」

「そうなんですか?」

「うん」

「いやベル君、黙つててくれないか?試験は今も続いているんだ、マフィ君最後の質問だよ、君は迷宮都市オラリオで何がしたいんだい?」

「まずは生き抜くだけの知恵と力が欲しい、それが出来たら色々な事がしたい自分の可能性を知ったり仲間と競い合い笑い合いたい、そして最後に「我が人生に一片の悔いなし」ってどこかの拳王様みたいに拳を上げて死んでやりたいですね」

彼女は俺をじーっと見つめると腕を組んで何かをブツブツ言い

ながら考えると

「分かったよ君を眷属として認めるよ、よろしく頼むよマファイ君」

「はい神様よろしくお願いします」

「やったー!」

白髪の少年ベル君は両手を上げて喜び、俺の手を握って大はしやぎするのだった

話が一段落すると、話に移り変わって

「それにしても今日はいつもより早かったんだねベル君」

「はい、ちよつとダンジョンで死にかけちゃって」

「おいおい大丈夫かい？痛くないかい？君に死なれたら僕はかなりショックだよ」

「何かあつたんです？」

俺がそう尋ねると、ベル君は居るはずのないモンスが低層まで来て襲われたとの事だ、やっぱそう言うのあるんだね・・・お決まりって奴か、つと思うのだった

食事が2名分しかないとの事なので、自分で用意していた食事を取り出し3人で食事した後

「マファイ君は明日からダンジョンに行くの？」

「分からないことだらけだから先輩がレクチャーしてくれるなら軽く行きたいですね」

「うん！一緒に行こう」

「よかったねベル君、後輩が出来て」

「はい神様あしたからも頑張ります!」

こうしてヘステイアファミリアに新たなメンバーが加入するのだった

恩恵

目が覚めると、一足先に起きて朝練へ向かったベル君は部屋にはおらず、主神と二人きりの俺

何かあったのか主神の機嫌が悪い・・・何があったんだなどと聞ける訳もなく

「起きたかいマファイ君！こっちにおいで」

呼ばれた俺は主神である女神ヘステイアの前に

「いいかい、君に頼み・・・いや神命だよく聞くんだ！」

「昨日加入したばかりでいきなりですか、それで何ですか？」

「ベル君を監視してくれ！絶対にアイズバレンながしが近づかない様に見張っていて欲しいんだ」

「そのアイズバレンながしって何なんです？危険なモンスか何かなんです？」

「ロキの所に所属してるらしいんだ、その女を絶対にベル君に近寄らない様に監視するんだ、何かあったらスグ報告してくれよ」

「女性ですか？ベル君のストーカーとかそういうのなんですか？」

「そういうのとは違うんだけど・・・」

「分かりました気を付けて見ておきますよ、ベル君はもう出かけたんです？」

「朝練だと思うよ、君は随分のんびりだね」

「ははは・・・」

（なかなか寝れなかったんだよ！色々なことが有りすぎてクツツッー！）

「それで君のスキルなんだけど、やっぱり実戦で試していくしかないと思うんだ」

「調べて貰えたんですか？なんか手を煩わせちゃってすいません」

「う・・・うんくまあね」

実はヘステイアが機嫌が悪いのは、ベル君にリアリス・フレーゼと

いうスキルが発現したためだ、早熟する懸想が続く限り効果持続

ベル君がアイズという女性に助けられ、惚れてしまった為に発動した過去に例のないスキル、ヘスティアも本人に言う事も認める事もせず隠し通す事に決めたのだ

ちなみにマフィ君のスキルについて一切調べてなんかいなかったりする、哀れマフィ

「ベル君にもスキル発動したみたいですね、やっぱりスキルって発動しにくいんです?」

「なななな!何を言ってるんだい君は!!」

「訳ありスキルってヤツですか、さすがベル先輩つすねく俺もレアスキル欲しかったなあ、それでどんなスキルなんです?」

「秘密だ!発現したことも誰にも絶対に言うんじゃないよ、ベル君にもだぜ?あの子は嘘を付けないたちなんだ」

「教えてくれたら黙ってますよ、たとえ拷問されてもね」

そして何とか聞き出した俺は、目を丸くするしかなかった変と言えば変・・・レアっぽくないのにレアなんだと思うしかないからだ

「そんなの色々な人が発動しそうなスキルんだけど例がないんです?」

「そこなんだよ!ボクの方でも調べておくけど、たぶん過去に類のないスキルなんだ、他に知れたら、それこそ暇な神々なんか黙ってないんだ、発動条件を考えても絶対に絡んでくるに決まってる」

「なるほどそれに効果次第ではシャレにならないっすよね」

「分かってくれるかい?」

「はい、必ず秘密は守り通します」

身支度を整え、朝練から帰って来たベル君と合流すると

「今日からよろしくお願いします先輩」

「せ・先輩だなんて、ボクだつて入ったばかりの初心者なんだベルでいいよ」

「了解つす、それで最初は登録からでしたよね？」
「そうだね担当のギルドの人に会ってからのかな」

ギルドに到着すると、エイナというハーフエルフの女性が対応してくれるとの事で、手続きをする事になった

「よかったねベル君、ずっと1人だったから心配だったけど」

「はいエレナさん」

「マフィ君だったわね、ベル君が無茶しない様に気を付けてね、昨日だって・・・」

「わああああーエレナさん!!」

「あらあ？ 気にしてるんだ、いいわ黙っててあげる」

昨日と言うのはベル君がアイズという女性剣士に助けられて、返り血を浴びたままギルドに走り抜けたという話だ

「ははは・・・お願いします」

「それでマフィ君の登録とPTの登録よね」

「はい、お願いします」

「それと1ついいですか？」

「なにマフィ君」

「ダンジョンの地図とかモンスターの資料とか買取できる素材なんかの価格表とかそう言ったものとかって調べる事は出来ます？」

「へえ〜君は結構慎重派なんだね、ベル君のPTにピッタリな子が見つかってよかったわ、あるわよ後で出すから見えて来て」

「助かります」

「それで今日は資料を見るだけにする？」

「いえ見たい項目を見るだけですで見たらダンジョンへ軽く行くつもりです」

「そう、けど無理しちゃダメよ」

「はい」

手渡された資料を目にする、一応何か知らないけど読める・・・1つ目の懸念は払拭されたことに胸を撫でおろすと、見たかった項目を閲覧していくこと1時間

「こんなもんか、少し足りないかな・・・」

「マフィ君もう見終わったの?」

「読むのは早い方なんで、それで追加の資料をとって・・・忙しそうだねエイナさん」

「そうだね」

ギルド職員は各自がせわしなく動き回っている、何度も呼び出せる雰囲気には無い事を考えると持ち越しにせざる得ない事を考え

「さーっっていきましょつかベル君」

「うん!」

ダンジョンの中は、薄暗くいかにもといった感じでまさにザ・ダンジョンだ少し緊張しながらもベル君の後を付いて行く

「少し待っててくださいますベル君」

「ん?どうかしたの」

「魔法つすよ」

「そういえばスキル発動してるんだよね・・・羨ましい」

「はははは・・・」

主神に言われて黙ってるしかないだけに乾いた笑いをするしかない俺

「眠りし火炎の魂よ集えフレイムオーラアデクション」

「神をも恐れぬ混沌よ我に示せカオスアデクション」

「おkつす今はこれだけしか出来ないけど行きましよう」

俺達2人への補助魔法をかけ終わるとダンジョンを進むことに

「マフィ君くるよ!」

「あいよ!」

俺の武器は棍棒、刃もありましえん!なぜ剣とかにしなかつたかと

言えば、ファイリングってやつだ

そして俺に発現したスキルは「添付」いわゆるバツフとか補助魔法、使えるのは2つだけ効果も不明、なので今日それを確認しに来たのが1番の目的だったりする

「マファイ君大丈夫?」

「大丈夫っす、自分に集中してくださいベル君」

俺は根を使いながら攻撃を受け流しつつ、急所そうな心臓や頭部を棍棒で突いていく、ベル君はスピード系短剣使いなのだろう、モンスターの間合いに瞬時に入り込んで切り裂いていく感じだ

数匹倒し終わったところで、敵の気配が消えたので警戒しつつ休憩する事に

「はあはあ・・・何かわかった?」

俺はベル君に何か添付で行ったスキルの効果について尋ねると

「多分だけど、力が上がってると思うテンションって言うのかな?こ
うぐわあーって湧き上がるというか」

「魔法の名前から見てもそうかもしれないっすね」

「もう1つのは余り感じなかったかな、ごめんね」

「まあ覚えたてだからしょうがないっすよ、地道にやっていくっす」
「そうだね、効果時間まだ計測してるんだよね?どうするもう少しで
切れそうかな?」

「まったくもって分からないっすね、もう少し戦ってみて切れなさそ
うなら効果時間は次回持ち越しでいいっすかね?」

「うん、それでいいよマファイ君」

その後2時間ほど戦ったが効果が切れた感じでは無いので結構な
効果時間と思われる、今回はそれが判明しただけでも大きな成果だと
言えるだろう

ダンジョンを後にするとベル君が

「今日マファイ君の歓迎会するけど大丈夫かな?」

「いいんっすか？けどそーいや財政苦しいんじや・・」

「大丈夫だよ今日は結構稼げたしさ」

ホームへ戻ると主神が既に戻っており、今日の成果を話すと「相当がんばって来たみたいだね、2人共ステータスを更新しておこうか」

「はい！」

ヘステイアは最初に俺のステータス更新から始めてくれた

マフィ Lv1

力 I 0 ↓I 25

耐久 I 0 ↓I 22

器用 I 0 ↓I 28

敏捷 I 0 ↓I 25

魔力 I 0 ↓I 33

魔法：添付（アデクション）

スキル：

ベル・クラネル Lv1

力 I 82 ↓H 120

耐久 I 13 ↓I 42

器用 I 96 ↓H 139

敏捷 H 172 ↓G 225

魔力 I 0 ↓I 0

魔法：

スキル：???

つとまあ、意外と上がるもんだなあと思う、ベル君もトータル160程度上がってるし、これって上限いくつなんだろ？数字の前のアルファベットが示す通りなら999か1000な気がするけど

「なるほど、それなりに上がってる感じだね、数字と効果がどの程度

かは不明だけど、明日も行くつすよねベル君？」

「それなりつてもんじゃないよ！凄まじく上がってるんだよマフィ君
!!」

「あくそうなの？つていうと普通はどの程度なもんなの??」

「そうですよね？神様!!・・・あれ？神様どうしました??」

「どうしたんです？ご機嫌斜め?」

「君ちよつとこっちに来てくれるかい??すぐに終わるからベル君はそこで大人しく待ってるんだいいね?!!」

俺は女神に引きづられながら外へ連れ出されることに

「それでどうしたんです急に・・・」

「どうしたもこうしたもあるかい！あのステータスだよ」

そう言われて初めて気が付く、あくなるほろつと

「やっぱあのレアスキルつすか?」

「たぶんね、君の成長スピードにまで影響出るとは思わなかったけどね」

「やっぱ上がり杉って奴つすか?」

「君はステータスの上限はいくつだと思ってるんだい?」

「数字の前の文字から察するに999か1000かなって思いますけど」

「今の調子でその1000までどれだけで行くと思ってるんだい?」

「そうつすね〜30〜40回つてとこつすか?」

「君は最速でLv2になった冒険者がどれ程の時間をかけて到達したか知ってるかい?・・・1年だよ分かるかい?」

「あく・・・なるほど不味いですね」

「まあ〜1000行つたからと言つてLv上がる訳じゃないんだけどね」

「何か他の要素も必要なんですね、だったら大丈夫つしよ?それに万が一上がつても黙つておけばアレみたいに」

「そう言う訳にもいかないんだよ、バレた時が不味いんだ分かるだろ

？」

「Lvが上がるとやっぱ分かるもんなんっすね、そうするとアレの様にはいかないと・・・それでどうするんです？このままだと最速記録を大幅更新するんじゃない？」

「・・・そうなたら間違いなく僕は疑われるだろうね神の力を使ったのではないかって」

「出来るんです？」

「分からないけどおそらくは、もしやってしまったら僕はここに居られなくなるから絶対にやらないけどね」

「このまま同じペースで上がって行った場合は俺の魔法って事でごまかせないですか？」

「多分それしかないと思うけど、君はいいのかい？」

「やっぱ大事になりますよね？」

「当たり前だよ、経験値を多く取得できる魔法なんか有るって分かったら狙われまくるに決まってる、命だつて保証しかねるよ」

「いえ補助魔法の影響で人より多く討伐する事が可能って事でいけば・・・無理ですか？」

「そこが落としどころだろうね」

「つて事は、今後俺はファミリア意外とPTを組む事は不可能って事になりますね、嘘がバレますし」

「・・・すまない、ベル君の為に協力してくれないかい？」

「大丈夫っすよ元々そのつもりだったし」

「さーて今日はマフィ君の歓迎会だ、3人ではあくくつと行こうじゃないか！」

「随分待たせちゃいましたしね、今度はベル君が拗ねてるかもしれないませんっすよ」

「それは大変だ！ベーーーーーるーーーーーん!!」

そう言つてホームに突っ走っていく女神へスティア、その後をヤレヤレという感じで付いて行くと共に、もう1つの魔法の効果について考えるのだった

「ベ・ベル君が居ない!!どこだい??もう怒ってないから出て来ておくれーベーるー君」

俺が部屋に戻ると必死に探す女神を他所に、俺は机にあった置手紙を手に取る

「先に行って席を取りに行つたみたいっすね、待たせすぎたっぽいです」

「さすがベル君だ気が利くじゃないかよし、すぐに向かうぞ!!」
「アイアイサーー!」

指定された店は豊穡の女主人って場所で、ベル君が今朝に出会った店員が働いているそうだ、たのむじえベル君、あまり変なフラグ立ててくれるなよ・・・っと思うマフィだった

俺達2人が店の前に到着すると、酒場の雰囲気無い感じだ何かあつたみたいだが・・・

ヘスティアは気にする事無く中へ入ろうとすると

「ほいほいゝアイズウゝ酌してゝなあゝ・・・うげっドチビ!」

「ロキー!」

どうやら知り合いの神らしく、相手の神ロキは・・・男神にも女神にも例えられるんだっけか?なるほどf m f m・・・

「貧乏女神が何しに来とんのや、さっきの小僧と同じ食い逃げしに来たんちやうやろな?」

「ボクを何だと思ってるんだい!今日は子供の歓迎会だ!」

ロキと呼ばれた神は俺の方を見て

「なかなかいい面構えしとるやん、このドチビに愛想尽かしたら何時でも訪ねて来るといいでえゝ」

「そうですね、その肩に抱えてる女性がもれなく粗品として付いて来るなら考えますね」

「くつくく・・・言うなあゝ自分、けどなあ相手見て物言わなあかんでえ

く、アイズはウチのお気に入りや命欲しかったら諦めときなく」

「なるほど彼女が噂のアイズバレンなにがしさんでしたか、それだと粗品としても願ひ下げですね」

「死にたいんか？小僧？」

「いえいえそう言う意味じゃないですよ、個人的な理由です」

「まあくええくわ、ウチもさつきの話は無しや、生意気そうなのはもう間に合ってるしなく」

「マフィも相手にしないで行くよ、ベル君が待ってるんだ」

「へいへい、それでは失礼します、えくつと神口キ様とアイズ様」

俺は深々と頭を下げてヘスティアの方へ向かう、するとベル君が居ないので店員に聞いてみると、走ってどっかいてしまったそうだと

「どうしよう！ベル君が・・ベル君が!!」

俺はヘスティアを落ち着かせて、何があつたのか聞くと別の席の話に感化されて出て行ったみたいだ、関係者という事を話しベル君の食事代金を支払った後

「ヘスティア様はホームへお願いします、俺は走って行ったほうへ向かってみますんで」

「分かったよ、必ず無事で帰って来ておくれよ」

「はい、おそらくダンジョンでしょうし」

「そうだろうね、装備はどうするんだい？」

「俺もベル君も護身用に持ってきてるんで大丈夫です」

こうしてベル君搜索にダンジョンへ向かう、途中で帰り道であろう冒険者に特徴を伝え中に入ったのを確認すると手早く補助魔法をかけ突入する

「さくで奥まで行ってない事を祈るしかないね」

武器を構えて周りを確認しながら進んでいく、現在もう夜も更けている事もあって、他の冒険者も少ない、時折帰り道の冒険者にすれ違うが、奥へ向かうのは俺とベル君くらいだろう

どうにか帰り道の冒険者に訪ねながら進むと、足元に魔石らしきものが散らばっているのを確認すると

「そろそろ近そうかな・・・っと」

戦いの気配がこの先の奥から聞こえる、足早に戦闘の気配のする方へ向かうと

「うああああああああああー！！！！」

がむしやらに短剣を振り回し必死で暴れ回ってる白兎ことベル君、ところどころ負傷してるのと戦い方から防御を気にしないで最速で仕留める為に動いているのが分かる

「眠りし火炎の魂よ集えフレイムオーラアデクション」

補助魔法をベル君へ放つ事でようやく俺に気が付くベル君、しかし周りにはまだ多くのモンスターが取り囲んでおり、話す余裕はない

続けざまにもう1つの補助魔法をかけると、ベル君の背中側へ行き、目の前の敵を倒していく、今日はじめて突入したダンジョンで同じ日にもう一度、しかもハードコースとは、なかなか刺激的な歓迎会だななどと思いつつも、1匹づつ処理していく

なるほどステータスの上昇ってのは結構大きなアドバンテージになるんだな、と昼間の時の自分と比べながら戦っていく

ベル君の方も叫び声なのか雄叫びか分からないような声を張り上げて戦っていく

しばらく戦って居るとモンスターも徐々に減っていき、最後の1匹をベル君が倒し終わったところでようやく話が出来る事になったが、キツイ・・・超キツイんですが・・・

「はあはあ・・・生きてるっすか？」

「・・・ごめん、けど、どうしても・・・どうしても・・・」

「気にしないでいいっすよ、俺は抜け駆けして一人だけ強くなるうって奴が許せないだけっすから」

「ごめん・・・」

「最弱貧乏ファミリアらしくていいじゃないっすかこんな歓迎会って

のは冒険者らしくってさ」

「ホントゴメンせつかくの歓迎会なのに」

「見栄を張って自滅するごちそう食べてるより、俺はこっちのほうがいいから、まだいけます?」

「連れ戻しに来たんじゃないの?」

「言つたでしよ歓迎会なんだから俺かベル君が気のすむまでモンスター虐殺無双歓迎パーティー続けるつすよ」

「うん!!」

そのまま場所を移動しながら戦い始める2人、時間が過ぎる度にお互いの息が合い始めていくのが分かる、視界に入れなくても相手の位置、相手の攻撃目標、徐々に理解しあえて来る昼間に戦った時より何日も何か月も一緒に戦ってきたかのような感覚さえ感じる

俺がミスればベル君は間髪入れずにサポートしてくれる、逆もしかりだ声に出さなくても直ぐに体が反応する

軽い休憩を挟みながら、目につくモンスターを殲滅していく、息が切れてもう立つてるのも嫌になるのに、気持ちだけが昂る・

もつと効率よくやれる、もつと早く倒せる、もつと鋭く!もつともつとだ!!

「くはははっはー!!コレが戦いなんだ!!コレが!!コレが冒険者ー!ー!っ!!」

何かにとりつかれたかのように戦い続ける2人、もしベル君が1人だったらとつくに気が住んで帰ってるはずだ

なのに今は俺がベル君に付き合っつて貰ってる状態だ、ベル君も俺の様子が変な事に気が尽きつつも、近くの戦友の強くなつていく姿に負けたくない、ここで後輩にも置いて行かれたらもう2度とあの人に追いつけないのではという不安から帰るとは言えなくなつてしまつていた

それからしばらく戦って居ると、ベル君がヤバい事に気が付きようやく自分の暴走に気が付く

「はあはあはあ・・ごめんベル君調子に乗り過ぎちゃつて」

「神様きつと心配してるから戻るよ」

「そうっすね戻ってジャンピング土下座でもしたら少しは許してくれるかな？」

「そのジャンピング土下座ってのが何なのか分からないけど、きちんと謝ろう」

「そうっすね」

フラフラになりながら来た道に戻っていく、散らばっている魔石を見てもやりすぎた感が否めない

出口から出ると気の緩みからかベル君が膝をついてしまい、まともに立つ事すら出来そうにないので肩を貸しホームへとゆっくり戻ろうとすると、目の前に女神へステイアが、息を切らして走り込んだ

「ベル君！マファイ君！」

「刺激的な歓迎会から帰還しました神様、心配かけてすいません」

色々ズタボロの2人、ベル君に至っては意識がほぼ無いのを見て色々と察したのか女神は

「おかえり2人共」

とだけ伝えると2人を抱きしめるのだった

衝撃緩和のリング

「そっそんなに伸びているのですか?!」

刺激的な歓迎会から2日後、ベル君もようやく目が覚めてステイタスの更新をした後に主神より告げられた数字を聞いて驚きまくっているベル君

ちなみに俺は昨日の夕方に目を覚まして、ギルドへ行って換金と調べものした後買い出しをしたり、主神からのお使いに出かけたりした、ファミリアで1番下っ端だししようがないよね

「ベル君も流石っすね、俺はトータル300程度しか上がらなかったのに」

「いやいやいや!おかしからね!それもおかしから!どういう事なんですか神様!」

「うん、おそらくPTでの戦闘による効率化と補助魔法の影響が相乗効果であがったんじゃないかな、それと2人共に言える事だけど、君たち二人は言ってしまうえば、恐ろしいまでの成長期なんだと思う、それら色々な要因が重なった結果だと思うよ」

「やっぱPTはいいっすよね〜歓迎会の時だって戦ってても、協力してっただけじゃなく、お互いがミックスアップしてる感覚があったから成長してるってこういう感じなんだろうって思ってたし」

「うん、僕もその感覚凄く感じてた」

「いいかい君達!初めておもちやを貰った幼子みたいなのはしやぎっぷりで先日みたいなのはもう絶対だめだからな、君達が強くなりたいて気持ちちは分かる応援も手伝いもする、力も貸そうだから約束してほしい、もう無理はしないって

お願いだからボクを一人にしないでおくれ」

「はい、無茶はしません、強くなれる様に頑張りますけど、絶対神様を一人にはしません、心配はさせません」

ベル君のイケメン発言を聞いた後に俺は、深く頷き同意するのだった

「その言葉が聞ければ安心だ、トウいう訳で2人共、今夜から2〜3日留守にするけど構わないかな?」

「今度は主神が無茶してくるように聞こえたんだけど・・・」

「え? そうなの? だめですよ神様!!」

「ちつちよつと親神に会いに行くだけさ、変な勘繰りはよしてくれよ!」

「で、その親神って誰?」

「神達の会合さ〜大丈夫、君が勘ぐるようなことは無いから心配しないでおくれ」

おもいつきり嫌な予感しかなかったけど・・・、ベル君は信じきつてるけど、どうも怪しい・・・

「俺が付いて行くのはダメなの?」

「神達だけの会合だからね、子供たちは不参加なのさ」

「なるほどね〜、じゃ〜無茶をしない様に気を付けて行ってきてくださいね、か・み・さ・まー!」

「ベル君もいいかい?」

「あつはい、いってらしゃい神様」

ヘステイアが出ていくのに合わせて部屋を出ようとする俺にベル君は

「神様を頼むねマフィ君」

「あいよ〜つと戻ったらダンジョン行きたいから、装備の手入れ済ませておいてくれっす」

「うん」

そのまま部屋を出て、ヘステイアの後を追うヘステイアは俺が来るのが分かってたかようで、近くのカフェへ、そこで注文した後に本題に張る事になった

「それで何をしに行くんっすか?」

「君達の助けになりたいんだ、その為に武器が必要なんだ分かるだろ?」

「ベル君がこないだ眺めていたブランドの武器ですか？」

「そうなんだよ、いつもいつも見ているのを見かけてね、助けてあげたいんだ、助けられてるばかりは嫌なんだよ」

「けど実力に見合わない上等な武器与えられても武器に振り回されてよくない気がしますけど」

「もちろんさ、だから頼みに行くんだよへファイトスにさ」

「相当無茶なんじゃないですか？初心者に持たせる最上級の武器ってのは、それに万が一できたとして対価あるんです？」

「うっ・・・」

「ヘスティア様が炉とか竈とかの神と言われているから鍛冶の神と相性がよくって仲もいいって話は理解できるけど、親しき仲にも礼儀ありつすよ？」

「わかってるさ！大丈夫だタケに教わった最終奥義だつてあるんだ、かならず「うん」と言わせて見せる」

「で、それはなに？」

「土下座つて言うらしいんだ、これをすれば、どんなお願いだつて受け入れられるつて言う奥義だそうだ」

「もうどこから突つ込めばいいんだ？」

「マフィ君も知ってるのかい？」

「知ってるさ、土下座のさらに上の頼み方もな、そのさらに上も有んぜ」

「おおおーすごいじゃないか、最強の方法は何だい？」

「嘆願して腹を切るんだよ、初期のころは解釈人も居ないから意識が切れるまで自分の臓物をひねり出して嘆願したそうだ、やんのか？」

「うっ壮絶だね、聞いてるだけでおなか痛くなりそうだよ」

「その反応からすると土下座も神達の中ではマイナーみたいだし、初めて見る人にはインパクトあるから土下座も一定の効果出るだろうけどさ」

「そうだろ?!なんかうまくいきそうな気がして来たよ」

「まあ〜これ以上止めても無理そうだからいいけど、腹は切るなよ？」

「分かってるさ」

「それと俺の武器は変更になる可能性があるから気にしないでくれ、ベル君のだけ頼むよ」

「そうなのかい？」

「明日にギルドの担当の人に相談の予約入れてて、今後の戦い方について相談しに行くんですよ、内容次第で武器を変えようかなって」

「そうなんだ分かったよ」

こうして話しがまとまり、俺はホームへ戻った

「おかえりマフィ君どうだった？」

「まあ多分大丈夫かな、数日間はヘスティア様も戻らないだろうし、ダンジョン行つて暴れてきますか？」

「うん、そうだね」

「あつそうだ、こないだの店の代金払わずに・・・」

「あく歓迎会のなら払っておいたつすよ」

「そうなんだ、ありがとう、けど一応謝っておきたいな」

「そうつすね、じゃく寄つてから行きますか」

その足で先日酒場へ向かうと、開店準備をしている女性達が見える、そのままベル君は駆け足で中へ入つて行き、ペコペコと頭を下げている、俺は急がずゆっくりしたペースで後に付いて行ったので、話の内容は分からないが、概ね許して貰えたようだ・・・がっ！

なんとベル君、またしてもフラフを立ててるじゃありませんか、ほんといつか主神を筆頭に刺されないか心配しながらも見ていると、どうやら弟の様な感覚でからかつてる感じだ

「先日はどうもつす」

「いいかい坊主ども、冒険者なんてカツコつけるだけ無駄な職業さ、最初の内は生きる事だけに必死になってればいい、背伸びしたつてロクな事は起きないんだからね」

身に染みるお言葉を貫禄ある大柄の女主人が、俺達2人に言つてく
ださいました、まったくもって耳が痛い話ですハイ・・・

「アタシにここまで言わせたんだ、簡単にくだばったら許さないからね」

「はいっ」

ベル君は若い女性から、俺は貫禄ある女主人から弁当を手渡されると、ダンジョンへ向かうのだった

「いい店っすね」

「そうだね、今日も頑張っつていこう！」

「あいあいさー！」

ダンジョンに入り、今回は交代で戦う係りと魔石を拾う係りになつて中へ進んでいく、中には魔石以外の素材なんかも出ることが有り、一応売れるとの事なのでそれも気を配りながら戦っていく

「それじゃ〜ベル君次よろしくっす」

「うん！」

そんなこんなで倒しながら進み、交互に戦ってる事もあつて効率はドロップ無視でやってるよりは落ちるが、稼ぎとかを考えると最高効率なのではないかと思う、片方が休みながら魔石を回収、片方が戦つて疲れたら交代つて感じで、食事も魔石を拾いながら食べるので実質無休憩だ

昼飯を食べ終わり、さらに戦い続けていく、何回目かの交代で感じたがベル君は若干燃費が悪い感じだ、動きが早くヒットアンドアウェイのスタイルなのでどうしたつて運動量が多い

対して俺は棍棒を使うが基本的にカウンター狙いだ、移動速度を変えずタイミングを見極めてギルドで調べた弱点を的確に狙うスタイルなのでスタミナが持ちやすい

けどどっちが優れているかは分からない、カウンター狙いは被弾すると結構なダメージを受ける、スピードで引つ掻き回す場合は、ダメージを受けても受け流しやすいという利点があるからだ

本当はもつとしつかりとした戦闘訓練を受けるべきなのだろう、

ぶつちやけごり押し感がやっぱ2人共に目立っている

「そろそろ換金して帰るっすよベル君」

「そうだね結構稼げたかな？」

「どうだろ？俺の最高記録出た気がするけどこればかりはね」

ダンジョンを出てギルドにて換金をして貰うと、トータル18300
0バリスとなった

「そこそこいったっすね」

「すごい！こんなにも稼げたなんて初めてだよ!!」

「1人9150バリスってどこか、うちって上納金ってどういう感じなの？」

「じよ上納金ってなんか物騒な言い方なんか嫌だなく、お布施とかの
ほうが言い方的にアレだとおもうんだけど、そういや特別決まってるな
いって言うかあまり神様も言わないから帰ってきたら聞いてみよっ
か」

「そうっすね、それで明日なんだけど予定通り、俺はエイナさんに色々
教えて貰う事になってるけど、ベル君はどうするっすか？」

「うくんく．．一人でダンジョンに行こうかなって思ってるんだけど」
「なるほど、それでベル君を否定する訳じゃないんだけど、俺は闇雲に
武器振り回しても強くなれる気がしないっすよね、今日は交互に
戦ってたから余計に感じたんだけど、圧倒的に戦い方とかPTの回し
方とかに疑問しか出てこなかったんっすよ」

「え？そうなの？」

「そう感じなかったならいいんっすけどね、俺はやっぱその辺が気にな
るんで、明日はみっちり勉強してきてベル君に教授してあげようっ
て考えてるんっすよ」

「うわあくそう言われると気になるな、一緒に付いて行こうかな」

「どっちでもいいっすけど、もしくはそれか神様いない間に男を上げ
るってのもあるっすよ？」

「なにそれ？」

「風俗っすよ遊郭ともいうんだっけか？この街にもあるらしいですし

行っ見ては？」

「むつむりむりむりーっマファイ君は行ったことあるの?？」

「ないっすけど?」

「とりあえず無理だよ絶対、僕は明日はソロで初心に戻ってダンジョンに入ってみたいからやっばダンジョンにするよ」

「らじゃあー」

翌日になり今日は別行動となっっているので、俺は予約時間までの間、なかなか全容が分かりづらい添付魔法について調べる事に

まずは添付というだけに、効果対象を人だけでなく他にも出来るのでは?についてだフレイムオーラの方は武器にも魔法を発動する事が可能だったかカオスの方は無理だった事から、何かしらの一定法則があると思われる

ちなみに武器にフレイムオーラを添付すると10分程度の間武器の耐久値が上がる、防具も同様だった

そしてこっからが問題だ、カオスは武器防具には無反応、しかしポーションには微弱だけど反応があったのだ、この事からカオスの効果はバツシブ系のスキルに反応する

さらにバツシブスキルのない俺に効果が出る事から、受信機と送信機という役割もあるんじゃないかと思ってる、なので俺が探すポーションはカオスの効果がより顕著に発揮されるものって事になる、もし思惑通りならポーションの効果を持続したまま戦えるって事に繋がる

「とはいってもポーションとはいえ結構高いよなあゝ・・・」

売っているポーションを眺めながら想像以上に高額なポーション、こんなのがぶ飲みして冒険者って職業やってけんのか? ってのが率直な意見だった

手に取っ触れそうなポーションを片っ端から添付していく、詠唱を脳内で詠唱する事でも効果がある事から最近はそうしてるのだ

(これも・・・ハズレかな)

ベル君から預かったポーションよりはマシ程度のポーション類、持ち金を考えると5000程度が上限となる、かたっぱしから購入して全額投資するほど間抜けじゃない

そんなこんなで目につくのはエリクサーって薬だ、陳列はされておらず触る事も出来ないが価格を見ても効果が高そうなのは見て取れそう

(もう少しダンジョンに潜り続ければ購入できそうだな・・・)

おそらく俺の求める魔法薬はエリクサー系になるだろうと考え店を出ると約束の時間までそこまでない事を考え、ギルドで時間が来るまで暇をつぶすと決めギルドへ向かった

ギルドに到着して暫く待合席で座って待っていると、エイナさんが現れ

「おはようございます、今日はよろしくつす」

「早かったのね、もう少し待っててね」

その後しばらくして別室へ案内され、早速話を進めていく

「それで相談と質問だったっけ？」

「はい、まず魔剣と属性武器の違いから教えてほしいんですけど、魔剣ってのは武器にアクティブスキルを乗せる事で任意で発動し剣の耐久値が魔法に耐えられなくなると壊れる、属性魔法は武器にバツシブスキルを乗せる事が出来るって事で合ってるのでしょうか？」

「うーん、君の言うアクティブスキルとバツシブスキルってのは常時発動型とそうでない物の言い方なんだよね？」

「そうですね、例えばスキル魔力強化なんかは、何もしなくても基本的に条件があるかもしれませんが発動しているタイプ、アクティブスキルはファイヤーアローとか発動に詠唱や切っ掛けが必要なスキルの事ですかね」

「なるほど〜アクティブスキルとバツシブスキルか〜なかなかいい言葉だね」

「それで答えは？」

「概ねあつてると思うよ、魔剣にはトリガーとなる詠唱が有ったりす

るし、属性武器・不壊属性とかは常時発動してるからね」

「分かりました、それで不壊属性の話が出たから聞きたいんですけど、魔剣に不壊属性を付与すれば魔剣の効果は永久になるんですか？」

「それが出来ないらしいのよ、研究は各所で行われてるみたいなんですけどね、けど魔剣を打てる鍛冶師も属性武器を作れる鍛冶師もすつごく少ないから研究は難航してるらしいわ、だから一般的には2つのスキルを付ける事は無理って認識になってるの」

その後も何処へ行けば研究してる場所に行けるのかとか、見学が可能なのかなど色々な方向から聞いてみたが、今後の役に立ちそうな答えは返ってこなかった

「戦い方を指南してくれる道場とか、指導してくれる人は紹介可能ですか？」

「うーん、無理だと思うな〜ファミリア内で教えたりはしてると思うけど、基本ファミリア間はライバルって位置づけだし、たまに受けてくれる人もいるみたいだけど」

「つととなると本などを購入して自力で模索する方法が一般的になるんですかね？」

「そうなると思うよ」

「なるほど、だから武器の系統に偏りがあるんですね」

「それってどういう事？」

「武器屋を覗いたんですが基本的に高度な技術の要りそうな武器なんかは置いてない気がしたので」

「あ〜そういうことか、君の故郷では色々な種類があつたの？」

「そうですね、少なく見ても数倍は種類有りましたね」

「へえ〜そうなんだ」

「つととなると高度の技術の必要のない槍か弓あたりですかね〜一番人気は？」

「剣とか刀とかも人気だよ」

「見た目でって事っすかね？」

「あ〜それもあるかもしれないわね」

「今ベル君が短剣で俺が棍棒を使ってるんですが、一緒に戦う場合そ

うですねえ〜：比較的体力の多い敵との戦いの場合、ピンポンになってタゲが固定されない事になって効率が悪い気がするんで、槍と盾を同時に持ったスタイルを考えてるんですがどう思います?」

「う〜ん・それって相当重くなってしまうし、扱いきれないんじゃないかな?」

「最終的にはタンカーのメンバーは補充したいので、それまでの間だけになるでしょうけど」

「君は最終的にPTの中で、どのポジションになると思ってるの?」

「ベル君はターゲットが固定された敵の後ろから急所を狙っていく高火力スカウト系アタッカー、俺は強化魔法を維持しつつ後衛と前衛を臨機応変にこなしていくタイプ、器用貧乏系オールラウンダーかなって考えてます」

「へえ〜君凄いな、ちゃんと考えてるんだエライエライ、そうだね君の言う通り、現状発現してるスキルを考えればそうなるんじゃないかな、今後のスキル次第になるでしょうけど」

「はい」

その後は、他のPTの例を教えて貰いながら色々聞いたりしたが、ゲームっぽい世界なのに基本的にノリと勢いな構成が多い事が疑問だったが、ポーションの効果が有用な事とヒーラーと呼ばれる人が皆無に近いほど居ない事が原因ぽい、それと俺みたいなバツファ系もほとんどいない様だ

魔法ってのは大概攻撃魔法を覚えるらしく、魔法使いというのは、魔法を詠唱していく間守ってもらい、詠唱が終わりそうなのを見計らって魔法範囲外へ退避するスタイル、後はタコ殴りでダメージ有れば各自がポーションで回復するスタイルだそうだ

魔法の覚え方は、2パターンで才能による発現と魔法書などによる外部の影響によって発動するパターンだそうだ、ちなみに魔法書は億くらいするらしく、よほどなことないかぎり才能による発現を狙うしかない様だ

その後も色々な事を聞いたが、活用できそうなネタは見つからず、結局のところ自力とかで何とかするしかなさそうだ

「長い時間ありがとうございましたエイナさん」

「うん、こつちも他の地域の事とか知れて勉強になったよ」

まあ、地域じゃなくて世界なんですけどねとは言えないので軽くスルーしつつ、勉強会は終わるのだった

「まだベル君はダンジョンっぽいし、武具やでも覗いてくるかな」

エイミさんに教わった武具やへ向かう、どうやらバベルの塔らしく、駆け出しの鍛冶屋なんかが固定客をつかんだり、腕試しで出品する事から結構掘り出し物とかもあるらしいとの事で向かう事に

いかにも高級そうな店とは違い、ザ・鍛冶屋って感じの埃っぽく鉄臭い感じの所へ行き順番に見ていく、やはり駆け出しらしく魔剣や属性武器なんかがあればいいんだけどなあ〜っと思いつながら見ていると、ジャンク品みたいな扱いの箱に入ったアクセサリから変な感覚を受ける、たぶんこの感覚は魔力とかさう言うのだろう、手に取って店員にどういった物なのか聞く事に

「あ〜それか、一応属性の付いたリングなんだけど効果が悪くてなあ〜全く売れないんだよ」

「どういった属性なんです？」

「衝撃緩和の属性だ、一見すごいように見えるがリングだけに効果は極めて低い、これが盾とか防具に付いてるなら売れるんだけどなあ、たぶん属性付与の練習に使ったもんだと思うぜ」

「どうする兄ちゃん？作った奴を紹介してやろうか？兄ちゃんみたいにリングの魔力に気が付いた奴を紹介して客を得ようって考えだろうから会うことは出来るだろうぜ」

「いえ紹介されても恐らく購入するだけの予算は無いと思うし、このリングください」

「おいおいいいのかい兄ちゃん、返品は出来ねーぜ」

「構いません2000バリスでいいんですよね？」

俺の考えが正しければ、このリングは2000どころか、俺にとつては数十倍の価値があるはず、さっそく魔法を使ってみるとビンゴだ、自分の体に衝撃を加えても殆ど衝撃を感じない

効果が切れるまでの時間を計測すると20分だったことから、まず

まずなんじやないかなと思う

ニヤニヤが止まらないが、にやける衝動を抑えてホームへ戻るとベル君が帰って来ていたので、色々話しながら食事を済ませ就寝する事となった

亀裂

「なにしてるの？マフィ君」

早朝出かける前に自分の持っている武器に加工をしていると、ベル君がおきて来て俺のやつてる事が気になり話しかけて来る

「お財布事情がきついっすから、武器を加工してるんっすよ」

「器用なんだね、それでコレがそうなの？」

「見た目は悪いかもしれんが、棍棒の片方を尖らせてなんちゃって槍だ、まゝ速攻壊れたらベル君銀行に頼る事になってしまっけどねww」

「うん大丈夫だよ、困ったら言ってね」

「それで今日から俺の武器は、棍棒からなんちゃって槍にしていくことにしたから」

「へえ〜槍にするんだ、それは何でなの？」

「盾を装備したいからさ、昨日相談して自分でもいろいろ考えた結果かな、槍での戦いに慣れたら頃にお金が溜まったら盾も購入する予定っす」

「今買わなくていいの？僕もあまりないけど少しなら貸せると思うけど」

「いいのいいの〜まず槍の戦いに慣れないといけないし」

「うん、分かった」

そして何時ものようにダンジョンへ向かう2人、俺達のように大勢の人達がダンジョンへ向かう、俺の様にどっかの農民一揆みたいな槍を持つてる奴は当たり前だが居ない、まあ〜酒場のおばちゃんも最初はカッコつけたってしようがないって事さ！

「今日は先行行かせてもらっす」

「うん、頑張ってね」

手早くバツフを済ませて戦いを始める、武器を変更したことによって戦い方は突きのみになる、刃もついてないし当たり前なんだけどね数匹倒していくと、やっぱ色々やりたくなってしまうのでちよつと

色々試してみる事に

「はあああああつっ！悪・即・斬・牙突！」

どっかの元3番隊の人みたいな恰好で構えて一気にモンスターに突き刺す、初めての割にはキツチリ一発で仕留める事に成功・・・一階層だしね

「え？なに??いまのスキルなの??」

「違うっすよ、ある人が考えた必殺技ってやつかな」

「へえ色々詳しいんだね、他にもあるの??」

「なんだいベル君興味があるのかい??」

「うん！今のかっこよかつたし、他にもあるなら見たい!!」

「けど難しいのばっかだから、今度練習しておくよ」

「僕もそう言うのやってみたいなあ、何かある？」

「知ってる技の大半が刀か剣だからなあ、いまの牙突だって本来は刀の突きの技だし、短剣となると・・・」

「え、それならなんで刀とか剣にしなかったの？」

「盾を装備した時に一番扱いやすいだろうと思ったから」

「なんで盾を持つことにしたの？」

「今後1人でなかなか倒しにくく体力のある敵が出てきた時に短剣と相性がいいと思ったから」

「そうなの？」

「最終ポジションはタンカーいわゆる敵を引き付けてガードする役目の人には俺はなれないけど、タンカーがPTにはいるまでやったほうがいいと思ったからかな」

「こないだ今のままじゃ不味いとかってのは、そういう事だったんだね」

「そういう事っす、ちなみに俺の最終ポジションはオールラウンダー系バツファーの予定っす、だからタンカーも本職ほどではないにしても出来る様になっておくべきだし、そう無駄でもないっすから」

「ちなみに僕のPTでのポジションってどうなるのかな？」

「敵の背後から急所を狙うスカウト系アタッカー、悪く言えば後ろからサクッと暗殺って感じかな？」

「なんか知らない単語いっぱい出て来るけど、マファイ君の故郷では一般的な知識なの？」

「そうっすね」

その後も順調に敵に風穴を開けて殲滅していく、切りのいいところで交代して今度はベル君、ドロップを拾わなくていい分ソロよりも敵に集中できるし殲滅速度も圧倒的に早い、今後もずっとこのままという訳には居ないだろうが、今はこうするしかないのが現状だ

新たな魔法効果である衝撃緩和の事は、ベル君には言わないでおくことに、色々と検証も終わってないのもあるし、衝撃緩和がある事いい事に被ダメージを気にしなくなるのは危険だと思うからだ

きつちり夕方まで戦い続け、換金を済ませてエイナさんに挨拶して出ると、すっかり夜も更ける

「遅くなっちゃったっすね」

「そうだね、神様もう戻ってるかもしれないし夕食買って帰ろっか」

買い出しを行いホームに戻ろうとすると、ベル君に話しかけて来る男性が

「ん？おお、ベルではないか」

「あつ神様ー」

どうやらベル君の知り合いの男神らしく少し話をする事になった

「始めまして先日加入したマファイです」

「おおくそうかベルももう先輩なのだな、ベルは本当にいい奴だからな助けてやってくれ」

「はい」

「ミアハ様は神様の宴には行かれたんですか？ヘステイア様が昨日ももどって来られなくて何か知ってたら教えて頂けませんか？」

「ヘステイアが、か？私も宴には参加しなかったのな、少しも見当がつかないな」

「い、いえ気になさらないでください」

「おお、そうだベルコレをやろう」

そういつて出したのは試験官らしきもの、おそらくはポーションだろう

「い・頂けませんよ、そんな」

「なに、よき隣人への胡麻すりだ、今後も我がファミリアを御鼻屑にな」

「あ・はい・・・」

「話の途中でアレなんですがミアハ様のファミリアっていうのはポーションなどの魔法薬を作るファミリアなんですか?」

「そうだ私自らも作っておるよ、そうだ君にもコレを」

「それよりも魔法薬について教えて貰いたい事があるのですが」「なんだい?」

「魔法薬っていうのはスキルが無いと作れない物なんですか?」

「そう言う訳ではないよ、レシピさえあれば作る事は可能だ」

「なるほどそれは高級薬エリクサーにも言える事なんですか?」

「そうなるね」

「分かりましたありがとうございます」

「君は魔法薬を作るのに興味があるのかい?」

「いえギルドでも教えてくれなかつたので、気になってたんです」

「そうか興味があつたら訪ねて来るといい初歩的なレシピなら教えてがえられるから」

「それってマジっすか?!」

「深い所までは無理だけど、興味があつたら何時でもくるといい」

「ありがとうございます」

ミアハ様と別れ、ホームに戻るが主神ヘステアアは戻っておらず、食事を済ませ色々話す事になった

「それでミアハ様の所でポーションの作り方教わりに行くの?」

「とりあえず原理だけは知っておきたいんだ、どうせ深くまでは教えてくれなさそうだし」

「ということだ近日中に訪ねてみる事にしようと思う」

「交代でサポートと攻撃をやっているのにも効率に限界が近いけどどうするっす・・・」

そうなのだ、ステータスの大幅な伸びによるスタミナなどの増加により休憩ついだが、手持無沙汰になりつつあり、かといって深く潜れば、敵の強さも同時に多数の相手とも戦う事を考えるとどうしたって無理がある、ぶっちゃけいきなりに近い状態だ、おそらく次の更新で間違いなく完全に打ち止めだろう

「マフィ君はどうするの？と思ってるの？」

「メンバーの追加でしょうねベターなのは、それが無理なら現状維持っすかね、おそらくステータスの伸びは停滞する可能性は否定できないけど、死んだら終わりだし」

「だよねえーエイナさんに相談するしかないよね」

「すでにして有るっすよ、信用できるサポーターかタンカーをレンタルできないかって」

「さすがマフィ君たよりになるなあ〜」

「どうなるかは分からないけど、毎朝エイナさんの所へ行ってみつかれば、さらに奥へ行く感じっすかね」

「そうだね」

毎朝ダンジョンへ向かう前にエイナさんの所へ行くが、見つかる事はなく資金集めと割り切ってあまり深く潜らず戦っていく、ベル君は早く強くなりたいという欲求からか、深く潜ろうとするが多くなってきた、その度に引き留めるが限界かな・・

その日の終わりに2人でエイナさんの所へ行き

「10階層まで潜っても大丈夫でしょうか？」

単刀直入に聞いてやった、ベル君もエイナさんをしっかりと見据え彼女の答えを待ってる

「ダメよ2人共まだ冒険者になって1か月いったかいってないかでしよ無理しちやダメよ」

「ですよねえ〜」

「どうしても強くなりたいんです！エイナさんお願いします！」

「ダメなものは駄目だよベル君」

「ベル君、仮に10階層行つたとしてもドロップ持って帰つてこれないっすよ?それでもいいんっすか?」

「うん!それでもいい、だから!」

「よかないっしょ、神様に何時までスラムに近いような場所で暮らさせるつもりっすか?」

「じゃく毎日じゃなくてもいいから!」

「お金稼ぎつてのは才能ない人は毎日の積み重ねなんで却下っす、それに無給で戦うつて事はプロの冒険者を辞めるつて事っすよ?それで追いつけるんですかね?」

「マフィ君の言つてる事は重要な事なんだよベル君、どうしても納得できない?」

「・・・はい」

「いい案ならあるっすよ、大手のファミリアに入るつて手がね、確実に入れてくれそうな大手が有るけどコンバートするっすか?ベル君」

「え?なんで?どういうことなの??」

「最近やたら変な視線を感じるから注意深く見てたら大手の女神だったんすよ、そして視線の先はベル君だった、だからその女神の所ならベル君の希望する以上の戦闘経験が期待できると思うっすよ」

「マフィ君冗談でも言つていい事と悪いことが有る!」

「ベル君が心配する内容は神様を1人にしません、無茶しません、心配させませんでしたよね?、俺いるし別にいいっすよ」

ここでベル君ブチギレで殴りかかって来る、そこをカウンターを合わせて殴り飛ばす

「やめなさい2人共!!」

エイナさんが大声を張り上げて怒鳴り散らし止める

「まだやるっすか?」

ベル君は何も言わず座り込み何も言わなくなつてしまった

「エイナさんお騒がせしました失礼します」

今日はホームには戻れそうもないので、ミアハファミリアへポーションの事を教えて貰うついでに、あわよくば泊めて貰おうと考え

ホームへ向かった

自分の食事と、お土産用に酒とつまみなんかを購入し、ミアハファミリアへ向かい今から習えるか確認するとミアハ様は意外と歓迎してくれた

「よく来たね、それでヘスティアは戻って来たのかい？」

「ここに来る前に寄ったんですがまだでした、何をしに行つたかは知ってるので心配はしてないんですが」

「そうかじゃ、さっそく始めるかい？」

「はい！」

こうして遅くまで俺に付き合つて貰い、朝方まで集中して制作に取り組んでいると、いつの間にか窓から日差しが差し込んでくる事でようやく集中力が切れ、周りを見てみると付き合つてくれたミアハ様も眠つてしまったようなので、空いてる場所で俺も寝る事に

翌朝起きるとミアハ様と眷属のナーザーザさんが朝食を準備してくれたみたいで、申し訳ない気持ちながら一緒に食事をする事に

「すいません気が付いたら寝てしまつて」

「気にする事は無いよ相当集中してたようだしね、どうだったポーションの制作は？」

「面白かったですね、けど目的の理論説明までは出来なかつたんで、もう少し研究する事になりそうです」

「理論説明と言うのはどういうことなんだい？」

「そうですね、色々な素材と製法で作るのは分かつたのですが、その一つ一つがどの様に作用して傷を癒すのかが知りたかつたんです」

「なるほどなあ、それが分かれば・・・」

「そういう事です」

「なかなかおもしろい事を考えるな、それで今日はどうするんだい？」

「今日はモンスターフィリアでしたっけ？お祭りなんですよね?！」

「そうだね君も行くのかい？」

「いえ、騒がしいのは得意じゃないのでダンジョンに行こうと思つてます、その後はポーション研究の続きでもしようかと」

準備を整え、ミアハ様達にお礼を言つてダンジョンへ向かうと、ト
ラブルがあつたらしく祭りの雰囲気では無いので近くの人に聞いて
みると、街の中にモンスターが逃げ出して暴れてるとの事だつた

氣になつた俺は周りを探してみると、よく見た人物2名が大型のモ
ンスターに追われているのが見える・・・なんとというご都合主義・・・つ
ていうかアレ絶対にヤバイ奴だよな

見てしまった以上助けられないという選択肢は無いので、急いで2人に
合流する為、俺は走り出すのだった

リリルカ・アーデ

「すまないベル君、ボクはこんな状況なのに、心から幸せを感じてしまっている」

「何を言ってるんですか神様!!」

白い大型ゴリラのモンスターに追いかけられ、神様を抱えてモンスターから逃げている2人、そのままベル君は隠し扉の中へ入ると

「マファイ君!!」

「強い敵と戦いたいからって、アレは強すぎなんじゃね?、またアドバイザーに怒られるっすよ?」

「マファイ君、それどころじゃないんだあのモンスター神様を狙ってるんだ」

「みたいだね、視線がヘスティア様の方を向いてるのは、ここへ来る時にも分かってた、どうする?」

「あいつは神様を追っています、見つかるのも時間の問題です、なので応援が来るまで2人で神様を守るんだ」

「アレ・・・倒してしまっても構わんのだろ?」

ミアハ様の所で作って来た処女作のポジションを2人に渡し、ややひきつった表情を浮かべカッコつけてみた

「ベル君と2人であのモンスターを倒すんだ、ここで2人のステータスを更新する、君達2人なら出来る」

「ベル君武器ないから引き付け役でいくっすか?」

ベル君のステータス更新を始めたヘスティア様、同時に俺も詠唱を始めて添付魔法をかけていく、しかし若干心が折れかけているベル君は

「ステータスを更新して少しくらい強くなった所で、あの攻撃をさばききる事なんて・・・」

「ベル君、君は何時からそんな卑屈な奴になったんだい、ボクは君の事信じてるぜ、だってそうだろ、バレンなにがしとかいう化け物みたいな女を目標にしている、ベルクラネルなら、あんなモンスターちよちよいのちよいき、やっとな渡せるよ」

そういつて大事そうにヘスティア様が抱えていた物を取り出すと。そこには短剣が、手渡されたベル君は鞘から刀身を出すと、武器が息吹くかのように刻まれたピエログリフが輝く

「さすがヘスティア様っすね色々な意味で、じゃ〜おとり役と壁役は俺でいくつす、前に説明した作戦でやるつすよ、大型モンス用の作戦で！」

「うん！」

2人のスティタスは、ありえないほどの上昇値を見せていた特にベル君はトータル600オーバーだ、力が早さが何もかもがみなぎり始める2人

手筈通り、俺がファーストアタックを取る為、モンスターの死角から一気に眼球めがけて渾身の突きをお見舞いする

どんなモンスでも鍛えられない場所がある、急所と呼ばれる場所だ、その中でもやられて最も怒りを買う急所は大概は眼球だ、神経が多くあり、やられると視界を潰される為もつとも怒りを買うのが眼球だと俺は考えているからだ

そのままモンスの攻撃を槍で受け流し、攻撃できる場所を突く！突く！突く、バックステップして攻撃をかわして、突く突く！

新たに追加された効果の衝撃緩和はしっかり働いており、受け流しの際の衝撃が全くと言っていいほど感じない、これなら捌ききれはらずだ！

ベル君は、飛び出すタイミングを見極める為に、物陰からじっと耐えていた、しかしヘスティアは俺達の作戦なんか知らないから、必死にベル君の背中を押して奮い立たせる為に色々言っているが、ベル君は集中している為に耳に届いていない

「よしー！」

マファイが合図を出すと一緒に飛び出すベル君、作戦はこうだ、俺がファーストアタックを決めて10数えたら攻撃を開始する、もしくは牙突の構えをしたら攻撃を開始しろと決めていたのだ

大型モンスを想定した戦いは今後絶対に来る、だから念入りに話合ってた

されましたね」

それも当然だ、あのモンスシルバーバックはLv1が1PT揃ったとしても討伐の厳しいモンスターなのだから、それをLv1が2名で撃破するという異例の出来事

「たまたま作戦が上手くいったつすから」

そんな話をしながら、暫くすると別の店員からヘステイア様と呼んでいるから部屋へ行くように言われ、ノックして入ると2人は俺の方を見るなり

「ごめんなさいマフィ君、君の気持も考えず我儘ばつか言つて、だから・・・」

「マフィ君許してやってくれないかい？」

「あー先日言い合いになった奴か、結局ベル君はどうするんつすか？、シルバーバックの時も覗いてたし相当執着されてるみたいだし受け入れられると思うぜ」

「何の話だい？」

「僕は神ヘステイア様の元で強くなりたい、そうじゃなきゃいけないんだ、だから絶対にコンバートはあり得ない、だから・・・だから・・・」
「俺が抜けるとかベル君とはもう組まないとかは、ベル君がコンバートしない限りないよ、気にすんなって」

「ありがとお・・・ありがとおお」

俺にしがみつき必死に鳴きながら謝ってくるベル君が必死でちよつともらい泣きしそうになるのだった

話しの付いて行けない神様にベル君が一応説明したことで、神様も納得したようだったけど

「それで視線の先に居た女神ってのは誰だい？」

「女神フレイア様ですよ、もしかすると今回の騒動も・・・」

「なっ！」

「なんで僕が??あつた事も無いのに」

「本当なのかいマフィ君」

「うん、きになって後を付けて突き止めたから間違いないよ、最初は暗殺者か何かかと思つて心臓にわるい追跡だったよ」

「そうか・・・心当たりが無かったわけじゃない、僕も気を付けておくよ、ベル君も気を付けておいてくれよ、あの女神は私も苦手なんだ」
「はい、神様」

「それでマファイ君、ベル君をあんな危ない女神の元へコンバートさせようなんてどういう事なんだい！」

「だって手っ取り早く強くなりたみたいだし、あそこって大手ギルドだし好きな階層で戦うのだって無理じゃないっしょ？、資金力にものを言わせて経験値貯める方法だっていくらだってある訳だし」

「マファイ君を責めないでください神様、僕があせって無茶しようとした結果なんです、それに心配しないでください、何があっても僕は絶対神様の元から居なくなったりしませんから」

「そうかいベル君がそう言うのならいいけど・・・」

「けど無茶をしたと言えば神様もつすよね？ベル君の武器が普通じゃないってのは戦ってる時にだって感じたっす、いくらかかったんです？」

「いいじゃないか話は付けて来たんだ、お金の事は気にしなくていい」

「いち・じゅう・ひやく・せん・まん・じゅうまん・ひやくまん・いっせんまん・おく・じゅうおく・ひやくおく・・・」

「なるほどね、おおよその金額は分かったけど」

「え？なにマファイ君どういうことなの？」

「ベル君のナイフの金額さ、おおよそだけど分かったって話、ベル君と同じで神様も嘘は苦手っぽいね」

「ぐぬぬぬぬぬー本当になので分かったって言うのかい?!」

「まあ〜単位はね」

そう言っつてへステイアの耳元で「億」と伝えると、またしても反応をするんで、面白い神様だなあ〜と思うマファイ君であった

翌日さっそくへステイアナイフをベル君から借りて魔法をかけてみる事にした

「ベル君へステイアナイフちよつと見せて貰える？」

「うん、いいよ」

手に取ると、ただ事ではない力と言うか怨念が込められているのが肌で感じ取れる、若干やばいかもしれないと思いつつも

「カオスアディション」

魔法を俺と短剣に添付していく、そして体を確認するが効果がない様だ、次に自分の武器である槍もどきに魔法を添付すると

「うわーっなこれ!!」

強烈な光が2人を襲う、あーやつちまった系か?!と思いつながら光が収束するのを待つて目を細めていると、強烈な光は収まりを見せ

「……」

槍もどきが変化してるのだ、ありえないことが起こると人はなぜ何も言えず固まるのだろうか

「マフィ君これって……」

「うくん……ダンジョン行くつすよベル君!」

「ちよつと待つて現実逃避しちやだめだから、あーもう神様何処へ居ちやつたんですかー!」

神ヘスティアは膨大な借金を返済する為に、ヘファイストスファミリアでバイトをする事になった為、朝早くから出かけてもう居ないのだ

俺は武器を手にとってみると、頭の中に色々な事が武器から流れ込んでくるのが分かる、どうやら相棒の槍もどき君として転生し、ヘスティアナイフの加護によって進化したらしい事が分かった

手にとって分かる、このチート武器つぷりが……色々と不味い気はするが、酒場の女主人も言つてた!最初の頃はなりふりかまうなつて!!

「進化したみたいっすね、もう槍もどきじゃないヘスティアランスといつた所っすかね」

「へえっやつぱはこのナイフすごいんだね、マフィ君の武器にまで影響出ちやうなんて」

「神器とかいうやつっしょソレ、なくしたり壊したらヤバそうっすね、俺のは恩恵に少しあやかつて進化しただけだし」

「うううう・・・本当にいいのかな、こんな武器使っちゃって」

「いいんじゃないっすか？武器は使われなければ只の鉄くずっすから」

「そうだね、じゃくいこっか」

ちなみに進化したヘステイアランスが魔法が切れて戻ると言った事はなく、完璧な進化をしちゃったのだった

今日は先日騒がせたこともあって、エイナさんに朝一であいさつしに行つてからダンジョンへもぐる予定だ

「こないだはお騒がせしてすみませんでした」

2人で深々と頭を下げてエイナさんに頭を下げると

「うん、仲直りして良かったよ、これからも仲良くするんだよ」

「はい！」

「それじゃ10階層まで行つてきますー！」

つと俺が言うと、エイナさんの顔が引きつり

「ちよつとまつたあああー！」

「ベル君やつぱこうなったね」

「ははは・・・エイナさん、俺達結構ステータスも伸びて強くなったんです、大丈夫です！」

「アビリティ評価Hがやつとのくせに、成長だなんて言うのはどの口かな？」

「ほ、本当です、僕達のアビリティいくつかはEまで上がったんですよ」

「勝手に俺のもばらすなよベル君・・・」

「いつEくくくくそんな出まかせを言つたつて騙される訳・・・」

「本当なんですエイナさん、最近僕たち伸び盛りと言うか、とにかく熟練度の伸びがすごいんです」

まあ、確かにすごいね、毎日100は確実に上がってるし、多い時は300行く事だつてある、神様曰く上がり過ぎワロエナイっこの事だ

「・・・ねえベル君」

「はい？」

「君の背中見せてくれないかな？、君の言ってる事を信用してない訳じゃないんだけど・・・ただ」

「ここでお人よしのベル君に頼むあたり、結構・アレっすねエイナさん」

「ううう・・・だってマフィくんは絶対に見せてくれなさそうだし！あっ」

「あーあ、ベル君まあアレだドンマイ？」

「いいですよエイナさん見せても」

「まった!!見せるなら俺だ、ベルのが見られるくらいなら俺が庇ってでもって神命うけてるっす」

とはいえ、ベル君のスキルにはヘステイア自らスキルの部分に偽造プロテクトがかかっているから、他の神としてみる事は叶わないが、万に備えてだ

「どういう事なのマフィ君？」

「いあくヘステイア様つてさ、ベル君にぞつこんなんでしょ他の女性に肌を見られたとなったら、神威とか発動しそうなくらい激怒すると思うんだよ」

「へえくベル君つてヘステイア様とそういう関係なんだ」

「ちつちがいますよ！恐れ多いです」

「そんな訳で、俺のを見せるからそれで納得してもらえないですか？もちろんスキルとかステータスを他に・・・たとえば貴女の主神であっても漏らさないって条件ですが」

「わかったわ誓うわ、見たものをたとえ主神命令としても誰にも公開しません」

「破ったら俺の永久奴隷にでもなってもらうからな！」

「わっわわわわ」

別室の小部屋で上半身を脱ぎ背中を見せると、なにやらブツブツ言ってるが、おそらく俺達の言ってる事が本当に驚いてるのだろう

「聞いてもいい？」

「答えられる範囲でしたら」

「ベル君も同じくらい上がってるの?」

「いえ、ベル君は俺以上に上がってますね」

「はあくこれだと10階層で戦うの認めない訳にはいかないけど・・・そうなる」と

彼女は俺達2人をじーっと見ると

「君達さ今日ダンジョンへは行かずに、装備を見に行かない?」

エイナさんに言われ、装備を見に行くことになった俺達3人は、ヘファイストスファミリアの店に行く事に

「マフィ君は知ってるよね?あれから行って見た?」

「はい、なかなかの掘り出し物に出会いましたよ」

「へえくそうなんだ、ベル君は初めてだっけ?」

「は・はい、けどヘファイストスファミリアで買う大金なんか持ってませんよー!」

「ベル君は俺より先輩なのに、ほんと調べたりするの苦手なんっすね」「何なんですか一体?!」

そんな訳でバベルにあるヘファイストスの店へ行く事に

「エイナさんその階層は・・・」

「いいのいいのせつかくだしさ行って見ようよ、見るのはタダなんだしね」

「へえく知りませんでした、ヘファイストスファミリアのお店がこんな場所にもあるなんて」

「この階層は超高級店っす、どっかに引っ掛けて壊すと破産して奴隷行きっす」

「まづいじゃないですか、エイナさん!!」

俺らを無視してどんどん進んでいくエイナさんに付いて行く2人、それでもベル君は装備には興味があるようで、きらびやかな高級装備に目を輝かせていた

「えっええー13000万バリス!!!」

ショーケースに飾られた武器を見て、あまりの高額に大声を上げる

ベル君、君の装備それに丸が1個付くんだぜ！

なくんって思いながらその様子を見ていると

「いらつしやいませー今日は何をお探してでしょうか、お客様」

「へ？」

「うっはーなにこの神様、超可愛いんですけど・・・クスクス」

「神様なにしてるんですか！」

「あははっはははーっ！」

俺は爆笑して腹を抱えて笑い、ベル君はなぜこんな場所に神様が居るのかって事に驚きまくっている

「マフィ君笑いすぎだよ！どういうことなんですか神様！」

「ベル君たちこそどうしてここに？」

「どうしてもこうしてもないです、神様帰りましょう、神様は神様なんですから恥も外聞も捨てちゃダメです、これ以上笑いの種になったらどうするんですか！」

「ええい！離せベル君！神にはやらなくちやいけない時があるんだ！」

「神様がやらなくちやいけない時ってどんな時なんですか?!お願いですから言う事を聞いてください」

「ベル君つぎいくよ！エイナさん待たせちや不味いですって」

「ただでただけ!!」

「帰って来てからでもいいつすよね?か・み・さ・ま？」

俺は神様に合図をしてうなずかせると、ベル君を引きづり本来の目的地の階層へ

「お見苦しい所をみせてすいません・・・」

「変わった神様だね」

「まあアレは俺達のせいだから何も言えないのが本当の所なんだけどね」

「ねえマフィ君やっぱ神様のアレって・・・このヘステイアナイフのせいなんだよね？」

「まあ間違いなくそうだな」

「やっぱり僕、今から行ってでも止めて来るべきだと思うんです！」

「さてよベル君、無駄っすよ、こうなる事は以前武器を手に入れる前に覚悟しての事だった、つてことはベル君は神の意志に反する事にならないか?」

「だからつて・・・マフィ君はこのナイフの価格分かるつて言つてたよね、いくらなの?」

「自分が代わりに稼ぐつてか?」

「あたりまえじゃないか!僕の武器なんだ」

「神様はそう思つてないともうよ、いま無理をして稼いだとしても神様はきつと傷つくと思うな」

「それでいくらなのマフィ君」

「やっぱ、はぐらかさせてはくれない?」

「うん、絶対知つてるべきだと思うんだ」

「俺も細かい数字までは分からないのは一緒に居たから分かるよな?」

「うん、単位までだったよね?」

「億だよ、数億だと思う」

「え?」

「冗談だよね?億つてえ〜つと1000万の100倍?・・・じゃくつて・・・え〜つと・・・いくつ?」

「ベル君の武器つてそんな高価なの?」

「そうっすよ、おそらくヘファイストス自らの作品だと思う」

「うっそ・・・」

「エイナさん、この事も秘密にしてくださいね、たぶん不味い事になるはずだから」

「分かつてるわよ!」

「おーい、もどつてこーい」

未だに現実から戻つて来れないベル君を揺らして現実世界に戻つて来て貰うと

「返しに行きましょダメだよ絶対!」

「無理だと思うぜ、それエイナさん持つてみてくれる?」

俺はナイフをエイナさんに手渡すとナイフに変化が出る

「ベル君見てみ、持ち主を指定する様に出来てる、返却しても二束三文にしかならないはずっす」

「そ・そんなあ、どうしようどうしたらいい？」

「必死に頑張つて強くなるしかないだろうね、それで稼いで返すしかないと思うっすよ、お金稼ぎのために商売初めても、そのナイフを渡してくれた恩を仇で返す事になると思うし」

「うん・・・」

「マファイ君の言う通りだよ、私も協力できることはするから頑張ろベル君」

「はい、ありがとうございます」

気を取り直して本来の目的地に到着し、ここの簡単な説明をベル君が受けた後は、それぞれに装備を見る事になった、今回購入するのは防具だ

俺もベル君も、サブウエポンが欲しい所だけど、今は武器より防具だという事で見ると、防具とか動きやすさに影響出るんだよ

「やっぱ見た目も考えると、防具とか動きやすさに影響出るんだよなあ・・・」

「贅沢言わないの、まず自分を守る事を第一に考えなさい」

俺はエイナさんと装備を見て回ってる、ベル君は大はしやぎで直ぐにどっかへ行ってしまったからだ

「盾くらいしか予算できに限界かな、出来ればエリクサー貯金は使いたくないからなあ」

「なんでエリクサーが欲しいの？ポーションでは追いつかない事があったの?？」

「最近ミアハ様にポーションの事で勉強してて、見本に1本欲しいんですよ」

「あいかわらずベル君とは正反対なんだね、ホント君達はいいいコンビだと思うよ」

「それで俺の指定したメンバーやっぱ無理そうですか？」

「サポーターか盾の得意な人だね、無所属のサポーターも最近は

ファミリアに入る事が多くなってきたの、だから難しいかもしれないわね」

「そうっすか、まあ縁がなかったって事ですね」

「しようがないよ、こればかりはさ」

俺は自分の戦い方を想定して、カントレットとグリーヴそしてインナーと厚手のコートを購入する事を決めると

「もう少し重装備にしたほうがいいんじゃないの？」

「防御魔法を持つてるので、防御よりも動きやすさと武器に耐えられるガントレットが重要なのを考えるとこの組み合わせかなと」

「まあ君が決めたならそれでいいと思うよ」

「ベル君はどこいったんっすかね？」

支払いを済ませてベル君を探していると、奥の方で箱が乱立してる場所で、目を輝かせて装備を見てるので

「いいのみつかったっすか？」

「あ、マフィ君これにしようって思うんだ」

見せて来たのは白い軽装備に赤色がアクセントに入った装備一式だ

「へえ結構かっこいいっすね」

「そうなんだ見た目もいいし軽くて丈夫そうなんだ」

「おーいベルくん、こっちにいいのがあたよー」

俺達を他所にエイナさんはベル君の装備に良さそうなのを彼女なりに探していたようで、声をかけて来るが・・・若干間に合わず？

「・・・それに決めちゃった？」

「はい、僕これにします」

「いいよ、ベル君がこれって決めたなら、君が使うんだし、それでいいと思う」

「はい、ありがとうございますー！」

お会計を済ませ、帰りの途中にエイナさんはベル君に籠手につけるタイプのプロテクターを手渡してラブコメ始めたので、イケメンシネ

といいながら、その場を離れようとする

「まってマフィ君にはコレを貰ってほしいな」

俺に手渡されたのは、高級そうな試験官に入った薬品、おそらくはエリクサーなのだろう

「や・やばいですって！さすがにもらえないって言うか高すぎますって」

「これは元々私が持ってたものなんだ、ベル君みたいに買った物じゃないけど、2人には居なくならないで欲しいから、貰ってほしいな」
「お守りとかそういうのじゃないんです？」

「ううん、知り合いに何かあったら使えって言ってもらったけど、私ダンジョンには行く事無いし、ずっと使わないままだったから」

「分かりました、使わないでいい様に今後も頑張るっすー！」

「うん！頑張ってるね」

なんやかんやで夕方になってしまったので、夕飯の買い出しがてら歩いていると、いきなりベル君に少女が飛び込んできた!!

フラグ？またなの？ええー！またなの?!

「だ・大丈夫ですか?！」

ベル君はぶつかって来た少女に話しかけると、逃げてきた方角から殺気を振りまいて走って来る男が

「もう逃がさねえからなーこのクソパルウムが！」

男は武器を取り出し、少女めがけて走り込んでくるので、すかさず彼の足を引っかけてやると、面白いようにコロコロ転がった・・なにこいつ?!

「てっめーなにしやる?!」

「いえ、貴方が勝手に躓いただけでは？」

いけしやーしやーと嘘をのたまうマフィ、当然そんな訳あるかーとかって突っかかって来る

「ふざけんなよ！てめーそのパルウムの仲間なのか？」

「勝手に俺の目の前で転んでおいて、言いがかりも付けんじゃねーよ、

かつこわりー野郎だな！」

「ちっ」

男はパルウムの女の子を追いかける為向かおうとした時

「さてよ、何処のモンだてめー言いがかり付けて謝る事も教えられねー貴様の所のクソ神の名前教えてから行けやこのロリコン！」

「あああんやんのかてめー！」

「やめなさい、街中で剣を抜くとは、穏やかではありませんね」

俺達に割って入って来たのは、酒場の店員リユーさんだった、何このイケメン美女・・

「ああん？口出しすんじゃないねーとつとと失せろ」

「吠えるな！」

「手荒なことはしたくありません、私はいつもやり過ぎてしまう」

リユーさんの威圧によって、俺達は怯んでしまう、男は捨て台詞を言いながらどこかへ行ってしまった、何子のイケメン惚れてまうやろ？

男は諦めて何処かへ行ってしまう、ベル君はいけんめんリユーさんにお礼を言うと、そのまま彼女に付いて行き酒場でそのまま食事にする事にした

次の日から、新たな装備に身を包み、さっそく装備の具合を確かめるべくダンジョンへ向かうと、後ろから声をかけて来る子が

「お兄さんお兄さん、初めましてお兄さんサポーターを探していますか？」

ベル君に話しかけるのは、昨日のトラブルの時に見たパルウムの少女

「え．．．ええっ？」

「混乱しているんですか？でも今の状況は簡単ですよ？冒険者さんのおこぼれにあずかりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みに来てるんです」

「そ、そうじゃなくて君は昨日の？」

「お兄さん、りりとお会いしたことが有りましたか？りりは覚えてないのですが」

「あれえ？マファイ君どう思う？」

「さあどうなんっすかね？」

お手上げのポーズでごまかすしかない俺を他所に彼女は

「それでお兄さん、どうですか、サポーターはいりませんか？」

「マファイ君どうしよ？」

何かおかしいなとは思いつつ、様子見もかねて雇うのもありだろうと考える

「いいんじゃないかな、前から探してたサポーターが都合よく向こうから来たんだし断る理由も契約内容次第ってところかな」

「そうだね、じゃくお願いしようかな」

「取り分はキツチリ3分割でどうだ？手始めだし面倒な計算も必要な
い」

「そうだね僕もそれでいいと思うよ」

「りりもそれでいいです冒険者さん」

「次にリルカさんは、どこかのファアミアに所属しているんですか？俺達2人はヘスティアファミアに所属している」

「はい、りりでいいですよマファイさん、それでりりはソーマファミアに所属しています」

「なぜ自分のファミアで組まないんですか？」

「りりと一緒に言ってくれる人が居ないからです」

「何故？」

「えへへ・りりはこんなに小さいですし、腕つぶしもからつきしなので、何をやってもどんくさいりりにファミアの方々は愛想尽かして邪魔者扱いにしてるんです、頼んでも仲間に入れてくれないんですよ」

「その大きなリュック持つてる事から力もあるように見えるし、その服の中にある武器だつて相当な物だと思っただけど」

俺は袖にある違和感で即座に気が付いた、隠し武器らしきものを持つてる

「さすがですね、これは護身用ですよ」

「なるほどね、神ソーマはどんな人なんですか？」

「・・・いいじゃないですかそんな事ダンジョンには関係ないでしょ」

「そうだねマフィもいいでしょ、行こうよ」

「悪い事を聞いたな、気を取り直して行こうか」

こうしてダンジョンに入り、ベルに小声で（何かあると困るから今日は5階層までいいいな？）といいいつもよりも超スローペースで進んでいく、ベルは不満そうだけど速度を上げると細かい所にまで気が回らないから仕方がない

5階層まで行きあらかた戦い終わると

「お二人ともお強いー流石です！お二人ならまだ行けますよりリリが保証します」

「いや今日はもうここまでだ、ベル君なるべく倒しながら戻るから少し休憩しようぜ」

「うん、そうだね」

ゆっくりとしたペースで敵を倒しながら戻り、換金を済ませて三等分する事に

「ベル君、さっきの戦闘の事で打ち合わせしたいからあっちへ行こうぜ、リリさん悪いんですが換金お願いできますか？」

「はい、おまかせください」

ベルを引き連れて離れた席へ座り話をする事に

「マフィ君はどう思ってるの？リリルカさんの事」

「何か隠してる、何かをしようとしてる、何かを狙ってる、何かに追われている、その他諸々かな」

「そっか・・・だから今日は5階層までだったんだね」

「そういう事さ、分配終わったら俺は少し一人で調べたいことがあるから、ベル君は神様に言付けたのめるっすか？」

「なるほど、分かったよ」

その後は他愛もない話をして過ごしていると、リリが帰って来て今日の稼ぎを出してくれるトータル8900バリスを分ける事に

「割り切れないねどうしょ・・・」

「ではりりは2000バリスで十分ですので残りはお二人でつて事で
どうでしょう」

「いや俺が2900で二人はそれぞれ3000でいいPTリーダーと
して決定する」

「えええーマファイ君?」

「そういう事で、俺はこれから用事があるから行くぜ、リリさん良かったらベル君貸し出すからデートでもいつてきたらどおつすか?」

「はい分かりました」

「ちよつと何言ってるんだよマファイ君!!」

その場を後にして俺は彼らがワイワイやってるのを傍目に、ギルド職員に話しかけて

「あそこに座ってる彼女が換金した魔石を見たいのですが」

「あく先ほどの、ちよつとまってね」

そう言っただしてくれた魔石を見て

「コレの買い取り額はいくらです?」

「12300バリスですがどうかされましたか?」

「いえ大丈夫ですありがとうございます」

つてことは相当やってくれたみたいだな、俺は魔石の数を数えてたから分ってる、魔石自体も換金額もピンハネしてるって事が

「エイナさんいます?」

「はい、確か・・・今日休みみたいですね」

「分かりました、出直します」

そう言っつて俺はギルドを出て隠れる事に、狙いが金なら俺達をピンポイントで狙った意味が分からない恐らく狙いは・・・

2人そろつて出るのを確認すると、注意しながら尾行する事に、そうするとリリは早速ベル君の注意を他に逸らした隙にベル君の腰にあるヘステイアナイフを抜き取った

「待てよー!」

俺は武器の切っ先を彼女の首に突き付け殺気を向けると

「マフィ君いきなりそうしたの?!」

「動くな! 動けば殺す何かしゃべっても殺す」

「どうしたんだよマフィ君!」

「ベル君腰のヘステイアナイフだ」

俺に言われてベル君は腰に手を伸ばすが無い事に気が付き、何が起こったのか理解した様だ

「だからって女の子に武器を向けるのは良くないよ!」

「ベル君、彼女の左手の袖の中だ確認しろ」

俺に言われてベルはリリの左袖の中にあるヘステイアナイフを取り出すと

「もどってきたんだしもういいでしょ」

「いや、悪いけど突き出させてもらうぜ、しかるべき場所へ、これをつかってコイツの両手を縛れベル君」

「出来ないよやめようよ、取られたのだから僕の不意なんだし」

「逃がせばベル君も同罪だ共謀罪だぞ、それでヘステイア様は悲しまないって言えるのか?」

「りりつい出来心なんだよね?」

「りりさん喋っていいとは俺は言っていない、動いてもしゃべっても確実に殺す!」

「マフィ君も落ち着いてよ!」

「いやこの場合落ち着かなくちゃいけないのはベル君だ」
「.....」

「ベル君が拘束しないのならこいつを殺す、その方が運搬は楽だしな」
俺にそう言われてリリを拘束し始めるベル君、観念したのかりりは大人しそうにしている

「それで変装・・・いや変身するなにか魔法かスキルがあるんだな?」

彼女は何も答えないが、ビンゴの様だ、なるほどねこりや大物の怪盗だわ

俺達は、一旦ギルドへ戻る事に、そこで対応してもらおうほうが早いと考えたからだ

「すいません泥棒を拘束したので、担当者の方ませんか?」

受付で俺が話をすると

「はい、先ほどの方ですね、やっぱり何かあったんですね」

「はい、こういったトラブルってよくあるんですか？」

「そうですね、よくではないですがたまにある感じでしょうか」

「そうですか、今仲間が取り押さえてるので何処へ連れて行けばいいですか？」

「はい、では調書をとりますのでこちらへ」

そして言われた様に、ベル君とリリを連れて行こうとすると、ベル君が頭を下げているのが見える、はあ・・・

「逃がしたんっすか？」

「うん・・・」

「すいません盗人の色香にやられたみたいで仲間が取り逃がしちゃいました」

「・・・そうですか調書だけとりますのでこちらへ」

こうしてあった事を全部伝え、調書がおわり帰る事に

「・・・ごめんなさいマフィ君」

「なんにだ？」

「色々全部・・・」

「その全部を言えよ」

ポツポツとベル君の口から、俺に謝りたい事を1つ1つ言っていくのを聞きながらホームへ戻った

神様が戻ってからもう一度今日の事をヘスティア様に報告すると、

俺は当然褒められベル君は怒られることに

「ベル君いいかい！君は甘すぎるんだよ、マフィ君が居なかったらどうなっていた事か」

「はい、ごめんなさい神様」

「うかつなのはわかるけど、逃がしたのは何でなんすか？」

「ほっとけなかつたんです、神様にあう前の自分みたいで、寂しそうだったんです、自分でも鈍感になちやっってるみたいで、自分でも気付いてないみたいに可愛くココロ笑うんです・・・一人でもへっっちゃらだつて」

「僕は神様に救って貰えました助けて貰えました、間違ってたらそれでいいんです、でももし間違っていなかったら・・・今度は僕があの子を助けてあげたいんです」

「ふうく・・・了解つす、俺はベル君にのるつす、神様はどうしますか？」

「ボクもそれでいいよ、マフィ君はどうするんだい？」

「俺はソーマファミアの内情を調べて、問題あるなら告発します、おそらくベル君が感じた事は本当だと思うんで、それなら主神に問題がないとは思えませんから」

「・・・そうだろうね、でもどうやってやるんだい？」

「証拠を集めます、言い逃れ出来ないだけの証拠を集めてソーマファミアに解散要求を突きつけるのがベストでしょうね」

「やりすぎじゃないかい？それに別のファミアの事に口を挟むのはご法度だぜ」

「被害なら受けてますよ、今日の報酬もピンハネしまくってますし、ナイフの件もあるつすから」

「それで解散させてどうするってんだい？」

「それで出戻るようならベル君とは合う事はないでしょう、確実に牢獄送りにしてやりますよ、フリーになって同じことをする場合もです、恐らくそうはならないでしょうけど」

「そうだろうね・・・私の知る限りでもソーマって奴は影の薄い奴って記憶しかないんだ」

「あと重要な疑問が残ってるつす、これ相当やばい話になるんでベル君ちよつと席を外してもらえないつすか？」

俺の一言にヘステイアは眼光を強める、俺の言いたい事を察したようだ

「ううん現実から逃げたくないんだ、僕にも聞かせてほしいです」

「ベル君たぶんマフィ君の話は君には相当酷になるはずだ、席を外したほうがいいよ」

「お願いします神様、それでも聞かなくちゃいけない気がするんです」

俺はヘステイア様に視線で合図お送り、ヘステイア様も観念したの

か首を縦に振った

「きつくなったら出て行ってもいいですから、話を戻すつす、なぜあれだけの事をして被害者が告発なりをしないのかについてです、あれだけ派手にやれば絶対にバレます、むしろバレてもいいときえ思っって行動してる節があるのには理由があるからじゃないかと考えてるんです」

「そうだろうね、それで君の見解は？」

「ターゲットの暗殺、それもダンジョン内です、ダンジョン内なら死体は残りにくいし、死体が見つかってもしもモンスターにやられたとか色々逃げ道もありますし、実際にモンスターを引き寄せる方法はいくつか聞きました、それを逆手にとればいくらでも殺人なんて簡単にできるはずなんです、但し協力者は必要ははずなので、早い段階で絞れるだけ絞って始末してるのはってのが俺の見解です」

「マフィくんの説に僕も同感だね、そうじゃなきゃPT初日から動きすぎだ、マフィ君の警戒しているのも彼女は理解してるはずだし、その上でやってるんだ、そう考えるのが筋だろうね」

「神様の前では嘘は付けないとの事ですが、これは他の神にも言える事なんですよね？」

「そうだよ、それがどうしたんだい？」

「まあ、今回の事件は、その能力がこういった緩みを産んだのかなって思ってますね、神の前で嘘はつけない、逆を言えば神の前で嘘をつく事が出来れば、それは事実になる、これが問題なんじゃないかと思っって、カラクリは簡単です、魔法なりで記憶を改竄したり他人に変身する事なんかが出来ればウソなんか付き放題、事実の改竄し放題って事です」

「それと今回ののがどう繋がってるんだい？」

「ソーマファミアがどのくらいの時期からこういった事をしてるか分かりませんが、最近始めた事ではないでしょう、なら子供が殺された神達はどうしますか？誰だっってPTメンバーに色々聞くに決まっていますよ、なのに言い逃れ出来てるからソーマファミアは存属している、おかしくないですか？」

「その通りだろうね、そうになると、この件相当に根深いかもしれないし危険かもしれないよ」

「やっぱそうなります?」

「動くなど言っても動くんだろ?」

「ベル君に乗るって言った以上はそうしますよ」

「僕にもやらせてほしいです、あの子を助けたいんです!」

「ベル君は絶対に動くな!!」

「ええええーっ!」

「どうしても何かしたいなら、覚悟があるなら俺の助手で付き添うっすか?」

「うん、それでいいよ」

「うん、それがいいと思うよベル君たぶん君の望む結果にならないかもしれないけど、覚悟しておくんだいいね」

「はい神様」

翌朝、エイナさんに会う為に朝一番でギルドに向かいエイナさんと面談する事になった

「昨日はなにか大変だったみたいね、休日でいなくてごめんね、それで詳しい事までは知らないんだけど何があつたの?」

「ここで昨日の事と俺が神様に言った見解を話す事に」

「うくん、マフィ君の言ってる事は筋が通ってるわね、それでここに来たのは」

「はい、ソーマファミアのメンバー全員の名前と過去にPTを組んだ他のファミアでのダンジョンでの消息不明者の所属までが知りたいですね」

「そうなるよねっしつかし変身魔法か記憶改ざん魔法ね・・・」

「変身魔法は昨日の彼女リルカさんは使える感じでしたね」

「はあく・・・やってくれるわねソーマファミア、たしかに彼らは問題と云うか色々ギルドでも言われててね」

「っと言うと?」

「なんというか必死なの、お金にもものすごく必死でいつも買取所で揉めてるんだよ」

「金っすか、何のために金が必要なのが今回の動機に繋がるんでしょうね」

「そうだと思うわ、それで名簿を出すことは出来ないんだけど、私の方で調べておくから任せてくれないかな?」

「そう言う訳にもいかないんっすよね、なんせ俺は少なくともギルドも疑ってる対象ですんで」

「ギルドもグルだつて言いたいのか?」

「エイナさんがそうじゃなくても、他の方まで信用は出来ないっす、例えば探ってるのをエイナさんの上司が見つけたら面白くないという事で適当に返答させたり、調査中といって返答を引き延ばしたりもできるっしょ?」

「・・・そうよね、ギルドの責任でもあるんだしそう言われても仕方ないけど」

「エイナさんは俺に仮があるっしょ?調べた内容で外に漏らしてはいけない内容は俺も背中の事がバラされない限り漏らさないっすって誓うっす」

「分かったわ、まずメンバーと最近のPT状況の資料を持ってくるわ」
その後しばらくしてエイナさんが大量の書類を抱えてもどつてくる

「多いつすね最近のだけじゃないんっすか?」

「最近のだけでこれだけあるのよ、私も手伝うわ」

俺達3人がかりで、1枚づつ行方不明者が出た時のPTをリストアップしていくと・・・まあ出るわ出るわよくもまあ今まで問題にならなかったもんだと感心するほどだ、ただ傾向があつて、数名が関わったPTは高確率で行方不明者が出ている事が判明する事になった

「このくらいいいでしょう、残りはエイナさんの仕事っすね」

「あーもう疲れたっすって後は私が1人でやるのか?」

「当たり前っすよ、他のギルド員にも内緒でお願いっす」

「あーもう、分かったわよ」

「エイナさんごめんなさい」

「いいのよベル君、私の仕事はこういう事も含まれてるんだし」

「それでこの5名ですね」

「そうなるわね偏りがあるのはそういう事になるわね」

「ファミリア全体で組織化してやってない、一部の奴らがやってるって事になりますね」

「そうね神ソーマも関わってないでしょうね」

「けど責任がないとは言わせませんよ、ウチとしてはソーマファミリアの解散及びお金集めの原因になってる事の即時中止っす」

「相当厳しい罰になるけど、その程度は当然よね、これが事実なら」

「当たり前です、それでお金集めの理由はどうやって調べるっすかね」

「そうねく・心当たりがないって訳じゃないけど」

「直接聞くんっすか?」

「疑ってるのを今知られるのは得策じゃないわ、あの神様なら知ってるんじゃないかと思って」

「それは?」

「神口キ様よ、あの神様のファミリアはこの都市でもトップのファミリアだし色々な事を知っててもおかしくないわ、それにソーマファミリアの作ってるお酒の愛飲者って話を聞いたことがあったから知ってるんじゃないかしら」

「ははは・・・それは俺達は行けないかな・・・」

「何かあったの?」

「いあくなんというかヘスティア様とあまり仲が良くないというか、俺も初めて会った時に知らなかったとはいえ失礼な事を言っちゃまって」

「じゃく私が聞いて来るわ、それくらいは任せて」

「すいませんお願いします」

ギルドを出て、俺達2人は被害者のファミリアの主神から話を聞くために、1つ1つ回る事にした

「捜査つてのは地味つすから、嫌になったら何時でも辞めていいつすよ」

「ううん、僕が言い出した事だから最後までやるよ」

「じゃ〜手分けしていきましよう数も範囲も多いですし、聞く内容は容疑者5名と会った事はあるか？そしてあつたことが有る場合は何を聞いたか？この2点についてです」

「うん分かったよ」

「途中になつてもいいので夜7時ホームへ集合つて事で」

「うん、分かったよ」

2手に別れ、俺は近くにあるホームを2・3回つて聞き込みをする、概ね予想通りの回答が得られたので、それ以降は回る事を辞めてソーマファミリアのホームを見張る事にした

容疑者の根城がファミリアのホーム以外にあると考えたからだ、これだけの事をしてるんだ隠家が無いと打ち合わせだつて拷問だつて出来はしないだろうしね

予想よりも早く容疑者の1人がファミリア出口から出るのを確認すると尾行を開始、容疑者は街で他の容疑者を含む数名でダンジョンへ入つて行つてしまったので追跡を断念

「そううまくはいかないか・・・」

ダンジョンでの尾行はまず無理だ、いきなり敵が湧けば対応せざる得ない、そうしたら戦いの気配で感づかれる

仕方がないので、引き続き時間まで被害者の居たファミリアに聞き込みをした後、ホームに戻ると2人は既に戻っていたので、調査の精査をする事に

「そうとう参つたようだねベル君」

「はい、神様によつては死んだ人の事を覚えても居ない神様も居たり、興味がないといった神様が多かつて・・・」

「ベル君！僕はそんな事はないからね、ベル君が死んだら僕は永遠に悲しむからね！」

「はい僕は神様に拾われてとっても幸せです」

「あーそういうラブコメ要素はいいから、それで聞いた所もあつたんだろ?」

「うん、何があつたんだつてのを聞いたそうです、それでキラアアントに囲まれて殺されたつて自分も必死だったから逃げるだけで助けることは出来なかつたつて」

「なるほどね、手口はキラアアントの子供か、予想通りのモンス寄せによる暗殺つすね」

「やつぱりそうなのかな?それだと自分も巻き込まれるんじや?」

「協力者が居れば逃げる事くらい訳ないと思うね、ルートを知つてればソロだつて可能だと思つす、その質問の仕方なら嘘にはならないし、神も案外甘いつすね」

「そうなると記憶の改竄とか変身魔法とかの疑いはないつて事かい?」

「まだ0じゃないけど、無しでも行けるつて事ですかね、神がもう少し甘くなければ事態を大きくしなかつたんだろうけど、聞く限りでは神は子供に一定以上の感情は持ち合わせていない、神であるが故の怠惰・いや神だからこそ市井の信者に一々大きく肩入れしないつて感じなのかな」

「そうかもしれないけど全員が全員じゃないんだぞ、私つていう例があるじゃないか」

「あーそうつすね、ヘステイア様のベル君Loveは凄いつす」

「そう拗ねるなマフィ君、ボクは君の事だつて大好きだぞ」

「あーうーれーしーなーあ」

「むうー」

「これで後は俺とエイナさんの仕事になるつすね、ベル君にはそろそろ動くであろうリルカさんを探してほしいつすね」

「見つけ出してどうするんだい?」

「説得して見てほしい、コレは俺にもエイナさんにも無理だと思うから、真正面から何も見返りとか変な事を考えずに向き合う事の出来るベル君だからこそ出来ると思つす、危険だろうけどやれるつすか

「？」

「分かったよ、説得してもうやらないように言い聞かせればいいんだよね？」

「そういう事つす、それで俺夕飯食べてないから買ってきてくれない？聞き込みに集中しすぎて朝からなんも食べれてないんだ、まだ聞き込みして来た書類の整理もあるし頼めないかな？」

「あつそういうば僕も食べるの忘れてたよ、神様は？」

「ボクも頼めるかなベル君」

「分かりました行つてきますね」

そう言つて買い出しに出かけるベル君を見送つた後

「それであのサポーター君を説得できると思つてるのかい？」

「ほぼ無理つすね、おそろくさらに騙されるんじゃないでしょうか」

「そうだと思つたよ、君は酷い奴だなホント、神顔負けだよ」

「そしてもし次仕掛けて来るなら確実にベル君を仕留めに来る可能性がありますが俺は見守りはしますが助けません」

「どうしてだい！ベル君を見殺しにするつて言うのかい?!」

「ベル君は全部知つた上でまた騙されるでしょう、それを打ち負かしすべて受け入れて彼女を助ける為に、だからこそ無理ならそこまでです。ステイタスの才能だけで今後やっていけるとは到底思えない、ここで生き残れないようでは冒険者を辞めるべきだと俺は考えてます。それに俺は賭けてるんですベル君に、ここで終わるような奴じゃないつてだから見守るだけにします」

「・・・それでも危なかつたら助けてやつて欲しい、お願いだマフィ君！」

俺は暫く考えた後深く頷き

「・・・分かりました」

と答えた

翌日ベル君は朝早くから出かけリルカを探すために出会つた場所まで待ち伏せる事にした様でじつと待ち続けていた、それを遠くから誰にも悟られない物陰から見張る事に

大勢の冒険者がダンジョンへ向かう毎日の光景を傍目に彼女は大きなリュックを背負って現れると、ベル君の方から近寄り話を始めた
「さくでどうなることやら」

一方ベル君はというトリルルカを見つけるなり

「サポーターさん、サポーターさん、冒険者を探していませんか？」

彼女の驚きを隠せないでいた、騙した相手が再び何もなかったかのように自分に話しかけて来る事に、彼女はスグに察したかのように観念し

「どうなされるおつもりですか？逃がしたくせに、殺すならダンジョンでつて事なんですか？」

「うくん・サポーターを探しててサポーターが1人で居たから声をかけたんだ」

「嘘です！リリをバカにしないでください、殺したいならそう言うてくださいれば・・・いいです付いて行きます」

彼女はもうこの世界に愛想をつかしていた、物心ついた時にはソーマミアリアのメンバーであり両親はあつけなくダンジョンで死に残された自分は逃げてでも隠れても・・・見つけ出されて、もう生きるのに疲れたリリは覚悟を決めた

ダンジョンに潜り何時もの様にサポーターとしての仕事をこなしていく、体に染みついた作業だけに苦はない、あとは何時自分が彼に殺されるのかを待つだけ

死刑宣告を受けてもなかなか死が訪れない、それは恐怖にさらされ続けるというストレス

「もう周りには誰も居ません、一思いにお願いしますベル様、覚悟はできてますから、これ以上リリは耐えられそうにありませんから」

「僕はね君を助きたいんだ、信じてくれないかな？」

彼女の絶望しきった目、かつての自分を映し鏡で見ているかのような感覚、だからこそほっとけない、なんとしても助けたい

けど彼女は冒険者に優しくされた事などはない、同じファミリアとしてそれは同じこと、信じてでも裏切られる事に慣れ過ぎた彼女には理解が出来ないのだ

「もう助けると思つて一思いにお願いします、おもつてたよりベル様は残酷です、死を待ち続けるのがどれほどに苦痛なのか分かつてらっしゃらない！」

「分かるよ、僕もそうだったから、けど僕は神様に会つて救われたんだ、だからリルルカさんだつて救われていいはずだよ」

「リリには分かりません、その気がないなら失礼します！」

彼女はダンジョンを出るべく引き返していく、ベル君も彼女を追いかけると、待ち構えていた冒険者に捕まる事になった

「よお〜ようやく合えたなアーデクックク」

容疑者の1人がリルルカを蹴り飛ばし、剣を突き付けて

「同じファミアリアのよしみで、後ろから追いかけて来る奴から守つてやるから、全部よこせ、なあ？」

リリがファミアリアから逃げ出すための資金を嗅ぎ付けて来たハイエナが牙をむくベル君が追いつき、殴りかかろうとすると他のメンバーにベル君は取り押さえられてしまふ、周りを警戒しないからだ

「やめろ!!リリから離れろ!!」

「おいおい威勢のいい兄ちゃんだな、アーデうまく騙してるみてーじゃねーか」

「ひっひひーなかなかいい武器持つてるじゃねーか、ヒエログリフの刻まれたヘアァイストス製かアーデの狙いはコレか」

「はなせ!その武器を返せ!!」

ベル君は男達に殴られ蹴られるのを確認して俺が飛び出して一気にリルルカを取り押さえている男を突き刺す急所ではないが不意打ちだった事もあつて綺麗に決まり吹き飛ばす事に成功、即座にベル君を押しえつけてる男へ向かい足めがけて一気に詰め寄り足を吹き飛ばすと男はわめき散らす

「ベル!最初に吹き飛ばした男を拘束しろ!」

俺に言われ武器を取り戻した後、言われた様に男を取り押さええる、おれも足を吹き飛ばした男を縛り上げてポーションで止血する

「まだ容疑者は3名居る油断するなよベル!」

「うん、分かった」

俺は縛り終わるとベル君へ添付魔法をかけるよ

「リリルカさん重要参考人として付いて来て貰います、拘束しなくても付いて来てくれますよね？」

「・・・はい」

2人以外は逃げたのか居なかったのか分からないが、ダンジョンを出るまで姿を現わす事はなく、そのままギルドへ連行した

ギルドは俺達が来る前から既に蜂の巣を突いた様な大騒ぎとなっており、俺達が来るとさらに騒ぎは大きくなった

ベル君と俺が、被害者のファミリアへ事情聴取へ行つたのが原因だったのだ、事細かに説明したことで、神の嘘を見抜くという御業の抜け道を聞かされた神達はごぞつてギルドに問い合わせたのだ

俺達の前では体裁とかを考え、変に勘ぐられたくなかったのだ、神達は俺達が思ってた以上に子供達を愛していたのだ

その様子に俺もベルもなぜか他人の事なのに嬉しくて目に涙を溜めるのだった

その後、ソーマファミリアは解散、容疑者5名も捕縛され追及されすべてを話す事になり、極刑となった

リリルカ・アーデは、俺達の説得もあつて保護観察付きでヘステイアファミリアにて監視する事に、神達も彼女の生い立ちには考えさせられる事があつたのだろう

ヘステイア様は、俺達の代わりに彼女にどうやら罰を与えたようだ、内容までは知らないが、その内容が彼女にとってプラスになっているのだけは分かる、それが彼女の表情に現れていたから

「意外と早く片付きましたね、さすが冒険者ギルドっす」

エйнаさんと全てが終わった後、その後どうなったのか聞くために訪れていたのだ

「まさか、お酒の為だけに集まったファミリアだったなんて思ってもみなかったわ」

「それももう酒じゃないっすよ、麻薬とか覚せい剤っていうんっすよ、それで酒の製造は永久に禁止になったんっすよね？」

「うん、当然と言えば当然だよね」

「禁止にしなかったら、もうひと騒ぎしてやる所つす」

「もうやめてよねホント、大変だったんだから」

こうして俺達のファミリアに新たなメンバーが加わる事となった

借金返済

「俺一応男な、でリリは女おk?」

主神へステイアも交えた新生へステイアファミリア初めての大会議だ、議題はもちろんリルカ・アーデの処遇についてだ

リリは保護観察と言う名目でソーマからへステイアファミリアへ編入してきた、ここで問題になったのが住む場所だった

部屋のキャパ考えても既に超えていた3人での同居に4人目は当然だが無理なのだ、そこで現在の部屋を俺とベル君、リリの使ってる部屋に神様とリリにしようと提案

ここで神様がダダをこねまくりやがったのだ、どうあってもベル君との生活は捨てる気のない我儘神様に、どうにか子離れしてくれと嘆願する他3名

そうなると、べると神様で元のホーム、俺とリリで暮らすって流れになり・・・

「神様が借金作って来なかったら、4人で暮らせるホームだって考えられたのに」

「なんだいなんだい！借金はボクのなんだから君達は関係ないじゃないか」

「んなわけあるかアフォ神さま・・・」

「むむむむむーだんだん君の僕に対する態度がおかしくなってきたくないかい?」

「敬ってほしかったらキャパを超え過ぎた借金すんなやゴルア!」

「まあまあ・・・二人とも落ち着いて・・・ね?」

「ところで借金と言うのは?」

「ここで俺がリリに全部ばらしてやることに、ケツケケツケ！」

「えええええー!」

「こらーっ!マフィ君ばらすんじゃない!!ベル君にまで知られちゃった・・・じゃ・・・な・・・べるく・・・ん?」

「もうすでにベルにはしゃべっちゃったた、テヘペロ」

「ぬぬぬぬー!」

「ベル君に聞かれて、正直者のボクとしては隠し通せませんでしたテ
へベロ☆」

「うぬぬぬぬーっ!!」

「僕は気にしてませんから、一緒にがんばりましょ神様」

「このベル君の一言で、機嫌が直る神様・・・単純すぎるだろ!!」

「まさか億単位の借金背負ったファミリアだったなんてオラリオーの
貧乏ファミリアなんじゃないですか?」

「とて厳しい・・・とっても厳しい一言を言うりり」

「それだけの借金が出来るほどの力を持ったファミリアとは言えない
んっすか?」

「そんな言葉だけを見繕ったってしようがないじゃないですか」

「まあ・・・半分程度はもしかすると何とかできそうかな」

「半分って、そう言えば何億なんですか?」

「あ、それ問い詰めるの忘れてたな、それで何億なんっすか?」

押し黙る神へステイア、俺達が冷たい視線を注ぎ込む

「・・・おく」

「はきはきしやべらんかい駄女神!」

俺はどこかのチンピラのぶとく女神を問い詰める

「に・・・二億バリスだ!」

「ふくん」

「おもってたより安かったですね」

「そうっすね、俺は6億くらいかと思ってた」

「へ?」

「まったくください2億ですよ2億バリスなんですよ?」

「だってなあベル君」

「そうですね、ちゃんと神様も僕達の事を考えて価格交渉してくれて
たんですね」

「まあ認めるしかないかな」

実はへステイアは一切価格交渉なんかしてない、この2人の反応に
へステイアは、何言ってるの???と不思議そうな反応をするしかな
かった

「ちなみにベル君喋るなよ、このネタは借金返済のネタなんだから」
「う・うん」

「へ？借金返済のネタ??」

「全額は難しいかもしれないけど、半分は狙えるんじゃないかっていう爆弾ネタがあるんっす」

「マフイ君どういうことだい半分って言うのと1億だぜ?」

「まあ俺を信じてくださいよ、ネタバラシは半額にした時にでもするっすから」

「君がそう言うなら何かあるんだろうけどさ・・・わかったよ君に任せるよ」

「それでヘステイア様、ヘファイストス様と面談を取り付けて欲しいんっすよ、要件は借金返済計画の件」

「だからナイフの借金はボク個人の契約書なんだから、そうさ!この契約書がベル君への愛の結晶誰にも渡したりなんかさせないさ」

「けど半額になるかもって時、動揺しましたよね?」

俺の凍える様な視線に・・・

「ううう・・・分かったよ、だから見捨てないでくれ、それに本当に半額になんてなるのかい?」

「ヘファイストス様にあつた事も無いから性格とか分からないし確実ではないですが、神々が本当に刺激を求めて下界に降りて来たってなら興味のある事にならお金は惜しまないと思うんっすよ」

「ヘファイストスの興味を引きそうな事かい?」

「はい、ヘステイアナイフの価格が安いのは単にヘステイア様と仲が良いってだけじゃないと思うんですよ、あれ自体が興味の対象だったんじゃないかって」

「それで君はあのナイフに隠された何かを掴んだんだね」

「まあ〜そういう事です」

「分かったよ、君の言う様に借金返済計画について話がしたいって伝えておくよ」

後日へスティア様の働きかけにより、俺とへスティア様は、ベル君のナイフを借りてへファイストス様との面談が行われることになった

「始めまして、へスティアファミリアのマフィといいます、お忙しい中、時間を作って頂き本当に感謝しております」

「ふふへスティア貴女の子供にしてはちゃんとした子じゃない、へファイストスよろしくね」

「早速ですが返済計画をお話しする前に、いくつかお聞きしてもよろしいでしょうか？」

「ええいいわよ」

俺は懐からへスティアナイフを取り出して机の上に置くと

「このナイフは持ち主を指定し、持ち主の能力に呼応して一緒に強くなるで合ってますか？」

「ええそうよ」

「他にはないですか？」

「ないはずよ・・・」

ここでへファイストスの片方しかない眼球の目線が動いた、どうやら気配を感じたのかどうか分からないが・・・

「もし他の効能が出た場合、それは失礼ですがへファイストス様の能力をもつても見極められなかった不良品という事でしょうか？」

「・・・何かあつたのね？はぐらかされるのは嫌いな率直に言って貰えるかしら？」

一気に機嫌が悪くなるへファイストス様、そりやそうだ自分の自信作が不良なんじゃね？とか言われてまともじゃいられる訳ない、職人なら誰だってそうだ

「結論から言いますが、先ほど言われた性能以外性能がこのナイフには発現しています、このネタいくらで買いますか？」

「そのナイフは使用者に合わせて進化するのよ、他の性能が追加されたとしても変ではないわよ」

ここで先ほどへファイストスの視線が動いた先にある布でくるまれた槍を机の上に出す

「他の武器に影響が出ました、そのナイフではなくこの武器にです」
「なんですって!!」

飛び上がる勢いでヘファイストスは立ち上がり、目を輝かせて机の上に置いた槍を手に持とうとするが俺はそれを制する

「待ってください、それでこのネタいくら払いますか？それが決まったらお貸ししますので」

彼女は気になってしょうがない事をひた隠し、俺に強い視線をぶつけて来る

「それも想定範囲内よ、他の武器に影響が出たのは持ち主によるところだと思わ、だからメンテナンスの為にも特別に両方今回だけは無料で見てあげるわ」

「いえ、結構ですヘステイアナイフに綻び所か細かな傷一つありませんから、それでは返済計画についてなんですが、こちらで計画書を作成してきましたのでお手数ですが目を通して貰えますでしょうか」

そう言って割引の無いパターンで用意してた用紙を数枚取り出し武器を元に戻した後、机に出すと、肩をすくめたヘファイストスは「分かったわよ言い値でいいわ、この私にここまで交渉するなんて褒めてあげるわよ」

「では遠慮なく借金全額でお願いできますか？」

「あーもう！分かったわよ、だから早く出さない!!」

言われた通り再び槍を机の上に出すと、ヘファイストスは手に取って布をはぎ取り、槍を見て真剣な表情に

少ししたら話の続きをと考えていたが、その俺の考えが甘かったことに気が付いた、女神は本棚にある隠し扉を開けると、奥にある作業場へ行ってしまったのだ

「これってどうなると思います？神様」

「あーなったら当分は出てこないゼマファイ君」

「あの神様を現実世界に戻って来させられる人物に心当たりありません？」

「椿っていう子供が可能性あるんじゃないかな」

「呼び出す事って可能なんです？」

「ボクのここでの扱い知ってるかい？この連中は神を神と扱わないんだぞ、遠慮なくこのボクを扱き使うんだ」

「大変つすね・・・」

「分かってくれるかい？」

「ええ・・・これ俺ってヘステイア様にとてつもなく大きな借り作れましたね」

「うぐぐぐぐ・・・分かってるよ！」

「しょうがないので椿って人を呼んでもらおうと、部屋を出て訪ねるが取り合って貰えず、部屋に戻ると」

「うわあああーっ」

鬼の形相というか血走った眼を光らせてヘファイストス様が腕を組み足をパタパタさせている

「これに刻まれている文字の中に読めない部分があるんだけど、これ貴方読める？」

「あーそれっすか」

「そうなのだ、この槍には2種類の文字で刻まれている、1つはヘステイアナイフと同系統の文字、そしてもう1つが現代日本語だ」

「早く教えなさいー」

「そう言って俺に槍を手渡すので俺は手に取って」

「高いですよ・・・ここに書いてあるのは俺の故郷の文字っす、内容はこの槍の性能と次の進化した時の形態っすね」

「やっぱりそうなのね、ヒエログリフで刻まれている方はメンテナンスの方法だけ、それで性能は何なの?!」

「そんな怒らないでくださいよ、びびって読み間違えちゃうじゃないですか」

「いいから！早く教えなさい！」

「ヘステイアファミリアのホームに使っている教会の権利及び修繕費と引き換えでどうです？」

「貴方ねーっ！冗談じゃないわ!!」

「じゃく槍もう見終わつたみたいですし帰ります」

「本気で怒るわよ、今の貴方達に戦争遊戯を仕掛けたっていんだから」

ね！」

「構いませんよ、仕掛けた時点で槍は砕いて処分しますんで、その時俺達が何を賭け皿に乗せればいいのかは知りませんが」

「ヘステイア、貴女には色々世話をしてあげたわよね、貴女から彼に言つてやつてちょうだい！」

「ううーもう十分だろマファイ君、ヘファイストスを怒らせていい事なんかないんだ」

「いえ、交渉をぶち壊してるのはヘファイストス様ですよ？それに弱小だから言いなりにならなくちゃいけないってのがオラリオという世界だとしたら、神達はなぜそんなつまらない世界に降りて来たんです？」

「ったく、いい性格してるわね、それで教会の権利と修繕費だったわよね、分かったわよ君にあげるから教えてくれないかしら」

「分かりました、まず現在の形態での性能はヘステイアナイフ同様の持ち主指定と持ち主の成長に同調するんですが、今の形態は初段階で次の形態になると【魔装】の掛け声で槍に変化が出る様になります。」

「マソウってのは？」

「あれ？通じないですか??魔装どうです？」

「あくそういう事ね、概念の違う言葉だからみたいね、それで続けて」
「次段階になると現在のヘステイアランスという名称から魔槍ホールドランス、に変わるらしいです」

「なるほどね進化したら必ず持つてくる事いいわね」

「そりゃもちろんですよ、期待して待つててください」

「それでまだ何かあるの？」

「スキルスロットつという概念があるそうで、詳しくは分からないんですがスキルを2つセットできるみたいなんですよ、槍に書いてある内容と槍から送られて来た内容はこれで全部です」

「なるほどね、ちよつと色々試してみたいわね」

「スキルスロットは俺の方でもいろいろやったんですけど何もなかったんで、ヒエログリフの方じゃないんです？」

「そうね、全部読んだけど見落としがあるのかもしれないわね、これ勝手にスキル入れれそうなら入れるけど構わない？」

「構いませんよ、全てお任せします、けど何日もかかるようでしたら困るんですけど」

「代わりの武器好きなの持って行っていいわよ」

「借りれませんよ、壊したり無くしちゃったら零細ファミリアなんですから弁償出来ませんし」

「じゃ〜後で1本あげるから持って行きなさい」

「さすがヘファイストス様ふとっぱら〜♪」

「それじゃ〜暫く借りるわね、私はこれからしばらく籠るから、適当に帰ってくれていいわ」

「最後に1つお願いなんです、ヘステイア様を1年程度貸し出すんで今後もこき使ってあげて貰えませんか？、お金の大切さを学ばせるいい機会ですので」

「ちよつと！何言いだすんだい君は!!!」

「あらそれは有難いわねフッフ」

「賃金は3等分でヘステイアファミリアとヘファイストスファミリア、そしてヘステイア様という形でどうでしょう？」

「そうね、それがいいわね」

「ちよ！勝手に話を進めるんじゃない！おい！マファイ君!!!」

「それと休日は週休2日、1日の労働時間は6時間で休憩は計1時間って所っすかね？」

「それだと労働時間が少なすぎないかしら？」

「今後うちのファミリアも大きくなっていくと思うんで、そう言った事を考えるとこの辺りが限界かなと」

ヘファイストスは、ヘステイアの本気で慌ててる表情に笑いをこらえきれず嘖き出しながら

「そうね分かったわ、ヘステイアあきらめなさいフッフ・」

「いい加減にしろー君達——っ!!」

「ではお忙しい中ありがとうございます、失礼します」

「いやあああああーっ!!」

ヘステイア様の絶叫がバベルの塔に響き渡るのだった

ホームに戻って4人での報告会にて

「今日は祝賀会だ！野郎ども飲んで騒ぐぞーっ！っ！！」

集まるなり俺がそう話すと、他3名がなんか冷たいとです．．

「マファイ君何があったの？」

「そうですマファイ様、祝賀会って何かいいことあったんですか？」

「なんだい自分だけ得しちやってさ」

なんかとつても冷ややかとです．．

「借金返済！、ホームの権利 get！教会の修繕費 get！俺の武器 get！この上なくたくさんの協力が得られました！これもひとえに俺様の力によるもの！皆の者、俺様を称えよ！褒めまくってくれ！さあ！さあ！って祝賀会なんだおわかり？」

「ええええええーっ！っ！」

ベル君とりりは余りの事に大声を張り上げて驚きまくってる

「どうなったら、そんな事になるんですかマファイ様!!」

「マファイ君、借金が半額になるかもしれないって、それがどうなったら．．え？何がどうなってるんですか神様？」

「どうしたもこうしたもあるかい、せっかく借金チャラになったのに、このボクをタダ同然で1年間ヘファイストスに売ったんだぞ、この悪魔くんは！」

「どういう事なんですか神様、マファイ君」

「色々貰いすぎたのと、神様にお金の大切さを勉強してもらおうという、俺から神様へのプレゼントだよ、ついでにヘファイストス様に媚びを売ったかったのもあるけど」

「なんでそうなるんだい！」

「よく考えてみたまえ、ヘステイア様の店員としての衣装、あれって確実にヘファイストス様のセンスによるものだろ？ってことはヘファイストス様は確実にあの衣装を着たヘステイア様を気に入ってたは

ずだ、それが脅しに近い状況で速攻取り上げられたら機嫌悪くなるに決まってる、今後どうしたって鍛冶屋に頼る事は多くなる、その時に印象悪いと色々まずいっしょ?」

「あーもう、それだったらあんなにも色々むさぼり尽くさなくなつてよかつたじゃないかーっ!」

「それはそれ、これはこれおk?」

「マフィ様ってやっぱ怖いんですねル様」

「うん、本気で僕もマフィ君が恐ろしくなつてきたよ」

「つてわけだ、祝賀会用の資金は稼いできたかね? ベル君リリ君」

「もちろんですボス!」

祝勝会は大盛り上がりとなり翌日全員?が二日酔でになされる事になった

魔法

「りりにも今後は戦って貰うから！」

「無理に決まってるじゃないですかー！ベル様も何か言っただけでくださいー！」

「マフィ君どういう事なの？」

「まず第一に、我がファミアリアはたったの3名しかいない、1人2役とか3役こなさなきゃならん！」

「第二に、昨日ステイタスを見せて貰ったけど優秀なスキルがりりにはあるー！」

「第三に、小さな女の子が体より大きな武器を振り回してるのに萌えるからだ！」

「おわかり？」

りりには縁下力持っていう一定以上の装備荷重時における補正、能力補正は重量に比例というスキルがある、ほかにもシンダー・エラという変身魔法もあるので、十分やっていけるはずだ

「全然わかりませんマフィ様！りりが戦うなんて！」

「武器も買って来たんだ我儘言わないの、危なかつたらイケメンのお兄さんが助けてあげるから」

「戦闘のフォーメーションはこの紙に書いてある通りだ、大型モンスの戦闘では特にこの紙に書いてあるように戦ってくれ」

「今日は試しただから、りりは隠して持つてるボウガンと、このハンマーを持って行くべ、荷物は各自分散して持つから、基本は2人戦闘1人サポートだ、順次入れ替わって戦う、ベル君はりりをカバーしながらになるがいけるな？」

「うん、任せてよりりも頑張ろうね」

「ううう・・・わかりましたよ」

「それと大事な事だからよく聞くように、りりはこの情報を絶対外部に漏らすないな？」

「なんなんですか？」

「俺とベル君がPTを組むと経験値が膨大に入ってきて来るいまだかつてないほどにだ、これには要因があつて俺の魔法の効果だからあまり騒がず慌てないおk?」

「ええええーっ?!」

「そうなんだから、1日でトータル200オーバーとかつて事もあつたんだよ」

「なんなんですかそれーっ!!」

「なんなんですかソレと言われてもそう言うものとしか答えられんが?」

「もういいです・・・」

「じゃ〜いくぞ!!」

今日も10階層で戦う、ここにとどまる理由はLv1だからだ、1階層からLv2の狩場となっており行く事が出来ない

「さて目的の10階層だな、まずはリリと俺が行く、ベル君はサポートよろしく」

「はい」

リリは諦めに近い状況で戦いに参加しているが、それでもキツチリ戦つてる事から自分も冒険者として戦ってみたかっただけでは?と感じる

時折危なっかしい場面もあるが、遠距離からボウガンで撃ち、とどめとばかりにハンマーでぶつ放すと大概是それで倒せてしまう

中型のモンスが来る時は俺が引き付けリリが死角からとどめを刺す感じだ

「やれば出来るじゃん、実は冒険者が嫌いなんじゃなくて、冒険者になりたかったんじゃないっすか?」

「そんな訳ありません、本当にリリとPT組んで戦おうなんて考える人いままで本当に居なかつたんですから」

「じゃ〜そいつらは見る目が無かつたっすね」

「そういうことしておきますマフィ様」

戦いながら気が付いたが、やはりリリのバッシュスキル緑下力持の

効果が俺にも出てる様だ、装備がいつもより軽く感じるから重力が変わった感覚なのだ

さて、ベル君が気が付かない事を祈るしかないなと思いつつ戦いを進めていく

「よしリリとベル君で交代しよつか」

そして、ベル君と戦闘を開始してしばらく経つがベル君の装備が軽いからなのか、動きに変化がない事から気が付いては居ない様だ

その事にほっとしつつ、狩りを続けていった

その日の夜ステイタス更新で、リリのステイタスも大幅に上昇した様で、俺は彼女に引っ張られて話を聞く事に

「にわかには信じられません、最初に聞かされた時は、大げさに言ってるだけと思ってきましたが、どういう事なんですか一体？」

「カラクリが一応あるんだけど、今は言えない納得できないっすか？」

「ベル様も知らないんですよね？」

「うん、知らない」

「なるほど分かりました、かならず秘密は守ります」

「そうしてくれ、それでどうだ？自分が強くなっていくってのは」

「そうですね、今からでも、もう一度ダンジョンへ行きたいくらいです」

「そっか、けど明日まで我慢してくれ」

次の日、今日はホームの魔改造的修繕作業が完了する日だそうで、この世界の建築技術の半端なさに驚きを隠せないが、修繕している間にダンジョンへ向かい早めに切り上げて、それぞれが引っ越しや、家具なんかの買い出しに出かける事となり

俺も1人で日用雑貨を購入しに行っていると、またあの視線を感じたので今度は追跡じゃなく、挨拶してやろうと思いい視線の先へ向かうと頭からすっぽりとローブをかぶった女性が立ってるので

「こんちわつす、何か用でしょうか？」

さも始めて見たかのように話しかけると

「……視線に敏感なのね」

「とたわごことを言うので」

「どこかでお会いした事があったのでしょうか？」

「いいえ、貴方に頼みがあったの」

「つていいいますと？大変失礼かと思いますが、お顔を拝見させていた
だく訳にはいかないのでしょうか？」

「そういうと女神はフードを取ってくれる、俺はさも驚きを隠せない
ような感じで」

「女神様？これだけ美しい方なら以前お会いしてたら忘れたいはずな
んですが、どちら様？」

「しがない女神をやっているわ、この本を白い髪で赤い目をした男の
子に渡してもらえないかしら？」

俺は手渡された本を見ると、ゴブリンでも分かる魔法書と書かれた
本を見て

「なにか言付けはありますか？」

「そうね……その本は差し上げるから読んで魔法習得ができるように
祈ってますと」

「分かりました」

それだけ言うた女神は人ごみに紛れて居なくなった、怪しすぎんぞ
女神フレイア様!!

さてどうした物か、本をじっと見ながらどうするか考えてると、本
から魔力を感じる事に気が付き、いよいよもって危なそうと思いつつ
もホームへ戻った

ホームに戻ると皆がそれぞれに忙しそうに引越しなどの作業に
追われており、俺も自分の作業に戻る

元々荷物の少ない俺は速攻で引越しとかは終わり、預かった本を
目の前に、どうしたものかと考える事に

結論は出てる、けど万が一を考えてしまう……

あの視線の感じからして危険は無さそうだけど何かあったら嫌だ
など思い、ベル君を呼び出して試してみる事に

「ベル君、引越し終わった?」

「うん、荷物もそんなに持ってなかったし終わったよマファイ君も終わったんでしょ?」

「そうなんだけど、1つ試してみたい魔法があるんだけど、協力してもらえない?」

「うん、いいよ、どうすればいいの?」

俺はベル君と本に魔法をかける

「神をも恐れぬ混沌よ我に示せカオスアデクション」x2

光が収束すると同時にベル君が意識を失う事になり

「あっ……」

完全にやっちゃまった系か?けど息も脈もある、息遣いも変じやない……瞳孔は、多分大丈夫!

少し様子見て起きない様なら、ぶん殴って起こすかと考えるマファイしばらくすると寝息が聞こえたので、寝たなと思い

「おおおーい!ベル君!!ヘステイア様がベル君のパンツはぎ取って何かしようとしてるぞ!!」

この一言でベル君は飛び上がって起き上がり、きよろきよろし始める

「寝てた?」

「うん寝てた、それで体に変化は?」

ベル君は体を色々さわりながら確認するが変化なく、俺はこの時は眠りの魔法か何かだと勘違いし、本は厳重管理する事にした

その日の夜、ヘステイア様の大絶叫が聞こえたので部屋に駆けつけると

「ベル君に魔法が発現したんだ!」

「神様!、魔法、魔法、魔法が使える様になりました!!」

「なにかしらないけどベル君おめでどう!」

「ベル様おめでどうございます」

「それでどういう魔法なの?」

俺達3人はヘステイア様から魔法について改めて教授して貰う事になった、ベル君の発現した魔法はファイアボルトというらしく、厨

二全開の小学生低学年が考えたぼくのさいきょうまほうって感じだが、この魔法には詠唱が必要ないらしいって事が判明した

本当に詠唱が必要なのか、神様に明日試してくる様に言われ、今すぐ試したそうな顔をしながらベル君は引き下がり、俺達は部屋に戻る事になった

様子を見る限りベル君は抜け出してダンジョンで試しに行くだろうと思いながらも、俺にはもっと重大な問題が残ってる・・・そうあの本が本物の魔法書グリモアだった事だ

なぜだ、以前聞いた時は億くらいいすると言われるグリモアをポンとあげちゃうなんて、相当執着してるのか・・・それとも只の酔狂・・・な訳ないな

けどそうなると俺も使いたくなるのが男の子の性ってもんでしょ！

さっそく眠ってしまったても大丈夫なように本をセットして、ベットに転がって魔法を使う事に

じゃく始めようか

俺にとって魔法ってなに？

「全宇宙のルールを変える事の出来る手段」

俺にとって魔法ってどんなもの？

「自分だけの世界を創造する世界と扉と鍵」

魔法に何を求めてるんだ？

「自分だけの世界を自由に変える能力、繋げる扉そして鍵」

それだけ？

「それ以上に叶うのなら、なんのリスクもなくその能力を使いたい」

無茶を言うんだな君は

「そうさ俺は強欲なのさ、誰にも負けないほどに強欲なんだ」

翌朝、俺は目を覚ますと本に魔法を使った所までは覚えているが、それから何があったか覚えがない

「さて、ステイタス更新してくるかな」

起きたのが早かったこともあって、ヘステイア様は部屋にまだ居る様で

「すいませんヘステイア様、お手数なんですけどステイタスの更新お願いできないですか？」

「なんだい朝っぱらから藪から棒に、昨日の夜したばかりじゃないか」
「俺の予想が間違つてなければ、魔法が発現しています、そしてベル君の魔法の発現の原因が判明するかもしれないので」

「なにがあつたんだい？」

俺は背中を出して、ステイタス更新をして貰いながら、説明をする事に

「昨日ベル君宛に本を預かりましてね、渡してきたのは女神フレイヤ様です」

「なんだって?!それは・・・まさか」

「はい、グリモアだと思えます、それで俺の魔法をベル君と本にかけたら発現したので、今度は俺がやってみました」

「なるほどね、まったくグリモアがいくらすると思ってるんだい、まったくあの女神は何を考えてるんだ」

「俺も色々考えましたが、兎を自分好みに育てて大きく育ったら頂くつもりってくらいしか思いつきませんでした」

「そうだろうね・・・って確かに発現してるし!!」

「そうっすか、それで見せて貰えます?」

俺は紙に移して貰ったステイタスを確認すると、魔法の欄に

「ワールドオブエンペラー」

時空間に世界を作り改変する

詠唱式： 我が世界を改変し世界を作るもの也、世界は我の手により作り変えられる、世界は我の声を聴き我に従えワールドオブエンペラー

「ワールドオブドアー」

自分の作った世界と現在地を繋げる扉を設置する、詠唱時に作った世界をイメージする、具体性欠如の場合は失敗

詠唱式： 我的世界とを繋ぐ扉を召喚せよワールドオブドアー

解呪式： ワールドオブドアーカット

「ワールドオブキー」

自分の作った世界に物質と生物を入れる事の出来る鍵、鍵は術者の意思で渡したり消したり出来る、鍵は世界ごとに異なり詠唱時にイメージした世界のカギが出来る、具体性欠如の場合は失敗

詠唱式；我の認めし者よカギを使い扉を開けワールドオブキー

この3つが追加されていた、うんガチチートだ、やちやった感半端ないんですけど、ヘステイアも目を丸くして凝視してる

「なんだいこの魔法は、めちやくちやじゃないか!これじゃ神の力と言ったって誰も疑わないぞ!」

「やっぱそう思います?」

「ベル君のスキル以上にヤバい代物だよコレは、絶対に人前で使うんじゃないぞ!」

「分かってますって、一応俺の魔法の場所ワールドシリーズはプロテクト嚴重によろっす」

「言われなくたってやるに決まってるさ」

「考え様ですよ、鍵まで作ってしまえば詠唱は要らないみたいですし」

「扉をどこに設置するかだね、まあ君の部屋になるんだろうね」

「それしかないっすよ、壁のデザインに見える様に、うまく隠しておき

ます」

「それでだねマフィ君、僕の部屋にも、僕の世界を作ってはくれないかい？」

「何をするのか聞いても？」

「誰にも邪魔されずベル君とデートするんだよエへへ」

「のぞき穴設置決定！」

「なんでだい！」

「何考えてんだっての！子供の魔法で神様が誰にも言えない事する気だろうか！羨ましくて許せん！」

「なんだいく？マフィ君はやきもちをやいてるのかい？」

「そうですが何か？」

「むむむむーからかい甲斐の無い子だな君は」

その日は発現した魔法は使わず、夜になってから俺はリリを呼び出す事に

「マフィ様リリに必要な話があるって事ですが、何なんですか？」

「リリは魔法、新しい魔法を覚えてみたい？」

「そりやく今日のベル様見てたら、私だって覚えてみたいですけど、リリは既に魔法を一つ覚えてますし無理なんじゃないかなって」

「俺の魔法で、リリの中に眠ってる魔法の資質を呼び覚ます事の出来るんだけどどうする？」

「本当ですか?!けどそんなグリモアみたいな魔法あるんですか？」

「うくん、グリモアの能力をリリに添付する魔法かな」

「もしかしてベル様の魔法の発現はそれが原因なんですか？」

「うん、そうだけどリリはどうする？」

「リリにもやってほしいです、マフィ様お願いします」

「じゃく変身魔法で犬耳少女になって、ここに座つてくれる？」

俺の言う通りにリリは変身魔法で犬耳少女に変身し、俺の座っているベットに座った

「じゃく魔法を使うね」

「よろしくお願ひしますマフィ様」

「神をも恐れぬ混沌よ我に示せカオスアデクション」x2

効果が発動すると、リリは少しして眠りについたので、そのままベットに寝かせ、いぬみみもふもふをする事に、このくらいのご褒美は許して貰わないとね

触り心地のいい犬耳と尻尾を思う存分撫でまわし、超ご機嫌のマフィは気が住むまで続けるのだった、ベル君の様に寝息が出たらそのまま置手紙をしてから部屋を出て、ベル君の部屋へ遊びに行った

「魔法使いすぎてマインドアウトになったんだって？」

「うん」

「大丈夫だったっすか？」

「危なかったらみたいアイズさんに助けて貰わなかったらヤバかったと思う」

「相変わらず悪運が強いというか、注意してくれよ」

「うん、そうする」

「リリが俺の部屋で寝ちゃってさ、今日ここで寝てもいい？」

「え？もしかしてリリにも？」

「うん、ベル君と同じ魔法使ったっす、運が良ければ明日はリリがマインドアウトかな？」

「人の事言えないけど、発現してたら注意してた方がいいよね？」

「そうだろうね」

「マフィ君は自分では使ってないの？」

「ヤバすぎる魔法が発現して神様から使用禁止命令が出た」

「さすがマフィ君だね、どんな魔法なの？」

「言えないくらいヤバイ奴が発現しちゃってさ言えないんだよ、使えないし言えないというジレンマ、分かる？」

「想像もできないなく威力がめちゃくちゃで危険だとか？」

「それだったら言えるんだけどね、けど使わない訳にもいかない事もあるし神様と相談してその内言えそうなら言うよ」

「うん、そうだね」

その日はベル君の部屋で泊まらせてもらい、翌朝俺達2人はリリの居る俺の部屋へ行くと

「おはよりり」「おはよく俺の部屋でいい夢見れたか？」

「あれ？りり寝ちやっただんですか？？」

「うん、気持ちよさそうだったからそのまま寝かせてあげたんだ、それで俺はベル君の部屋に泊めさせて貰った」

「あううう、お二人ともごめんなさい」

「いいよ僕達も同じ症状になったから、神様の所へ行こうよりり」

「あっそうでした、魔法が発現してるかもしれないですよ？」

「そそ、さっそく神様の所で確認してくるっす」

りりはそのままへステイア様の所でステイタスの確認をしに行く
と、りりにも新たな魔法が発現した様だ

召還魔法：白狼王フェンリル

詠唱により疑似生命体を召喚する、術者の意思で解呪可能、解呪の詠唱によって次回召還時の忠誠値等に影響、術者のステイタスに比例して召喚獣のステイタス変化

詠唱：白き狼の王よ精霊の声に目覚め我が聖戦に光をフェンリル

「また凄い魔法っすね、ベル君の魔法が普通に見えて来る」

「すごいねりり、おめでどう」

「これからダンジョンへ行くんだろ？行くついでにサモン登録しておくといいよ」

「はい、皆さんありがとうございます」

ホームの外で早速りりに召還してもらおう事になり、りりが詠唱を始める

「白き狼の王よ精霊の声に目覚め我が聖戦に光をフェンリル」

りりの目の前に、小犬？小犬にしか見えない白いモフモフに赤い瞳のベル君が子供になったかのような小犬が

「りり、いくらなんでもベル君の子供を産むとか色々早過ぎっすよ」

「かっかわいいーっちっさいベル様ーっ！」

りりはべる犬を抱きしめてモフモフしはじめる、返信魔法で犬耳になったら完全にベル君との子供だ

「りり君、ボクにも抱かせておくれよ」

「え〜嫌ですよ、りりとベル様の子供なんですから」

「ななななっいつの間に関係になってたんだい君達は!!」

「神様もりりも、いい加減にしてください、フェンリルだって困ってますよ」

「おーおーパパ言うねえ〜さっそく父親としての自覚が芽生えたのかい?」

「マフィ君もいい加減にしてください」

その後もしばらく弄りまくった3人だったが、流石にベル君が泣きそうなので一旦フェンリルに帰って貰う事になった

「いあくりりの魔法が1番の当たりだったっすね」

「ボクもフェンリル欲しいよ、もう1匹出せないのかい?」

「無理に決まってるじゃないですか」

「フェンリルの子供に名前とか付けてあげるんですか?」

「ベルJrかな」

「それは却下だぞボクが絶対に認めない!」

「ぱぱあく子供の名前ながいいでちゆか?」

「りりもい加減にしないと怒るよ?」

「いいじゃないですかベル様はりりの事がお嫌いなんですか?」

「おーつとりりの突然の愛の告白が来たぞ!さあくベル君答えは?!」

「と・友達からお願いします」

「何やってるんだい!ベル君はぼく・のベル君なんだ、勝手な事は許さないぞー」

「神様、僕は誰の物でもありませんよ、神様も冗談がおすきなんだから」

「おーっつと2人共撃沈かーっ?!」

「黙れマフィー!」

その後ギルドで登録をすると、フェンリルの可愛さに女性が大量に食いついてしまい、ちよつとした大騒ぎになったのだった

その後ダンジョンで軽く戦い、フェンリルが本当に戦えるのか確認すると、ありえない速さで敵に食らいつき、次々と敵を牙と爪で倒し

ていくんだけど、ふりふりしながら歩く姿にポワポワしちゃって、気が付いたらフェンリルだけで敵を処理しちゃってたりした

今日は魔法発現記念パーティーと称して、酒場で大盛り上がりした、フェンリルをみんなで可愛がりながら癒されながらで、最後はもみくちやにされてるフェンリルに若干同情しちゃうのだった

レフイーア

朝早くからベル君は、昨日アイズ・ヴァレンシユタインから戦い方を1週間の期間教えて貰えるという約束を取り付けてた為、外へ駆け出していた

どうしてこうなったのかと言うと、アイズという女性はベル君を5階層にてミノタウルスから守ったのだが、これはロキファミリアのメンバーが取りこぼした敵の1匹だった

その後何度かチャンスを見つけてはベル君に接触したもののベル君が逃げて行ってしまうので、きちんと謝っておきたいと考えたアイズは相談をエイナさんとしているところへ、ベル君がそこに登場し、ようやくきちんとお互いに誤解を解くことに成功、その話の中でベル君が戦い方を教えてくれる人が居ない事を知ったアイズが戦い方を教えてあげると約束した為だったのだ

「なにか昨日から様子がおかしかったけど、こういう事だったんだ、にしたってあの兎君は所かまわずフラグ立てまくりやがってモゲロ！モゲてしまえ！」

少し離れた場所で、アイズとベル君が朝っぱらから訓練？らしきことをしているのを覗いてる俺は、ベル君にいいよのない怒りを覚えただが、あれってどういう訓練なんだろう？

「おっ！いい蹴りが入った！ナイス金髪娘！ざまーみろ色兎！ケツケツケ！」

「あのおく・・・」

「よし！追い打ちだ！いけ！とどめをさしちまえ!!」

「すいません・・・少しお尋ねしたいのですが・・・」

屋根の上から観戦していると、下の方から女性の声が、なんだよ、いい所なのにと思いながら下を見ると、金髪エルフの少女が俺を見上げてるのに気が付き、彼女の居る場所まで飛び降りると

「はい、なんででしょうか？」

「この辺りで剣姫、アイズ・バレンシユタインさんを見かけませんか？」

「あくもしかして金髪美女でロキファミアリアの?」

「そうです、何処か知ってるんですか?」

ふむ・・もしかして、ベル君の相手の金髪娘やっぱアイズか・・
と思いながら、相手を見てロキファミアリアの子が心配して見に来たと
感づき

「知ってますけど、それがどうかしましたか?」

「本当ですか!それでどこにいるんでしょうか?」

「いまさつき屋根の上から見てたんですよ彼女達の訓練風景を、これ
がなかなか面白くつてき」

「その屋根の上から見えるんですか?」

「うん、相手がさつき気絶しちゃったから、今は動きがないかもだけ
ど」

「相手って誰なんです?」

「色兎っす」

「そんな二つ名聞いた事無いんですけど・・」

「あくそれは今俺が付けたからですよ、色々な場所でフラグ立ててや
がるから、そう俺に呼ばれる事になりそうなんっす」

「神様でもないのに二つ名つけるなんてすごいんですね、それで本来
の二つ名は何かあるんですか?」

「本来の?」

「え?」

「え?」

「なんか話がかみ合っていないっすね」

「そうですね、それで屋根の上に、どうやって上ったんですか?」

「あくこっちからっす」

そう言っただけを案内して先に上ってもらい、俺は手助けする事
に、うん早起きするのいいことある!これから早起きしよつと!つ
と心に誓うのだった、ちなみに純白でした、たまらんとです!!!

「お!ちようど再開したみたいっすね」

「え?あのちっさいの見えるんですか?」

「近眼っすか?」

「どうなんですよ？凝らして見ればなんとか・・・アイズさんと・・・あれは・・・さっきの!!」

「相手の色兎となにかあったんです?」

「さっきぶつかった子なんです、その時にあの子にアイズさんの居場所聞いたのに、逃げ出したから怪しかったけど、うううううーっ」

「さすが、色兎所かまわずかよ・・・」

「ありがとうございます、私行きますので!」

そう言っぺこりと頭を下げた彼女は下へ降りようとするが、はわわわわ・・・となり、俺が手を貸してあげどうにか下まで降りると

「俺はヘスティアファミリアのマフィっす、またどこかで」

「私はロキファミリアのレフイーヤ・ウイリデイス、二つ名は千の妖精です」

「その二つ名って何かあると付けられるの?」

「あくLvが上がるごとに神々から頂けるんですよ」

「そう言うシステムだったんだ、教えて貰ってありがとうございます、俺も色兎もLv1なんで」

「だから話がかみ合わなかったんですね、それでは急ぎますのでこれで」

「はい頑張ってください!あの色兎の処遇はレフイーアさんに一任しますんで」

「はー!」

走り抜けていく彼女を見て、もうひと騒ぎあるかもと思いきっそり付いて行くことに、テヘへ

レフイーアが訓練している近くまで来ると、あの色兎は立てなくなったのかアイズに肩を貸してもらいながら戻ってるようで、その姿を見ているレフイーアは面白いくらいにシヨックを受けている、レズなのかな?」

などと思いなながら様子を伺うと、レフイーアは遠くから見ても分かるくらいに黒い何かを出しながら肩を落としてトボトボ歩き出している、何この子ちよー面白いんですけど!」

「あの2人に用事あるから合流するけど、レフイーアさん来る?」

「なっ！行くんですか？あの状態のあの状況なのにですか?!」

「いかないなら置いて行くけど、どうします?」

「いきます!付いて行かせてください!」

「およく問い詰めるだけなので、俺が話し終わるまで話に入ってこないでくださいね」

「なるほど!それはいいと思いますよ!ぜひ色兎にガツンとお願いします!!」

そしてあの2人の行先を先回りして待ち構えると、色兎を抱えた2人が俺達を見つけて、アイズは眼を見開いた

「うちのベル君を鍛えて頂きありがとうございます、アイズ・バレンシユタイン様、あとは此方で引き取りますので」

「うん」

「それでお聞きしたいのですが、どういった経緯でベル君はアイス様に指導して頂けるという幸運に恵まれたのか教えて頂けないでしょうか?」

「この子が戦い方を教えてくれる人が居ないって言ってたから、教えてあげる事にしたの、私もこの子の成長の早さのヒミツに興味があったし」

「なるほど、アイズ様がベル君の才能を気に入って弟子にしたと解釈しますが、どうでしたか今日の訓練は?」

「どうやって教えていいのか昨日から考えてても分からなかったけど、戦うのがいいって思ったから戦ってた」

「さすが一流の方は凄いですね、一流の門下でも優秀な弟子を鍛える時にそうすると聞いた事があります、それを始めて教える事になるのに既に理解されてるとは」

「そうなの?」

「はい、それでお願いなのですが、ベル君が気絶している間のわずかな時間でも構いませんので、俺とレフィーアさん2人も参加させて頂けないでしょうか?」

「うん、いいよ」

「それとレフィーアさんは同門でしたよね?それでしたらベル君の訓

練期間が終わった後にもいいので時間がある時にレフイーアさんと2人きりで訓練する時間を作ってあげられませんか？」

「どうして君がレフイーアの事を気にするの？」

「彼女さうとう貴女に従事したそうでしたので、レフイーアさん次第ですが付き人にでもしてあげたらなと思ひまして」

「レフイーアいいの？」

「はっはい！もちろんです付き人やらせてください!!」

俺は小声でレフイーアに（これくらいいいか？）（ナイス！超ナリーイス!!!）

後日レフイーアからめちやくちや感謝された、いい物を見させてもらったお礼などとは言えないが、彼女からのお礼を有難く受け取るのだった

翌日から3人でアイズさんの指導の下訓練をする事に

俺達2人はベル君が気絶している間見て貰う感じだ、初日同様ベル君は速攻で気絶するので結構な時間が使えるので不満はない

「並行詠唱の訓練をしたいのでビシバシお願いしますー!」

まずはレフイーアさんからだ、彼女Lv3らしく俺達より遥かに高みに居る魔導士らしく、火力だけで言えばファミリア屈指だそうだ

並行詠唱という動きながらも詠唱を続けるという高等技術とのことで、俺も興味があり見学しているが即座に撃沈する

「よろしくおねがいます」

「うん」

俺は棍棒を用意して構える、槍じゃないのは貰ったばかりの槍を壊されたくないのと、万に一つでも傷を付けそうなのを嫌ったからだ

さっそく彼女の攻撃が来るのを武器で逸らすのがキツイ、俺だけ強化魔法を使って衝撃緩和を武器に添付魔法を使っているのに、それでも衝撃が殺し切れない

それでも攻撃をそらして反撃するが、彼女の剣の方が早く、カウンターを食らいそうになるのをどうにか武器で受けるが真正面から受

けた攻撃が衝撃緩和を突き破って来る

「くっ！」

「君は硬いね、本気だったのに吹き飛ばされないなんて」

「魔法ですよ強化魔法を使っています、そうじゃなかったら、あの2人の仲間入りです」

「そう、いい魔法だね」

「それを突き破って来るなんて思いもしなかったです」

「どんどんいくね」

やはりそう何度も受け流させてはくれず、反撃の糸口を掴ませてくれない、なんなのこの化け物は！

剣の速度が速すぎて受け止めきれず、結局立ってはいられず撃沈：
くそう！！

「はあはあ・・つぎベル君頑張れよ」

「よく気絶しないで居られたね」

「はあはあ・・男の子のちっぽけな意地ってやつさ」

そのままベル君の番となり俺は気絶ししそうなのを堪えて戦いを見る事に、気絶するのがどれほど勿体ない事か戦ってきた俺は嫌と言うほど理解したからだ

「あ・目が覚めたレフィーアさん」

「あうう・・私どれくらい気絶してました？」

「俺がボコボコにされてる時間くらいかな」

「だんだん気絶するまでの時間短くなってません色兎さん」

「そりや毎回おなじなら訓練の必要ないでしょ？」

「そうなんだけど・・絶対に負けません！」

「期待してるっすよ、俺レフィーアさんの戦い方をみて勉強してるんですから」

「え？」

「え？だってLv3の魔法特化型っしょ？俺はオールラウンダーなんで前衛も後衛もやるんっすよ」

「そうなんですか？」

「そそ、うちってき弱小少人数だから色々やれないといけないんっす、

俺の使う魔法もそういう魔法だし」

「大変なんですね」

「そう大変なんですよ、オラリオ一の借金王ファミリアっすから」

「あははは・・・いくらくらいなんです？」

「ざっと2億・・・あつたかな」

「うつひやくーっ！よくやってられますね」

まあ返済したけどね、それは言わなくてもいいか、と思いながらしゃべりながらもベル君の戦闘から目を離さず凝視する

「終わったっすね、がんばってくださいレフィーアさん」

「はいー」

再びフェファイアの番となり・・・あっもう気絶した、もっと頑張れよ!!

気絶すると入れ替わるかのように俺がアイズさんに突っ込んでいく、足に力を溜めて一気に加速させ彼女めがけて突き刺す勢いで向かうが軽くかわされる

アイズさんが剣に力を入れるよりも早くサイドステップして距離を取るが、相手の追撃の方が早い、すかさず武器で攻撃をそらすが体制が崩される

「くっ！」

そのまま追い打ちが来るのを避ける為に相手の懐に素早く近づくと、まさかここで距離を遠ざけるのではなく距離を詰めた事により、一瞬相手が硬直するも、さすがはアイズさん、すぐに切り返して攻撃を繰り出してくるが距離が無い事で威力の弱い攻撃だった為、今度は確実に受け流す事に成功し、距離をとる

「今のはいいと思う、君は視野も広いし思い切りもある、けど一か八かになる攻撃が致命傷になるとは考えないの？」

「距離が近ければ力を込めて攻撃できないというのは、さつき見学してて分かったたので、博打じゃないですよ」

「そうなんだ」

その一言だけ言うと彼女は向かって来るので、足に力を込めて自分も前が出る、剣筋は見えやしないなら、攻撃が来る瞬間より早い段階

で来ると考えて動けばいい、相手は俺めがけて攻撃するなら分的は分かってる分、今度は交わして今度こそカウンターで！

そう思ってた時期もありました、アイズは剣の速度を変化させていたのだ、当然タイミングを計っていた俺はまんまと引っかかり直撃を食らってしまおう

「やられました、速度を変える攻撃がこんなにも効果があるとは、次変わりますね、立ってるのがやっとです」

「うん」

次にベル君の番だ、どうやら俺の戦闘を見ていたようで目に力が籠っている、何か掴んだのかな？と思いつながら下がると、レファイアさんも起きていたようで

「今度は早かったっすね」

「君だけ気絶してないなんてズルい！それに・・・」

「魔法特化だししょうがないっすよ、俺オールラウンダーって言うけど、今は敵の攻撃を受ける役目のタンカーがメインでダンジョンに入ってるし、しゅとさが違います」

「そういえばマファイ君は魔法使わないの？」

「あく俺の魔法は戦う前に使うから、添付魔法っていう強化魔法っす」

「それでアイズさんの攻撃を受け流しても吹き飛ばされないんだ、なんだかズルいですね」

「それよりも並行詠唱って何なんですか？2つの魔法を同時に詠唱するとかなんです？」

「移動とか攻撃しながら詠唱するんですよ」

「なるほど、それで攻撃をして貰ってるんですか」

「そうだよ」

「何かブツブツ言ってるのが詠唱だよね？あれって口で言わないといけないの？」

「そうに決まってるじゃないですか、喋らずに詠唱なんて無理ですよ」

「まぢっ？」

「まぢー！」

俺は試しにレファイアに脳内詠唱でフレイムオーラアデクション

を使う

「え?!えーっ!」

「できるっしょ?今のは添付魔法フレイムオーラアデクションっす」

「うっそお・・・」

「訓練終わったら、教えよっか?他の魔法でも出来るのか知りたいし」

「うんうん!」

アイズさんとの朝の訓練が終わり、俺達2人はダンジョンへ行つて魔法の実験を行う事に

「それで上司か誰かにちゃんと弟子の面倒を見たいのでダンジョンへ行くって言つてきました?あとで怒られるの嫌っすよ」

「ちゃんと saying ってきたから問題ないです、それで脳内詠唱でしたっけ?」

「まあ俺が勝手に言ってるだけだけど、そういう技術がないとは思わなかったよ」

「動きながらでさえ詠唱するのは難しいのに、頭の中だけでなんて普通は考えませんよ」

「右をみながら左を見るといふ感覚に近いのかな、同時に2つの事を考える事が多かったから俺は思いついて、すぐ出来たけど」

「なんなんですかそれは!同時にどうやって2つの事を考えるんです?」

「人には無意識とか癖とかつてあるっしょ?頭で考えないで行動する事」

「うん」

「それって無意識で動きながら他の事も考えてるんだよ、それを意識してできる様になれば、並行詠唱だって脳内詠唱だって原理的に出来るはずなんだよ」

「だからそれをどうやるんですかー!」

「そもそもさー、訓練で思ってたんだけど、なんでアイズさんに物理攻撃を仕掛けてるんですか?」

「だって並行詠唱は攻撃をしながら詠唱出来るというメリットがある

「んですよ」

「ロキファミアリアって全員で敵をタコ殴りして詠唱してぶつ放す感じのPTなの？そうだなー、例えばウチだと3人しかいないけど、それぞれに敵に合わせて細かく役割を決めてたりするんだけど、これも一般的じゃないの？」

「いえ、役割は有りますよ、攻撃を受ける人、詠唱をガードする人、近接攻撃する人とかって感じで」

「やっぱあるんじゃない、ならなんで詠唱する人が物理攻撃するの？意味なくない?！」

「意味ならあります！こないだ一緒に戦った人はそうやってましたし、アレが出来ればもつと貢献できるはずなんです」

「言い方間違えたかな、詠唱してる時間は効果に比例して長く集中の必要な物、だからこそ詠唱を邪魔させない人が付くんだよね、じゃく守られっぱなしでいいの？例えば守ってる人に合わせて位置を変更したりして、守られやすい環境を作るのが必要なんじゃない？」

「むく確かに・・・」

「俺なら詠唱をガードしてくれる人を攻撃にまわして、自分は絶対攻撃を受けないで済む工夫をすれば火力は確実に上がるから、絶対回避をしつつ詠唱もする方法を選ぶかな」

「なるほどー一理ありますね」

「それと魔力って認識というか、こうやって体の一部分に集中させたりって出来ます？」

「俺もやり始めて少ししか経ってないので細かいことは出来ないが、手に集中させる事は訳なく出来る」

「この技術を応用する事で、人探しがやりやすくなるのだ、あの粘着女神を追跡したのもこの技術の応用だったりする」

「それが何の役に?！」

「ステイタスに表示されない裏スキルって俺は呼んでるっすよ、これに応用すると索敵とか後ろからの攻撃とか察知したりも出来るっす」「そんな事が出来て、どうやって索敵するのよ」

「水を静かな湖面をイメージしてみて、そこに魔力の滴を1滴たたらす

イメージをすると、引つ掛かりには波紋が乱れるでしょ?」

「乱れた場所に何かあるんだよ、あとは自分の体の薄皮1枚に魔力を張ると攻撃を感知しやすいっす、それが後ろからの攻撃でも」

「へえ、裏スキル面白そうね、教えてくれるの?」

「どっちも結構俺は簡単にいけたんっすけど、いけそうっすか?これ両方できたら、アイズさん相当びっくりすると思うっすよ」

「うん!」

こうしてレフィーアさんの訓練メニューが決まり、俺も魔力操作の訓練をしながら、一緒に訓練を開始すると、どうやら裏スキルの概念が無かったのか中々にレフィーアは苦戦をする事に

「そろそろ戻らないと遅くなっちゃうっすよ」

「まだできてないもん!」

「はいはい・怒られても俺のせいにはだけはしないでくれっすよ」

そこから何時間か頑張るが、どうにも概念の違う魔力操作に四苦八苦する事になった

「このままだと朝練まで、そう時間がないけど、どうするんっすか?」
「行くに決まってるじゃない!」

「アイズさんとの訓練は作戦通り回避をしながら詠唱するという方向性でがんばっす」

「魔力操作が全然上手くないのに、ううう・才能ないのかな私」
「なかったらLv3なんか行かないっしょ、それに概念の違う技術なんだし、しょうがないっすよ、もう間に合わないとアイズさんに申し訳ないから出るっすよ」

「また付き合ってくれる?」

「空いてる時ならいつでもいいっすよ、提案したの俺ですし」

「うう・シャワー浴びてる時間あるかな?」

「ないと思うっすよ、粘り過ぎっす」

「匂うからって嫌われたらどうしよーっ!」

「しらんがな、このレズエロフ」

「レ・レズエロフですってーっ!」

「君のあだ名っすレズエロフ、神様に提案しておこっ♪」

「殺す・もしそんな二つ名になったら君を確実に殺すからーっ！」
「ご心配かけてすいません！今出ますんで、後でごあいさつにうかがいますねーっ！」

俺はレフィーアに追いかけられながら、大声で覗いていた人に聞こえる様に大声を張り上げた

「何大声出してるのよ!!まてーっ!!」

「君の所の人じゃないのかよ!?!覗いてたのは!」

レフィーアは立ち止まり

「え?」

「え?」

「どういう事よ、誰か覗いてたの??」

「何時間も前から居たつすよ、言ったじゃないつすか、魔力操作の応用で索敵が可能だつて、もう忘れたんつすか?」

「なんで言わなかったのよ!誤解されたんじゃないの???」

「さあ〜」

「さくじやないわよ!どうしてくれるのよ!!!」

「俺は別に誤解されようが困る事はないし」

「誰だった?」

「ずっと見てたのは背の高い女性だったかな、最初は3人くらい居たけど、すぐに2人は帰ったみたい」

「リヴェリア様だきつと・・・」

「親かなにか?心配そうに見てたし」

「うう・・・最初にいた2人は?」

「結構強い雰囲気だったぞ、剣姫ではなかったのは確かかな、性別までは分かんない、俺もこの技術を身に着けたの最近だし、さつきも訓練してる最中に反応があったから識別しようと訓練してたんつすよ」

「あううう・・・絶対に誤解されてる気がする」

そのままダンジョンを出て、軽くつまみ食いをしながら集合場所へ向かい、再び訓練再開となった

結果は俺に関しては散々で、昨日よりも悪くなっている、徹夜明け

なのもあつて動きが鈍っていたからだ

対してレフィーアは成果が出ている、かわす事に重点を置いた事で、昨日よりも気絶するまでの時間が長くなっていった、魔力操作の練習も空いてる時間にやっつてるのを見ると彼女も必死なんだろうなと感じた

ベル君も着実に成果を出してきている、俺の動きを取り入れたりして、受け流しやカウンターを狙つてる場面が見られる様になった

ベル君との戦闘の合間に、アイズさんはベル君に

「聞いてもいいい？どうして君はそんな早く強くなれるの？」

などと、この鬼のように強い天然少女は聞いて来るので、ベル君は「僕は強くなんか・・ただ、その、どうしても追いつきたい人が居て、何が何でもたどり着きたい場所があるからだと思います」

それを聞いていたレフィーアも考えることが有ったようで、めらめら闘志を沸き立たせていた

朝の訓練も終わり、もどつて休みたいので帰ろうとすると

「どこ行くのよ！来なさい!!」

「明日じゃダメなんっすか？結構眠いんっすけど」

「だーめ！誤解を解かないと大変な事になるんだからね！」

「俺関係ないもん、誤解されたって、むしろご褒美だし・・」

「いいから来なさい!!」

俺はうたたね状態のまま彼女に引きづられて行くのだった、解せぬ

ロキファミアリア

「リヴェリア様だから、この子に色々教えていたら、遅くなっちゃったんです」

ロキファミアリアへ連行された俺は、半分眠りながら彼女の必死の説得の横で正座させられている、この子って徹夜なのにすげーな、やっぱLv3は伊達ではないのだろう

「それは見ていたから分ってる、私にはレファイアが教わってる様にしか見えなかったもんだからな」

「ううう・・・やっぱり見てらっしゃったんですね」

「まさか私の気配に気が付くとは、この子は本当にLv1なのか？」

「はい、間違いなく初心者ですよ冒険者になって半月足らずらしいです」

「なるほどな、それで眠そうな君、よく私の気配に気が付けたな、何かのスキルなのか？」

「そんな感じっすかね、あまり師匠をいじめないでください、悪いのは俺っすから」

「ふふふ分かっておるよ、君も大変だったろうレファイアに教えるというのは」

「教えて貰ってただけっすよ？Lv1がLv3に何を教えろとおっしゃるのですか？」

「そうか、それでは事情は分かった故、休んでいくといい、部屋を用意しよう」

「まじっすか！女神レファイア様感謝感激です！」

「私は女神ではない、まったく調子のいい奴め」

部屋に案内してもらい結構高級そうな部屋に高級そうな家具の部屋に入りベットに入るとそのまま就寝してしまうのだった

別室では、レファイアが今度は団長のフィンと共に話し合いの場が持たれた

「へえ〜レファイアが師匠だなんてすごいじゃないか」

「本当のことを言ったらどうなんだ？レフイーア」

「あうううう・ごめんなさい、本当は並行詠唱の概念を教える代わりに、あの子に裏スキルを教えて貰ってました、本当にごめんなさいりヴェリア様」

「裏スキル？なんだそれは」

「彼が言うには、ステイタスに表示されないスキルの事を彼が勝手に名付けたそうです、それと脳内詠唱についても教えて貰ってました」

「脳内詠唱とはなんだ？」

「頭の中で詠唱して発動するらしいんです、口で詠唱しなくても出来るから便利だつて」

「それでうまくいったのか？」

「いえ、裏スキルの方もなかなか難しくて、とっかかりは掴めかけてるんですが、その先が」

「なるほどな、それで裏スキルの効果はなんなのだ？」

「索敵が主だそうです、自分の体の薄皮一枚に魔力を覆う事で、後ろからの攻撃を察知できるそうです。もう1つは自分の周りに水たまりをイメージして魔力の滴を1滴たらして波紋に引っかけた物を探知するらしくって、彼も昨日練習しててりヴェリア様達に気が付いたそうです」

「達というのはどういう事だ？」

「最初りヴェリア様と、もう2人彼が言うには性別までは分からなかったけど、強い2人が見てたと言っていました」

「テイオネ達だな、彼女達はスグに出て行ったというのに、まさか気が付いていたとは」

「相当凄い能力の様だね、それだけの効果なのにステイタス欄には出ない」と

「はい、そうらしいです、だから裏スキルって呼んでるそうです」

「興味深いな、フィン私もその技術は学びたいんだが」

「そうだね、魔法特化にとっては喉から手が出るほど欲しい技術だろうね、それで彼はどうやってこの技術を？」

「それが、魔法を覚えてから思い付きでやったら出来たって言うんで

すよ、最初彼にこの技術は一般的じゃないの？って聞かれましたし
「ヘスティアファミリアだったよね？彼は」

「はい、そう言っていました、オラリオ1の借金王最弱ファミリアだつて、なんか借金が2億ほどあるらしいですよ」

「あはははは、それは確かにオラリオ1を名乗れるだろうね、本当に面白い人物みたいだ、是非目が覚めたら合わせてくれないかな？」

「はい、ひきずってでも連れてきます」

などと物騒な話し合いが行われてるとも知らず、ふかふかの気持ちのいいベットで心の隅まで穏やかに寝ていると、ノックの音がし

「昼食の準備が出来ましたがどうされますか？」

と扉の向こうから声があるので飛び起きて、扉を開けて挨拶をした後ファミリアの人達が沢山いる食堂らしき場所へ案内される

俺はどこで食べていいか分からず、食事を作ってるおばちゃんに

「急遽泊めて貰ったんですが、食事頂けるのですか？」

「あらそうなのかい、これ持って食べな席は適当でいいから」

「ありがとうございます、めちやくちや美味しそうですね、ロキファミリアってすごいっすね」

「そうかい味も確かだよ、ゆつくりしていきな」

そのまま見渡すと賑やかに食事をしてる風景が有るけど居づらい・・・仕方なく席ではなく部屋の角でこっそりと食べていると

「どうしたんだい君は？」

なにやら小柄な金髪イケメンが話しかけて来る、ボツチに話しかけるなんてイケメンめこうやってフラグを立ててるんだなと思いつつも

「いあく昨日お世話になったんですけど、なにか場違い感が半端なくって、おかまいなく」

「君だろ？ヘスティアファミリアのマフィ君ってのは」

「およ？俺なんかをよくご存じで、失礼ですけどどちら様なんでしょうか？」

「僕は、フィン・デイルムナって言うんだ気軽にフィンと呼んでくれたまえ」

なんか偉そうなちびっ子だなと思いつつ、貴族の子供か何かかなんだろう、いい物着てるし

「フィン卿、申し遅れましたへステイアファミリア所属のマフィと言います、家名は有りません」

「やはりそうか会いたかったよ、そんな所で食べてないで一緒に食べないか？」

「いあくしが無い平民っすから貴族の方とは一緒には不味いんじゃない？」

「ぶっはははっ本当に君は面白いんだね、ボクは貴族とかじゃないよ、ロキファミリア所属で代表をしているんだ、見た目よりも遥かに年をとってるから初対面の方にはよく間違われるんだ」

「どちらにしてもお偉いさんじゃないっすか、なぜに俺なんかに？」

「客人をそんな場所で食事をさせていたら、ファミリアの恥なんだ」

「まぢっすか？俺って客人として扱われてたんですか？」

「そうさ、紹介もするから来てくれないかな？」

「はい」

何か嫌な予感しかしないけど、やたらと上座に座らされ、料理を持って行こうとしたら給仕の方が持つてくれたりもしてなんだか変に勘ぐってしまう

なんか視線が痛いのです、食事の味がしなくなっただです．．

「みんな食事中にすまないが、客人を紹介させてくれ」

彼の一言で全員が食事を辞めて、話し声もピタッと止まると

「へステイアファミリアから招待したマフィ君だ、彼は独自の技術を持つており是非とも我がファミリアでもその技術を取り入れたいと考えている、粗相のないように頼む」

ちょｗｗｗｗレフィーナの野郎、ゲロリやがったな!! あーもうせっかく昨日はうまく誤魔化せたの!!

「だんちよー何なんですかその技術って？」

「それは今精査中だ、遠征前なものもあるから遠征後に精査して有用な

ら使って行こうと考えている」

「マフィ君からも何かあれば」

この人絶対に性格悪いな、確実に全男性の敵に違いないなどと考えつつも、一宿一食の恩を返すべく

「ご紹介にあずかりましたマフィといいいます家名はありません、しが
ない自分から何を学ぶのかは存じ上げていませんが、昨日はすつごく
良い部屋に泊めて頂いた上に、ごちそうまで食べさせてもらってあり
がとうございました、ちなみに請求書は師匠のセフィア様にお願
いします」

「ぎゃっははははーおいセフィアどういう事だよ!」

「セフィア師匠になったの?すごいじゃん!」

セフィアは顔を真っ赤にして俯いているざまーみる! つと心
中で思うのだった

食事を食べて、そそくさと荷物を持って出ようとする、扉の向
うに人の反応が、早速ソナーで探知するとレフィアと他3名ほどが
待ち構えてるのを確認

(まずいな、コレは絶対よくないパターンだ逃げるか? 逃げるのは簡
単だけど、後が怖いな・・・)

相手がその気ならと、部屋に、はたから見えないゲートを家具の死
角に設置して部屋から出ると

「色々ありがとうございます、それでは失礼します」

当然逃がしてはくれず、違う部屋に連行されました・・・クスン

「帰るところ悪いね、どうしても聞きたいことが有ってね、君がその気
なら好きだけ泊っていつてくれて構わないよ、君の所にも既に連絡
はしてあるし」

「なにゆえ俺なんかそんな待遇を?」

「君の言う裏スキルについてだよ、レフィアを責めないであげて欲
しい、無理矢理口を割らせたのは我々なのだからね」

俺はシュンとしているレフィアを横目で確認してから視線を戻
し

「いいつすよ、レフィーアさんとアイズさんには教えます、彼女達には借りもありますし、元々アイズさんの借りを返すためにレフィーアさんに教えたんですから、他は遠慮させてください、もし俺に有用な条件ならその限りではないですけど」

「何が望みだい？借金返済かい？」

「借金は先日完済しましたんで大丈夫です、なので技術が欲しいです、そうですね自分はオールラウンダーを目指す槍と盾を装備した戦い方をする予定なんです、槍の技術が習えるなら習いたいですね」「へえ〜どうしてオールラウンダーなのか聞いてもいいかな？」

「自分の魔法は強化魔法特化型です、強化魔法を維持しつつ、状況に応じて前衛にも後衛にも動ける戦い方が有用だと考えたからです」

「なるほどね、君はなかなか面白い考えかたをするんだね」

「それで2人にならいつでも教えますので、連絡いただければ」

「それでアイズについてなんだけど、彼女に戦い方を教わってるのかい？」

「はい、遠征に行かれるという前日までの空いた時間にですけど」

「なるほどね、レフィーアもものかい？」

「はっはい！」

「そうか、まさかあのアイズがね、すまないがアイズを呼んできてくれるか？」

「アイズさんは裏スキルの事知りませんよ？教えたらもう強すぎて訓練にならないつすから秘密にしてみましたし」

「なるほどね、色々分かって来たよ、アイズの訓練で一矢報いる為に徹夜で2人して特訓してたんだね」

「はい」

「それで聞きたいのはこれだけじゃないんだ、その裏スキルと言うのは索敵が主だと聞いたのだけど他にも使い方はあるのかい？」

「それはノーコメントでお願いします」

「ふむ、どうやら他にもあるが言いたくないか〜…まあボクが君の立場でも同じようにするだろうし、そこは仕方ない話だね」

「アイズさんいらっしやいましたよ」

「ほお？やはり索敵を今も使ってるんだね？」

「そりやそうですね、こんな強い人ばかりの場所で尋常じゃいられませんし」

ここでノックがしてアイズさんが入って来ると全員が目丸くしている、その反応にアイズさんも???って顔をする

「本当だったようだね、話をしながらでも索敵可能と言う事は詠唱中も可能って事なんだろ？」

「はい」

「アイズ君はこのマファイ君とレファイアに戦い方を教えてるそうだね？」

「うん」

「アイズに聞きたいのだけど、裏スキルって分かるかい？」

「知らない」

「訓練してる時にマファイ君の索敵能力について何か思う所は有ったかい？」

「わかんない」

「そっか、アイズ、君がノックする5秒前に彼はアイズがこの場所に来たのを察知したんだ、そういったステイタスに出る事のないスキルを裏スキルと言うそうだ」

「そうなの？すごいね君」

「彼が言うにはアイズとレファイアだけには、こういった事の出来る裏スキルを教えるもいいと言っている、アイズはどうしたい？」

「覚えない」

「そうか、マファイ君に聞くが彼女達から僕達が教えて貰うというのは構わないんだろ？」

「構いませんよ」

「だそうだ、アイズ必ず技術を覚えて来るんだ、レファイアもだ頼んだよ」

「うん」「はい！」

「それともう1名頼みたいがいいかな？提供するのには槍での戦い方の教授を提供しよう」

「フィンまさか！」

「うん、僕も君と同じ槍を使うんだどうだろ？」

「まじっすか？そりゃこの上なく有難いですけど」

「それで裏スキルはボクではなく、リヴェリアに教えてあげてくれるかな」

「はい、構いませんけど何方なんですか？」

「そこにいる女性だよ」

俺は彼の言う方向を見ると、長時間覗いていた女性だと気が付き

「あ・よろしくお願ひします」

「ふむ、期待してるぞ先生」

「あの先生とか辞めて貰えませんか？精神衛生上よくないので」

「そうか、マファイ君これでいいのかな？」

「はい」

「初歩はやり方教えるだけなので今すぐ始めますか？」

「うん」「是非」「そうだな」

「見学しても構わないかい？」

「外部の方が質問をしても答えられないですけどそれで良ければ」

「じゃ〜お願ひしてもいいかな？」

「それでは集まって貰えますか？レフィーアさんは知ってるかもしれないですが、おさらいだと思って付き合ってください」

「はい」

「まず魔力と言うのを自分で意識して動かすところから始まります、今俺の右手に魔力が収束されてぼんやりとですが光ってますよね、この状態にまず各自やってみてください、自分の中の魔力と言う物を感じた事のない方は難しいので、リラックスした姿勢で、あぐらをかいったり椅子に座ったりして、目を閉じて自分の中の魔力を感じてみてください」

レフィーアは徹夜でやっただけあって即座に右手に魔力を集めている、リヴェリアさんはなかなかうまくいかず、レフィーアの方を見て真似しようと必死な表情だ

アイズさんは感じた事はなかったのだろう、床にすわって目を閉じ

ている

「アイズさん触れていいですか？俺の魔力を流すので俺の魔力が流れて来るのを感じて貰いたいんっすけど」

「うん、いいよ」

俺はアイズさんの肩に触れて魔力を流すと、流石に分かりやすかつたみたいで反応が見られる

「感じ取れたみたいですね、自分の魔力で俺の魔力の流れを止めて貰っていいですか？」

「うん、わかった」

なかなか自分の魔力を掴めないようであレコレ試行錯誤していくうちに、魔力が動くので

「それです、それがアイズさんの魔力です」

「分かった」

どうやら自分の魔力を感じる事に成功し、俺の魔力の流れを自分の魔力で止める事に成功する

「次はどうするの？」

「もう手助けは要らないので、自分の魔力を右手に出来るだけ多く集めてください、それが出来たら初段権クリアですね」

「うん、わかった」

「レフィーアさんは集めた魔力を体の意識した部分に自由に移動させて、出来るだけ多く移動させてください」

「うん」

「リヴェリアさんもリラックスできる姿勢で、少しだけ意識出来てますが、もう少し自分でやりますか？それとも俺の魔力を流して見ますか？」

リヴェリアさんも椅子に座り直し、俺の補助を要求したので手伝う事に

「俺の魔力が流れているのは完璧に感じ取れているので自分の魔力で流れを止めてください」

しばらくすると魔力の流れを止める事に成功したので、後は自力でやって貰う事に

「自分の魔力を右手に集めたら出来るだけ多く動かしてください、これは暇な時にやればやるほど上達して次段階へスムーズに出来るようになるので」

「はい」

「それじゃ、初めの訓練はここまでにします、ありがとうございます」

「ありがとうございます」

「帰っていい？」

「いや、槍の訓練がまだだろ？」

フィンと言う男はどこまでも、俺の精神を削って来やがる

「時間大丈夫なんですか？」

「かまわないさ、外へ出よう」

外へ出ると、なぜかギャラリーがいつぱい、なにこの見世物・

「ギャラリーは静かに頼むよ、マフィ君すまないね」

「はい、よろしくお願いします」

「じゃ、君の思うように攻撃してきてくれるかな？」

「補助魔法は？」

「使ってくれて構わないよ」

「それでは遠慮なく」

俺はフルバツフにすべく次々と魔法を発動していく姿に、ギャラリーはざわめき立つ、静かにしろって言われたじゃん

「それが脳内詠唱なんだね、確かに素晴らしい技術だ」

「はい、これは彼女達も相当苦勞すると思いますよ」

「そうか」

「では行きます！」

俺は足に魔力を溜めて一気に距離を詰めてフィンさんめがけて突きをする、どうせ格上なんだ小細工は通じはしないだろうという考えだ

俺の渾身の突きをフィンの棍棒の先で止められてしまう、結構傷つく防ぎ方だ、衝撃吸収ついてるのにいきなり手が痺れるとは

俺はバックステップで距離をとって、今度は緩急をつけての突きの連打だ、威力は落ちるがこれは只の弾幕、これでどうにか体制を崩してやろうという考えだったが、速度の違う突きだけに行けると考えた俺が甘かった

フィンさんは、全ての突きを確実に払いのける事で逆に俺の体制を崩しに来る

やばいな・・・スキが無い、作る事も出来ない

俺が硬直したのを見て、今度はフィンさんからの攻撃だ、受け流すべく槍を構えるが、なぜかすり抜けやがった

一体何をされたのか分からない衝撃緩和が無かったらマジやばいんっすけど

「君は本当にLv1なのかい？」

「Lv1っすよ、疑うなら背中確認してもいいっす、それにしても何も出来ませんでした、最後のは教えて貰えるんですか？」

「やはり見えてたんだね、目もいいし感もいい、よく考えて動いている、けどそれだけだね」

「はい・・・」

「もう少し続けよう、その中でなにか1つでも感じる事が出来れば今日は十分だろう」

「ありがとうございます」

その後もどうにか隙を作るべく槍を動かすが、今の手札では手詰まりだ・・・ならば！

再び足に魔力を溜めて一気に噴射して距離を詰め、今度は肘に魔力を溜めて噴射させて加速した速度で槍を突き刺す

両手から片手に変えて一気に突き刺した槍の軌道に一瞬だけ、フィンに隙を作らせた事でこのまま行けると思ったが、槍で受け流されてしまい、そのまま受け流した威力を上乗せして槍を振り回した、加速された槍は体が反応できず直撃、そのまま吹き飛ばされることに、衝撃緩和があつて吹き飛ばされたのは初めての経験だっただけに、流石に立っては居られず、膝をつく事に

「はあはあ・・・はあはあ・・・あんなカウンターもあるんっすね、やつぱ

「凄いつす」

「どうやら今日の課題はクリアしたようだね、自分で言っておいてアレなんだけど、まさかクリアするとは思わなかったよ」

「冗談きついつす、フィンさん性格悪いってよく言われませんか？」

「あはははは、耳が痛いね」

「今日はすごい勉強になりました、またよろしくお願いします」

「うん、今度は遠征から帰って来てからだ、楽しみにしててね」

「はい」

俺はどうか解放され、帰ろうとすると、シャワーでも浴びていくといいと言われ遠慮なく借りた、何この施設超凄いですけど!!

どうにかホームまで帰り、そのままベットに転がり込むとそのまま意識を失うのだった

その頃、ロキファミリアでは、団長みずから他のファミリアの子を指導したという話でもちきりとなり、フィン技術提供の見返りだと説明し納得させた

そして緊急幹部会議が開かれ

「いや〜遠目に見とったけど、ドチビの所のガキやっぱウチの見立て通りやったなあ」

「ロキ様どういう事なんです？」

「前の遠征の打ち上げの時や、あの時に初めて会ったんやけどな、ドチビの所のガキにしてはいい目をしてるからウチに誘ったんやけどな、あのガキなんて言ったか知ってるか？ウチのアイズたんを粗品にくれるなら考えるいうたんや、そいでな生意気なのはベートだけで間に合ってるから断ったんや」

「それはおもしろい事を言いますね、初対面でそれだけ言うなんて」

「がっはっはーなかなか骨のありそうな奴みたいじゃのお」

「そうだね、彼ならきつと近いうちに駆け上がって来るよ、僕達の場所までね」

「フィンそれほどだったのか？」

「ああー僕にはLv3くらいに見えたよ、あれでLv1だなんて信じられない、結局最後まで気絶しなかったしね」

「手を抜きすぎたのではないのか？」

「いや、最後のカウンターは食らえば確実にLv4でも耐えられなかったはずだ、彼の補助魔法による所だろうけどね」

「ほお〜それは言っておった裏スキルの他の使い方をしておったのではないか？」

「だとしたら脅威だね裏スキルと言うのは、彼がこの先ほかつておいてもLvは上がっていくだろう、そうなった時が未恐ろしいよ」

「フィンにそこまで言わせるほどの技術とはの〜」

「ロキ様はどう思われますか？」

「う〜んウチの見解は、その裏スキルいうんは、未完成のスキルとちやうんかな、一定値到達することで得られるスキル、神の恩恵はそんなあまくないんや、そんな見落としがあるとは思えへん、そうなるスキルを得るのに必要な段階、未完成やおもうで〜」

「あれが未完成品だというんですか？」

「それでロキ様は、あのスキルに名前が付くとしたら何になると思われます？」

「ウチの見立てでは恐らく魔力操作つてとこやな、けど魔力操作は過去にも発現してるんや、確かあれは種族限定な上に一部の血族がごくまれに発現するスキルやったはずや、それにあないな多彩な真似は出来ひんかったはずやし、そうなる魔法力操作つてとこかな、発現したら初やで、それに効果も一級品やろうな」

「なるほど、それが魔力を持っている者なら誰にでもチャンスがあるって訳ですね」

「そういう事や、たぶん公表したらオラリオ中大騒ぎ間違いナシやろな」

「彼には？」

「黙つといた方がいいやろな、そのほうがおもしろいやん」

「そうですね、彼が知ったら取得するのを嫌いそうですし」

「それで他の利用方法は何かわかったのかフィン、その為に修行に付き合ったのだろじやろ?」

「ああ、おそらく加速に使ってたね、あの瞬発力は、どう説明したってLv1の代物じゃない、それと耐久にもだろう応用の広い技術だと感じたよ」

「なるほどのおく誰でも利用可能な上に応用も幅いろいろいわけか是が非でも欲しい技術じゃのお」

「それとロキ、彼が借金の話をしていたんだが、ヘステイアファミリアには2億もの借金を何に使ったのかと、数日で返済したという話について調べられないか?」

「その話か、それは簡単やで今日ヘファイストスんとこに世話になる言うんで挨拶行つた時に出たわ」

「それで?」

「借金の理由は子供の武器や、ドチビが頼み込んでヘファイストスに作らせたんや、借金返済の方はおもしろい話やったで、あのガキがヘファイストスに何かわからんけど興味の引く何かを提示して、それと引き換えに借金チャラにしたちゅー話や」

「その面白い物とは?」

「それが全くしゃべらんくつてな、椿がいうには、あのヘファイストスが何日も徹夜でそれと格闘中つて話や、おもしろいと思わんか?」

「そうだねそれは気になるね、ヘファイストス様がそこまで興味を引くと言う代物、それにその代物には魔法力操作は関係ないだろうからね」

「そうや、そこがミソなんや、ウチも興味あるし調べといてやるわ」

L V 2 前編

ロキファミアリアから解放された翌日、完全とは言えない体調だが、朝のアイズさんとの特訓の為に出かけると

「どうしてこうなった!」

「これってどういう事なんですか?アイズさん」

「ごめん逃げ切れなかった」

なぜかロキファミアリアのメンバー数名がギャラリーとして居るのだ

「気にしないで来て」

ベル君はかなり委縮してしまってる、その気持ちわかるぞ!

「集中しろベル君、君の目指す先は、こういったギャラリーの目線に晒されるんだ、逆にこの状況を楽しめ、利用しろ!」

「うん!」

ベル君の目つきが変わり、集中したベル君は先日よりも動きが良くなった、昨日は俺が行けなかった分、多く学べたのだろう

あいかわらず容赦のない攻撃を繰り返してくるアイズさんの攻撃、手加減って言葉を彼女にまず教えたいと本気で思うマフィ

しかしどうにか食らいついて行くベル君の攻撃はかすりもしないが、アイズさんからの攻撃は衝撃を殺せないながらも避けている、目が良くなったのと、その目に体がちゃんと付いて来てる証拠だ

やはり経験の差を埋める事など出来ず、そのまま直撃をくらって撃沈

次にレフィーアさんになり、彼女は回避をメインとした並行詠唱を開始する、アイズさんの攻撃は本当に容赦がない、手加減と言う言葉を

を (r) あっけなく撃沈されてしまい気絶、がんばれ!!超がんばれ!!!

レフィーアが気絶すると同時に、一気に突進しながらフルバツフにしていく、最近は詠唱にもなれて来た事もあって速い速度でフルバツフにする事が出来る

そのままあの性悪ちびっこ団長の見せた最後の突きの正体、100

↓0↓100の突きをしてみる、昨日終わってからの帰り道、色々考えた結果導き出した答えが100↓0↓100の突きだ、そうとしか考えられないならば試すだけだ！

以前見た事のあるアニメや漫画なんかの知識を総動員して導き出してただけに自分で考えだしたとは言い難いが、それでもこれも俺の力だと割り切っている

突き出した槍の軌道を一瞬で0にするのは相当の筋力が居る、必要な筋肉を魔力で強化しねじ切れそうな痛みをこらえて0にする、そこから一気に肘からの魔力噴射により一気に100にする！

出来るかと確信していた時期が俺にもありました・・

カランカランカラン・・

飛び出して一気に0にしたとたん、魔力強化した腕力でも耐えられず武器を落としてしまう事に

「すいません、手元が狂いました」

「いいよ、今のって団長の技だよね？」

「真似してみたんですが、無様に失敗しちゃいました、やっぱ筋力が足りないみたいです」

「うそでしょ！昨日一度くらっただけで見極めたの？」

ギャラリーが何か言ってるけど無視しながら

「それでは再開！」

今度は緩急をつけた突きで弾幕をしながら間合いを詰めていく、アイズさんも性悪と同じように全部を弾いていく事で間合いを詰め、俺の体制を崩しに来る

俺は崩れたところを彼女が攻撃するのを見計らって、魔力で体を支えて、攻撃を受け流し、その威力を利用して薙ぎ払いをする

しかしアイズさんの反応のが早くかわされてしまう事に、かなり自信があっただけに、ぽつきりと自信をへし折られた俺は

「諦めるっかっての!!」

攻めあるのみ！再び突きの突進を繰り返して、相手が受け流すよりも早くサイドステップで再び突きを繰り返す、100↓50↓100

ならば行けるはずと考え力をコントロールして突きを繰り出す

「やっぱにわか仕込では駄目っすね、交代します」

「うん、君も強くなってたよ」

「ありがとうございます」

その後も順番に相手になってももらい、今日の朝練も終わりを迎えた
「おつかれ〜みんなすごかったよ、これ差し入れ飲んでね」

アマゾネスの女性が俺達に差し入れをくれるので頂く事に、ベル君は何度もお辞儀しながらお礼を言ったりして、なるほどこうやって可愛がられるんですね分かります、などと思いつながらながめていた

「アイズさん、明日で朝練はラストになるんですが、明日はベル君と1日中訓練に付き合ってあげられないっすか？」

「いいけど、君はいいの？」

「俺達2人は、ベル君が気絶した間と言う約束でしたので、それなのに結構時間オーバーしてたりもしたんで、明日のラストはベル君だけお願いできないですか？」

「うん、いいよ」

「そういうことだからレファイアさん、我慢してね」

「はい」

「今日までアイズさんありがとうございます」

「うん、こちらこそありがとうございます」

いい雰囲気のまま帰ろうとしたのに、アマゾネスの女性が絡んでくる、ちちもむぞー！強そうだから殺されそうだしやらないけど・・・それにもむだけのチチガナイ。。。

「やるじゃん君、昨日の団長から1回食らっただけでもう真似するなんて」

「あーあれっすか、やっぱ100、0、100で合ってたんです？」

「なにそれ？あれはぐぐつとやってぐつてやってぐぐだよ」

なに子の子ちよーおもしろいんだけど

「なるほど分かん」

「なんでよー！ー！」

もうなんか疲れたし、帰ってダンジョンへ行く準備しよつと

ホームに戻って、神様に心配かけてすみませんと一応謝ってから、ステイタス更新をした時

「うそっ・・・」

「どうしたんです?」

「Lv2になってる」

「不味いっすね」

「まだ保留にも出来るけど、どうするんだい?ベル君よりも早くに到達するなんて」

「Lv1現在のステイタスは見る事出来ます?」

マファイ Lv1

力 S 940

耐久 SS 1005

器用 S 987

敏捷 A 897

魔力 SS 1020

魔法:

【フレイムオーラアデクション】

詠唱式: 眠りし火炎の魂よ集えフレイムオーラアデクション

【カオスアデクション】

詠唱式: 神をも恐れぬ混沌よ我に示せカオスアデクション

【ワールドオブエンペラー】

時空間に世界を作り改変する

詠唱式: 我が世界を改変し世界を作るもの也、世界は我の手によ
り作り変えられる、世界は我の声を聴き我に従えワールドオブエンペ
ラー

【ワールドオブドア】

自分の作った世界と現在地を繋げる扉を設置する、詠唱時に作った世界をイメージする、具体性欠如の場合は失敗

詠唱式： 我の世界とを繋ぐ扉を召喚せよワールドオブドア

解呪式： ワールドオブドアークット

〔ワールドオブキー〕

自分の作った世界に物質と生物を入れる事の出来る鍵、鍵は術者の意思で渡したり消したり出来る、鍵は世界ごとに異なり詠唱時にイメージした世界のカギが出来る、具体性欠如の場合は失敗

詠唱式；我の認めし者よカギを使い扉を開けワールドオブキー

スキル：

うくん・・・バグった？10000って超えるんだ、そうになると気になるのが最大値だよなあ、神様も10000って言ってたのに

「保留でお願いします」

「いいのかい？これだけのステイタスだぞ、保留したって上がるとは限らないんだぜ」

「まずレコードホルダーは勘弁してほしい、第二に10000が最大なのに10000超えたから限界値知りたい、いまLv2にするほど差し迫ってない」

「なるほどね、君がそう決めたなら僕は何も言わないよ」

「あざっーす！、他のメンバーには秘密にしといてください」

「うん、誰にも言わないようにしておくよ」

「それじゃくダンジョン行ってきますね」

「マフィ君、ヘファイストスが武器を返すからって言ってたから、今日帰りにでも寄っていくといいよ」

「了解っす」

そのまま3人でダンジョンにいつものように入り、探索を行う事に各自が強くなった分稼ぎも徐々に増えて行ってるのが分かる

「明日はリリと俺とで潜るから、ベル君はみっちり頑張っ来ていよ、俺からのささやかなプレゼントだぜ?!」

「あはは・・・生きて帰ってこれるのかな？」

「さあ最近手当たり次第にフラグ立ててるから神の裁きがあるかもな」

「フラグってよく言うけどどういう意味なの？」

「使い方は色々、ベル君の場合は女性に出会って、いい思いをしそうな切っ掛けを作るってのをフラグって言うんだぞ、ちなみにベル君はロキファミアで色兎って呼ばれてるから、Lv1なのにもう二つ名が付いてるんだ、俺に感謝しろよ」

「どういうことなんです、マフィ様」

「色男と兎を掛け合わせた、俺が広めておいたおk？」

「何てことするんですかー！昨日帰ってこないと思ってたら、そんなくだらない事をしてたんですか?！」

「何を言ってるんだ、色兎の毒牙にかかりそうな女性達に警告をしておいたんだ世界平和だろ？」

「おもにマフィ様の平和の為ですよ？そこまで嫉妬してたなんて見苦しいです」

「うっさい！」

「そんなつもり全然ないのに・・・」

「じゃく神様かりりを固定の彼女にすればいいじゃん」

「なんで神様になるんだよ、そういう間柄になる訳ないよ神様なんだよ」

「じゃくりりが彼女になってあげますよ、ベル様」

「よかったっすね、おめでどうお二人さん、おいらは血の涙を流しながら見守るよ」

「もうりりもからかわないでいいから」

ダンジョン探索が終わり、俺はヘファイストスから武器を返して貰いに行く

「どうでしたか何かわかりました？」

「スキルスロットは武器の次段階後になるみたいね、取り付け方も分かったわ次段階になったら持って来たら付けてあげる」

「そうでしたか、他には？」

「貸していた武器には君の魔法使ってみた？」

「使いましたけどそれが何か？」

「ヘステイアナイフと同じ様に魔法は使ったかと聞いたのよ？」

「あっそういえば使ってないですね、もしかして変化すると思います？」

「やってみてくれる？」

「ヘステイアナイフが無いから借りて明日でいいですか？」

「この2つの槍に使ってみてくれるかしら」

「あく了解です」

それぞれの槍にカオスアレイションを使うと、あの時の様な強烈な光がほとばしり、光が収まると、粉々に砕け散った槍が、せつかく貫つたのに！

「……」

「砕けちゃったんですけど」

「そうみたいね」

「泣きそうなんですけど」

「しようがないわね実験に犠牲はつきものよ」

「原因は何だと考えますか？」

「嫉妬したんじゃないかしら、この武器は生きてるって事だし」

「なるほど把握、次は嫌ですよ」

「それは駄目よ、次の武器渡すからやってみて」

次に持って来たのは刀、同じようにやるが変化はない

「これいかに？」

「やはりある程度使い込まれてるのが条件みたいね、次これで」

「まだやるんですか？」

おもいっきり睨まれました怖いとです、しかたなく次のロングソードへ魔法を使うと変化が現れる

「成功っすね」

「失敗よ、ヒエログリフが刻まれてないわ、あーもう手詰まりね」

「その武器誰かのものに良かったんです？」

へファイストスは武器を手に取り、じーつと見つめると

「使用者指定の属性がついてるわね、他に武器自体に問題ないわよ」

「俺思うんですけど、親の武器がヘスティア系でしょ？だとすると同じヘスティア様の恩恵が必須条件じゃないですか？」

「やっぱそうなるわよね、私も同じ結論よ、君のファミリアの子って他に誰かいるのかしら？」

「はい、後はりりって子が居ますよ」

「その子の獲物は？」

「両手ハンマーとリトルバリスタですね」

「後で渡すから、しばらく使う様に頼めるかしら？」

「分かりました」

「ところでふと疑問に思ったんですけど、ヘファイストス系の武器作れば良くないっすか？」

「うちのファミリアの子達も基本的には鍛冶を生業としているから、私が作った武器を使わせるわけにはいかないのよ、他のファミリアにしてもそう、あの武器はいわば邪道の代物なのよ、そうポンポン作る訳にはいかないって訳なの」

「買い替えの要らない武器なんて邪道ですしね、鍛冶屋に喧嘩売ってるとしか思えない事を自分からやるってのは確かにそうですね」

「だから次の武器が変化したら、その武器は私が貰うわよいいわね？」

「了解っす」

「スキルスロットの概念は鍛冶屋としては邪道ではないですよ？調べているのはスキルスロットの概念だったりします？」

「正解よ、あの概念が他の武器にも使えるのなら、武器の革命が来るわ」

「なるほどね、2億以上も支払わせて、ちよつと気が引けてたんですけど、その技術が確立させられれば元は取れますね」

「貴方でも気にしてたのね、けど貴方の言う様にそうなるわね」

ホームに戻ってりりを呼び出して詳しく説明すると

「構いませんけど、こんな高そうな武器大丈夫なんですか？」

「いいんじゃないやね？あつちはあつちでスキルスロットの概念を研究材料

にするって考えてるし」

「そうですね、スキルスロットってやっぱり装備するとスキルが発動するって事なんですよね?」

「多分そうだと思うよ、一応もし試作品出来たら一式優先的に回してくれるように頼んだけど買えないかもね」

「そりゃそうですね、装備しただけでスキルが発動するんですから、ありえない価格にきまっています」

「明日は2人で探索だけど、行く前に俺がロキファミアミリアで取得して来た技術の中で使えそうな覚えてみないか?」

「さすがマフィ様ですね、そういう抜け目のない所、ほんと頼りになります、是非教えてください」

「それ褒めてる? けなしてない? 泣くぞ?」

早朝早くから、りりと朝の鍛錬を始める、教えるのは裏スキル、ロキの所の技術ではないが俺の開発したとか言うとかまた騒ぎになるし出来るだけ穏便にしたかったことが理由だ

「いまから裏スキルについて説明する、まず裏スキルと言うのはステイタスに表示されないがスキルの様な効果を持つてる事を指す、これをりりにも教えるから取得を目指して欲しい」

「はい、そんな技術があったんですね、さすがマフィ様よくそんな技術を盗んでくれましたね」

「ぬすむとか失礼過ぎるぞりり君!」

「ごめんなさいい・・・」

「りり君、教えるのは俺だぞ、しっかり分別を弁える様に!」

「はい!」

「では続けるぞ、この技術は自分の魔力を操作する事により様々な事が出来るようになる大変便利な技術だ」

「どんなことができるのでしょうか教官!」

「まずは俺の後ろの建物の後ろに犬が1匹いるから確かめてこい」

俺の言う様にりりは建物の後ろに回り、犬が居るのを確認すると

戻って来て

「教官、確かに居ました!」

「これはソナーという技術だ、広範囲にあるものを探知できる、これを覚えるとダンジョンで不意打ちが無くなる素晴らしいとおもわんかね? リリ君」

「す・すごいです、こんな事が出来るからロキファミリアは強いんですね」

「ふむ、他にもあるぞ俺の後ろに回って10メートル離れてから、俺に矢を放て」

「何言ってるんですか! 教官が大怪我しちゃいますよ!」

「教えを乞う者は、教えて貰う人を疑ってはいけない覚えておくように」

俺に言われ言われたとおりに、背後に回りこみ10メートルほど離れる

「もう2歩前へ、そうその位置だ、好きなタイミングで撃て、撃ちますとかは言うな無言で撃て」

言われた様に数秒後、リリは俺に向かって矢を放つと、後ろを向いたまま矢を手で掴むと

「どうだ? すばらしい技術だと思わんかね?」

「すごいです! マファイ様!!」

「これこれ今は授業中だリリ君」

「はい教官!」

「よろしい、ではまず初級編だ俺の右手をよく見てろ、薄く光ってるだろ? これは俺が意識して魔力を手に集めてるんだ、リリは自分の魔力を感じた事はあるか?」

「ないです教官!」

「まずは俺がリリの体に魔力を流す、俺の魔力を感じて見ろ」

「はい!」

魔力を流しながら、リリの魔力をいじくりまわしてあげると反応がすぐに出る

「今俺の魔力を流して、リリの魔力を弄ってるの分かるか?」

「はい！この感覚が教官で、こっちがりりの魔力ですね」

「そうだ、筋がいいぞ次の段階だ、もう自分の魔力は把握したと思うからその魔力を右手に集めろ」

俺の万全のサポートにより、ロキの連中よりも早くにりりは右手に魔力を集中させることに成功する、俺が教えるのに慣れたのもあるが「よし、その集めた魔力をゆっくりでいいから左手に移せ」

結構長い時間をかけて、1割程度を右手に移すがほとんどが逃げてしまっている

「もう一度左手に魔力を集め直すんだ、今度は俺がサポートするから感覚を掴んでくれ」

りりの集めた魔力を俺が無理やり反対の手に移動させる、ゆっくりと分かりやすいスピードで左右に移動させ感覚を掴ませる

「俺に頼るばかりではなく自分から、もっと意識して動かすんだ」

徐々にサポートの威力を弱めていき彼女が自分の意識だけで動かせるようになるまでどうにか出来る様になり

「そう、その感覚だもう少し続けて慣れたら速度を上げていけ、速度を上げると魔力が散ってしまふ、少しでも散ったらやり直した」

どうやらコツを掴めたようで、とんとん拍子で速度を上げる事に成功する

「りりは才能があるな、こんなに早くここまで習得するとは」

「教官のおかげであります！」

次に左右の足に魔力を移動させる、足は神経が薄いから非常に難しい、それが出来たら意識した体中色々な場所に移動させて訓練をする、ここまで出来たら第二段階クリアだ」

「はいー」

あれこれアドバイスをしながら、どうにか速度は遅いながらも自分の意識した場所へ魔力を集中させることが出来る様になったので、今日はここまでにしてダンジョンへ向かう事に

「教官今日は何階層まで行くんですか？」

「いまもう訓練中じゃないからいいよソレ」

「なんか癖になっちゃって、マフィ様」

「とりあえず10階層かな、11とか行きたいけどバレたら何言われるか分からないしね」

「そうですね」

10階層までは敵を避けながら最短距離で進み、10階層に到着すると最高効率で倒していく

「なかなか難しいなあ」

「そりやそうですねよ、魔力の移動を覚えたばかりのリリだから、思ううのかもかもしれませんが」

魔石拾うのが、手間なので魔力の手を使って回収しようと考えたのだが、思いの外難しい

「右30の3」「はい」

右に30メートル先3匹の略だ、手信号を織り交ぜながらPTプレイをより充実させていくのも大切だからだ

「3の後直20の4」

その後もこんな感じで探索を続けていき、夕方になる頃にダンジョンを出て買い出しした後帰ると、ベル君が戻ってるので今日の事聞いてみる事に

「どうだったラストアタックは?」

「うん、すごく充実した1日だったよ色々な事を教えて貰った」

「そっか、それは良かった」

「マフィ君、聞きたいんだけど、アイズさん達に聞いたんだけど」

「裏スキルか?」

「うん、それ僕も初めて聞かされて驚いたんだけど、マフィくんがアイズさん達に今度暫く教えるんだよね?」

「ベル君も覚えるかい?しかもアイズさん達には秘密の技術込みでだ、追いつけるように彼女達には全部教える気はないんだ」

「なんかズルい気がするけど、そうでもしないと追いつかないよね」

「気に食わないか?言っておくが簡単な技術じゃない、ベル君が彼女達に教える予定の技術まで覚えたらまた考えればいい」

「ううん、そうじゃないんだ」

「まさか彼女達にも同じように教えろと?それこそ無茶な話だ断固と

して断る、一定まで教えたら後は創意工夫だ、俺だって毎日練習してるんだぜ、いまの技術だけでは足りないと考えてるからだ、創意工夫して色々模索してる」

「そうだね、マファイ君の言う通りだ」

「ちなみにリリは今日から始めたぞ、出遅れたなベル君クツク」

「うっそーっ！っ！どういふ事なのさー！」

「そう怒るなよ、ベル君は美女とデートしてんだ、リリと俺にも何かしらの意向返ししたっていいじゃんか」

「だけどさく・・ひどいよマファイ君」

「わーっただっての今から初歩まで教えるから俺の部屋に行くぞ、リリも呼ぶからな」

3人が俺の部屋に集まり、早速裏スキルの練習を始める事に

「ちよつとどういふ事なんですか！」

「だから今から裏スキルの訓練だつて言ってるだろうが」

「ちがいます！なんで扉を開けたら外なんですか、それにここ何処ですか？」

「細かい事はいいんだつての、始めるぞ、教える時は俺は教官だ、分かったなぼんくらどもー！」

「はい！」「もう・・ブツブツ」

「そのチビっ子、もう帰れやる気のない奴に教える気はない！」

「すいませんでした教官！どうか私にチャンスをください！」

「それでいいのだリリ君」

各自、裏スキル取得に向けて訓練していく、リリは朝やってただけじゃなく時間を見つけてはずつとやってた事もあって2段階目としてはレファイアを超えている、俺の生徒の中でピカイチの成長だ

ベル君は、リリほどではないが、既に手に魔力を集めるのに成功した

「リリは3段階目に入る、今度は難しいが出来る様になると纏とソナーが出来る様になってるはず、この段階をクリアをすれば実戦で使い物になる様になる訳だ」

「はいー！」

「自分の皮膚に魔力を染めていくイメージだ、満遍なく髪の毛、顔、体、両手、胴体、足、つま先、順番に覆っていけ、最初は自分でやってみろ、それを見て手助けの仕方を考える」

「はいー」

やはり3段階目は難しいらしく全く出来ないでいるので、俺が無理やりリリの魔力を使って覆ってあげると

「この状態を維持しろ、今はほぼ全て俺がやってるけど自分の意識でやれるように」

「はいー」

暫くするとリリも要領が分かったのが、自力で維持できるようになるが、数秒でほころびが出て来てしまう

「今日はここまで、また明日の朝だ！」

「はいー」

部屋に戻ると、俺は各部屋へ行って魔力を全部吸い取ってマインドアウトさせ強制的に寝かせる事に、特にベル君が徹夜で練習しそうだったからだ

翌朝、強制的に寝かせた効果がちゃんと出ており、寝不足で朝の練習に遅れることなく集まった3人は

「よし！ダンジョンへ行くまでの間、続きをするぞ」

「はいー」

各自に練習を始める、俺は水面歩行の練習と、石を使って拾う訓練を交互に行い、リリは昨日の続きを、ベル君は自分の魔力を集めて移動させる練習をそれぞれに行った

「朝練終わり！飯食ってステ更新したら準備して今日も張り切って行こうー」

「はいー」

今日と言う日が運命の日だという事をこの時の俺達は知る由もなかった

L V 2 後編

「不味ったな、かなりヤバいかも」

ダンジョンに入り暫くした所で、俺の探知に引っかけた気配に危機感を覚える

(さて、どうしたものか・・・近いのはたぶんミノタウルス、離れたところに行くつか集まってるのと、問題は、このめちやくちや強そうな殺気というか闘気みたいなのだ、選択を間違えば誰かが死ぬ、ゲートで逃げるのも不味いだろうな、どう考えてもあの粘着女神からのプレゼントだ、逃げたら次何してくるか分かったもんじゃない)

「どうしたんですか？マファイ様」

(仕方ないな、各個撃破：いや危険すぎるか？俺が粘着女神ならどう考える？)

・・・やっぱ各個撃破は危険だな、まったく何てもんをプレゼントしなきゃがる)

「顔色悪いけど大丈夫マファイ君？」

「悪い最悪の状況だ、化け物2匹とモンスターPTが待ち構えている、しかも逃げられる感じじゃない、各自に分散してこれを対処する」

「何ですか?!各個撃破していくのがセオリーじゃないんですか？」

「頼む俺の指示に従ってくれ、後でいくらでも聞いてやるから、ベル君はこの先からゆっくりと近寄って来てるモンスターを1人で倒せ、りはこの先の通路を右に進んだ先に広場がある、1匹たりともベル君の戦ってる場所へモンスターを行かせるな絶対だ！何が何でも食い止めろ、俺は最悪の奴を食い止める」

「最悪って何ですか？」

「この状況を作った奴だよ、この戦いはベル君がミノタウルスに勝ったら勝利だ！分かったな？ベル君がミノタウルスを倒したら全員ベル君の元へ集合だいいいな？」

「はいマファイ様」

「待って、ミノタウルスって本当なの？」

「本当だ、因縁の対決に勝て、それも出来るだけ早くだ、俺達が食い止

めていられる時間も限られている」

「むっ無理だよマフィ君！」

「もう来たようだけベル君、俺達の命ベル君に預ける頼んだぞ！」

話している間に再度全員にフルバツフを行い、各自移動を開始する「りり全部倒そうと思うな、行こうとしてる奴優先だ、分かったな？わかったら行け！」

「はいー！」

ミノタウルスを横目に、りりは指示された場所へ向かう、俺も自分の向かうべき場所へ向かう

「このクソみたいな状況アンタなんだろう？」

「ほお？よく俺が居る事に気が付いたな」

人の話を聞かない系か？このためきみみ？のおっさんは可愛くなさすぎるぞー！

「俺アンタに会った事無いんですけど、何か悪い事でもしましたかね？」

「・・・俺の都合だ」

まったく粘着女神の差し金なのは分かってんだ！って言うのと激情しかねないから黙っておくけど

コイツはおそらくは粘着ファミリアの精鋭、それもトップクラスの強さだという事がビンビン伝わって来る

「自分へステイアファミリア所属のマフィって言います、失礼ですがどちら様でしょうか？」

「・・・オツタルだ」

こうして話しているだけで、息が詰まる、喉がカラカラだ：ちっ！

『ベル！魔法は切り札に使え！装甲が厚過ぎて無駄だ！』

突然の大声にダンジョン全体が震えるほどの反響を響かせる

「ほおく俺を前にして、奴の状況を把握するとは貴様何者だ？」

「だからへステイアファミリアのマフィっす、家名はありません」

ホント人の話を聞かない人だな、唯我独尊系か？

色々どうにか時間を稼ぐ方法を模索していると、オツタルは武器を構える

「遊んでやる来い！」

「そういう親切要らないんですがねえ」

俺も武器を構え、相手を見据える・・・このまま時間稼ぎをしても相手がいつ来てもおかしくない感じだ、次に話しかけたら来る！ならばこっちから行くのみ！

「まったく会話は知能ある生物の基本なのに！」

俺は足に魔力を噴射させて一気に相手に突き刺すが、相手の剣で軽くないなされる、そんなのは何度もヤラレてんだよ！

今度は体勢を崩したふりをして肘から魔力を噴射させて突きをするが、やはり軽くないなされてしまう

「少しくらい驚いてくれたっていいのに！」

槍を使ってバックステップした後、槍をしならせ再び突進する

「いや、これでも驚いてるぞ、今のはなんだ？」

「言う訳ないじゃないっすか！」

今度は弾幕を緩急つけながら攻撃していく、当然の様にいなされていく俺の攻撃

『りり！右!!』

「器用な事をする、その大声はなんだ？」

「気にしないでいいっすよ、弱者の遠吠えっすから」

「本当に楽しませてくれるな貴様！」

（まったくもう少し弾幕で遊んでくれよ!!）

オツタルは、俺の弾幕の1つを大きく振り払い、出来てしまった俺の際を大剣でいつきに切りつけに来る

体勢を壁に付けた魔力で引張り移動してどうにか、かわす事が出来たがギリギリだ

まだ戦いが始まったばかりだというのに、もう息が切れ始めてるのを考えると、訓練と命を賭けた戦いの差ってのはこうも違うのかと思いつながら距離をとって息を整えようとするが、オツタルはそれを許さない

(格上なんだから、少しは手加減しろつての！)

相手のLvとか分からないが、どうみても今までの見て来た人達とは全く違う性質の敵に、本気で生きて帰れない気がして来たが、オツタルの攻撃をどうにか受け流して再び距離を取る

「逃げてばかりなのか？」

「はあはあはあはあ・・・『べる！避け方が雑になって来てる、集中しやがれ！』」

「俺を前にしてまだ余裕があると見える」

「・・・そう見えるなら貴方の目は節穴っすよ」

「息が整ったな」

そう言うとおツタルは、とんでもないスピードで加速し一気に距離を詰めて切りつけて来る、魔力を受け流す方へ集めてどうにか受け流す事に成功するが、それでも腕が痺れて来る

躲したその先からおツタルの連打が来る、1発1発が重い、受ける度に体全体が悲鳴を上げる

どうにか距離を取ろうにも、距離を取るたびに即座に距離を詰められてしまう

このままでは俺の死亡時刻は時間の問題だ、恐れるな！攻撃は最大の防御！そう自分に何度も言い聞かせて、相手の攻撃を受け流しながらタイミングを計る、どうやら緩急をつけた攻撃では無い事を再認識しタイミングを合わせて一気に武器を受けた瞬間に受けた威力を乗せてカウンターを繰り出す

オツタルは攻撃する時に大きく動かず最小の動きで攻撃していた為、見切られてしまい逆にカウンターを貰う事に

ぎりぎり刃を防具で防いだ為、傷は浅くて済んだが、防具はずり落ちしてしまう

ぶらぶらと取れかけの防具をなびかせながら距離をとって邪魔な壊れた防具を外し、再び槍を構えると、応援と思われる数名が近寄って来てるのを察知

「オツタルさん聞きたいのですが、この企画にゲストの予定はありますか？」

「……ないな」

「そうですか、少し待ってもらえませんか？お互いの為に」

「……邪魔が来たのか？」

「はい、この気配は知ってる気配ですのでゲスト出演は遠慮してもらいます、オツタルさんも、その方がいいのでしょ？」

戦いながら感じたのだが、こいつは最初から邪魔が来た時に備えていただけ、とんだ道化師を演じたみたいだ、自分の選択ミスが他の2人に多大な影響を出してしまった事に後悔するも、悔やむことはない
「そうだな」

アイズが、ベル君を庇い剣を構えたのが分かる、ベル君が彼女を払いのけたのを確認して

『ロキファミアリアの皆さん、手出ししないでください！主に俺の命がかかってますので！』

俺の大声に反応してきよろきよろしている、1人は俺の位置に向かって来てる、これで下手な手出しはしないだろう

「どうやら思いとどまったようです、このまま俺達も、お開きにしてくれると大変助かるのですが」

「ふん、ロキの奴らか何故黙って助けを受けない？」

「この勝負はベル君が、ミノタウロスを撃破したら勝ちです、その間に戦いの邪魔が入ったら俺達の負け、俺がここに来たのは本来ベル君の邪魔をさせない為です、貴方の目的が、俺と同じと分かった時に話し合いで解決したかったんですけどね」

「そういう事なら、このゲーム俺がミノタウルの所へ行けば勝って話だな」ニヤリ

「そういうの本当に辞めて貰えませんか？」

「そう言うな、面白くなってきたところなんだ、付き合えよ！」

オツタルの攻撃が再開される、つたくこの人は!!

遊びで人を本気で殺しに来るとかホント迷惑なんですけど!!

オツタルの攻撃は激しさを増し、傷が次々に増えていく、どうにか受け流してカウンターをするが全然かすりもしない

血が目に入り視力も奪われ目を閉じて戦うしかなくなり、腕も上が

らなくなってくるが攻撃が止むことは無い

攻撃が静かに感じる、死が近いんだろう……

何かが俺の中で弾けた……

(あくわりーな相棒、耐えられるギリギリで頼む、そうだな相棒分かってるよ)

【魔装】

オツタルの一瞬の怯みに一気に近寄り突き刺す、今度は刺さったらしいな

再びオツタルの攻撃が来るのが分かる、カウンターで一閃

オツタルの呼吸……ベル君の覇気……りりもシロも頑張ってるのが分かる、どうやら俺達の所にもギャラリーが1人到着した様だ、これは性悪だな

再びオツタルの攻撃が来るが、避けなくても、なぜか分かる性悪が間に入るって

その隙は致命的だぞオツタル、俺はすかさずオツタルの武器の付け根めがけて突きを食らわせてやる、思った通り武器は粉々だ、ざまーみやがれ!

「俺の勝ちだなオツタル、このゲーム獲物が無ければ、向かった所で無駄だ違うか?」

「そうだな、また今度遊んでやる」

「そういうの本当に迷惑なんで遠慮します」

オツタルの闘気が消えるのを感じ、俺も武器を下げる

「そこに居るのは性悪団長ですね?」

「マフィ君、目が?今すぐに回復してやる」

「少し待ってください、勝負はまだついてません仲間がまだ戦ってます」

「分かった」

俺は武器を地面にぶつ刺して体を支えると、戦いの行方を見守ると

共に動けるだけの体力を戻す為留まった

『りりあと少しだ！シロ必ず主人を守れ！ベル戦いは終盤戦だ！最後まで気を抜くな！』

ベルがミノタウルスの腕に大ダメージを与える、ミノの手から武器がこぼれ落ちた

『ベルその武器を使い！』

俺に言われ視線を合わせることなく攻撃をかわした隙に相手の獲物を奪い、攻撃を仕掛ける、ここまでこれば戦いの終わり時は近い

『りり撤退準備をしろ！勝利は近い！』

りりの方は、徐々に敵の数が減っている、オツタルと言う枷がはずれた事による影響はない、ならば行ける！

ベルが勝負を決めに行く、奴は冷静だならアドバイスは要らん、後はベル君の思うように戦わせるだけだ

相手のみぞおちにヘステイアナイフが突き刺さる、ミノの急所には届いてない、声をだすのを辞めたのも関わらず、それを堪えきれず

『ベル！そこだ！決めやがれ！ひねり出せ！全部打ち尽くせええええ!!!』

ミノがファイアボルトの連射により内部爆発を起こして、ミノが消えた事を確認

『りり撤退だ、ベルの元へ戻れ、シロは主人をうまく逃がす助けを！』
警戒を解こうと思った矢先、ロキファミアリアの1人がベル君の背中を覗こうとしてるので

『ロキファミアリアの皆さん覗きは感心しません、性悪団長に言いつけますよ』

りりが安全県内に入ったのを確認し

『完全勝利だ！てめーらー！よくやったー！愛してるぜてめーらー!!ちくつしよーどんな言葉を使えばいい分からんねーよ!!!』

俺の目は湧き上がる涙が止まることなく、いいようのない喜びが湧き上がってくる

俺は、ほんの少し回復した体力を使つて、ゆっくりと槍を使つてベルの元へ戻る

「はははは・・・ぶっつはっはははは」

「もう何がおかしいんですかマフィ様、あははっはははっ」

「ったく帰るまでが遠足だぞって無理かな」

「ベル様おつかれさまです」

俺はマインドアウトで気絶してるベルに残ってる魔力の半分を渡し、ベルを担ごうとすると

「君さくズタボロな上に目だっで見えてないんでしょ？回復してあげるから座りなよ」

「零細なんで回復薬とか返せないし気持ちだけ頂きます」

「マフィ君、観戦料だ素直に受け取ってくれ」

「・・・はい、分かりました、ありがとうございます」

俺は腰を下ろして、素直に好意を受け取って回復してもらおう、実は血が抜けすぎて意識が結構ヤバイ

「りり大丈夫か？シロ最高の働きだったぞ、こっちこい」

俺はフェンリルのシロをなでなでしてあげる、もふもふ癒される

「マフィ様が一番危険なんじゃないんですか？その傷めちやくちや深いですよ」

「体は止血してもらったから大丈夫、目の方は眼球には届いてないよマブタ付近を切られて途中で血が入って見えなかっただけさ」

「それにしてもマフィ様の大声すごかったです、あれ無かつたらりり死んじゃってましたよ、マフィ様ありがとうございます」

「改めてそう言われると照れるもんだな、俺の方こそ詳しい説明も無しに信じてくれてありがとうございます」

「ロキファミアリアの皆さん、つまらない雑魚の戦う演目だったのに回復とかありがとうございます」

「全然そんな事無かったよ、彼すごかったんだからアルゴノートみた이었다った、あんなの始めて見たよ」

「マフィ君、貴方は何と戦ってたのだ？」

「この演目の主催者ですよ、オツタルって名乗ってたかな、いやくめちやくちや強いし、本気で死を感じる時って静かなんですね」

「「「なっ！」」」

「ほえ？知り合いつすか？」

「君は知らないの？」

「はっははは、そうかマファイ君は知らずに戦ってたのか、ボクは知ってるのかと思ってたよ、奴はオラリオ最強のLv7だよ」

「まじっすか、俺良く生きて帰ってこれましたね」

「団長マファイ君の言ってる事本当なのですか？」

「ああ本当だとも、あのオツタルを、たった1人で退けたのを見届けたからね」

「うそだろおい！テメーが手を貸したんだろ？」

「ボクがそんな嘘ついてどうするんだい、彼らの戦いの勝利条件は、彼がミノタウロスを倒すまで邪魔を排除する事、そして彼はそれを完璧な采配で勝利したのさ、あんな采配、僕は見た事も聞いた事も無かつたよ、オツタルと戦いながら他2人の状況を完全に把握して指示を出す、アレを見ただけで回復程度では申し訳ないほどさ、君達をダンジョンの外まで送る手伝いくらいはさせて貰わないとね」

この日、ベル君もLv2にとなった

大魔導士

「悪いっすね、おんぶまでさせちゃって」

「気にするな、今は体を労わる事を考えればいい」

俺ら3人は、絶賛背負われてダンジョン外へ搬送されている、りりも既に意識を飛ばしておりティオナに背負われている、ちなみにベル君にはアイズさん、俺はリヴェリアさんにだ、くんくんいい匂い

「何故PTを分散させ各個撃破の選択をしたのだ？」

「それを許してくれそうなら、感知した時点で逃げてたし、各個撃破なんか選択しませんでした」

「やはりそうか」

「これって、どの程度ギルドに報告します？」

「私達が見た事は話す予定だが？」

「ミノタウルスを撃破したのは、ベル君で構いませんが、あのオツタルって奴は見逃してあげてください、色々思う所があるので」

「なぜだ？どうして君が庇う？」

「殺気も感じていたしズタボロにもされました、死線を見る事にもなりました、けどアレは俺の手でいつか必ず殺します、罪で裁かせてなんかやらない、おそらく追及しても粘着女神がどうかしちゃうでしょうし、そんなの面白くないっすから」

「粘着女神とは女神フレイヤの事か？何があった」

「以前から時折視線を感じてて、どうにか突き止めようとソナーの技術を開発して、どうにかたどり着きました、時折こういったプレゼントを渡してくるんです、さっきの戦い、ほぼ全てベル君の戦いを全部見てましたし、俺の方には視線が一瞬だけ来ましたが、後は全部ベル君の方だったので、ベル君が目的だと思います。そう言う色々な意味を含めて粘着女神ってあだ名付けてやりましたよ」

「やっかいなのに目を付けられたのだな、何かあれば相談しに来い」

「マジで頼りにしてるっすよ、俺が切り札を教えて近付いたのは、コレが1番の目的だったんですから」

「ふふ、そういう事か、抜け目のない奴だな君は」

「そうじやなきや零細ファミリアでやってけませんよ」

話は少し時が過ぎ、ロキファミリアが全員遠征にて50階層で全員が落ち合った後

(僕にあれだけの事が出来るのか、あれほどの広範囲の戦場をすべて把握した上で、自分は格上の相手を引き付ける、その上での確に指示まで出す、それほどの代物だということのか裏スキル、しかもそれは発展途中中のスキルという可能性を秘めている)

「おいフィン」

(僕が最初に覚えるべきだった、リヴェリアに譲ったのが大きな間違いだったのだ、あの後にリヴェリア達に指導を受けた全員が初段階にすら届かないでいる、皆が全員この遠征中に時間を見つけては訓練してるにも拘わらずだ)

「聞いているのかフィン」

(この先の59階層では、何かが待ってる、最初に覚えておかなかった代償を必ず支払わされるだろう、たかがLv1の駆け出しが思い付きで始めた技術だと、僕の心の奥底で慢心があったからだ)

「どうしたんじやフィン」

(いや、そもそも、あれだけの事を同時にできないで、彼の技術を学んだところで、使いこなせはしないだろう、今は自分の出来る事を増やす、そっからだ)

「彼に追いつくためにもだー!」

「はあくようやく現実世界に戻って来たかと思えば、夢でも見ておったのか?」

「あ・いや、声に出てたか?」

「彼に追いつくためにもだーって所からじゃよ、やはり気にしておったのじやなマフィの小僧の事を」

「小僧だど?僕の目指す先にあるのは彼のあの姿だ、やっと僕にも明確な目指す先が見えたよガレス」

「そうか、この先の貴様の働きに期待しよう、イキり過ぎて自滅するでないぞ」

「ぬかせ、ガレスこそしつかり頼むよ」

時は、さかのぼり俺達がミノタウロスの討伐に成功した翌日の昼過ぎ

「気が付いたみたいだねマフィ君、傷はもう大丈夫なのかい？」

目を覚ますとヘスティア様が、俺をのぞき込んで心配そうに話しかけて来る

「ベルとりりは？」

「二人とも憔悴しきってるよ、まだ目を覚まさない」

「なら大丈夫です、心配かけましたね」

「まったくだよ、ミノタウロスを倒したんだって、全く無茶をするんだから」

「ベル君1人です、俺達は外部の邪魔を処理してましたから」

「どういうことなんだい？」

「まあ、ロキの人には口止めお願いしてたし、約束を守ってくれたんでしよう、聞きます？」

「他には言わないよ、話してごらん」

「今回の首謀者はオツタルっていう冒険者で戦い終わって聞いたんですけどLv7とか最強とか言われてる人だったみたいですね、それが首謀者です」

「なんだって！それをなぜ口止めしてるんだい!!」

「まあまあドウドウ！」

「ボクを牛扱いするんじゃない！それでどういう事なんだい」

おおよそかいつまみながらを説明していく、聞き上手なのか俺の話をよく聞き理解してくれた

「なるほどね、確かに粘着女神の奴ならそう考えるだろうね、マフィ君の判断に賛成はするがボクとしては、あの魔法で逃げて欲しかったかなその為の切り札なんだろ？」

「切り札は先に見せるな 見せるなら更に奥の手を持ってって名言があまりましてね俺もこの名言の支持者なんですよ」

「いい言葉だね、僕も参考にさせて貰うよ」

「全員のステイタス更新をして全部の紙を持ってきてもらえますか？」

「いいけど、勝手に見ちゃ不味いだろ」

「今後の対策にも必要なんで、これで終わるとは思えないですよ」

へステイアは寝ている2人からと俺のステイタスを更新して戻って来る

「やっぱりLv2になりましたか」

「因縁の相手を知ってたんだろうぜ、ほんと嫌になるよ」

「ベル君はこのままLv2になるでしょう、りりは大幅に上がったが、少し足らなかつたみたいですね」

「そうみたいだね、君はどうするんだい？」

「ベル君が発展アビリティの幸運を選ぶとして、俺は・・・」

俺の発展アビリティにもベル同様に幸運と他にもいくつかへステイア様も知らないアビリティが付けられるみたいだが・・・

「俺も幸運でいきます、Lv2への更新お願いします、それと俺だけは公表しないでいきます、ベルを隠れ蓑にするみたいでアレですが、レコードホルダーとして名乗りを上げるのに、他に隠し事をしてるとは考えないでしょう」

「・・・そうだね、あまり褒められたやり方じゃないけど、ベル君に知れたら黙ってられ無いと思うよ」

「分かっていますって、うまく誤魔化しますよ」

俺のステイタスを更新してLv2へとし、発展アビリティに幸運を付けた

「まあ〜こんなもんか、予想の範囲内でよかったよ」

「そうかい全く君は可愛げが無いんだから」

「そういうのはベルに期待してください、きつと（おおおお力がみなぎってくるぜ!!）とかって思ってるだろうし、是非今後の為にも立ち会いますね」

「趣味悪いよ君」

「いまさらでしょ」

「明日へファイストス様にお見舞いに来るように言っておいてください、槍を渡すので」

「分かったよ」

翌朝2人は目を覚まして、神様がベル君にいろいろやってたが華麗にするーし、ベルに話しかける

「Lv2おめでどうベル、レコードホルダーだそうだ」

俺はベルのステイタスの紙を手渡してそう言っていると、嬉しそうに神様に再確認し大はしゃぎを始める

「それでどうするんだベル？発展アビリティは、俺と神様は幸運を推薦する、後は自分で決めろ」

「なにかマファイ君少し変わった？」

「吹っ切れた部分が合ってたな、少し変わったかもしれんが気にするな」

「マファイ君もLv2に？」

「残念ながら無理だった、近い所までは来てるはずだからもう直ぐだろうって神様が」

「そっか、Lv2かくやっぱこう力が溢れて来る感じなのかな、ぶわーって力とかがこう燃え盛る感じで湧き上がってくるというか」

俺とヘステイアは下を向いて、こらえ切れない

「ゴメン無理!!神様どうか助けてくださいプププ」

「私だって無理だぞマファイ君！うっこえがぼれぞお・・・ぶつぶぶ」

追記堪えきれず2人して大爆笑する事になった

「いあくごめんベル、予想通りの反応するもんだから、もう堪え切れなくってや」

「ひどいですマファイ君も神様も」

「それでベルに新たなスキル英雄願望アルゴノート、俺の方に全ての魔法が一覧から消えて大魔導士オーバードロードっすか」

「どちらも聞いた事のないスキルだ、大魔導士の方は予想は出来るけど、裏スキルと呼んでいるアレがスキルとして発現したんじゃないか

と僕は思う、やっぱり裏スキルと言う概念には少し疑問があったんだ、裏スキルは大魔導士を得る為の通過点に過ぎないって事になるね、もう少し検証は必要だけどね」

「そうだろうな、今教えてる誰かが発現すれば確定だから様子見って事になるけど、確定したらやっぱり公表するしかないよな?」

「そりやそうさ、ロキの所の子供にも教えてるんだろ?」

「深い所までは教える気が無いけど、自力で極めないともし言い切れないかな」

「ロキの奴の子供に先を越されるのは癪だけど、今公表するのは嫌なんだろ?」

「当たり前だ、自分から切り札晒すとかありえないな」

その後の話し合いで結局、ロキの所よりも早くウチのメンバーの誰かが発現する様に指導して、予想通り大魔導士が発現し確定したら時期を見て公表するという事で一致した

その後ヘアリストス様がお見舞いに来てくれたので、武器を渡す事に

「確かに形態が変わってるわね」

「次段階の形状は魔装ロンギヌス、スロット3に増えるだけです」

「それじゃ暫く借りるわね、スロットも次段階記念に無料で私の好みに入れておくわ」

「お任せします、零細なんでホント助かります」

「ちゃんとそんな顔しなくても用意してあるわよ、怪我が治ったら顔を出しなさい渡してあげるわ」

「すいません、何から何まで」

「段階を超えた様だしね」

「ははは・分かります?けど少しの間、黙っておくので見なかった事しておいてください」

「それはいいけど、どうしてなの?」

「レコードホルダーになりたくないからっす、次回にはうちのベルがレコードホルダーとして昇格しますんで、その次かまた次くらいに提

出しようと思ってます」

「そう、いいわ見なかった事にしておくわ」

「ありがとうございます」

翌日、朝の訓練が終わるとベル君はエイナさんのアドバイスを聞きたいという事で、飯も食べないで突っ走って行った、戻ってくるとLvアップの更新をするというので、りりと駆けつける事に

「ベル様おめでとうございますー!」

「おめでとうベル、お前がレコードホルダーだ、うんよくやった!オラリオの歴史を塗り替えたんだ胸を張るといい、それと今日の祝勝会までにベルの二つ名も決まるらしいから合わせて祝杯を挙げるぞ、ヘステイア様がきつと素敵な二つ名を獲得してくるはずだ!」

「ありがとう、りり、マファイ君」

「今日は祝勝会だ今日の主役を称えてあげよう!」

「おおー!」ありがとうみんな

「ヘステイア様ぜひとも色兔の二つ名をgetしてきてあげてください、主に世界平和のために!」

「なにいつてるんだよ!絶対に嫌ですからね神様!」

「任せておくんだベル君、無難なのを勝ち取って来るよ!」

さっそくダンジョンへ行きたいのだが、俺の獲物が無い為、ヘファイストスの所へ寄っていくと言うと

「ボクもLv2になったから防具を一新しようと思ってるから、見てくださいいいかな?」

「りりも矢の補充とかしたいので、今日は買い出しにしませんか?」

「そうだな、無理にダンジョンいなくていいか、じゃく祝勝会に遅れないように自由行動って事で」

「はーい!」

さっそく俺はヘファイストスに会いに行くと、案内されて部屋の中へ

「ほら持って行きなさい、いい知らせと悪い知らせがあるわ、どちらが知りたい？」

俺は新たな槍を手渡されると、ヘファイストスの返答に悩む
「悪い方からで」

「次段階の魔装ロンギヌスにするには君が強くなるだけでは無理らしく、この槍でその魔物を討伐する事の2点が条件みたいね」

「分かりました、それでそのモンスターとは？」

「ブラッドドラゴン、サンダードラゴン、ヴァルガング・ドラゴンの計3体ね」

「それでどの階層あたり？」

「それぞれが30〜50階層付近に現れるらしいわね、Lv2がどうにか出来る階層じゃないわ今は力を付ける事ね」

「いい知らせはなんですか？」

「スキルスロットの理論を確立したわ、試作品が今渡したその槍よ、スキルは土精剛腕ね、本来はドワーフ族の専用のスキルなの、体が頑丈になり、腕力が上がるスキルよ、それと土属性の魔法を習得しやすくなるという説もあるわね」

「それは有難いですね、検証結果をレポートに纏めて提出します」

「それとその武器には不壊属性も付いているから簡単には壊れないけどメンテが要らない訳じゃないから注意してね」

「ありがとうございます」

店を出ると、ベルが居るので話しかけると、欲しかった作者の防具が無かったので、明日の昼にアポを取ったらしい、その事で俺に相談したいというので

「そうだな、明日は俺とりりで潜るよ、その鍛冶師にLv2である事を言うと言いな、運が良ければ専属契約が結べる事もあるらしいから」
「専属契約か、確かにあの名前の作者の作品って前使ってたすごく良かったから」

「とはいえ専属契約ってのは色々面倒也多いらしいから、交渉にベルだけってのも危ないな、やっぱ俺が付いて行く事にする、どんな危険

な契約結んでくるか分かったもんじゃない」

「あはは・・・信用無いんだねボク」

「その為のファミアさお互いが助け合う為にあるんだし」

「うん、分かったよ」

「時間余りそうだな、明日暴れられない分、暴れて来るか？」

「そうだね、久々の2人での探索だね」

時間までダンジョンで暴れた後、そのままベル君の祝勝会へ

「それではヘスティア様からベル君の二つ名を発表してもらいます
！」

「こほん、ベル君の二つ名は未完の少年リトルルーキーだ！どうだ無
難だろ？」

「異議ありありだ！そんな可愛らしい二つ名じゃ余計色鬼の毒牙にか
かる女が増えるぞ！」

「ボクももうすこし格好のいいのがよかったな」

「なんか普通な感じですね」

「なんだいなんだい！この僕が必死になって頑張って来たというの
に」

「どうせ末席で、目立たない様に白波立てない様にしたんだろ、わざわ
ざ会議直前になってLvアップ報告したのだから俺の策だかな、急
すぎてギルドが情報提出できないだろうって」

「分かっているさ！君に言われなくなっちゃって、そうだよ君の言う通りさ文
句があるのかい？」

「そんな事よりだ、レコードホルダーの方はうまく誤魔化せたのか？」

「大変だったさ、君が見逃した借りを返すつもりか知らないけど、粘着
ストーリーカーが庇ってくれなかったら危なかったよ」

「そっか、ならいい方向に向かったみたいだな」

「何の話です？」

「あのおくそんなにレコードホルダーって不味かったんですか神様」

「ベル君は気にしなくていいよ、何も知らないベル君を犠牲にして、の
うのうとしてる奴だって居るんだからね」

「人聞きが悪いな、俺に言ってるみたいだに聞こえるぞ？」

「そりやそうさ君に言ってるんだからね」

「まあまあ二人とも落ち着いてください」

「そうだな、すいませーん！話が終わったので料理お願いします」

イケメン美女エルフのリューさんと、銀髪の腹黒系美女が料理を持って来てくれると

「Lv2おめでとうございますリトルルーキ私は好きですよ」

「ランクアップおめでとうございます、クラネルさん」

つと店の店員からも祝福の言葉と共に、俺は女主人に目で合図すると了解を得られたので

「お二人さんも一緒にいかがですか？、じゃんじゃん今日はいきますんでー！」

「はい！」

どうやら俺達の話が他の耳に入ってしまった様で、噂話が聞こえる有名税ってヤツだね、ガンガレ！べる超ガンガレ！

酒も進み、にぎやかな話が続くがどこにでも絡んでくるアフォは居るもので、魔力操作で足を引っかけると綺麗にすつころぶ

「大丈夫ですか？酒が回り過ぎてるんじゃないですか」

リニューさん視線が痛いです、辞めて頂けないですか？

「くつそーなんだ一体、おう！それよりよP T探してるんだって？」「いえ全く探してないですよ、酔いが回り過ぎて空耳が聞こえてるんじゃないですか？明日に差し支えますし休んでは如何ですか？」

回りからもヤジが飛ぶ、笑い声とヤジでいたたまれなくなった男は「ちっ」

彼はそう言うと言席に戻って行った

「凄い上手にかわすんですね、見直しちゃいました」

「その腹黒い笑顔って天然なの？そうだとすると神々からの支持は低そうっすね」

「うっなんでわかるんですか？」

「気を付けたほうがいいですよ、頭の悪い男なら引っかかりですけど、少し頭のいい奴ならスグに気が付いちやいますしね」

「それと何か言いたそうですねリニューさん」

「貴方ほどの手練れがLv1には見えませんでしたので、すいません」
「奴に何したか見えてましたもんね、リユースさんて強いんですね」
「いえ、見えはしなかったです、何かをしたのだから」

その後も飲んで騒いで楽しい祝勝会の翌日

「ヴェルフ・クロツゾさんですか？」

「おう、昨日は悪かったな俺の防具を探してるんだって？」

「はい、ありますでしょうか？」

「あるぞ！リトルルキー、俺の事はもう知ってると思うがヴェルフ・クロツゾ、ヘファイストスファミアのまだ下っ端だけどころしくな」

「あ・僕はヘステイアファミアのベル・クラネルです」

「俺は付き添いで来た同じヘステイアファミアのマフィだ家名は無い」

「それでベルは俺の作品を2度も買いに来てくれた、俺の顧客違うか？」

「はい、そうですね」

「俺達下っ端の鍛冶屋は客を取り合ってるんだ、有名になれば向こうから来るが、無名だとそうはいかない、俺達の作品は駆け出しが財布と相談して買いにくるくらいだ」

「はあ」

「ベルには難しいか？有象無象と本物の差ってヤツだ、俺達も今はちよつとだけ名が売れたが、少し前まで有象無象だ、ここまで分かるか？」

「なるほど、名が売れなきやいい物を作っても売れないから名を売るために顧客獲得競争してるんですね」

「そうだ、俺にしてみりやこれはチャンスだ、そこで頼みがある俺と直接契約を結ばないか？」

その言葉を待ってたとばかりに、おれとベルは顔を見合わせ、俺は頷くと

「はい、お願いします！」

「よかったなベル」

「それでさあくもう1つ頼みがあるんだけどいいか？」

「なんですか？」

「俺をお前たちのPTに入れてくれないか？」

ベルは俺の様子を伺うので

「俺がPTリーダーやってるんだ、いいぜ好きな時に来いよ、その代わりしつかり働いてもらうぜ？」

「あー任せろ！」

その後、直接契約の手続きまで見届けてから、明日から一緒にPTに参加するという事で、りりに話を通しておくことに

翌日から4人PTになったという事とベルがLv2になった事もあつて1階層へ進出した俺達

「やつてきたぜ1階層——っ！」

「子供か！」

「ここが1階層なんだくうわあ」

「ベルもかベルもなのか?！」

「マフィ様大丈夫なんですか？」

「まだ大丈夫だ、このフロアの大半は把握できてるしな」

「それってホント便利ですね、りりはようやく纏が出来る様になったばかりなのに」

「常に維持しておけよ、これも重要な訓練であり命を守る技術だ」

「はい教官！」

「おい2人共、そろそろ作戦を伝えるぞ」

「ベルフは最初俺とベルの3人で組んで各自が邪魔にならない程度の距離感で各個撃破していくスタイルで行く、大型なんかは俺が指示出すから従ってくれ、難しい事は言わない大型は俺が引き付けて他が敵の死角からタコ殴りするだけの簡単なお仕事だ」

「ここまでで質問無ければ行くがいいか？」

「おうー」「うん！」

「ベルが先頭で次がベルフ俺が次で最後がりりの隊列だ、ベルあの方向30の2からいく」

「うん！」

「ちよつとまってくれ30の2つてなんだ？」

「30メートル先に2匹いるから向かって倒せだ、察しろよ」

「まてまてまてなんで分かるんだよ」

「冒険者の基本の索敵だ」

「ベルフさん気にしたら負けです、マフィ様は広範囲で索敵が出来る人だと思えばいいです」

「わかったよ」

そのままベルが先頭で敵を倒し始める、ベルフも攻撃を始めるのを確認して各自にバツフをかけてから

「右15の4だ、俺が2匹受け持つ」

次々と倒していく、ベルフの様子を見ながら次々と倒していく

「ベルフサポートヘりり前へ、ベル前30の6各自2づつだ、終わったら他のサポート」

その後も戦い続けていると、大型が出たらしく何人かが逃げているのを感じ

「救援要請だ、大型が居る俺の攻撃5秒後に攻撃開始、ついてこい！」

そのまま大型の居る場所へ行き、他の冒険者を横目に、俺が突進して一気に目玉をぶつつぶし距離を取ると、腕に変な輝きが

りりとベルにも出ている事からスキル英雄願望だと判断して

「全員距離を取れ！ベル魔法を食らわせてやれ！」

ベル君のファイアボルトで一気に敵は崩れ落ち煙となってきえる

全員を集合させて、休息を取らせる

「全員良く俺の指示通り出来たヴェルフも合わせるの大変だろうけど、ウチはこういう感じだ、嫌なら戻るがどうする？」

「いや、マフィお前凄いなこんな凄いPT見た事無いぞ」

「そりや誉め言葉として受け取っておく、続きやりますかね」

この後は危ない事は何もなくて次々と殲滅していき、今日の探索は終わりとなった

翌日は休みとしていたので、ベルはヴェルフに装備を作って貰いに行き、りりは何か用事があるらしいので

「さてと行きますかね！」

最近コツコツと扉を設置して、各層の何か所かに自由に行けるようになってるので、こつそり時間を見つけては潜っている

ちなみに今日は12階層からだ、中層と呼ばれている13階層へ今日は行くつもりだ

13階層は大量にモンスが出たりモンスの能力も格段に上がるらしいが

予定通り13階層へ到着しアルミラージらしき大群とヘルハウンドらしき反応が多数探知できる

人の反応は無い、ならばする事は1つだけだ！

買っておいた盾を装備して、突っ走る!!

「おーいちゃんといついでこいよ！俺と一緒にマラソンだ♪」

(間もなく、焰は放たれる。忍び寄る戦火、免れえぬ破滅。開戦の角笛は高らかに鳴り響き、暴虐なる争乱が全てを包み込む。至れ、紅蓮の炎、無慈悲な猛火。汝は業火の化身なり。ことごとくを一掃し、大いなる戦乱に幕引きを。焼きつくせ、スルトの剣——我が名はアールヴ)

大量のモンスを引き連れて怪物行進をし、広場に到着する前に詠唱を終わらせて

「レア・ラーヴァティン」

一斉に集まっていたモンスが焼き払われる、即座に燃え尽き魔石だけを残して消し飛ぶ、やっぱこうでなくっちゃね

調べたら詠唱は公開されており、様々な魔法を取得に成功した俺は、発現した大魔導士に相応しい威力の攻撃魔法も使える様になった事から超範囲狩りをしに来たのだ、うんチートだね絶対に人に見られちゃいけない奴だわwww

「さて、この階層も後1回集めたら終わりかな」

人が居ない事を言いことにやりたい放題、人が来てしまったら場合によるが少しでも巻き込みそうなら扉からさようなら

絶対に誰にも知られてはいけない狩り方だが、ソロで探索を続けて

いくなら、この程度は致し方ない

扉をいくつか作ったら、残り半分を処理し、次の階層へ向かう

次の階層も人はおらず3回に分けて処理して次へ次へと向かう

魔石拾うのが面倒になって扉を床に設置して自動回収したりする方法も考え出し、効率はさらに酷い事になって行つた

1回だけ人の気配がしたので、モンズ共を俺の空間へ招待してモンズを処理したが、他は人がいる事も無く順調に進んでいった

「ゴライアスいるかな？」

次の階層の最後に居ると言うゴライアスという階層主をソロで倒して今日は終わろうと向かったが残念ながら倒されており会う事が出来ず、18階層に到着後扉を分かりにくい場所へ設置して今日の昼前の探索を終わる事にした

換金をして、昼飯を食べてから、再び続きに戻る前に鍛冶屋でいくつか武器と防具を購入して、部屋で超重装備のフルフェイスの頭防具を付けてセーフティゾーンを通過し、再び奥へ向かう

流石にいくつかPTがあり、この階層は旨みが無いのでさつさとモンズを避けて次へ向かう

いくつか下りて、ようやく人の居ない階層までたどり着き、再び範囲狩りを始める

22階層まで進み、範囲狩りを続けると、やはり徐々に敵の攻撃が痛くなって来たので、危険と判断し、今度は階層を戻りながら、うまみのある階層で狩りを続けた

「よし！結構進んだな、帰ろつと」

本日の収入は昼前が120万で昼からが250万となり計370万也！やっぱいわコレ

ちなみにソロでの収入は全部隠し財産として俺の宝物庫の空間へ、前に手に入れたグリモアも有るけど他の宝はまだない

ちなみに範囲狩りをやるとドロップアイテムのほぼ全て灰になるので残念ながらドロップアイテムは非常に少ないがそれでもそれなりにあつたりする

換金所のいいところは、相手の顔を見ずに身元証明も必要のない所

にあるが、大量の素材を一気に出すのは持つのも大変なので持てるだけ換金する事に

翌日からPTでの狩りを再開し、俺は中層への進出を提案し、ギルドで意向を言うとエイナさんに、全員がサラマンダーウールを装備する事を条件に出したので帰りに購入した

「さて条件も揃った事だし、明日から中層へ行くんだけど、隊列とかは変わらないし作戦も同じだ、何か質問あるか？」

「俺は特にないぜ」「ボクも無いかな」「りりも無いです」

「じゃー明日に備えて英気を養うか、今日は俺のおごりだ好きなだけ食え」

夕食を終えてホームに戻り、ヘステイア様に明日から中層へ行く意向を伝えて寝る事になった

翌日から13階層を探索する事になり、試しに戦わせてみるが問題なので、先へ進みある程度多い数の場所へ向かい全員でする戦いをする事に

さすがに大勢の敵を相手にするのは皆が苦手らしく、俺が細かく指示を出す事でどうにかする事が出来た

「ちよつと無理かな、各自が視野をもつと広げて戦えるようにしないと、指示出すだけで喉がカラカラだったの」

「マファイが異常すぎるんだっての」

「ほんとうです、どういう視野してるんですか」

「マファイ君はやっぱりすごいね」

「明日から早朝訓練にヴェルフも来い、今のままでは足手まといだ、先へ進みたいが纏までは全員が覚えるまで探索は12階層までだな」

「なんだよ纏って」

「ヘステイアファミリア独自の技術だよ、特別に教えてやるけど他に漏らすなよっ」

「マジか！そりやく楽しみだ」

「マファイ様、以前りに口キファミリアから覚えて来たとか言っていないでした？」

「ギクリ・・・」

「何を隠してるんですか?!リリにも言えない事なんですか?」

「あく説明するの、めんどかったからロキファミアのせいにした、すまん」

「まったくリリを何だと思ってるんですか!」

「まああれだ、俺が開発した以上!」

翌日、早朝訓練を終わらせてダンジョンへ向かう途中、ミアハファミア所属ナーザさんがベル君を呼ぶので、何かと思い付いて行くとかエストを受けて欲しいとの事で、詳細を聞く事になった

クエスト

「ブルー・パピリオ？」

俺達3人は、ミアハファミアリアのナアーザさんから話を聞いて、クエストの内容を聞くと、なにやら切羽詰まった様子で、ブルーパピリオを出来るだけ早くとってきて欲しいとの事だ

ぶっちゃけクエストって呼ばれてるけど、俺もベルもあまり知らないし、りりは何か知ってるみたいだけど

「7階層に出現するレアモンスターからのドロップですよ、それよりも報酬ですけど、このポジションが報酬ですか？」

りりは何か思う所があるようで、ポジションを手にとって何やらいろいろの事を始める

「失敬しますね、代金は後で払いますので」

「え、ちよつと・・・」

有無言わずりりはポジションの栓を抜いて匂いを嗅いだり、手に1滴たらしめて舐めたりする

「このポジションが500ヴァリスですか？ぼろい商売ですねえ、いやはや羨ましかぎりです」

「薄めてあるのか？」

「はい、味を調整してありますね、まあよくある手口ですよ、ええ全くよくある手口です」

俺も以前ミアハ様から少しだけポジションの作り方を教えて貰ったので知ってるが、改めて口に含むと言われた様に味が若干違う

「さすがりり、恐ろしい子ー」

「褒めても何も出ませんよ、ベル様ここで購入したポジション出してください」

りりの迫力に、ベル君は少し前に購入したポジションをりりに渡すと、すかさず手に取って舐めとり確認する

「さて、この落とし前どうやってつけてくださるんですか？」

「まあ〜までよ、この件は俺が全部かた付けるから、俺がいいというままで、りりは手出しすんな、それとベル、俺がいいというまで購入は控

えろ」

「ナアーザさん、クエストは悪いが受けられん、今日の夜7時にまた来るミアハ様に合わせてくれ」

彼女は俯き、小さな声で返事をする、俺達は通常業務へ向かう事に

その日の夜、夕食を手短に済ませ、手土産を持ってミアハファミリアのホームへ行くと

「すまんっつ!!」

「あーそういうのいいんで、一応俺も無理聞いて貰ったりしたんで、これでチャラっす、今日話したいのはもつと前衛的な話です」

「いや、私の監督の不行き届きだ、本当にすまない! 騙していた分の金はすべて返す!」

「それ計算とか無理だしめんどくさいし、ベルの為にもならないし色々後ろ向きすぎますよミアハ様」

「し・しかしだな・・・」

「この件はヘステイア様にもまだ言ってますし、あいつらにも誰にも言うなと言ってるんで、それはいいんですよ、俺がここに来たのは、俺が以前ここに来た時も、今日もそうだけどナアーザさんの目をみて性根が腐ってないのに何故、こんなくだらん事をしたのかって事ですよ、理由あるんでしょ?」

「ナアーザ何故こんなことをした? 答えよ!」

「ファミリアの帳簿は火の車状態、何も知らない兎はいい鴨だった」

「ええい! バカ者、騙し取った一銭が何になる・・・」

「まてよナアーザを責めんな駄神、まず帳簿はナアーザだけが付けてるのか?」

「うん」

「よくミアハ様がポーションを配ってる話は知ってるが、それらも帳簿には?」

「つけてない、ミアハ様は誰構わず、いい顔してポーションを配り回すから把握しきれない」

「なるほどな、こりや駄神が100%悪いな、ナアーザさんのその隠してる手って義手だよな？」

「うん、冒険者してた時に食べられちゃった、これの為にミアハ様はどんなでもない借金をして、他にもいたメンバーも借金の事で居なくなっちゃって私一人に、それにもう私は戦えないから」

「なるほどね、ちなみに額は？」

「約7000万です」

「ふーん、うちの2億に比べれば屁だな、ちなみに完済したけどな」

「ふあ？」「2億だと?！」

「まあ〜いいやその話は、で建設的な話をしようか、1個500ヴァリスで粗利は？」

「200くらい」

「35万個〜40万個を捌かないと完済にならない訳だ、1日に出来る量は？」

「ミアハ様と2人で頑張っても50前後」

「30年近くかかる訳だ、これをどう考えてるかミアハ様に聞いても無駄だ、ウチの駄女神みたいに言うに決まってる、無駄に寿命が無いから感覚が違いすぎて話にならない、そこでだ商売をポジションを売るだけじゃなく例えばポジションの作り方講座をやって授業料で稼ぐとか、そうすれば覚えた人達は道具だって欲しいし、材料も欲しい、そういった物を売るとかさ、いろいろあるんじゃない？」

「それをやる資金が無い」

「だからさ貧すれば鈍するっていうじゃん、おもいきって1億くらい借りて来て店をきちんと作ってやる、企画を精査してやる、今ポジションバラまいても意味がない全くない、まずそこからだぜミアハ様」

「それが出来れば苦労はない、それで君達は2億の借金をどうやって返したのだ？」

「借りた人に技術提供した、それを2億と教会の権利と修繕費その他もろもろつけて貰った、だからミアハ様に同じ手は使えませんよ」

「それは相当な技術なんだろうな」

「まあ俺達の話はいいけど、とりあえず1000万融資します、条件はヘステイアファミリアへの傘下へ入って貰う事、そして俺の言う事は絶対です、これが条件ですが受けますか？」

「とんだ酔狂なんだな君は、1000万で何をするつもりなんだ？」

「まず暫くの毎月の支払いに充てるのと、ミアハ様には帳簿を付けて貰うのと、ポジションや金目の物の管理はナアザさんが行う事、1週間に300個のポジション作成をする事からですかね」

「なっ！いくら何でも・・・」

「それでポジション作成の体験を金を取って行う方向ですね、やつぱファミリアのメンバーが少なすぎます、授業の中で教えていれば勝手に増えるっしょ」

イケメンはこういう使い方をするんだよ！

「ポジションのノルマをこなしながら、器具類とか作成に必要な薬品も販売ってところかな、授業を受けて発展アビリティの選択肢を増やしませんか？って名目で売り出せば行けるはず」

「ポジション作成体験入学は、運転資金が溜まるまで、ヘステイアファミリアの施設を使う」

「まず目標はファミリアのメンバーを10名程度と、毎月の利益が100万いくことを目指すところからですね」

「・・・分かった、君達のファミリアの傘下に入ろう」

「とりあえず、次回の集金は何時でいくらですか？」

証文とか色々見せて貰い、必要最低限の資金を渡してから、傘下に入れる事を言う為ヘステイア様の所へ行く事に

「ってわけだ、よろしく！」

「ってわけだ！って何もいってないじゃないか君は!!それにミアハがなぜココにいるんだい?!!」

「めんどくせーな、ミアハファミリアは、マフィじゃなかったヘステイアファミリアの傘下に入った以上！」

「わざとだろ！絶対わざとだ!!それでミアハどういう事なんだい?!!」

イケメン神説明中……

「はあく……言っておくけどこのマファイ君の手腕は悪魔のごとくだよ、ボクだって被害者なんだ」

「あれは自業自得ってやつ、俺の優しさが分からないと見える」

ちびっこ巨乳神説明中……

「そうか、マファイ君よろしく頼むよ」

「ほおうくら、ミアハ様も納得したでしょ？」

「むむむむーっ!!!」

「それに俺達にもメリットがある話なんだ、教えて貰いに行つたことがあるから分かるけど、ミアハ様達のポーションの技術はオラリオ屈指、今後の発展も見込める、そうなる在今后俺達が遠征を始めた時、消耗品であるポーションが優先的に手に入るのはもちろん、同行させて現地調達だって考えられる、中には厄介な状態異常もあつたりするだろうし、現地で専門の奴が居れば遠征中の死亡率が確実に減るのは大きい」

「なるほどね、確かにサポートしてくれる傘下ファミリア、それも消耗品ともなれば困いこみをしておいて損はないって訳だね」

「そういう事、俺達だけで養うのは不味いから、新たな事業を含めて自立させつつ、俺達はポーションを始めとした薬品類などの消耗品で苦勞しなくていい」

しばらくハスティアは腕を組んで考え込み

「分かったよ、マファイ君の資金でやる事だ、ボクがあれこれいう事じゃない、けど最後までしつかりやるんだいいね？」

「分かつてるっての、じゃ〜改めてよろしくミアハ様」

俺達はがっちり握手を交わして、今後について話し合う事になった

話は移り、ミアハファミリアが傘下に入った事を、ベル達やナアーザさんに話をし、今後について話し合う事に

「まずは、俺以外で、この材料を出来るだけ多く集めてこい、上層のはずだから弱い敵には違いないがパントリーで狙う事になるはず、多くの敵を一度に相手にするのは、今後俺達に課せられた課題だ、俺抜きでもある程度対応に苦しまなくて済むようにする為の訓練だと思つて気を抜くなよ?」

「うん!」「はい!」

「次にナアーザさんは、帳簿の引継ぎを、それとミアハ様には定期的な、うちのヘステイア様に収支報告をしといてください、ポーションの作成に必要な器具や薬品の価格リスト、原価リストの提出をしてください」

「次にミアハ様です、薬品ばらまきは暫くやらなくていいです、つていうかやるな!ミアハ様には今作れる薬品の調合を全て本に纏めておいてください、それを見て新たな新薬の開発に乗り出します、同時に1週間に1回程度のペースでポーションの作成体験を実施するんで、その打ち合わせも同時にやっけていきます」

「うむ、わかった」

「とりあえずこれでスタートしてみ、後は臨機応変にやっけていくしかないかな」

こうして新たな試みがスタートする、最初こそ0人だった講習者は徐々に数が増えていき、1か月もする頃には受講者が定員いっぱいまで集まり、その中から数名がミアハファミリアへ加入する事になった。ポーションの作成に必要な品々もそれなりに売れており、趣味でポーションを作ったり、空いた時間で作って売りに来たりして内職がてらにと授業を受けに来る人もいたりした。

新薬の開発には、俺も携わり新たな新薬として、各種のステイタスが一時的に強化されるポーションや、現存する薬品よりも長時間の間のモンスターを引き寄せにくくなるポーションなんかも開発に成功、逆のモンスターを引き寄せるポーションもあるが俺や神々の許可なく売る事を禁じた。

おかげで3か月を過ぎる頃には、毎月の利益が100万ヴァリスを
超え、ミアハファミリアは軌道にようやく乗ったのだった

「収支報告書を見る限り、もう自分達だけでやっていけそうですね、傘
下からは抜けますか？」

「いや、子供達ともよく話し合ったが、君達が居なければ今頃どうなっ
ていたか、私達は君達の傘下でこれからも努力していくと誓おう」

「わかりました、それではミアファミリアの新店舗祝いに行きましよ
うか」

「そうだな」

こうして借金こそ完済した訳じゃないが、新たに俺からの融資と自
分たちの資産で作った建物、ミアハファミリアのホーム件店舗の完成
記念パーティに向かうのだった

黒いゴライオス

「よし！次はこのボールでやれ」

「はい教官！しかしお言葉ですが、水風船の次はゴムボールって一体どういう意味が？」

「最初のは流れを、次は威力だ、前よりも相当に難しいからな、水が入ってない分感覚もつかみにくいし、必要な魔力もケタ違いだ」

「はい！」

13階層からの戦いで自分達にはまだ早いという事で全員が纏程度は出来る様になってから再度挑戦するという事で、早朝訓練の時間を引き延ばして昼前後まで特訓をする事になって、数日たった

りりはソナーも範囲がそこまで広くはないが出来る様になり、次段階の体以外に魔力を纏わせたり、集めた魔力のコントロールをさせたりしているこれが最終段階なのでクリアできれば、予想通りならりりにも大魔導士が発現するはず

「さて次はへっぽこ組の1号ベルだな、纏の効果時間を延ばせないんだったな、ベルの場合、魔力の無駄が多すぎて通常ほぼ消費する事のない纏とかでもやたら消費するほどのコントロールが身に付いてないのが原因かな、よって前に戻って体の魔力を動かす訓練からやり直そう」

「・・・はい」

ベルはりりに差を付けられているのに結構気にしており、ちよつと元気がないうえに、さらに後輩のヴェルフの登場で抜かれるのではないと思うと気が気ではない

「最後がへっぽこ2号のヴェルフだな、この技術な応用次第では鍛冶にも使えるんだぜ？、てめーが鍛冶屋としても冒険者としても一流になるには今後において必須科目だ、ちなみにだけど、この技術はヘファイストスファミリアには公開してない、この意味わかるよな？」

「どうやって応用するんだよ」

「お前さ、魔剣作らんとか言ってるらしいじゃん、それは個人の自由だしって事で俺もベルも何も言わない、魔剣よりも俺の使ってる魔装

のほうが優秀だしな、鍛冶に置いて必要な技術、火を知り火を扱い金属を見極め、その金属が一番効果的な火の入れ方を見極める、これってさ目だけで見てるから、出来栄えにバラツキが多少だけ出たりするわけじゃん、俺なら魔力の目でも見るね、そうすれば目だけで見る事の出来ない火力や金属の状態がより一層見極められるからね」

「……よし！よろしく頼むぜ！」

うまい具合にやる気の出したヴェルフ、しかし彼はベル以上に才能が無かった……最初から相当手こずる事となり、教える方もうんざりするのだった

ちなみに俺は、次の段階になるのでは？と考えた事をやっている、魔力操作だけで魔法を作り出そうと考えたのだ、一応全ての魔法は詠唱さえ知ってれば発動できるが、ソナーに似た魔法や魔力を糸の様に操ったりとした魔法が存在した事から、いけんじゃね？と思いついたのだ

コレを自分の思ったように組み合わせ、詠唱を行わずに組み立てて同じ魔法を作り出すという練習を今はしている、これが出来れば様々な魔法が自分の思ったように産み出す事が出来るはず

数日かかって、ベル君もどうか範囲がかなり狭いながらもソナーまで習得し、ヴェルフは魔力を一か所に集めるところまでは習得できたので、一応大目に見て中層への進出をしてもなんとか行ける所まで漕ぎつけた、つていうかベルとヴェルフが中層へ行きたいと駄々をこねまくった事もあるが……

「さて再挑戦になるから今日は訓練無しで準備してこのまま向かうけど、準備は出来てるか？」

「「あいあい……」」

早朝早くに中層へ向かって腕試しする事になり、一行は混雑を避ける為に足早に中層へ向かう、俺の指示によりほぼエンカウントなしで

目的地まで行く事に成功して中層の入り口前にて

「さてこつからが本番だ、最初は少なめの場所から行つて徐々に増やしていく感じかな、最大40匹は同時に出てくる予定だからそのつもりで」

「よ、40つていくらなんでも・・・」

「ベル君はもっと多い方がいいのかね？やる気ですね！」

「ちつちがうよ、多すぎて対処しきれないって事です！」

「まあいいじゃねーか、やれるだけやってやるぜ」

そして予定通り敵の少ない場所から徐々に多い場所へ向かい、戦いまくつてると、やっぱ経験不足なのかヴェルフが一番にへばつてしまふので、サポートに回らせ3人でヴェルフの穴を埋めながら戦つていくと

「右20と左前に15湧くぞ！」

いきなり同時にモンスターが大量発生の子兆があり、ヴェルフもその言葉に反応してサポートを切り上げて剣を構える

「りりとベルはスイッチ方式で交互に目の前のを、ヴェルフは自分を守れ」

簡単な指示で動けるようになったりりとベルは前方の敵の処理を、俺は後ろ側の処理を、ヴェルフは俺達が内漏らした敵の処理をする事に

「あー行きつく暇もねーっ！」

「喋つてる暇があったら手を動かしてください!!」

「不味いぞ、息つくどころか、さらに22：いや43匹追加になりそうだ」

「なんだよおい！まだここに30以上居るんだぞ！」

「仕方ない、人命優先だべりりヴェルフで背中合わせで戦つて死角を作らず対処しろ、倒すよりも時間稼ぎを優先に」

『おい！その怪我人含めた6名！、そのまま真つすぐ走れ、人影が見えたら背中の奴を俺の所へもつてこい！回復する！』

魔力を乗せた大声で、要救護者達のPTに呼びかけて、こちらに引き込む

「ちよつと待つてください、マフィ様、敵を呼び込むおつもりなんですか?」

「仕方ないだろ、死にかけが1名居る、ベル見捨てるか?」

「ううん、マフィ君が正しいよ、りりもヴェルフもいいね?」

「わかったよ!」 「しょうがないですね」

俺の声に反応してPTが言われた様にこつちへ向かって走って来る

「後30秒程度で来る、それまでに出来るだけ減らせ」

「了解!」

きつちり30秒後俺達の居る部屋付近に到着した、要救援者PTが到着すると

「おい! けが人を俺の所へ、他は俺とケガ人を守れ! 回復魔法を使う」

相手が何か言おうとしたが、無視して壁を背にして手招きすると、詠唱を開始する

「今は遠き森の歌。懐かしき生命の調べ。汝を求めし者に、どうか癒しの慈悲を・・・」

怪我をしているのは小さな黒髪の少女で、肩から斧が刺さったままだ、下手に引き抜かないのは怪我の場所から血が噴き出さないようにする為の処置でいい判断だ

「ノア・ヒール」

魔法の効果により、まずは斧を引き抜き、魔力をコントロールして血管を素早く止めてから神経を優先的に治癒していく、肩からざっくりやられているので神経も多くがズタズタになっている

「君達はうごかず俺達を守れ絶対に近くに來させるな!」

「ベルとりりは出来る限り、後ろに敵を逃がすな、ヴェルフはりりとシロのサポートに回れ」

神経が完全に繋がり、次は堰き止めていた血管の治癒に入る、少々魔力がやばいので

「その女の方悪いけど魔力がきつい、俺の体に手を触れる魔力を貰う!」

言われた様に彼女は俺の体に触れながら周りを警戒してるが、今の所打ち漏らして来てない

「もう少しかかる、べる、りり、ヴェルフなんとか耐えろ、右に2程度まもなく湧くぞ、前からヘルハウンドが12、1分程度でござ到着だ」
血管をつなぎ、筋肉の治療に入る、結構深くやられており、予定より時間がかかっている

「ちっ！おいでかいの、あの正面からヘルハウンドがもう来る、処理が終わらんから内漏らし来るぞ！2分でいい持ちこたえやがれ！、他は絶対にこつちに来させるな、でかい奴をサポートしろ！」

「おうー」「はい！」

言われた様に各自が戦い、俺達の所へは1匹も来る事無く回復をする事が出来き、順調に回復していく、しかし敵は増える一方で徐々に押されていく

筋肉も重要な場所は繋ぎ合わせて、残りはポジションでカバーできる範囲に入るとポジションを振りかけて

「よし！安全圏確保した、撤退の準備に入るぞ、俺が切り込んで道を作る、ベルとりりヴェルフはしんがりだ、いくぞ！」

俺は出口の敵を一気に槍で切り裂いて行き道を作ると

「よし後に続きやがれ！、離されるなよ」

そのまま上層へ一気に走り出し、隊列を守りながら突き進むが、ここでトラブルが

しんがりをしていた奴らと道が分散する様に落石がおきてしまったのだ

「お前らはそのままダンジョンを出ろ、俺はあいつらをどうにかする」
『後で合流する、ベルがパーティーリーダーとなつて行動しろ、りりはベルのサポートにヴェルフは2人を助けてやってくれ!!』

これでもう自分達で判断して行動するだろう、そしてこの場合、合流する為の切り札を持つてるが人前で使いたくない俺にとって、要救援者達は邪魔でしかない俺は

「もう少しで彼女も気が付くはずだ、そうすれば自力で歩けるだけの

回復はしたつもりだ、このまま戻れるな？」

「はい、この度は誠にありがとうございます、この御恩を報いる為に・・・「まてまて」」

彼女の言葉を遮り、どうせ俺に付いて行くとか言う気なのは分かっているからだ

「今はいい、困ったときはお互い様だしな、それともう少し魔力が欲しい貸してくれないか？」

「はい！そのような事でしたら好きだけ持って行ってください」

遠慮なく彼女の魔力を貰い、いささか回復すると俺は

「よし、これでなんとかなる、行ってくれ」

「しかし一人で合流するなど無謀すぎます、一緒に戻って救援を呼んだ方がよろしいのでは？」

「貴女も見たから知ってるだろ？俺には広範囲のサーチが出来る合流するのは難しい事じゃない、邪魔さえいなければな」

俺にそう言われて、顔を曇らせるが、けが人を担いだ大男が

「彼の言う通りにしよう、命」

「・・・はい、桜花殿」

彼女達と別れしばらく移動してゲートに入り、ベル達を搜索する事に、どうやら下の階層に落ちたらしく同じ階層には居ない事が分かり、そのまま搜索すると16階層にてベル達全員を発見すると、敵を避けながら合流する

「ベル魔法を使いすぎるな、へばるぞー！」

「「マファイ!!」」

いきなり現れた俺に対して、全員が驚き慄いたが、今はそういう驚いているのも不味い状況だ、俺達が戦うには敵の強さがやばい、周りにはつい数日前に苦戦したミノタウロスがうじゃうじゃいる

「ミノに囲まれてるな、もうまもなく姿が見えるぞ」

「ど・どうするんですか?!」

「お前らは全員背中を合わせて対処しろ、俺が全部処理する」

そう言うと、俺はミノタウロスの頭めがけて槍を突き刺して、次々

と倒していく、当然Lv1と言ってる俺がこんな事をすれば、嫌でも気が付かれるが今は仕方がない

回りに居る敵を全て処理して戻ると、結構返り血でべたべたになっているのを嫌い、すぐさま自分の世界から水を取り出して浴びると、ついでにベル達にもかけてあげる

「いったいどういう事なんですかマフィ様、もうどこから突っ込んでいいのか分かりません!」

「マフィ君、今の魔法なの?」

「マフィおまえLv1であそこまで強いのかよ」

「いつぺんに喋んな、とりあえず周りに結界を張って出来るだけ回復する、最初は俺とヴェルフが休息を取る、その後ベルとリリだ、休息時間は各3時間とする」

結界魔法で俺達を覆うと、俺とヴェルフは適当な場所で休息を取り始める

計6時間程度の休息をしてから、今後について話し合う事に

「いい判断だな、確かに上に行くよりも18階層を目指す方が建設的だ、今の俺達なら近くにある竖穴から降りて一気に下の階層へ向かい18階層を目指す方がいいだろう、バックパックが紛失したのは仕方ない、俺のを使えば何とかなる」

「はい、それで近くに竖穴があるとの事ですが、そこから17階層へ行って18階層へ行く感じですね?ゴライアスはたぶんロキファミリアが通過してからの予想時間とか考えるとギリギリだと思います」
「なるほどな、いた場合は俺が受けてる間に18階層へ逃げろ、それも4人で倒すか?」

「バカ言わないでください!マフィ様が引き付けるのだから無謀なんですよ!」

「やっぱ強い?」

「当たり前ですLv3が数十人居ても手こずります」

「そっか、なら最初の案で行くいいな?」

「はい!」

こうしてサーチしていた縦穴から、いつきに降りて17階層へ向かい、ゴライアスが湧き始めてるのを探知し、作戦通りに俺が引き付けてる間にベル達は次のセーフティゾーンへ到達すると

「さて、倒してしまっても構わんのだろ?」

目覚めてしまったゴライアスと対峙して、俺はゴライアスの一撃を受けながらから一気にゴライアスの体を使って駆け上がり、目玉潰しをすると一気に距離を取って構える

(周りに人の目は無いが、何時気が付いて見に来るか分からん、ならば!)

ゴライアスごと俺の空間へご招待して対峙する、空間の名称は精神と時の部屋だ、時間の流れが極端に遅くしてあり、元の世界の一瞬が、こつちでは何日にもなる

「これで心行くまで遊べるな!」

そのまま何時間もかけてゆっくり削っていき、ゴライアスも徐々に崩れていく、このゴライアスに自己再生といった機能が無い為、削ったら削った分がダメージとして蓄積されるのでマフィだけでどうにか戦えている、前に訪れた時もこの様にして戦う予定だったので、問題ない

徐々にお互いを削りながら戦闘は続いて行く、あぶないダメージは即座に距離を取って回復し、再び攻撃を開始する

敵からしたら嫌な相手間違いなしだ、攻撃は当たりにくく、ようやく当たったと思えば消えて回復し、再び回復した後戻って来て攻撃してくる、けど自分は回復手段がないのだ

今回魔法を回復と補助魔法以外使わないのは、魔法は範囲狩りで戦って稼げるので、あえて近接攻撃で戦いたかったからだ

数時間の激闘の末に、ソロでゴライアスを撃破して、魔石とドロツプアイテムのゴライアスの骨と魔石そして、メダルらしきものをgetする

そのまま元の場所に戻り、18階層のセーフティゾーンへ行き

「おつかれさんって!!アイズさんが何故?!!」

そこに居たのはベル君達とアイズさんだ、流石に予想していなかつ

ただけに、驚きを隠せない、ロキファミリアは遠征に行ってるんだから、居ても不思議じゃないけど、タイミング良すぎね?？」

「うん、大丈夫だった?」

「そりやく見ての通り五体満足だけど、ベルどういう事?またなにか特別な力でも?」

「ボクだって驚いてるよ、駆け抜けたら、その先にアイズさんが居るんだもん夢でも見てるのかと思っただけど、ロキファミリアは遠征の帰りでここに留まってるって、さっき聞いた所なんだ、それよりもマフィ君こそゴライアスから良く逃げ切れたね、今助けをお願いしようとした所だったんだ」

「なるほど、把握、色兔再びでおk」

「なんでそうなるのさ!本当にやめてよね!!」

何故か他のメンバーもその様子を見て爆笑し始める、俺もつられて爆笑を始めた

その後、なぜか俺だけがロキファミリアのキャンプに連行された: 解せぬ!

確かに滞在するだけの装備が無いから、助かるんだけど・・・解せぬ!

「ふくん、やつかいな毒つすか、それで足の速いのの中にレフイーアが入ってるのは何故に?」

アレはどう見たって足早くないだろ、アイズさんの方が絶対に早いべ、俺は連行された先で性悪団長達と話をする事に

「君の教えてくれたリーダーさ、アレの御蔭でずいぶん助かったよ、行かせたのも最短で行って戻って来られるからね」

「習得したんっすか?流石レフイーア恐ろしい子!」

「しかし困った事に、他の団員には遠征中に時間を見つけては各自訓練したんだけどね、とっかかりすら掴めないのが現状なんだ、何故なんだろうね?」

「ほえ?最初の手に魔力を集めるのも?」

「そうさ、僕もやったが全然進展が無くてね、不甲斐ない話さ」

なんだぞれ、なにが理由でもあるのかな?・・・あくそういう事か

「まあ〜気長にやるしかないっしょ、技術ってそう言う物だと思うし」
ここで冷たい視線が俺に突き刺さる、やめて!俺のライフは0だ
おーっ!

「条件があるなら聞かせて欲しい、僕は君のあの時の戦い方が今でも忘れられないんだ、オツタルとのね。それに今回の遠征で痛いほど分かったよ、君のあの技術は、今後我々が階層を進んでいくのに習得するべき最優先の技術だっつね」

オツタルとかわざわざ声に出して言うな!ほんと性悪野郎めっ

「残念だけど、最初の提示通り、あの3名までしか受け付けませんよ、事情はどうあれ俺達には関係のない話です、特にロキファミリアから求める事もないですしね」

「次回の遠征に同行しないかい?君達のファミリア全員でいい、安全は確保しよう」

「それこそお断りですね、俺は俺のペースで遠征の準備をし始めてます、そう遠くない未来に俺が主導で遠征を企画しますんで、人のおんぶにだっつて行くより、よほど楽しめそうですんで」

「君は見た感じLv2じゃないのかい?それで遠征とは何処までを探索するんだい?」

「言う必要性が感じられませんか?」

「・・・そうか、僕は焦っているんだろう、今の発現は撤回させてほしい、今話しを進めてもお互いに、いい結果が出るはずもないな、近い内にあの時の続きをするから、その時にでも時間を作ってくれないかい?」

これは流石に断れないと判断し、了解する事に

「いいですよ、けど色よい返事は期待しないでくださいね」

「分かってるさ、君に「うん」と言わせられるような事を考えておくよ」

やめて!本気で辞めて!あーもうホントこの人って性悪すぎるわ

!!

その後、俺達はロキファミリアからありえない待遇を受ける事になった、泊まるキャンプまで用意して、食事なんかも貰ったり装備のメンテまでして貰える事に、

っていうか戻ったらベル君達が勝手にヴェルフ主導で始めてやがった、同じファミリアって事もあるんだろうけど、施設道具を借りて整備してたのだ、ヴェルフ逞しい子!!

りりはフェンリルと遊んでいると、周りのロキファミリアの面々からも目を付けられてシロがおもちゃに・・・哀れシロ

ベル君は、アマゾネス達に囲まれて「アルゴノート君だ」とかって色兔つぷりを発揮してるし

俺はその姿を見て、ここに来る以上に疲れ果て指定されたキャンプに戻って寝る事にした

(あつ予定を過ぎても戻って無いから大騒ぎしてるかも!)

と思いついて、飛び起きて腕を組んで考え・・・

回りの気配を考えると、動くのは不味いと考え寝静まるのを待つことに

その夜中、ここはダンジョンでありながら外と同じように昼と夜がある様で、そんな皆が寝静まって、キャンプを出て気配を把握しながら離れた場所へ行き、ホームへ飛ぶと

「ありやま・・・手遅れか」

ホームに人影はなく、嚴重に保管されていた金庫がこじ開けられて中身が取り出されている事から、搜索願が出されている事に気が付き、ギルドへ向かって情報を集めようとしたが、余計な騒ぎになると考えて神ヘステイアが何処へ行ったか考える

「まさかとは思うけど、ダンジョン?」

仕方なくミアハ様のホームへ向かい、寝ているミアハ様を叩き起こして事情を聴く事に

「すいません夜分遅く、急を要する事だったので」

「マフィ君!無事だったのか?、ヘステイアならダンジョンへ向かつ

たぞー！」

「あーそうっすか、聞きたい事手短におしえてもらってありがとうございませす、ったくやってくれるな！」

思つてた以上に話が大きくなつてゐる事に気が付き、搜索の搜索に出る事に

「あーそれで、何時頃行きました？」

「そうだな、夕方4時ごろだったはずだ、手練れを何名か集めてたから大丈夫とは思ふが」

「分かりました、俺が今ここに來た事は伏せておいてください、誰にも言わない様に」

「何か事情があるのだな、分かつたそうしよう」

即座にホームへ戻り、ゲートから各階層をサーチしていくと、10階層にヘステイア様達が居るのを発見する、その中にはあの時に助けた奴らの気配もある、それとコレはイケメンエルフ美女のリューさん？それにもう1柱神が混ざつてゐるのを確認して、いよいよもつて大騒ぎなのを見て頭が痛くなつた

(さてどうしたものか、合流するのは不味いな、他に俺の能力は知られたくない、ここはリユースさん達の実力を信じよう)

結局元に戻り、キャンプで再び眠る事にするのだった

翌朝になり、一応何処までヘステイア様達が進んだのか氣になつた俺は、森の中からばれない様に中へ入り、サーチを開始する

(どうやら、休息をちゃんととつてゐる様だな)

12階層と13階層の間で休憩をしており、未だ休息中なのを確認すると、再び戻る

(さて、こゝうなると問題なのは、アレが来るまで待たなくちゃいけないって事だ)

気持ちを切り替えて、昨日言われた通り、ロキファミアアの解毒剤を受け取つた後に戻るらしいので、その後について俺達も戻る方向で言われていたので、断りはしたが仕方ないと諦める事に

「やつぱ言われた通り、そちらの後に、ここを出ます」

「そうかい、ならそれまでゆつくりするといい、気遣いは無用だよ」
「ホントは嫌なんですけどね、下手な事で少しでも借りを作るのは、けど手遅れなんで甘えます、だからと言ってこの程度で生徒を増やしませんから」

「わかっているさ、この程度でどうにかしようとは思っていないさ」

「この後、すこし体動かしがてら19階層へ向かいます」

「なるほど、けど君達には早すぎないかい？ここに居るのだから無謀と言えなくもないんだ」

「いえ、夜中確認しましたが、特に問題はなさそうですので、何かあればここに戻って来やすいですし」

「そうか、1人連れて行ってほしいんだけど構わないかな？」

「いいですよ、誰ですか？」

まあ、客人としておきながら、何かあったらメンツにかかわるんだろうと思いい納得して受け入れる事に、アイズさんあたりかな？つと思っているところの性悪は

「この僕さ」

「ちよwwwwwwおまwwwwww」

斜め上でしたorz

「なんで団長だけなんですか！ズルいですよ!!」

「私も生きたーいい！アルゴノート君と遊ぶの!!」

などと非難殺到、ざまあーっ!!

「あーなんか色々大変そうなので、僕達だけで行きますね」

そそくさと、18階層を後にして19階層へ向かう

「大変そうだったな」

「そうだねヴェルフ、まさかロキファミアの団長が付いて来るって話聞いた時はびつくりしたけど」

「そうです、こういう話になったら、こうなるんですかマフィ様」

「しらん！っていうかこうなって良かったとだけ言っておく」

そして新たなフロア19階層は今までは違い、密林ぽい階層で隠れる場所も多く障害物も多い、この事から普通なら不意打ちなんかを

気を付けなくちゃいけないが、俺達には通用しない

的確に敵を倒していき、順調に稼いでいくと数時間位した頃に、サーチにアイズさんが居るのを見つけると

「アイズさんが来てるな、俺達を探してる感じかな」

「やっぱ監視しておきたいんだろ、俺達は一応客人扱いだし」

「どうするんですマフィ様」

「アイズさんに申し訳ないよ、マフィ君」

仕方が無いので、アイズさんに分かる様に魔法を上空に打ち上げて俺達の場所を教えると、即座に彼女は合流する

「なんか心配かけてすいません、アイズさん」

「ううん、私が気になって来ただけだから」

「じゃく続けるぞ、ベル左前20の2からだ」

こうして狩りを夕方まで続けて、戻るとすかさず、俺は姿を隠してヘステイア様達一行を探すと結構近い位置にまで来てるので、間もなく来ることが分かりホッとするとともに、これからの展開に頭を悩ませることとなった

予定通り、夕食中に神ヘステイア様一行は、俺達の居る18階層に到達する

食事中に、結構でかい声で「べるくーん！まふいーくーん！どこだーい！」と叫んで言うもんだから恥ずかしすぎて、口を閉じさせに行く事に

「……かみさま」

ベル君は知らなかった事もあって、神ヘステイアがここに来た事が信じられず、あっけに取られている

そんなベル君を他所に、ヘステイア様はベル君を見つけると、叫びながらダイビングしながらベル君に抱き着き押し倒して大騒ぎ、他の面々は微笑ましくその光景を眺める事に

いちやいちやはそう長く続く事はなく、リリがヘステイア様を引き離してしまおう、りり恐ろしい子！

「ベル君との再会に水を差すんじゃない！」

「いい加減にしてください、周りに見られまくってますよ、ハシタナイ

です！」

「うわあーっ！バレンながしーっ、なぜ君までここにいーっ
！」

りりとヘステイア様がじやれ始めると、リユースさんとあの時助けた
ファミリアの子達に俺は囲まれ、ベル君はもう1柱の神と眷属らしき
人に話しかけられてた

「マフィさん、やはり無事でしたか」

「やはりってなんですか？ぼくコワカツタヨ？ママン」

「それだけ言えるなら大丈夫です、それに私は貴方のママではないで
す」

知ってるがな！冗談通じないのか??などと考えてると、和風の鎧を
着たあの時助けた3人が

「おつ怪我大丈夫みたいだな、良くここまで駄女神を連れて来てくれ
た、出来れば置いて来てほしかったですがね。しかし感謝する、お守
り大変だったでしょ」

「いえ・自分達は」

「まあ〜気にすんな、とりあえず俺達の借りてるテントへ行こう、おー
いその神ヘルメット様でしたっけか？狭いけどロキファミリアか
ら借りれたキャンプへ行きますが、話の続きはそこでどうです？」

「いや〜手厳しいね、俺はヘルメスさ、ヘルメットじゃない」

わざとだわざと！〜こういうタイプは用心しないとね、ここまで来て
ベル君に用事って事は粘着女神が絡んでも考えられる、たぶんこ
のキャラから考えて関係は少なそうだけど

キャンプに戻って、話の続きをする事に

「そちらの学級委員長さんは行かないので？」

「がっ学級委員長?!」

だって居そうじゃね？眼鏡かけて気が強そうで、なにか見るからに
固そうなのって学級院長に、この世界にだって学校あったはずだし

「だって居そうじゃありません？〜っていうか凶星?！」

「ぶぶつアスファイ、いいからいいから、マファイ君、俺達も状況を色々知りたいんだ、ロキファミアリアに挨拶に行かせる」

「なるほど、了解」

その後、俺達の借りているキャンプにて、まずは入るなり命って呼ばれていた彼女が土下座を始め

「この度は、本当にありがとうございます、この御恩は必ずいつか報います」

「やめてください、お互いに無事だったんですし、神様を無事に連れて来ていただいたんですから」

「つてベル君の言う通り、あれは俺達ならいけると判断しての事だ、気にしなくていい、君も傷は大丈夫なのか？君の様な美少女に傷を残してしまったのではと心配はしてたんだ、時間がギリで最終的な治癒はポーションに丸投げしたからな」

「は・はい、大丈夫です」

「ならいいんだ、さてそろそろ挨拶と情報を持ったと思われる学級委員長が戻ってきそうですね」

「へえ〜？、わかるのかい君には??」

「そうつすよヘルメス様、俺はこの能力で追われる彼らを、自分の場所に引き込んで回復もしたんですから」

「なるほどね、今後の予定について話し合おうアスファイ？」

アスファイと呼ばれた学級委員長は、今後の説明をし、明後日に出発する事や、新たに1個のキャンプを借りる事に成功した旨を伝えた
「つまり1日は暇がある、せっかくだし明日はゆっくりしようじゃないか」

その案に全員が納得し、俺達も明日は体を休める為に完全休業にする事にした

ヴェルフには何やらヘファイストスから荷物と伝言を預かってきており、思う所があったのだろう、1人でどっかに行き、ベル君は夜の散歩へ@2名ほど後を追った

「それで、何か用ですか？」

キャンプに戻った俺は、とつと寝ようとするヘルメス様に呼び出されて外に出て人気のない場所へ

「君は一体何者なんだい??アスファイが持って帰って来た情報の中に興味深いものがあるね、ロキの所の子供は君にかなり執着していると見える、キャンプをもう1基借りれたのも君の御蔭だという、なぜだい？」

「さあ〜ご自分で調べてはどうですか?商売とか伝令なんかを司るんですっけ?ヘルメス様は」

「あらら手厳しいなあ、だからこうして俺みずから情報を探ってるというのに」

「それはご苦労様です、手に入れた情報は残り10柱の何処へ持つて行くんです?本命ゼウス様かヘラ様、対抗は粘着女神ですかね」

「それを答えたら教えてくれるのかい?」

「いえ、関係ないです興味ないので・・・」

あらま本命かよ、つていうか居るんだ、まだこの世界に・・・ギルドとかでは消えたとされる神なのに、まあ粘着女神じゃないのが救いかな

「なぜ気が付く事が出来たんだい?どうやら君の察知応力は塑像を絶する様だね神々さえも見抜くとは」

「何のことですか?」

「はあく・・・そういう事にしておこう、俺がここへ来たのは頼まれあからもあるが、自分でも興味があったからさ、ベル・クラネルに」

「でしようね、目線気を付けたほうがいいですよ、俺じゃなくても気が付きます」

「いや〜君だけじゃないかな?これでも俺ここまで見透かされた子供って君以外あった事無いんだよね」

「学級委員長なら気が付きますよ、そういう賢さが見えました」
「なるほど、参考にしておくとよ」

「それと、俺が居る限りベルに何か仕掛けても無駄ですよ、全てぶっ潰しますから、俺だけで」

やらべルに反感を持つてる冒険者に痛めつける手助けをした様で、魔法道具らしきものを渡した

(だめじゃないか、監視されてる上に撮影もしてんだぜヘルメス様よ) この世界にも撮影技術とかはある、魔法道具と呼ばれているもので、俺も持つてたりする、使うのは初めてだけど、まさかこういうくだらない事に使う羽目になるとは

ヘルメス様はその後さっさと戻り、キャンプで休んだので、渡したアイテムを回収しに行き、男の後ろから魔法で寝かせヘルメスの渡したアイテムを確認し、この魔法道具が自分の姿を消す代物だと気が付き

(なかなかナイスなのをもってるなヘルメス様は、有難く使わせて頂きますね)

そのまま自分の精神と時の部屋でしっかり寝て、名目上は徹夜で警戒したが、その後何かを仕掛けて来る事は無かった

翌日、ロキファミアは早朝早くに出発し、その後、俺達が出発するまでの時間の間に、ヘルメス様からのプレゼントが無いのに、あの男達は動き始めて騒動を開始したので、速攻でヘステイア様を解放し、騒動を起こしてる奴らを次々に処理してやった

(ざまーっ！こんな手読まれてるっての、ヘルメス様どお？くやしー？くやしいのお？)

様子を確認すると、ヘルメスは学級委員長と共に木の影から様子を伺っており、作戦の失敗に頭を抱えている、まったく・・・

「だから無駄だつて言ったじゃん、あの程度のごろつき何人集めても無駄ですよ、ちなみに証拠は持つてるんで、ギルドに報告しますね」
「あーっもう！やっぱ見抜かれてたか、まあいいさチャンスは、これからいくらでもあるんだからね」

「学級委員長ほかつておくと、ファミアア潰れますけどいいんです？」
「ヘルメス様!!もういい加減にしてください、ギルドに報告されたらシャレにならないですよ!!」

「でも君の所もヘステイアが来てるんだ、同罪だろ??」

「まあ〜ウチは零細ですからね屁でもないですよ罰金程度ならね、も

しそうじやないとしても何とでもなります、けどそちらはどうですかね？」

「あー分かったよ、負けだ負けだ」

お手上げらしくヘルメス様は両手を上げて降参の意思を見せる

「この記録媒体と、この魔法道具を20億で買いませんか？」

俺が提示したのは、この一連の首謀者の記録が移された代物と、ヘルメス様が実際にごろつきに手渡した魔法道具だ、もちろん慰謝料込での提示だ

「これで詰みましたよヘルメス様！どうなされるおつもりなんですか?!」

「ここまでコケにされるとはね…、いささか怒りが抑えきれそうもないよ」

うし！予定通り煽りに成功して神威の発動だ、これで確実に、この神は失脚する

ヘルメス自身としては、おいたのすぎる子供への軽い脅しのつもりだったのだろう、ヘルメスが神威を発動させると

「無条件でそれらを渡せ！これは警告ではない命令だ!!」

すさまじいプレッシャーだが、関係なく俺は距離を取って森に姿を隠すと、予想通りヘルメスは、そのまま俺の方へゆっくりと近寄って来る

証拠品を宝物庫へ仕舞うと、武器を構えて神に挑む準備をする、こちらに大義名分がある分、神にだって槍を向ける

つと接触する直前、天井から大きな気配が！

(やばいやばいやばい！神威って、このバカげたモンスターまで使役すんのかよ！)

『冗談じゃない！階層主まで使役する為に呼び出すとかふざけるな！ヘルメス！』

俺の魔力の籠った大声に反応して、ヘルメスが天井を見上げ、予想もしていなかったのか神威を解き

「違う、そんなつもりは無い！」

『んなこと信じられるか！どういうつもりだ、セーフティゾーンに

モンスターしかも只の階層主じゃないのが産まれて来てるんだ、言い訳が通じるとでも思ってるのか!!」

「まっつてくれ・・・」

大声で叫んだ俺の声に反応して、冒険者達がざわめき立つのが探知できる

(不味いな、あんな強大なのは勝てないぞ・・・)

急いでヘルメスを無視してベル達の居る場所へ向かう、そして合流すると

「どういう事なの?、あれがヘルメス様が使役する為に呼び出した階層主だよな?」

階層主は既に産み出され、さっそく暴れ回っている、それに呼応する様に次々とモンスターが産まれ始めた

「そぞ、まっつたくやってくれる、撤退するぞ全員いるよな?」

ヘステイアファミリア全員とヴェルフを確認して、逃げ出そうとした時、出口にむかってレーザー砲が命中して出口が塞がれてしまう

「あーもう、確実に殺す気か!」

「ボクがヘルメスを説得してくる」

「ヘステイア様は、これ以上動くな!神威で対抗しようなんて辞めてくれ、悪いがこの場から出て貰うぜ」

すぐさまゲートを出してヘステイア様を俺の空間へ移動させて、そのままホームへポイすると、再び戻って来て

「封印術を使う、ヘステイア様は、俺の安全な封印術の中に隠した、居ても状況が悪くなるだけだ」

「分かった」「はい!」「おう!」

「とりあえずあのゴライオス強化バージョンの能力がどの程度なのか知らないけど死ぬ、感知するだけでやばいのだけは分かるけど、とっかかりがあるのかが知りたい、それまで動くな」

「けど、けが人を助けないと」

「ベル気持ちは分かるが、アレはそういう敵じゃないんだ、自分の事、自分の親しい人を守るのが限界だ、耐えろ」

「・・・うん」

俺達が話してる間もゴライオスは大暴れをし、リユーさんや、学級委員長は既に動き始めている

タケミカツチファミリアも準備を整え抗戦の構えのようだ

戦いの様子を見る限り、通常種にはなかった自己回復を持ち、遠隔攻撃もえぐいのがある、近接もかなりの威力があり、腕を振るうたびに冒険者が紙くず同然に舞っている

さすがに逃げ出せない事が分かり、こりや絶対にヘルメスの野郎ただでは置かないと決め

「おおよそ分かった、自己回復能力がやつかいだな、作戦を説明する」「うん」「はい」「おう！待ってたぜ」

「りりとシロは冒険者の救助を優先しろ、敵の動きを常に把握して攻撃は絶対に食らうな、自分の助けられる範囲でいい」

「はい、マフィ様」

「ベルは俺の護衛だ、いまからあの自己回復を食い止める手段を使う、その間俺が無防備だ、その間守りつつ、英雄願望で力を溜めまくれ、最後の切り札に使う」

「うん！」

「ヴェルフ、使えそうか？無理なら俺の護衛になる」

ヴェルフは俺が何を言ってるのか察したのか

「分かってる、意地と仲間の命をはかりにかける気はねえ」

「よし、ヴェルフは魔剣の準備をして攻撃の瞬間まで待機、ここぞって時に使う、それまで一緒に来い」

「じゃく各自行くぞ！最初は俺の槍をあのゴライオスに刺したら一気に距離を取って、ゴライオスの魔力を奪いまくるぞ、そうすれば自己回復が鈍くなるはず」

そして俺達3人は、ゴライオスに槍を刺す為、モンスの後ろ側へ回り込み一気にケツの穴へ槍をぶち込み奥深く食い込ませると

「よし、あの丘の場所まで一気に行く、ベルはりりの援護か雑魚たちの処理、ヴェルフも同様でいい、魔剣はまだ使うなよ切り札だからな、ベルもだ光ってる体の力を使わない様にコントロールして戦えいいな？」

「うん!」「おう!」

そして、俺は魔法の詠唱をしている人たちの場所まで行き

「魔力欲しい人は、俺に触れる、いまなら無料でいいぜ!」

そう言う俺はゴライオスからのパスからいつきに魔力を吸い上げていき、自分も詠唱を開始する

その場の指揮つてる奴の合図と同時に魔法を発射するが、吸い上げた魔力がまだ少ない事もあって即座に自己回復を始める

そこに命が現れて命は俺に触れ

「よろしくお願いします、マフィ殿」

「かなり溢れてるからな、俺だけでは使いきれん、気にするな」

俺達の会話を聞いて、俺の言葉が戯言でないのを察知した魔法使いは

「どういうことなんだ?魔力を譲渡できるのか?」

「そうだ、あのゴライオスから吸ってるんだけど、いかんせん量が多くて使いきれん」

俺がそう言うのと、次々に手が俺の体に触れて来たので各自に魔力をどンドン送ると

「す・すごい、魔力が溢れて来る・・・」「すっげー勝てるぞコレ!」

「よし野郎ども!魔法の打ち放題だ、詠唱開始しやがれ!!」

その号令と共に、次々と詠唱をしていく

「命は俺の前へ、その魔法でアレを足止めする、コントロールは任せろ、お前は魔法に魔力を送り込む事だけを考えろ」

「はい!」

重力魔法で、ゴライオスをロックさせて動きを封じると、他の近接タイプの冒険者が攻撃を仕掛けようとするので

『近接攻撃は後2分待て!!ゴライオスの自己回復を食い止める作業中だ、付近の雑魚処理を先にしろ!』

大声で指示を出した事もあって、各自雑魚処理に向かうが、指示に従わず動く奴が居るので

『指示に従え!リユ、委員長!!暫くゴライオスは動かないロック中

だ!』

ようやく俺の指示に従い、2人も雑魚処理に向かう、予定通り全ての雑魚が処理できそうなタイミングで

『雑魚処理お疲れ様!デカいのが行くからその後には攻撃開始!雑魚処理終わってない方はそれまでに処理してください』

その言葉通り、詠唱の終わった人達による魔法による連続攻撃によって、ゴライオスは大ダメージを追うが、自己回復速度が落ちた物のやはり消し飛ばされた箇所からどんどん回復していくと同時に、近接攻撃者が一斉に攻撃を仕掛けていくが、重力で縛っていた鎖がほどけた事もあって、ぽんぽんと冒険者が吹き飛ばされていく、リユースさんと委員長は、それらが邪魔になり、勝手に引くように指示を出す

「どうするんだ坊主きりがないぞ」
「大丈夫です、回復速度落ちて来てますんで、@1〜2回程度さっきのをやれば終わりですね」

「おう!聞いたかテメーラー!しっかり詠唱しやがれ」
その号令と共に、各自が俺の渡した魔力を使って詠唱を開始する
『重力で再び縛ります、先ほどと同じ方法で削るので下がってください』

詠唱の終わった命にあわせて魔法をコントロールして縛りきる
『今の中に、負傷者を下げてください、次で決めますので力を溜める奴は今のうちに!』

各自が負傷者を安全な場所へ移動させるのを確認すると
『負傷者の回収終わったようです、大きいのが行ったら、攻撃を溜めてる人はラストアタックです、思いつきりやってください』

そして連続で魔法が発射され、その後次々と魔剣や、溜め攻撃が繰り出されズタズタになった所へ、ベル君の渾身の1発が発射されると、ゴライオスはアイテムを残して煙となって消えたのだった

『完全勝利です、お疲れさまでした、死亡者0全員の勝利です!』
この俺の発現をきっかっけに各地から、地鳴りのごとの喝采が溢れる

「「うおおおおお!!」」

「「「やったーーーーーっ!!」」」

その歡喜の声が鳴りやむことは暫くなく続くのだった

「よおくやるじゃねーか、大したもんだあの荒くれ共をうまく使ったアよお」

「途中で指揮勝手にしちやって、後で全部おやびんの指示だつて事にしといてくださいね」

「ばーか、くだらねえこと言っていないで胸張ってる、俺達は荒くれだが人の手柄を取るほど腐っていないってんだ」

いあく主に俺の精神衛生上、遠慮されると困るのですが・・・

俺達の出発は結局延期される事になり、その日は様々な物資を持ち寄って大宴会が開かれることに

「マフィさん、見事な采配でした、途中指示を無視してしまいすいませんでした」

「りゅーさんの方が強いですからね、気持ちは分かりますから気にしないでください」

「それであればやはり・・・」

「そうですね、ヘルメス様が原因です」

ちなみにあの2人は、とつとところを出て行った、まあ祝勝会に参加する勇気は無かった様だ

「俺も聞いたぜ、つたくふぎけやがって、事が終わったらとつとと消えちまいやがった、ただで済ます気はねーぜ、なあ!お前ら!!」

その言葉に反応して、冒険者達は皆が一様に頷いた

こうして18階層での事件は、とりあえずの結末を迎える事が出来たのだった

後処理

18階層で起こった、セーフティゾーンでの階層主出現から討伐が一応の終わりをさせたが、後処理という大きな出来事が残っており、この件はまだ続くのだった

俺達はその後、地上へ戻り、連名でヘルメス様を告発したが、ギルド側が俺達にした事は、今回の事件の箝口令の徹底だった、口を滑らせればどうなるか分かったもんじゃないから一応従うが

そして問題のこちらの要求はヘルメスファミリアの解散及び、資産の没収、没収した資金の分配、ヘルメス様の今後オラリオへの立ち入り禁止などだ

この件は概ね受け入れられたが、ヘステイアファミリアも罰金として資産の半分を収める結果となり、ヘステイアのファミリア内での立場は、勝手にファミリアの資金を使った事と重なり地に落ちた

「おいへスっ子、茶もってこい！」

もはや名前すら呼んでももらえず、俺の半奴隷化させたが、しばらくしてベルに見つかり、対立する事に

「何てことさせてるんですか!!神様もどうしたって言うんですか?!」

「黙れベル、ファミリアの資金を勝手に使った上に、ダンジョンに入り込んで罰金騒ぎ、これでも一応神様って事で追い出されないだけマシに思っただけで貰わんと困る、これ以上問題起こされたら、今度は俺達がヘルメスファミリアの様になるんだ」

「いいんだベル君・・・ごめんよ」

「やめてください!神様!!」

「おい!手を止めるな、さっさと掃除してこいや、へスっ子」

「マフィ君もいい加減にしなよ!あれだつて僕達を心配してくれた結果じゃないか、神様に何の落ち度もないはずだよ」

「じゃなぜ俺達は資産の半分も払わされる結果になった?話はそれからだ」

「半分と言っても数十万、今回の件で稼いだ分だけだったはずだよ、そ

もそも資産は全て使ってしまったんだし」

「どちらにしてもだ、無罪放免ではファミリアの風紀に関わる、今後の事を考えても何をして神様だから許されるなんてバカな事を考えない為にも必要な処置だ」

「神様だつてもうしないって誓ってくれたでしょ！それでいいじゃないか」

「だあくめ、考慮はしたし情状酌量の余地も考えたけど、これが限界、聞けないならどうぞコンバートをお勧めします」

「っ！」

ベルはその後何も言わずに、苦い顔をしながら部屋を出て行った

「なんてことを言うんだい！ベル君が出ていてしまったらどうするんだよ」

「おい、口の利き方を気をつけたえへスっ子、この程度の事を出ていくならそれまでの奴だ、少し頭を冷やせばわかる」

「べるくーんーん！」

へスっ子はベル君を追いかけて部屋を出ていく

「ダメだ・・・はやくあの駄女神なんとかしないと・・・」

「まったくですねマファイ様、それでどうするんですか？」

「嬉しそうだなりり」

「そりやそうですよ、いい気味ですマファイ様の行為を何度も潰したんですから」

「以外だな、てつきりベル側に付くと考えたんだけど」

「それはそれこれはコレです、ケジメは必要ですから」

その後、ベル君はへスっ子に言いくるめられ、納得しないが理解するように自分を抑え込み、あやまりに来たので許した

話は変わり、ヴェルフとりりがLvUPを果たし、それぞれがLv2へと至った、そして契約上はヴェルフが鍛冶を取得するまでという契約だったのでPT契約も終わったのだが、ベルの希望により、今後も要請あれば一緒にダンジョンへ行くという契約を結び、今後も度々一緒にダンジョンへ行く事になった

りりは残念ながら大魔導士は発現せず、新たな召還魔法、天馬ペガサスを習得する、発展アビリティに耐異常を選択した

ちなみに困った事に俺のLvまでもが上げられる様になってしまったが保留、ステイタスが概ねカンストするまでは上げない事にした、他にも理由はあるけど・・・

そして最大の予定外の出来事が、2日後に起こった

「それで、ヘルメスファミリアの方々全員で何の御用向けでしょうか？」

若干つて言うかかなり引くわ、報復か？とも思わせる迫力に逃げたくなる気持ちを抑え対応する事に、この場にはヘステイアファミリア全員、ヘルメスファミリア主神以外全員が集まっていた

「簡潔に言うわ、我々元ヘルメスファミリア全員、ヘステイアファミリアへの入信コンバートを希望します」

「はああああーっ?!?!」

詳しく聞くと、最初は団長である、アスファイ・アル・アンドロメダが、ヘルメス最後の願いを聞き遂げる為に、自分だけでヘステイアファミリアへ来るつもりだったが、なぜか全員がアスファイ委員長に付いてきちちゃったって訳だそうだ

「どうします？ヘステイア様」

「こういう時だけ調子のいい奴だな君は」

「あーちなみに、この会議が終わるまでですよ」

何がと言うとヘス子ちゃん半奴隷の刑の話だ、ちなみにベル君も諦めたのか、何も言わなくなった

「ううううーっ!・・・それで君達全員でなのかい？ボクは構わないけど、あまりおすすめしないぞ、この悪魔が居る限り何を言い出すか分かったもんじゃないんだ」

「ふむく悪魔かあ、俺はちなみに天使なんで、ベル君かなあ？悪魔は!」

おもいつきりジト目で全員からの視線に晒されることに、酷い・・・
「もういい加減にしてください、大勢の前でみつともない」

りりにどやされて、仕方なく話を進める事に

「俺からは1点だな、全員の力が知りたい、ヘステイアファミリアに相応しくない者は傘下ファミリアであるミアハファミリアへ行くか他へ行ってもらう以上」

「僕は、とくにありません、皆さんよろしくお願いします」

「りりも特にありません、マフィ様にお任せします」

「ボクは全員を面接した後、決めたいなって事でよろしく頼むよ」

結局、神ヘステイアに一任して、全員をヘステイア様が面接した後、合格者全員と手合わせを順次行っていくことになった、流石にLv1〜3に手こずる事はなく、勝利できたが、ここからが本番だった

「さて、最後はアスファイさんですね、よろしくお願いします」

「よろしいのですか？連戦でお疲れなのでしたら、後日にされても」

「今は1秒も無駄に出来きません、問題が山積みなんですから、この程度の事は今日中に済ませておくべき、それにこれはハンデですよ」

「貴方はLv2なのでしょ？Lv4の私にハンデとは言ってくれますね」

「Lvで勝敗が決まらなかったのは、見てたでしょうに」

この戦いの前に戦った、シアンスロープのLv3ルルネとの戦いで一方的に勝利してるのだ、この事実にも、この戦いを見守っていた前へルメスファミリアは夢を見ているかの如く驚きざわめき立った

「いいでしょう、その舐めた態度後悔しないでくださいね」

実際にアスファイも前の戦いを見て、Lv差を覆し一方的な強さを見せるマフィに脅威を感じたが、勝てなくは無いと感じていた

マフィの方は、未だ切り札らしい切り札を切ってはおらず、まだ手札を残しているうえに、アスファイの戦い方は、先日のゴライオスの件で見ている、勝機を十分に感じていた

「舐めてる覚えは無いですが、こつちが格下に一応なるんで手加減は期待しないでくださいね」

この言葉に、アスファイがブチ切れる

「その武器を本来の槍にしなさい！それが手加減と言っているんです、ふざけないで!!」

俺の武器は棍棒だ、当然刃も付いておらず、彼女にしてみたら舐めてる以外の何者でもない、しかもアスファイ達側に武器などの制限は無い事を始めにマファイ自身が言ってるのだ

「気にしすぎですよ、コレだって十分凶器ですからね、一々文句はいいから、かかってこいよ、ヘルメスファミア元代表の委員長さんよー」
あからさま過ぎる挑発だったが、アスファイはその挑発にあえて乗り、マファイに攻撃を仕掛ける、マジックアイテムによる弾幕と煙幕を繰り出すと即座に相手の懐に潜り込む

しかしそんなあからさまな目つぶしが効く様な相手ではなく、見事にカウンターを貰いアスファイは距離を取って体制を整えると

「あああん！舐めてんのテメーだカス！なもんが通じるかボケエーっ！」

俺の怒声に、周りの空気は張り詰める、アスファイも何が起こったのか理解しきれない様子だ

「さっさと来いや、Lvがちーっつとばっか高いだけで、うぬぼれてやる、前にやったルルネのほうが、よほどマシだつぞー！」

俺の挑発に乗らず、ゆっくり武器を構えて距離を測りながら近寄って来る、時間も押してる事もあって相手に合わせる理由もない事から、今度は俺の方から攻撃する

俺の棍棒が不規則な速度と軌道でアスファイに襲い掛かる、最初は眼で捉えさばき切れていたが徐々に押されて行き、相手のガード事、ブーストした魔力で噴射した急加速の攻撃には耐えられずアスファイを吹き飛ばす

そのまま追撃とばかりに、突きの連打、壁を背にした彼女が逃げる場所はない

「おらおらおあらあああ!!ちゃんとメシ食ってんのか!Lv4はこんななものか!俺をがっかりさせるの早すぎんぞーっ！」

攻撃の合間を縫ってアスファイは身体能力の差をうまく使い、棍棒の突きから抜け出した

しかし避けた傍から更に連打は続く、アスファイの目には闘志が徐々に失われて行き、どうにかして終わってほしいと願うばかりとなり、

膝が崩れる

膝が崩れる直前、彼女の闘志の変化に気が付き、アスファイが膝が崩れた瞬間と同時にマファイは距離を取って

「どうした？もう諦めますか？Lv2に一方的にいいようにヤラレて闘志まで消えつつある、それでいいのか？アスファイ・アル・アンドロメダ！」

俺の言葉に、アスファイは歯を食いしばって立ち上がり、目をぎらつかせ

「貴様に何が分かる！貴様なんかにーっ!!」

アスファイは、一心不乱に俺になりふり構わず攻撃を仕掛けて来る、その攻撃を槍と体で裁いて行くがカウンターを乗せる余裕がない

「やつとらしくなつたじゃんか！」

アスファイ自身も知らなかった、初めて自分の中の獣を呼び覚まし必死に攻撃する、さすがにこうなると地力の差が出るので、今度は俺が防戦一方になる・・・しかし

「ど・・・どういう事なの？・・・なぜ魔力が」

ようやく自分の魔力が奪われることに気が付いたアスファイは、仕方なく距離を取って自分の身に何が起こっているのかを確認する

「おしかったですね、そのまま攻撃してれば時間切れの前に俺を倒せたものを、勝機を逃がしたんですよ貴女は」

「どういう事なんです！答えなさい!!」

「ゴライアスとの戦いするとき、俺は何をしましたか？」

「・・・何って」

ようやく何が起こってるのか気が付くと、アスファイは魔力が吸い尽くされる前に、俺を倒し切るという選択を選び、再び速い速度で攻撃を繰り返して行く

しかし元々PTでは壁役をしたりして、ステータスも耐久が高めの俺を押し切る事は叶わず、ほぼ全ての魔力を吸い上げられると、彼女は

「参りました」

「お疲れさまでした、今回は色々熱くなりすぎました、気に障ったら謝

りますが?」

「結構です」

そう言っただけで彼女は退出していった、ようやく全ての審査が終わって一息つくとなんか

「あああーっ、きつっっっ!!やるんじやなかった」

「何も1日でなさらなくても良かったんじやないですか?」

リリの言う事にも一理ある、しかし嫌な事は前倒しでやりたいタチなんだ

「あーそれで俺からの結論ですが全員問題ありません、全員今後ともよろしくー!」

俺の宣言通り、結局全員がヘステイアファミリアへのコンバートを済ませて、大所帯となったヘステイアファミリア

「しっかし結局のところ、資金はほぼ0だ、にも拘らずこの人数をどうにか遣り繰りしなきゃいけない、あーちなみにアスフィ委員長はウチの委員長って事でよろし、実際は副団長ですけどね、元ヘルメスファミリアのメンバーを指揮してくださいって事で、今まで通りみたいな感じですね」

改めて、戦いの後にメンバーを集まわせて話し合う事になった、アスフィに魔力を元に戻した後、若干機嫌の悪い彼女を必死で宥めるの苦労させられることになったが、緊急を要する事なのは彼女自身理解していたようで、会議に参加する事に

「わかったわ、それでその名称は辞めて貰えないかしら?」

「やっぱ駄目です?」

「ええ辞めて頂けるかしら」

うん・・・辞めておこう、彼女のオーラがそう物語ってる

「ベルお前もヘステイアファミリアの副団長に就任しろ、いいな?」

「え??ぼ・僕が??」

「いいからいいから、どうせアスフィ姉さんが大概はやってくれるから、ベル君はヘステイア様の面倒を主に覚えてくれればいいよ、とりあ

えずね」

「うん、よろしく願います」

ベル君は皆に挨拶し、他のメンバーから拍手がベル君に送られたので、受け入れられたのだろう

「さて、アスフイさん、早速ですがマジックアイテムのリストを早急に作って提出してください、出来る範囲で材料と作成方法も纏めてあるとなおいいです」

「はい」

「それと、明日の朝6時に全員集合してください、ヘステイアファミリア独自の技術を教えますので、とりあえずはこれだけかな、ベル達は何かあるか?」

「それってあのスキルの事だよな? みんなでやるの?」

「嫌かベル?」

「ううん、かなり厳しいので、本気で強くなりたいと思う人だけにした方がいいかなって、マジックアイテムを作る専門の人も居るんでしょ?」

「そうだな、ベルの案で行くんで皆さんよろしく」

「はい、畏まりました」

なぜか代表してアスフイさんのみが返事したが、元々こういう感じだったのかな?

「あーそれと歓迎会などは、今日明日には行えませんが、後日必ず行いますんで、その時は参加してください、それと明日から本格的に話し合っって色々決めていくんで協力のほどよろしく願います」

こうして最初の会議は終了し、この件をミアハ様に連絡した後、翌日に備える事にした

翌朝集合すると、若干名は来ておらず、それでも結構な面々が揃った、そして裏スキルの説明をするだけで大騒ぎになり

「まさか、これはマフイさんの発現したスキルではないって事なんで

すか？」

「そうだ、アスファイ、俺のステイタスに、こういったスキルは記載されていない、もちろんベル達にもだ」

「・・・なるほど、これは確かにロキファミアが必死になって、貴方をどうにかしようと考えてる訳ですね」

「めんどくさいし、これから先、ロキファミアとの関係が今後どうなるかも分からない以上は教える気はない心配すんな」

「はい」

初日の訓練が終わり、各自が初日で諸段階までは全員がクリアする事になり、今後は各自、自由参加で行う事になった

訓練が終わり、今後の事を話し合う為に、傘下に行っているミアハ様達2名を含む数名が集まって話し合う事に

「ヘス子ちゃん、皆にお茶を」

ヘステイア様が、全員にお茶を配膳すると、早速話し合いが行われた

「現状ヘステイア様の扱いは、俺専用のヘス子ちゃんの刑執行中なので気にしない様に、それと他のメンバーが真似しない様に気をつけてください」

「マファイ様、以外だれもやらないと思いますよ」

「はい、貴方が異常すぎるんです、神にこの様な扱いなど考えられませんか」

りりとアスファイに指摘され、他の神や幹部からも冷ややかな視線が・・・

「仕方ないでしょ、次下手を打てば今度はウチがヘルメス様になるんだからケジメは必要です」

「・・・分かりましたから、話を進めてください」

「まず資金が圧倒的に足りない、今日の晩御飯すら危ない状況だ、マジックアイテムの中で即ヴァリスに変えられそうなのは変えちゃってください、機密性の高い物はやめてくださいね、売るものに関してはアスファイ主導で報告は要りません任せます、それとダンジョンへ行く方は、この会議の後から向かいます」

「はい！」

「それとPT編成は後でアスフィとやるので、ダンジョンへ行く希望者のリストを回してください、今ある資金を使って料理の出来る方は人数分の食事の準備と各自ホームでの滞在に必要な物資のリストアップと買い出しなどを、後何かあれば随時報告してください、緊急時ですので、暫く慌ただしいかと思いますが全員が一致団結して切り抜けましょう以上です」

「はい！」

この後アスフィと俺とで協議する事に

「店も失ったんだよな？」

「はい、全て失いましたよ、残っているのは、各自が持っている資産が少しと、マジックアイテム類ですね」

今回の件で、ヘルメスファミリアの資産が解体されてしまい、俺達以外に見舞金と口止め料という名目で分配された

「新店舗の確保も重要だけど、住む場所の方が優先ですね、さすがにホームまで無くなってしまっただけでは手狭過ぎる、この場所の付近の土地をリストアップして買収するのがベストでしょうね」

「そうなりますね、今まで使っていたホームと店は2か月の猶予を貰っているので、暫くは何とかなりますが、その後の事を考えればそうなります」

「大きい金が必要です、俺の裏スキルの技術をロキファミリアに売るって手段があるが危険だよな？」

「そうですね、恐らくロキファミリアは興味を示すでしょうが、今後を考えるうえでリスクになるでしょうね」

「仕方ないな、店舗とホームの買戻しに必要な見積もりを早急に提出してください、もし買戻しが高過ぎる様でしたら、ミアハファミリアの店舗と共に新たに建てる事も視野に入れます」

「分かりました」

この後ダンジョンへ行くPTの編成を行い、各自がそれぞれに動く

事になった

俺はアスファイに付いて行き、彼女の仕事を視察しつつ、打開策を模索する事に

ベル達は元ヘルメスマンバー3名を付けてダンジョンへ、それとは別のPTを1つくくって計2PTがダンジョンへ向かった

店舗の定員として数名が行き、マジックアイテムの内職者、生活に必要な食事等の事をしてくれるメンバーと各自が分かれて作業を開始した

俺達2人は、ギルドで手続きを済ませ、店舗とホームの買戻しの件について話し合う事について

「高すぎます、どういう計算をしたら、こんな数字になるんですかー!」
アスファイの姉さん怖いっす、ギルドの担当者との買戻しの件で話し合いの中で提示された金額は売値の倍だった、俺にしてみたら当たり前だけど彼女はそうは思っただけ無いです

「ですから適正に審議した結果ですので、私に言われなくても」

「責任者を出さない、貴方では話になりません!!」

「まあ〜待てよ、アスファイ気持ちは分かるが、彼らも慈善事業者じゃないんだ、そうだろう君?」

「は・はい・・・」

冷や汗をぬぐいながら、アスファイの剣幕にビビる職員を宥め

「それでだ、このままいくとアスファイがさ、ギルドの機密を漏らすって言いだしかねない、それではお互い困りますよね?アスファイはさ、愛した主神が奪われて今にも何かしでかしそうなのを、俺の方でも抑えるのが限界なんだ、分かるだろ?」

「は・はい・・・けどしかし」

「わかるー!君も中に挟まれて板挟みだつてさ、そこでさ提案なんだけども、この記憶媒体を上司に見せて買い取って来て貰えないかな?きつと役に立つ代物だからさ」

そう言つて職員は上司に報告すべく出ていき、しばらくすると上司

らしき人が会いたいというので別室に案内される事に、そこには壮年の男性と先ほどの担当者が

「・・・挨拶はいい、いくらで買い取れと？」

「3億ですね、そのくらいで売れると思うんですよ、コレを量産して売り出せば、戦いの所も結構迫力あるから娯楽としての価値もありますし、新種とも言える階層主の驚異的回復力とか情報が欲しいファミリアもあるはずですからきつと沢山買ってくれると思います、ちなみに口外にはしませんよ媒体を売るだけなんで」

「ふん、いいだろう差し押さえていた分を差し引いて支払う、この件について他にいかなる手段を用いても絶対に漏らしたりするなよ？それと続きがあるなら出せ」

「追加分は2億ですね、嫌なら他に交渉権を買ってくれる場所を探して売るだけです」

「却下だ、追加分と合わせて3億までだ、貴様達とてギルドを脅し続けてもいい事はあるまい」

「舐めた事ぬかすなよ、俺達が弱小だからって従う理由にはならん、合わせて4億だ、差し引いた分はアスフィの口止め料とする」

ここで相手の心がぼつきり折れる、ギルドとしての脅しに屈しないだけで、こうも弱いとは、交渉も下手過ぎるギルドの権力を期待しすぎだ、そして相手は深々と頭を下げて嘆願してくる

「・・・追加の記憶媒体と全員の情報統制量込みで4億で頼む、この通りだ」

この辺りが、落としどころと判断、これ以上は不味すぎる

「分かりました、4億ですべてお渡しして、全員の情報統制で手を打ちます」

こうして店舗とヘルメスファミリアのホームを取り戻し、追加で3億程度の資金を調達する事に成功し戻って手続きを正式に済ませ、ホームへ戻る事に

「いあくなかない価格でしたね、資金に暫く苦しまなくて済んだ」「・・・ヘスティア様が貴方を悪魔の様と言った事、今回身に染みて感

じさせられました」

「やだなあく平和的な話し合いだったじゃないですか、人聞きの悪い、それで店舗とホームは借金して取り戻した事にして、3000万の借金を背負った事にしておいてください、間違っても4億の収入から買い戻したなんて言わないでねアスファイ」

「なんですか!」

「今新たに加わったメンバーと元から居たメンバーが一致団結して、危機を切り抜けようとしてるんです、その心意気は是非とも買うべきです、一応ウソはいけないので、正式な借用書をヘステイアファミリアと俺とで結びます」

「頭が痛くなって来たわ・・・あの記憶媒体の中身も貴方以外知らないのに口止め料は払わせるし・・・確かにあの4億は貴方が作ってきた事には変わりないですが、あんまりです」

「さてその話はもうおしまい、残り3億を使って土地の買収を始めますよ」

「・・・もう知りません!」

アスファイが拗ねちゃったので、この件は後日に後回しにして、予定していた業務に向かうのだった

後日ベルとりり、そしてヴェルフの3名でLvアップの祝賀会が行われていた、しかしそこでまた新たな火種が燈り始めているのだった・・・

ひまわりの神様

「それで、アポロンファミリアの奴らが探りを入れて来てると?」

俺はLvアップをした2人を祝う祝賀会に行こうとして準備をしていたら、アスフィに緊急の案件があるからと、半ば強引に引きずられ話を聞く事になった

「はい、あからさま過ぎて何を考えているのか、狙いはベル・クラネルでほぼ間違いなさそうです」

相変わらず、色兔はもてやなあくつなどと思いつつも話を続ける

「それで粘着女神は、この件知ってるのか?」

「粘着女神とは???」

「あーゴメンえくつと・・・フレイア?フレイヤだっけかな、そう言う名前の女神いない?」

「・・・怒られますよ、絶対に他では言わないでくださいね」

「あーいいから、それでフレイヤファミリアは知ってるそうか?」

「さあくなにゆえフレイヤ様の所が関係してるので?」

「あそこもベル君に執着してるからね、あの粘着女神にしてみたら面白くはないでしょう、下手に探るのは不味いな、俺自ら出向くか、あー不味いなオツタル君と再戦になるな、何かいい案ないです?」

「まずどこから突っ込めばいいのです?とりあえず頂点と再戦って所から聞かせて貰えます?」

俺、誠実に説明中・・・

「良く生きてましたね、っていうかこの件を私に話してよかったんですか?」

「あーいいよーヘルメス様への土産話にでもどうぞ」

彼女達元ヘルメスファミリアの全員ではないが、未だにヘルメス信仰者はいるし、それを分かった上でコンバートを許可してる

「全く・・・それですね、一応私の方で話を入れておきます、あそこはウチの客でもありますんで」

「そうしといてくれると助かるよ、それでヒマワリの神様は、どういう

性格してるか知ってる？」

「・・・ホントいい加減にして頂けますか？本気で怒りますよ、性格はヘスティア様に聞いた方が早いと思いますよ、少なからず因縁があるとの事ですし」

「了解、聞いておくよ、動きからして、せつかちなのかアフォなのか判断がしづらいな、一応暫くの間ファミリア全員手狭だけど、ここで団体行動だな、バカだった場合誘拐とかする可能性がある、ミジンコ並みの低脳なら誰かに言いがかりをつけて来るかな、ちよびつとおりこうさんならこのあからさまな探りを利用して警戒させまくってジワジワ嫌がらせして俺達の反応を伺うかな、まともなら今後は手出ししてこないかな」

「なるほど、一理ありますね、相手がおりこうさんだといいですわね」
「そうだね、また神を失脚させると、俺の二つ名に影響しかねんし」
「またですって?!」

「あー悪い、以前にソーマを解体したんだよ、なので今回は辞めて欲しいかな、まだ俺の二つ名が決まるの先だしさ」

「すつごく個人的な理由ですね、それで他には対策はされるので？」
「いや、これ以上はちよびつとおりこうさんだった場合、相手に乗る事になるから面白くないですね、なのでここまですして様子見をします、この建物の中なら俺のサーチ範囲内ですし」

「構わないですが、彼らは元ヘルメスファミリア全員が、ヘスティアファミリアにコンバートした事知りませんがよろしいので？」

「はあ？こないだギルドで登録したじゃん、どゆこと？」

「ギルドは、登録したとしても公表とかはしませんよ、聞かれれば答えるでしょうけど」

「もしかして、そう仕向けた？」

アスファイは、あからさまに視線をそらし話を続ける

「それでメンバーを全員ここへ集めるのですか？」

「あー・・・そう、そうなんだ、アスファイの手腕は怖いっすね、この件でアポロンが潰れたらアスファイのせいだからな！絶対だぞ!!」

「私は知りませんよ、ただファミリアの情報漏洩を阻止しただけです

ので」

「うわあ・・・責任逃れだ、政治家みたいだ、ひつどおーっ」

「話を進めてください、アフロロンじゃなかったアポロンだけに構ってられるほど、私達は暇じゃないんです」

「言いつけてやる、あの2柱に言いつけてやるからな・・・さっきの話は撤回して現状維持で、狙われるのは俺達3人と1柱だけだし」

「まさか撮影してるのですか？だとしても無意味ですよ、ヘルメス様は旅に出られましたし」

「アフロロンとかびつくりだわ、俺の言ったヒマワリの神様のほうがまだかわいいぞ?・・・しばらくあの2名と一緒に鍛えてくるから、運営任せるよ」

「勝手に任せないください、貴方が団長なんですよ、私もここへ頻繁に来てたらバレます」

「構いませんよ、俺達小遠征するから居ないし、ヘステイア様の面倒だけ見てくれれば、そうだミアハ様に頼むか」

「それで行きましょう」

その夜、ベル君達とアフロロンが喧嘩をして帰って来た・・・ミジンコだったな

即座に該当者3名とヘステイア様を呼び出して、詳しく話を聞く事に、丁度アスフィは戻ってしまったので居ない

「まず、怪我もなく一方的に、ぶっ倒してきたんだな?」

「ううん、ヴェルフは少しやられちゃったよ、それで、ごめんなさい」
「どうやら、ベル君はここに来る前にヘステイアに少し怒られたよう
うで、しょんぼりしてる」

「あーいいからいいから、こうなるのは想定範囲内だったんだよ、今日俺が行けなかった理由もそこにあつたし、アスフィからその件の説明受けてたんだ」

「どういうことなんだいマフィ君」

「最近うちの近辺を探ってるのか分からんが、アポロンの奴らがこの近辺をウロウロしてるらしいから対応を考えて欲しいってアスフィ

が言ってきたんだよ」

「なるほどね、次に相手のやって来そうな事の中に、誰かにちよつかいをかけて来るんじゃないかって考えてたんだね？」

「3つほどパターンは話し合ってたけど、ミジンコ並みの行動ですね、なので今後の対応もやりやすくて助かります、ヴェルフは本当の被害者かな、悪かったなウチのごたごたに巻き込んで」

「いや、俺は全然いいぜ、ダチの為だからな気にすんな」

「相変わらず男前つすね、この後の話どうする？聞いてくか？」

「もちろんだ、俺にも知る権利があるから聞いたんだろ?？」

「そういう事だ、もうヴェルフも当事者だからな、話の続きをするけど、おそらく相手が次に仕掛けて来るのは近日中だ、神々の集まる宴って次は何時です？へステイア様」

「うーくん聞いてないかな、けど誰かがそろそろ主催してもいいかもしれないけど、どうしてだい？」

「次に仕掛けるとしたら、アポロンの神自らが出て来るはず、こんな早いタイミングで動いた事から、相手の神はせっかちでこらえ性が無く、頭はミジンコ並み、へステイア様はあのヒマワリの神様と何か因縁があるって聞きましたが、俺の推察はどうですか？合ってます？」

「相変わらず、神を神と思わない奴だな君は、そうだね、おおよそ合っているとと思うぜ」

「なら次の会合が決まってないなら、アポロン主催だろうな、そこで因縁をつけて対立し戦争遊戯に持ち込むはずだ、これでほぼ間違いない違う可能性があるとするなら、俺達の事をもっと詳しく調べて手を引くかだ」

「おいおい、話デカくなってねーか、本当にそうなるって言うのかよマフィ」

「まず間違いないね、2〜3日後には必ず動くはずだ、そうでなくては今日の騒ぎの意味がない」

「ボクも同じ意見だね、アイツなら明日にも動いてくるだろうさ」

「決まりだな、へステイア様は神々の会合出るなよ？時間を稼ぎたい」「何をするんだい？」

「相手が少数弱小と思ってるなら相手の土俵で、確実に完璧に勝つ！けど今の俺達3人ではアポロンの所に、何をどうしたって全く歯が立たん、なので出来る限り鍛えに行く小遠征だ、準備を明日1日で行い、その後1週間の遠征へ向かういいな？」

「うん！」「はい！」「ちよつと待てよ！」

「ヴェルフなんだ？」

「元ヘルメスファミリアのメンバーに頼らないのか？」

「そうだけど？何か問題がある??」

「無茶過ぎるだろ！どう考えたってアポロンファミリアは小さなとか弱小なんかじゃない！」

「仕方ないだろ、手伝ってくれないだもん」

「お前団長だろうが！そういう事を言ってる場合なのか?!」

「あいつらは、まだコンバートして1週間も経ってないんだ、万が一があるんだよ、それに、あいつらは俺が原因でファミリアごと潰されたんだ、後ろから狙われるなんざ御免だね」

「つち勝てんのかよ、たった3人なんかで」

「2週間引き延ばして可能性は1%だろうな、数の差は絶対に不利になる、かといって信用しきれないメンバーで挑めば1%とて危うい、まあそういう事だとりあえずヴェルフは気にするな、所詮は他所のファミリアの話なんだ、話を最後まで聞かせたのは親友だからだ」

ヴェルフは何かを想いながら押し黙り、暫くした後部屋を出て行った

その後、小遠征の話し合いをした後、ヘステイア様と話の場を設ける事に

「それで宴なんですけど、行かずに無視した場合なんですけど、次にする行動はおそらく襲撃か誘拐だと思われれます」

「あり得る話だね、それでどうしたいんだい？」

「戦争遊戯が決定してから開催までに、どれだけの時間が必要だと考えます？」

「・・・うん、3日〜1か月くらいかな、規模によってとか色々あるからね、1対1の決闘の場合はスグだろうし」

「やはり間に合いませんね、襲撃が予想されるターゲットですが恐らくヘステイア様になります、明後日から俺達は居ませんし」

「あーもう、やっぱそうなるのかー、嫌だぞボクは」

「アスフィを護衛に付けたいのですが、元ヘルメスのメンバーもターゲットにならないとは言えないんですよ、なのでヘファイストスファミリアに暫くの間滞在するか、ロキファミリアに頼るくらいしかないんですよ、後者は出来れば避けたいですね」

「宴に出て、そこから時間稼ぎしたほうがいいんじゃないのかい?」

「できますか?出来なければベル君を失いますよ、相手のターゲットはベル君なんですから」

「本当なのかい?!何故それをもっと早くに言わないんだい!!」

「間違いない情報ですよ、アスフィが言うんだから間違いない」

「信用してるんだね、ならなおさら彼女達を使うべきなんじゃないのかい?」

「使いますよ?何を言ってるんですか?」

「はあ?君は信用しきれないとか、恨みを買ってるんかもしれないからって・・・」

「あの場で本当の事を言える訳ないでしょうが、俺はこの機会に乗じてヴェルフが欲しかったんだ」

「・・・悪魔」

「何とでも言えよ、とりあえず種は蒔いたんだ、後は運に任せるしかないかな、それとアスフィ達は使うけど、戦闘には使いませんよ、こないいいチャンスは無いですからね、ベル君にはもう1段階強くなってもらういい機会ですし、利用しまくりですよ、相手がミジンコですからね、やりたい放題です」

「相手が可哀そうになって来たと思うのは、ボクの気のせいだけなんだろうか・・・」

「何を言ってるんです?ヘステイア様がカギを握ってるんですよ、ベル君との永遠の愛の扉の鍵を」

「そんな事を言っつて、どうせ負けても何かしらの手段でどうかしちやうんだろ?」

「あらま、最近へスティア様つて賢くなつてきました?」

「いいから聞かせろよ、ボク達が負けた場合は何をするつもりなんだい?」

「ホームごとゼーくんぶ深層へ置き去りの刑かな、残念ですが、神を含めて全員皆殺しです、ベルはその前に助けるけど」

「・・・分かつたよ、絶対に時間を稼ぐから、絶対に勝つんだ、宴に参加して戦争遊戯の開始時間を出来る限り引き延ばして見せる」

「じゃー1か月は最低伸ばしてね」

「うっ・・・それはいくら何でも無理がある気がするんだよ」

予想よりも早く、アポロンから宴の招待状が翌日に届けられ、「ただけせっかちなんだよ」と思いながら、内容を聞くと子供同伴って条件だそうだ

「それで君達は明日から出発なんだろ?ボクはベル君と行きたいのに」

「しゃーないな、俺が付いて行つてやる、その時間だけ戻つて来るから」

「えーやだよ悪魔と行くのは」

「ぎけんな!遊びに行くつもりだったのかよ!!」

「わかつてるさ!そのくらい・・・だけど」

「ああん?!」

むりやり納得させて、俺が宴に参加する事にしてやった、いい出会いがありますように、と心の奥底で祈り続けたり・・・

「アスフィは、留守の間頼みますよ」

「はいはい、気を付けて行つてきてくださいね、それでその日だけ、どうやって戻ってくるつもりなのかしら?」

「あれだよ、ぴゅーつと戻つて、ぴゅーつとまた出かける感じ、おわかり?」

おもいつきし殴られた、痛いよママン

「痛つたいなあ〜もう、知りたかつたら自分で少しは考えろよ」

「それで? なんなのシヤキシヤキ答える! 早く! ハリーハリー!」

「それで遠征に居る食料とかを、あまり目立たない様に、生鮮食品とか腐るものとかも全然おkだから、騒ぎにならない程度で仕入れて来てくれる?」

「遠征に生鮮食品? 何を言ってるんですか頭腐りましたか??」

「いいから! 早く行ってこい5人分を10日分でちやちやと買って来い! ハリーハリー! ハリアーアップ!」

今度は蹴り飛ばされました、暴力女とか嫌いとです・・・マフィです

「いつてーな! 何するんだ、あーそっか、生活用品とかも頼むわ、言うの忘れてた件だね、じゃ〜いつてら〜」

「いい加減にして頂けますか? 私ってそんなに信用できませんか?」

「だってさーベル君達にも詳しく言っていないし、神様は少し知ってるかな、なので信用を得る為にも行って来てよ」

「・・・いつか絶対に教えるって約束できますか?」

「わかったよ、今回の遠征でベルとリリには話すから、その後な? いいだろ?」

ようやく納得して、アスフィは手配をする為に部屋を出ていった

「いいのかい?」

「ベル君とリリにはそろそろ幹部としての自覚を持ってもらう為にも教えるつもりだったし、アスフィに関してはアポロンの件が終わって様子を見ながらですね」

「そう決めたならボクは何も言わないけど、かくまってるくれる場所って君のあの場所でもいいんじゃないのかい?」

「いつそ神様もいきます? 精神と時の部屋バージョン2へ」

「はあ? ダンジョンへ行くんじゃないのかい?」

「時折行く感じですね、ほぼ全て? を精神と時の部屋バージョン2で修行します、ベル君はあり得ない速度でステイタスだけが強くなつて

しまった弊害を感じてないみたいだけど、俺はそうは思ってなくて、速度に技術とか経験が追いついてないんですよ、今回はそれを見つめなおす旅ですね」

「なるほどね、ボクもその意見には賛成だけど、その精神と時の部屋バージョン2つてのは何だい、嫌な予感しかしないんだけど」

「前のバージョンは、時間の流れを変えただけの昼と夜があるだけの何も無い部屋、今度のは時間の流れが違うのは勿論、劣化と言う概念が無い、進化とか成長とかはするけど、さらに重力がこの5倍あります、結論として、こつちの世界に居るより何倍もの時間を使え、重力が強いで居るだけで鍛えられ、年を取ったりしない、食べ物とかも腐らない劣化しない、素晴らしい環境にございます」

「あのさあ・・・自重って言葉知ってる？」

「じゃく反対するの？」

「しないけど、ボクも行けるんだろ？連れて行ってくれよ」

「重力強いっすよ？」

「限定解除は？」

「しろと？」

静かになっこり笑いながら頷くヘステイア様、言うんじゃなかった・・・

夕方、ヘステイアファミリア幹部会が行われ、今後の予定について話し合う事に

「明日早朝から小遠征に向かいます、18階層を起点にするので物資の補充などは現地でも行えるので、なんとかかなりです、問題は武器などの消耗品になるんですが、一度こつちに戻るので、その時に補充するので食料と合わせて準備の方よろしくお願いします」

「はい、予定に合わせて準備しておきますね、用意した物資はかなりの量ですが大丈夫なの？」

「問題ないです、後で整理しに行きますので、それと続いてですが、ヘステイア様が狙われる可能性が非常に高いですので、とあるファミリアに匿って貰う事になっています、場所は俺とヘステイア様、そして

匿って頂ける神様のみが知っているだけにします、嘘を見抜く神が相手の場合の事を考えての処置です」

「分かりました、我々は自分達の身だけを守っていればよろしいのですね?」

「はい、アスフイさんに全てお任せします、ミアハファミアアの方も一時的にアスフイさんの所で寝泊まりなどをして貰えばいいと思います」

「うむ、すまんが世話になるぞアスフイよ」

「はい、お任せください神ミアハ様」

「それで最悪の場合ですが、ホームとか店舗を捨てても人命優先でお願いしますね、これだけは全員が厳守してください」

「「「はい!」」」」

「次に神の宴に関する件ですが、ミアハ様も今回は出席してください、ウチからはヘステイア様とベル君に行かせます」

「え?」「昨日と違うじゃない」

「色々考えた結果です、俺とアスフイは外からガードしますんで、アポロンの挑発にうまく乗って戦争遊戯を受けてください、その時の対価とかはヘステイア様に任せます、遊戯方法はファミリアvs俺達は狙ってますが、あえて1vsを狙うような発言でこちらの手の内を見せない様にする事いいですね?」

「分かってるさ、ボクを信じろ」

「その後は出来る限り、時間を引き延ばすために、ヘステイア様は病気になるし緊急入院しますんで、ミアハファミアアの力が必要になります、面会謝絶を絶対に守ってください」

「うむ分かった」

「バレた場合ですが、すつとぼけてくれて構いません、後で何とでも出来すから」

「その何とかなるが怖いと思うのはボクだけなのだろうか?ミアハ本当に頼むぞ色々な意味を込めて」

「あはは・・・怖いな、だが了解した」

「今回の遠征で、恐らくですが、ベルでアスフイを超えるくらい、りり

で今のベルを超えるくらい、俺は性悪団長を超えるくらいになるのを目標に頑張つてきます」

「性悪団長って?」

「フィン・デイルナって野郎です、まーっ性格の悪やつでしてね、今回の遠征の1番の目的は奴に勝つ!その為の遠征ですから」

「それって勇者ですよ?勝てると思ってるのですか?」

「いけるっしょ、アレ結構対人戦苦手なんじゃないかなって思ってるんですよ、俺的にはオツタルの方が対人戦だけに絞れば10倍は少なくとも強く感じまし」

「比べる対象がおかしいですマフィ様、けど期待してますよマフィ団長」

「こんな感じの意気込みで頑張つてきますね」

翌朝、俺達3人は荷物を纏めて集合する

「神様行つてきますね」

「うん、がんばろうねベル君」

「よし、行くぞ!」

「どこへ行くんですか?出口はあつちですよ!」

「こつちでいいんだって付いて来い」

有無言わずにりりとベルを引き連れて俺の部屋に入り、扉から精神と時の部屋バージョン2へ向かおうとすると

「どういう事なのかりりにも分かる様に説明してくださいマフィ様!」

「めんどくさいな、入ったら教えるから付いて来いよ」

俺達は扉から精神と時の部屋2に入り、そこで説明を改めてする事に

「まず、俺の魔法は異空間とか別空間を作る魔法、そして扉を作る魔法、扉の鍵を作る魔法の3つがある、そしてこの空間が精神と時の部屋バージョン2って訳だ」

「やっぱりあの時の事はコレだったんですね、リリをバカにして!」

「そういうなよ、この魔法のヤバイのは、やろうと思えば階層主を地上

に出すことだつて嫌いな奴を深層へ送り出したり異空間に閉じ込めることだつてできる、これがどれほど危険かくらいわかるだろ?」

「そうですね、絶対に知られては不味いですね」

「それよりもなんで神様が居るんですかーっ!」

「ボクの事は気にしなくていいよ、君達のお世話をする為に来たんだ」
「何を言ってるんですか?!マファイ君どういう事なの?」

「ここ安全、俺達修行、世話してくれる人必要、秘密を喋っていい者限定、おわかり?」

「おわかり?じゃないですよ、マファイ君の言う事は分かるけど、神様にお世話をさせるなんて恐れ多いです!」

「ベルの話は後回しだ、後1時間くらいするとヘステイア様以外の俺達は2倍の重力に襲われる、1週間後に3倍、1ヶ月後に4倍、半年後に5倍に増えていく様に設定してある、ここでの1年は俺達の世界の1日だ、たっぷり時間を使って修行できる」

「それだとりりは人より早く老けちゃうじゃないですか!」

「それも対策済みだ、この世界において劣化といった概念は無い、進化とか成長と言った概念はある、ダンジョンとかよりも魔力の回復が早いおよそ20倍かな」

「いろいろ修行するのに便利な場所なんですね、それでリリ達は何をするんです?」

「まず、リリは裏スキルを完成させろ、時間はたっぷりある」

「はい!」

「ベルは、俺とエンドレスバトルだ、怪我しても回復してやるから気にしないで殺す気で来い」

「マファイ君が怪我しちゃったら?」

「言うじゃねーか!」

こうして俺達の修行は幕を開けた、事前に作ってあった湧き水の施設や畑や果樹園なんかの施設があり、飲む食べるには困らない、持ち込んだ食料を合わせれば1年は持つだろう

宿泊施設も完備しており、俺の趣味がふんだんに盛り込まれてるの

でオラリオよりも快適かもしれない

ヘステイアは俺達の修行の様子を、微笑ましく想いながら見守り、食事や掃除などといった事をしつつ、時間を見つけては様子を見に來たりした

修行内容は、1 v s 1を始めは順番にやっていき、自分に足りない物、課題を見つける事から始めた

1時間後には重力が倍になったがLv2に全員がなっているの、それほどの苦にはならなかったが、それでもかなりの負荷となり着実に力を付けて行った

課題が見つかる、それぞれが思い思いに修行を開始する、俺の場合は予備動作のない槍捌きを習得するために、鏡の前でひたすら槍を使い続ける

ベル君は、パワー不足と素直過ぎる攻撃に課題を見つけたので、イメージトレーニングをしたり、シャドーのやり方を教え架空の相手見据えその相手がイメージ通りに出せる様に四苦八苦している

りりは、裏スキルの次の段階の身体強化と基礎訓練に重点を置いて修行している、ときおり俺が手助けをしながらやる事で、確実に成果を出してきている

その他に2匹の召喚獣を出して、じゃれてるじゃなかった組手を行っていたりもしている

1週間がすぎると重力にも完全に慣れ、成果が少しでも出れば手合わせを行い、その中で新たな発見をしたり、次の課題を見つけたりし、着実に力を付けて行った

ステイタスの方は、毎晩夜行い、数字の変化を細かく記載して何をするのが効果的なのかを探ったりもした

ステイタスはダンジョンに潜る方がやはり上昇する数値が大きい事から、モンスターを倒すとLvにに応じて苦戦とか関係なく入手できると分かり、今後の役に立てようと考えた

そしてステイタスが、概ねカンストしたのは俺とベルが4ヶ月後、りりが半年後にそれぞれステイタスがカンストしLvを引き上げさらに精進した

「Lvアップおめでとうりり、ようやく許可が下りてよかったね」
「はい、ベル様も次の段階までもう少しなのでは？」

「Lvアップもまだ出来ないみたいなんだ、まだ先は長そうかな」

「これでようやく全員Lv3になった訳だ、明日はLvアップによる体の変化に慣れる為に、俺とベルで徹底的にしごくから覚悟しろより」

「はい、お手柔らかにお願いしますね」

「しつつかし、まだこれだけ滞在して半日なんだろう？、予定では1年なんだから、まだ半年もあるし、もう少しゆっくり修行してもいいんじゃないのかい？」

「だめですよ神様、まだ僕は全然マフィ君に勝ってないんですから、休むなんて出来ません」

「けどねベル君、無理しすぎても良くないと思うぜ、明日くらい全員Lvアップした記念に休んでもいいんじゃないのかい？」

「それはそうなんです、絶対に負けたくありませんので、りりとマフィ君と神様で休んでは如何ですか？」

「りりは休みませんよ？今すつごく調子いいんですから、勿体ないです」

「俺もパスかな、ベルに負けでもしたら、たまったもんじやない」

「はあく・・・分かったよ、気がすむまでやって来るといいよ」

こうして精神と時の部屋バージョン2の修行は後半へ続くのだった

修行の成果と宴

精神と時の部屋へ入って半年が過ぎ、そしてさらに2か月が過ぎた頃、全員が5倍の重力に完全に慣れて、修行のペースは更に過酷さを極めているのに、ベル君がトンデモ発言をする

「マフィ重力もつと上げる事って出来ないの？」

どっかのサイヤ人みたいな発言をしたのだ、出来はするけどこれ以上は負荷が大きすぎて元の世界に戻った時にどんな変化が出るかわかったもんじやないから、1年で5倍って決めてたのに、それに結構ムキムキになって来てますぜ、これ以上だと本気で筋肉ダルマになるぞ、最近になって俺を呼び捨てにするようになったし、これ以上の変化は俺がヘスティア様に何されるかわかったもんじやない

「条件がある、纏を寝てる時も起きてる時もするなら上げてやる、これ以上は無駄な筋肉が付いてしまつて動きが鈍くなる恐れがある」

「そうですねベル様、りりとマフィ様は既に纏を寝てる時も起きてる時もしてる様にして重力に対抗してるんです、ベル様も筋肉だけに頼つてれば無駄な筋肉で長所の素早さが堕ちます、それに筋肉ダルマのベル様は見たくありません」

「そうだぞベル君、この重力の修行は裏スキルの纏を完璧にするためにやってるんだぜ」

俺達に総攻撃を食らい、しぶしぶ諦めると同時に、纏を続ける訓練に入ったベルは必死に続けるが、寝てる間に纏が切れてしまい、どうしても維持できないでいるので、ベル君は俺に泣きついてきたので、特別訓練をする事になった

「これって・・・完全に寝てしまつたら頭の形変わりそうなんだけど」

「ちなみに抜き打ちで、俺がナイフでロープを切るからよろしく」

何かと言うとH×Hでお馴染みの、ビスケがゴンとキルアにしていた寝てる間も意識を飛ばし切らない訓練だ

「なるほど、考えましたねマフィ様」

「ちなみにロープが切れたら、自分で再度設置する事、ロープを放す度に石は大きくなる事、分かったらとりあえずやってみろ、寝る時はこ

れから毎日これをする」

「分かったよ」

こうしてベル君の寝る時の訓練が1つ追加され、さらに周を訓練に取り入れる事にした、これは俺達3人が行い、結果想像以上の成果が表れる事になった

さらに2ヶ月後

「ラスト1か月になった、周と纏は全員完全な物になったので、いつきに10倍に引き上げる、総仕上げだ纏で抵抗しないと、即死する可能性もある覚悟はいいな？」

「はい！」

重力を10倍に引き上げると、纏の出力がかなり必要となり、俺はともかく2人は厳しそうな表情を浮かべる

「やめるか？」

「大丈夫だよ！」「大丈夫です」

そしてこのまま生活を続け、予定していた課題を概ねクリアし、最終日となった

「よし、明日ここを出る、出たら15階層から順番に探索を行う、目標階層は35階層になる、その間に宴もあるから全部を探索には回せない、それでも俺の魔法で効率よく探索を行えるから、強ささえあれば行けるはずだ」

「はい！」

「それでは今日くらいは休むなりして明日に備えよう、解散！」

その夜、全員のステータスを確認して、この1年を振り返った

マフィ Lv4

力 SSS 1640

耐久 SSS 1905

器用 SSS 1487

敏捷 SSS 1397

魔力 | 199X

幸運 F

耐異常 E
治癒 I

スキル 大魔導士オーバーロード

魔闘気操作マジックオーラマスター
完全領域支配者パーフェクトタクト

ベル・クラネル Lv4

力 S S S 1740

耐久 S S S 1512

器用 S S S 1387

敏捷 | 199X

魔力 S S S 1390

幸運 E

耐異常 F

逃走 H

スキル X X X X X X

英雄願望アルゴノート

大魔導士オーバーロード

リリルカ・アーデ Lv3

力 S 1004

耐久 A 905

器用 A 987

敏捷 B 897

魔力 S S S 1479

耐異常 F

魔防 I

スキル 縁下力持アーテル・アシスト

大魔導士オーバード

聖獣奏者セイントサモナー

魔闘気操作マジックオーラマスター

うん全員チートだね、完全にぶっ壊れたわ、俺達に勝てる奴いんのか？、つてくらいになった、ちなみに2人には俺の魔法は教えていない、何度も詠唱を教える様に問い詰められたが絶対に教えてあげない、代わりに精神と時の部屋2の鍵は貸してあげた

この数値に現れない、経験や戦い方などが完璧に裏打ちされており、同じステータスを持つてたとしても、そうそう負ける事は無いだろう

大魔導士と魔闘気操作は、裏スキルが発展し完成したスキルと言う事で確定した、ちなみに魔闘気操作は自分で魔法が作れる

しかしりりは、俺の空間魔法を、どうにかして作ろうとしてたが、レポートとアイテムボックスという魔法までしか作る事は出来なかった、いい加減諦めて欲しい・

ベルは魔闘気操作の取得が出来なかったが、大魔導士は発現したので、ベル的には十分だと言うので、近接戦闘の訓練に切り替えて訓練した結果だ、彼曰く魔法作れても何作っていいか分からないとの事だ、その分を補う形で近接戦闘は魔法無しで、俺と戦うとほぼ互角の戦いになるほどまでに強くなった

それと俺の許可なく裏スキルを教える事はヘステイア様からと俺から、2人に対して厳守する様にと誓わせた

全員Lvが大幅に上がってるので、これを報告するのかの件は、ヘステイア様に全部任せる事で決定した、結局言い訳を考え神々の前で説明するのはヘステイア様だからだ

ヘステイア様との2人だけの会議で、アイズに多分勝ててしまうんだけどどうする？という重要課題を、何日もかけて話し合った結果、成り行きに任せるしかないが、出来る限り引き延ばす努力をする事で決定

翌日、精神と時の部屋2を出て誰も居ないことを確認してから15階層へ行き探索を開始した、ヘスティア様は、宴に必要なドレスを発売したいとの事で、ホームへ送った、後はうまくやるだろう、姿を隠すマジックアイテムを貸したし、宴前に襲って来るとは考えにくいので大丈夫だろう

「うわー体が軽い！羽が生えたみたいだーっ！」

どこの悟空さんですか？このベル君は・・・

「ホントですね、体の重さを感じませんし変な感覚ですね」

2人してぴよんぴよん飛び跳ねてはしゃいでる、確かに体の軽さが変に気持ち悪くも感じなくはないが

「気がすんだら行くぞ、りりがルートを決めて行くぞ、もう出来るだろ？」

「はい！では行きますよ2人共」

「おkー」

敵を発見して各自が戦うが、あまりの手ごたえの無さに、りりが先に飽きてしまい、最短で突っ走る事になった

「最短で下へ向かうのはいいけど、縦穴使うのはどうかと思うぞ」

「いいえ、ここでは戦いになりません、さっさと向かいますよ」

「へいへい・・・」

「そうだねりりの言う通りだよ、行くよマファイ」

ありえない速度で走り抜ける3人、人に走つてるところ見られない様にだけりに指示を出して走り抜け、あっという間にゴライアスの居る階層へ階層へ到着すると同時に全員がゴライアスの気配を察知

「やったーゴライアス湧いてますね」

「ちよつと不味くない？りり」

「ベル様は、ビビってるんですか、いまのりり達なら勝てるはずですよ」
どうやらゴライアスを黒いゴライアスと勘違いしてるベルは、勝てるんか不安な様で

「とりあえず、2人でやってみなよ、あの黒いのよりは遥かに弱いし」

「はーいー！」「うん」

ゴライアスの場所まで一気に走り抜け、りりがシロと共に攻撃開始

する、リリはシロが超お気に入り、めったに他の召喚獣は呼ばない
おかげでシロはめちやくちや強く忠誠心が半端ない、さらにリリは
シロとは念話を通じて会話も出来るらしく、シロの声とかはリリ曰く
可愛すぎて毎日何時間でもお話してるそうだ

リリが攻撃を開始して、ベルが攻撃を仕掛けようと自己強化の魔法
を使い攻撃を仕掛けると、ベル君の攻撃が当たる前にゴライオス撃
沈・・・

「ソロ討伐おめー」「うそ・・・」

「わーい！シロやったね！」「ワンワン！」

そのまま18階層のセーフティゾーンへ行き、適当にいろいろ見
て回って、先日の大騒ぎからの復興の速さに、全員が驚きを隠せない
でいた

「人ってすごいね」

「そうですね、噂では機能を回復したみたいなのですが、ここまで
とはリリも思いませんでした」

そのまま19階層へ行き次々と倒していくが、やっぱり少しすると
飽きるのか次の階層へ足早に向かう

「このまま襲って来るのを最短で倒しながら向かいます、ちよつとり
リ達のLvでは弱すぎますので、付いて来てくださいいね」

「はーい」「うん」

こうして最短で突き進み25階層へ到着し、一旦昼飯を食べる為に
精神と時の部屋2に戻って食事をして再び突き進むことになった

食事を食べ終わり、簡単な打ち合わせの後再びダンジョン探索の続
きをする事に

「これって他のファミリアが知ったら絶対に怒りますね、リリ達は恵
まれませんよ、マフィ団長様々ですね」

「褒めても教えないけどな」

「やっぱダメですか？リリはこんなに団長をお慕いしてるのになですか
？」

「裏が見えすぎて引くわーベルもそう思うだろ？」

「あははは・・・」

「そういう事言わないでくださいよ、ベル様のリリに対する愛が薄れるじゃないですか」

「はいはい・・・」

「もうからかうのはいいから、リリ集中して」

「可哀そうな奴・・・」

結局その日は35階層まで到達し、精神と時の部屋2で睡眠をとってから再び探索へ向かった、時間の流れが違うので、リアル時間では当日の夜9時に出発んだけどね

そのまま37階層まで行き、ここにあるという闘技場と呼ばれる場所へ向かうと、噂通りモンスターが山のように溢れており、これが湧き続けるのだという場所だ

「ここで気がすむまで戦うぞ」

「すごいね、こんな場所があるなんて」

「噂には聞いてましたが、実際に見ると圧巻ですね」

その日は、結局37階層で戦い続け、集団戦闘の訓練と称して次々に倒していった、やはりリリには指揮をしながら戦うのは苦手なようで、結局俺が指揮しながら戦う事になった

「怪我は誰もないみたいだけど、結構神経使いながら戦ったから、疲労が結構あるな」

「結構どころかかなり疲れました、相変わらず集団戦はマフィ様には全く勝てませんね」

「うん、僕も自分だけで精いっぱいなのに、よく指示を出しながら戦えるねマフィは」

「うーくん慣れかな？それよりも、これからどうする？夜食？朝飯？を食べてまだやる？」

「もう時間の感覚おかしくなって来てますね、そういえば宴は明日でしたよね？」

「そうだね、明日の夜からだよ」

「リリはここで戦って、昼ぐらいに戻りたいですね」

「僕もそれでいいかな、マフィはどうしたいの？」

「俺も同じ意見かな、明日の昼を目安に戻ろう」

「了解！」

こうして腹時計が鳴るごとに食事をとり、再び戦うというスタイルで経験値と魔石などを稼ぎまくり、予定通り翌日の昼にホームへ戻った

ホームに戻ると、ヘステイア様が、プリプリしながら待っており話を聞くと

「なんで昨日は戻らなかったんだい？ボクは心配したんだぞ」

「言ったじゃん、小遠征だって」

「ううーそうかもしれないけど、1日でも顔を見ないと心配なんだ察してくれよ」

「わーったから、ステイタス各自更新して、アスフィに来るように伝えてくださいよ」

「アスフィ君なら、朝から執務室に居るぞ、君達の帰りを待ってるみたいだね」

「怒ってた？」

「うん、相当怒ってたよ」

ステイタス更新を急いでやってもらい、大特急で執務室に向かった「アスフィたっだいま！」

「……」

「あれれ〜怒ってらっしやいます？」

俺の方をちらつと見ると、本に再び目を向けて読み始める、なんか悪いことしたのかな？と色々考えるけど思いつかない

「ふーっ、まあいいわ、おかえりなさい団長、成果はどうでしたか？」

「まあ〜ぼちぼちかな、明日出発する前に、ベルとりの手合わせしてあげてくれないかな？、どの程度まで強くなったか確認しておきたいんだ」

「そうね、貴方もよ？私が見てあげるわ」

「あ〜…出来れば遠慮したいかなって言うか」

「団長もですからね！いいですか？」

「はい！」

話は移り、今夜の宴について話し合う事になった、俺達が出ている間に特にアポロンからの接触はなく動きもないそうだが、アスファイが言うには宴の準備で団員が必死になって準備してるとの事だ

「さて、今夜仕掛けてくると思うとワクワクすつぞオラ！」

「それは何なんですか？それよりも調べておきましたから目を通しておいてくださいね」

手渡されたのは、団員のデータと、特徴などを詳しく纏めてある資料だ、次々と見ていくが特に問題は無さそうだ

「団員の数凄い人数だな、よくこんなにも居たもんだミジンコなのに、それで・・・団長のヒュアキントス・クリオがLv3ですか、隠してる可能性はありますか？」

「恐らくないでしょうね、討伐したゴライオスの件を時期などから考えてもLv4には至っていないと考えられますし、ダンジョンへ行ってる頻度から見ても考えにくいですわね」

「なるほどね、これだけの数だ、切り盛りするだけで動きが鈍くなって満足に動けないってか、・・・しっかし良くここまで調べましたね、ダンジョンへ行ってる頻度とか、どうやって調べるんですか？」

「Lvが上がると色々ギルドから融通も利くんです、こういった情報もLvが上がるごとに調べやすくなりますし、私ですと店舗関係での繋がりなども使いますので調べるのは結構得意なんですよ」

「なるほどね、逆にひまわりの情報採取能力は？」

「全くダメですね、素人同然が数名ほど真似事をしてる程度です、未だにハステイアファミリアは3名だと思ってますし」

「あちら、リリー1人の方がマシって事か、っていうか比べるのも失礼だったな」

「そうですね、アーデさんは、裏事情に比較的聡明ですので、彼女クラスがあちらに居た場合は気が付いていたでしょうね、それと気になる

子が1名居るんですが、予知夢を見る事の出来る子が居るそうですが、それをあのファミリアは全く信用しないで検証も行ってはいない様ですね」

「マジ？そんなのが居るの？」

「はい、確か・・・この子ですね、カサンドラ・イリオンLv2です」

「なるほどね、この子は必ずウチに欲しいな、ベルをぶつけてみるか色兎なら、無意識に口説いて来るはず」

「賛成しかねますね、現実性を取るなら戦争遊戯の賭けの対象にするべきです」

「それじゃく意味ないな、俺が欲しいのは彼女の能力もそうだけど、1番欲しいのは信用と信頼ですから、恐らくそうしないと予知夢があったとしても利用価値は無いでしょう」

「团长自ら口説いてみては？、色々手回しするのは回りくどすぎて失敗しそうですし、それに欲しいのは团长だけであって、私は興味ないですし」

「うーくん、一度接触して見てからかな、性格に難あったりとかしたら嫌だし、そうですね俺が動きます」

「それでヘスティア様達とミアハ様達の衣装とか手配の方は？」

「全て終わってますよ、今頃ベル君がヘスティア様に引きずり回されてる頃だと思えますよ」

「了解、色々助かったよアスフィ、君が居なければこうも順調には全く進んでないどころかファミリア自体も危なかったよ、本当にありがとう」

「まだ終わってませんよ、それで勝算はどれくらいになったんです？」

「うーくん・・・少なくとも見て50%かな、ちよつと鍛えすぎちゃった感じでした」

「・・・何をしたんです？」

「あまり言いたくないな、けど言える範囲で言うと全員Lv3には達したかな」

俺とベル君は4だけだね、けどあえて言わないアスフィ怖いんだも

ん

「はあ?!冗談ですよ?」

「これがマジなんですよ、スキルも全員1つは追加されたし」

「1つは?って事は2つとか3つ発現した人も?」

「そうだね、りりが3つ、俺が2つ、ベルが1つかな」

「何して来たの?ホント答えないと怒るわよ?」

「いやあく不味いんっすよ、俺の隠している切り札の中でもトツプクルスのヤバい奴だから」

「それって私が付いて行っても効果出る事なの?」

「死にますよ?色々な意味で」

主に俺の精神がだけど・・・しかしアスファイは見事に勘違いをし、話を切り替えて来た

「・・・明日の手合わせ相当気合を入れないとマズそうね、今日はこのまま私は失礼するけどいいわね?」

「あく・・・はい、お疲れさまでした」

一緒に宴の監視をするって言ったのに・・・言ったのに・・・言ったのに・・・

彼女の表情が、有無言わせない感じだったので、諦めて1人で監視する事になった

さてさて宴が始まり、俺はこっそり用意したタキシードとシルクハットとパーティー用のサングラスに身を包み魔法を使って上空から様子を探る

「なるほどね、こういう感じなんだ、さてさてカサンドラちゃんはどこかなあ・・・っと」

ベル君達は知ってる気配なので直ぐに見つかるが、姿を頼りに探すのは結構大変で、しらみつぶしに探していく

「子供同伴のせいで、探す対象が多すぎんぞ、これが奴の手立てだとするなら、やりおるわい!」

などとくだらない事を呟きながらも探し回る

「あくアレかな、情報通りの髪型だし、他には似たのは・・・」

間違っていたら恥ずかしすぎるので、必死に全員を調べ尽くした「ほぼ決定かな、一応姿と気配を消して確認しよう」

すかさず自分の姿と気配を消して屋根の上に降りると、

(貴方の刻印は私のもの。私の刻印は私のもの、シンダー・エラ)

の魔法で黒猫に変身して、カサンドラちゃんやんの近くへ行く、暫くすると、ダフネ・ラウロスらしき人物がやってきて

「カサンドラ少しは手伝いなさいよ、それにさつき言ってた夢って何なのよ空から紳士が現れ空のダンスを踊るだっけか？意味不明だし」
「信じてよ、ダフネちゃん」

「あーもう知らないからね怒られても、勝手に空眺めてなさいよ、私は行くからね」

ありやま、俺の作戦見破られてるわ、こりや本物か、俺の作戦は全く同じで、空から彼女の視線を強制的に奪って引き付けて、彼女を空でダンスに誘うがシナリオだったのだ

(仕方ない、完璧には予知夢で来てないみたいだし、やりますかね)

さっそく空へ上がり、彼女視線が俺と月が重なるようにダンスを踊り、彼女の視線が来るのを待つと、すぐさま俺の姿に気が付く

(よし！)

すかさず彼女に視線を合わせて、視線が合ったと感じたスグにお辞儀をしてゆつくりと近づいて行き

「今宵は宴です、どうでしょう私と一曲踊って頂けないでしょうかプリンセス」

華麗な一礼で彼女の前に手を差し出すと

「は・はひつよろこんで」

ちよつとカミながらも、俺の手を取ってくれたので、彼女にも魔法を使いゆつくりと空へ移動していく

「ひゃあーっ高いです、高いですーっ」

「少々慣れるまでこうしましょう、プリンセスすこし我慢してください」

そう言つて彼女にお姫様抱っこをして、さらに上昇し雲の上へ
「プリンセス大丈夫ですか？足が着きますので、降りて頂いて構いま

せんよ」

彼女はゆっくりと俺に支えられながら足場を確かめる様にゆつくりと足を卸すと

「本当ですね、支えて頂いてありがとうございます、え〜つと〜」

「そうですねムーンライトプリンスと今宵は名乗らせて頂きます」

「あ・あの私は・・・え〜つと〜」

「いいですよ無理なさらなくてください、今宵は宴なのですからプリンセス」

「あ・ありがとうございます」

そして彼女が両足で立った所で、再び彼女に

「どうです、私と一曲踊っては頂けませんか？プリンセス」

「はい、よろこんで」

そう言つて彼女は俺の手を取つたので、指を鳴らして魔法で地上の宴で流れている曲を流し始める

「うっそお〜どうなってるのですか？ムーンライトプリンス様」

そして曲に合わせてゆっくりと踊り始める、彼女に合わせて足を動かしながら、まだ少々怖い様で、ぎこちない感じだが、その辺りはこつちでサポートする様にしながら踊っていく

「驚く所が、音楽とは素敵な感性をお持ちの様だ、そんな素敵なプリンセスに教えてあげますよ、プリンセスが私を見つけてくれたからです」

「私ね、貴方が来るの夢で見たの信じてくれますか？」

「そうでしたか、私もですよ今宵はきつと僕の伴侶となつてくれる方が見つかるつて信じて待つてましたから、プリンセスの夢はきつと今宵の出会いを確かなものにする為に授かったのでしょうか」

「はい／＼」

「ならばプリンセスと私の出会いもまた運命なのです、良ければ今宵は、もう少し一緒に居させてはくれませんか？」

「うん／＼」

曲が終わり、ゆっくりとした曲が流れると、チークダンスを踊る、彼女との視線をそらさずゆつくりと体を寄せ合いながら

最初は照れてなかなか俺に手を回してはくれなかったが、徐々に手を回し体を委ねてくれる

そして曲が終わりに近ずき

「太陽が消え、貴女の背の呪縛が解き放たれた時、私は仮面を脱ぎ捨て貴女を迎えに行きます、それまで夢を語らず待つていてくださいますか?」

「え?」

「私の予知夢です、貴女と同じように先ほど夢を見ました、太陽が消え貴女の背の呪縛が消えるのを、そして貴女は夢を私にだけ語りかけるのを」

「プリンス様分かりました、私必ず待つてます」

「それでは最後の余興です上を見て頂けますか?」

カサンドラが上を見ると同時に、魔法で作った花火が一斉に華を開かせる、音は出ないが夜空に色と緑の幻想的な光景に彼女が目奪われてる隙に次の仕掛けを

ゲートを使って一瞬で地上の人影のない場所に戻り彼女を抱き上げると、ゆっくりと地上に下ろし

「それではプリンセス、約束の日にまた会いましょう、12時の鐘が鳴りましたゆえ魔法が解けます」

そして仮装していたシルクハットとサングラスを取って、深々と挨拶しゲートを使ってその場から消えた

「これでうまくいくかな??.」

少し離れた場所で彼女の様子を伺っていると、上空を見上げたまま一向に動こうとはしない事に、ちよつと心配になって変身魔法で黒猫になって近くに行くと

恍惚とした表情で空を見上げる彼女の姿が見えるが、いかんせんこういう事は初めてなので、これがうまくいったのかさっぱりわからないマフィは頭をフル回転で悩ませる結果となった

小遠征という名の超修行

「ムーンライトプリンス様あ〜」ぽわぽわぽわ〜♡

「ちよつと聞いているの？カサンドラどうしちやつたのよ一体！これから戦争遊戯が始まるつてのに、しつかりしてよね!!」

「ダフネちゃん、私ね今度お嫁さんになるんだ、だから〜、早く沈まないかなあ」

「はあ？ついに夢だけじゃなく白昼夢まで?!」

ダフネはぽわぽわ状態のカサンドラを揺さぶり叩き目を覚まさせようとするが、彼女が現実世界から戻って来る事は無かった

「痛いよお〜ダフネちゃん〜ん、私の事は暫く構わないで、私はあのプリンス様の婚約者なんだから傷がいたら嫌われちゃうわ」

ようやくダフネもいよいよ不味い事になってると判断して、どうか昨夜なにかあったのか聞いたです

「ねえカサンドラ、まさかとは思うけど本当に空から紳士が現れた訳？」

「どうせ信じてくれないもん、だから私の夢は、プリンス様に捧げたのよ」

「空から紳士どころかプリンス？もう何が何だか分からないよーっ！」

「ダフネちゃん、気にしなくていいんだよ、きつともうすぐ分かるから」

ちなみにこんな状態のカサンドラだが、予知夢の効果が、あの日以降飛躍的に向上し、頻繁に夢を見るようになったが、彼女は言われた通り誰にも話さなかった、そして予知夢の効果でアポロンファミリアの状況を誰よりも把握していたのだ

時間は前日の宴の後、俺が成功したのか分からなくて、カサンドラがぽわぽわして空を永遠眺めていたせいで、宴は終わってしまい、参加者が帰り始めた時によりやく「しまった!」っと思っただけでへ

ステイア様の元へ向かった

居場所自体は、即座に分かったが少々機嫌がよろしくない、ベルは楽しかったのか嬉しそう

「お疲れさまでした、ヘステイア様ベル」

「うん、戦争遊戯決まったよ、それでマファイが警戒して周りにいると思っ探してたけど見つからなかったし何かあったの？」

「それは戻ってからにしようベル」

ホームの執務室に戻り、報告を受ける事になった

「戦闘の形式は攻城戦、ファミリア全員で戦う事になる、君の要望通りだ」

「賭け皿は何になった？」

「アポロンはベル君を、ボク達は好きにしてくれていいってき、これでもいいんだろ？」

「なにそれ、ヘステイア様って実はすごいのか？まじ尊敬なんだけど」

「ほほほーっどうだい、見直したる？」

「うん、どんなに調子に乗っても許しちゃう、まじ神様最高っす!!」

「よかったですね神様、なんだか先ほどは機嫌が悪いのかなって思ってたんですけど、よかったです」

「機嫌が悪かったのはどうせベルが、何かしたんじゃないのか？例えばアイズさんとキスしちゃったのを見られちゃったとか」

「ある訳がないじゃないですか、僕はただアイズさんと踊っただけで」
「あーそういう事ね、原因判明したわ、そりやく怒るわな、そりやく怒りが有頂天で頭冴えまくってたわな、おおよその宴の内容分かったよ」

「聞いてくれよ！ベル君たらさ、始めて踊った相手がヴァレンなにがしなんだぞ！初めてを奪われたんだ、うわあああん」

「か神様、変な風に聞こえますから、変な事言わないでください」

「いいからいいから、ベルお前が悪い！以上だ」

「なんでだよ！」

「ヘステイア様は最高の結果を出してくれた、これに報いるのも団長の役目、よってベルとヘステイア様で旅行へ行くといい、行先は精神と時の部屋2での共同生活だ好きだけ行って来い、部屋もダブルベットのある部屋以外は使えないようにしておく、邪魔は一切しない鍵も全部渡そう、ベルは、その間に修行などの一切を禁止とする、思う存分甘い生活をして来い」

「おっおーおーおーっおおおおおおー貴方は神か、そうか私の主神を今見つけたぞベル君！」

「ちよつと目を覚ましてください！神も主神もヘステイア様じゃないですか！」

「そんじやくゆっくりしてくるといいよ、俺これからアスフィの所へ行つて来るから、出来れば、明日の出発までに戻つて来てくれると助かるかな。それじゃお幸せに」

精神と時の部屋の設定を色々変更した後、鍵を全てヘステイア様に渡し、俺はアスフィの所へ向かった

アスフィの所へ向かうと、彼女は自主訓練をしてるらしく、元ヘルメスのホームには戻っておらず仕方なく戻って休むことにした

翌朝、あらかたの準備はされており、荷物を次々に運び込んで準備をしていると、執務室に向かうアスフィの気配を察知して、残りの荷物を手早く処理して向かうと

「おはよアスフィ、昨日は概ね上手いったよ」

「おはようございますマフィ団長、それで詳しく教えて頂けるかしら？」

俺なるべく詳しく説明中・・・

「ヘステイア様の方は想像以上の結果ですね、それに比べて・・・」

しゅんとした俺をアスフィは冷ややかな目を突き付ける

「団長つてやっぱ恋愛経験ないんだあ、話を聞く限り、たぶん成功はしてると思うんだけど、引き込んだ後の責任はきちんと取ってあげてくださいいね」

「なんだよ含みのある言い方だな、宴の戯言だろ？相手だつてまとも

に受け止めないんじゃないのか？」

「さあ、人それぞれじゃないかしら、ちなみに私ですと手を取りはしないですけどね」

「あつらゝ・やつぱ失敗か、慣れない事はするもんじゃないな、そうになると景品に入れて貰うしか手が無いか」

「いえ、最初の打ち合わせ通りにいきます、アフロンファミリアの解散、全財産没収、紙アフロンの今後一切オラリオへの立ち入り禁止、団長ヒュアキントス・クリオの今後10年間のコンバートの禁止だけで十分です」

「うゝん・アスファイがそう言うのなら仕方ないのか、アレは他に渡るの危険だぞ、俺の策が完璧じゃないにしてもバレてたし」

「そうですね、太陽が沈んで背の呪縛から解放されたら、誠意をもって迎えに行けば考えてくれると思いますよ」

「分かった、同じ女性の意見だ信じるよ」

「それで撮影した記憶媒体はあるのですか？」

「あるけど見せないぜ、アレは俺の人生最大の汚点だからな、恥ずかしくないわ」

「そっか・・なにかいいヒントがあるかもって考えたのですが」

「その手には乗らん、アレは俺を含めて見てはならん代物だ、完全封印か処分する品だ」

「あら残念」

話は新婚旅行？へ行った2人の話へ移り

「それでヘスティア様達は行ったきりなの？」

「いや、結局すぐに戻ったみたい、今はまだ双方ともに寝てるみたいだね」

「どっちも残念なのね、それはいいけど出発前に、手合わせしていくのよね？場所は何処にするの？」

「いつもの早朝訓練してる場所。。不味いな」

「そうよ、戦争遊戯が決まって、私達は注目の的よ賭けの対象にもなるんだから、見に来るわよ」

「しかたない精神と時の部屋2を使う、特別な空間だ誰の干渉も受け

ない」

「精神と時の部屋2?」

「俺の切り札の1つさ、この緊急時だし仕方ないだろう」

「そう、おあつらえ向きの場所がある訳ね、それじゃ私は準備をしてくるから、この後7時でいいのかしら?」

「それでいい、ここへ集合だ」

関係者全員が集合し、精神と時の部屋2へ行きさっそく手合わせをする事になった

「ここが言っていた空間なんですね、どういう理論で部屋からここへ来られたんです?」

「あーいいからいいから、さっさと始めるぞ、最初はリリから手合わせしてもらえ、魔法武器道具の一切の制限なしだ、怪我しても回復してやる、思いっきりやれ」

「よろしくお願いします、アスファイ様」

「こちらこそよろしくねアーデさん」

始め!の合図と共に、まずはリリが各種強化魔法を脳内詠唱で次々にかけていく、一方のアスファイは、リリが自身を強化する魔法を使っているのに、いち早く気が付き阻止すべく着弾すると爆発するアイテムで牽制、そのまま煙幕で視界を遮る

当然りにそんな目くらましが通じる訳もなく、あっさりアスファイはハンマーでぶっ飛ばされて撃沈

「大丈夫ですか?アスファイ様」

「勝負ありかな、とりあえず回復魔法で回復するけど次やる?」

「はい、問題ありません」

「次はベルとアスファイとの手合わせだ、準備が出来たら始めるぞ」

そして手合わせが始まる、ベルは強化魔法をあまり好まない、1つだけは使うが並行詠唱を脳内でやるのが苦手だからだ、それでも即座に強化魔法を使って即座に攻撃を開始する

一方のアスファイは、煙玉が俺達に通用しないのだと判断し、次に距離を取って上空に飛び上がるマジックアイテムを使い、上空からの攻

撃を開始する

残念ながら上空でも俺達は戦えちゃったりする、空気を足場にしつつ、軽快に空中へ飛び出す、ベルはかなりの空間把握の適性があり、空中のどんな姿勢でもちやんと見失うことなく動けるのだ

アスファイは当然だが即座にベルに捕まってしまう、アスファイのマジックアイテムとでは機動力がまるで違う為に、アスファイの策は潰えた

さらにベル君の攻撃が、彼女が地面に届くタイミングで決まり、勝負あつた

「さて次はやるのか？やるのなら少し胸を貸してやるぞアスファイ」

回復魔法で有無言わず回復をさせ、少しの休憩を挟み、俺はアスファイに訪ねた

「言い出したのは私です、団長の言う様に胸を借りるつもりでいきま

す」
「その心意気は買おう、しばし手ほどきをしてやる、好きにかかってこ

い」
大きく息を吸って、集中力を高めたアスファイは、自身の持つてるマジックアイテムのほぼ全てが役に立たないと判断し、自分の力のみでの勝負に出た

アスファイの攻撃を当然の様に最小の動きのみで受け流していく、まるで赤子を相手にするかのよう、アスファイも本来ならありえない出来事だったが、すなおに事実として認める事で必死に攻撃を仕掛けていった

「むやみに飛ぶな、隙ができやすい、だからこうやって簡単に体勢が崩れて倒されるのだ、さっさと立て」

もう何年選手だよってくらいベテラン臭を漂わせ、圧倒するマファイは、アスファイを指導するかの如く扱う

「そうそう、いいフェイントだしかし、本気度が足らん、だから簡単に見破られるんだ、フェイントはこうやるんだよ！」

闘気を完璧に乗せたフェイントは、それがフェイントと分かっ

ても、危険を察知し脳が危険を察知するよりも早く体が反応する為、どうしたって身構える、そこにフェイントの効果により顕著に発揮されるのだ

マフィのフェイントに完全に惑わされ振り回され、徐々にボロボロになっていくアスファイ、マフィの持っている武器は只の棍棒、しかも長さが30センチ程度と短い獲物だ、当然マフィが本来使う獲物とは別の代物だが、それでもLv4であるアスファイを完全に掌握し手玉にとってる、これが同じLvの戦いだと言ったとしても誰も信じないだろう

「どうした？この程度なのか？俺がLv1の時にオツタルと戦った時はもつと絶望的だったが、貴様の様に無様に負け犬顔など晒しはしなかったぞ、しかも俺は貴様と同じLv4だ、なのになぜだ？女だからか？年齢を重ね諦め癖が付いたからか？元々負け犬根性が染みついていたからか？」

「っ！調子にのんぬあー！くそがきい!!」

おれに、わざと煽られるように乗って来たアスファイは、がむしやらに武器を振り回して攻撃していく

「だめだぞアスファイ、やけくそになって攻撃しても、遥か格上には通じない、やはりこうするしかないか」

俺の闘気の質を一気に変えると、宝物庫からメイン武器である魔装ホールドランスを手にとって

【魔装】

魔装によって全身に鎧を身に着け武装をすると、あらためてアスファイと向き合い

「これが俺の本気だ、真剣にかわせよ、でなければ・死・ぬ・ぞ・？」

俺はアスファイに向けて本気の殺気をぶつける、アスファイは完全に殺気に飲まれ、足が重くなり体が石のように固くなり、手は震え武器を持つ手が揺れ出す

マフィの「死ぬぞ」のセリフの所で、ほとんどの体の機能を失い、そのまま意識は残っているのに体の神経のほとんどが麻痺した為に上下から流水する

「ここまでにしよう、って聞こえてないか」

あつちやくやり過ぎたかな?と思いつながら彼女に近寄ると、リリが「だめです!マフィ様、これ以上アスフィ様に何かをすれば色々な意味で死にます!」

「分かった、リリに任せるよ」

「まったく君はやりすぎって言葉を覚えるべきだよ、あの2人とは違って彼女は大人なんだぜ?」

「なんか俺ふるぼっこにされてない?」

「後で謝っておくんだぞ、きつとんでもないトラウマになつてるからな」

暫くして部屋から出て来たりりとアスフィに、色々な意味で気まずくなつて、どう話しかけようか迷っていると

「今日から付いて行きますので、よろしくお願いいたします」

それだけ言つて精神と時の部屋を出て行った、連れて行くだけで許してくれるなら助かるけど・・・どゆこと?と思うマフィだった

オラリオの執務室に戻り、準備を整え待っていると、アスフィがやってきて

「引継ぎは全て終わらせて来ました、今すぐに出られます、それと色々ありました、私をあんな目に合わせてちゃんと責任は取ってくださいるんでしょね?」

「本当に申し訳なかつたです、俺がオツタルと戦つた時の再現をしたつもりだったけど、俺とアスフィは違うって事を分かつて無かつた」「はあく・・・やっぱり分かつてないのね、そんなだから小娘一人落とすのに手間取るのよ、仕方ないから面倒見てあげるわ、チェリーボーイ君」

彼女はそう言つてウインクし、給湯室へ向かいお茶を入れてくれた・・・わからん

そして準備を整えて、全員が集まると早速出発する事に、再び精神

と時の部屋に入り、今回の小遠征などについての説明などを打ち合わせする事に

「小遠征後半は期限が2週間と前回と違って比較的長めになる、そして今回の修行からアスファイが加わる事になった、それと今後のスケジュールについてだけど、ここで1年修行して、前回の37階層闘技場で体を慣らしてから再び潜る予定だ、目標は未到達領域60階層としたかったが、勝手に未到達領域に行くと面倒が増えるので59階層までとする、ここままで何かあるか？」

「なにかあるかじゃないわよ！前提説明が全くされないから話に付いて行けないんですが」

アスファイが半ギレで問い詰めて来る、他の3名も若干引き気味

「あーもう、分かれよ！」

「わかる訳ないじゃないですか、もうやだあ〜」

俺、かいつまんで説明中……

「はあ・なるほど、あの短期間であれだけ強くなった原因は、この空間だったんですね、こんなのオラリオに知れ渡ったら大変な事になりますし、隠してた事には何も言いませんが、ズルすぎます……いくらなんでもズルすぎです」

なんとか彼女を宥めて話を続ける

「今回の後半の修行は、仕上げも視野に入れてるので、仕上がった者は修行やダンジョンへの探索の一切を禁ずることになる、これは戦争遊戯の後に審査が入る恐れがあるからだ、ステイタスがバれて問題が無いように調整するのが目的だ、スキルに関してはヘステイア様が完璧に偽造するので外部への公開はさせないので安心してほしい、ここまででなにかあるか？」

「目標到達Lvはいくつなんですか？」

「6か7になると思う、それと今回も俺とヘステイア様の両方の許可なくLvを引き上げるのは禁止だ」

「分かりましたけど、審査の前どういった手順でどの程度申請するんですか？」

「Lvに関して言えば全て公開する、戦争遊戯の2日前までに申請だけする、何か色々聞かれても無視すればいい、嘘をつかない後ろめたい事はしないが今回の肝だからな」

「大騒ぎになると思いますよ、どうやって言い訳するつもりなんですか?」

「それはヘステイア様と、今も打ち合わせ中だ、しかし言い訳を理由に嘘をついて糾弾される訳にいかないだよ、どうせ戦争遊戯でLvがおかしい事には気づかれるし」

「分かりました、りりは何があつてもマファイ様達についていだけで、だから信じますからね?」

「アーデさんの言う通りです、私も団長とヘステイア様を信じて付いて行きます」

「うん!僕も同じだよマファイ」

「次に、スケジュールだけど、今回はヘステイア様が最初の1年間だけ手伝いをしてくれるが、待ってるのが来るまでの期間、俺達だけで生活する事になる、全てを修行に充てる事が出来なくなるので覚悟しておくように」

「何を待ってるんですか?」

「ヴェルフ・クロッゾだ、彼がヘステイアファミリアへコンバートしてきてくれるのを俺は待ってる」

「本当なの?!ヴェルフが?どういう事なのマファイ」

「今回の戦争遊戯を利用して、ヴェルフをウチに引き入れたかっただけだ、種は蒔いたがどうなるか分からない、けど俺は信じてる奴との友情をな」

「相変わらず人が悪いですマファイ様は」

「来てくれるといいねマファイ」

「おう!奴なら絶対に駆けつけてくれるさ、そう言う訳だから出来る限りヘステイア様をホームに待機させておきたいんだ、分かってくれるな?」

「「はい!」」

こうして小遠征の後半が始まった

アスファイは、大魔導士オーバーロードのスキルを得る為に、ほぼ1年かけて大魔導士オーバーロードを習得した、習得に時間がかかったのは、年齢による所があるみたいで、成長期の体には馴染みやすいのではないかという神ヘステイアの説で意見は一致した

その事を考えて、俺達の体を大人にしない様にする設定を精神の時の部屋に設定し直し、さらにアスファイの持っていたマジックアイテムの技術を掛け合わせて、成長期のまま体を維持するマジックアイテムを作りヘステイア様以外全員に装着させた

アスファイは成長期が終わっていたので、体の時間だけを逆行する部屋を作り出して成長期の体へと戻す為に、そこで修行を開始して様子を見る事に

いきなり成長期に体を戻すと何があるか分からない為に行った処置で、しつかりと時間をかけて体を成長期に戻す、アスファイの希望もあって15歳時の体にする為、今回の小遠征は大魔導士オーバーロードを取得するだけに終わった、1人だけで何年もの生活を余儀なくされる何度も忠告したが、彼女の何がそうさせたのか分からないが、最後までやり抜いた。

ちなみに神秘と時の部屋と名付けられた場所に1人で籠ってる間にステイタスを全てカンストさせていたのでLv5に昇格した所で修行は終わりとなった

他の3名はさらなる高みを目指して、精神と時の部屋3での修行に前以上の負荷を背負って修行をしていた、重力は30倍となり、万が一魔力が切れた時点で死ねる場所、さらに、毒の成分が吹き荒れる環境、灼熱地獄の環境、極寒地獄の環境、魔力の回復力が少なくなった環境など様々な環境に耐えながら、各自が修行を行った

環境に慣れる為に、毎日を必死に生きるだけでも過酷さを極める修行なのに、前以上の修行カリキュラムまでもこなしていた

「今日は極寒ですか、本気でリリ達を殺しに来てませんか？ベル様：うろうう・・・寒いどころか痛いぞうろうう」

「仕方がないよ、ダンジョンではこういう場所があるかもしれないんだし、今日のメニューは何？マファイ」

「まずはここで生活する為の家づくりかな、それが終わったら食事の準備、全て凍ってるから気を付けてな、それが終わったら池の氷を割って水中戦闘の訓練だ」

「鬼だ・・・ひどすぎる・・・やるんだけど・・・やりますけど・・・言わずにはいられないリリを許してください」

「気にすんなよ、俺だって何度もそういう事言ってるんだ、お互い様だ」

「そうだよ、僕だって最初は何度もマファイと言いつつ合ってたんだし、今日始まった事じゃないんだからさ」

こうして訓練メニューをこなしながらの生活が続いて行った

「やっと一年生きて出てこられたーっ！長かったです本当に良かったです！、ダンジョンってホント天国ですねベル様マファイ様！」

変な反応をする、リリ、実はこうやって喋りながらも戦闘中であり、何百と言う敵に囲まれてるのに、天国とほざくりり・・・ちよつとやり過ぎたのかなと思いつつも、敵を処理していく

「ほんとだね、ここって灼熱の場所なのに不快に感じないなんて変になっちゃったのかな？リリの言う通りダンジョンって快適だね」

ベルも変な事を言い始めた・・・どうしよう、ヘステイア様には絶対に魅せられない光景だ

「無駄口叩いてないで、さっさと処理しろよ、寝る場所がここなんだから煩くてかなわん」

「ここに今日は泊まってるいいんですか？どうしたんです？熱でもあるんですかマファイ様」

話がおかしな方向へ向かっている、一般の人が見たら変人の集まりでしかない俺達は、その階層の全ての敵を倒すと、簡単な寝床を作って休むことに

時折数十匹が寝ていると襲って来るが、全員が寝ながら倒してい

き、起きる頃には、俺達の周りに魔石などがゴロゴロ転がっている
「あー良く寝た、久々に快適に眠れました、たまにはこういうのもいいですね」

「うん、けど明日にはまた戻るんでしょう？だったら今日くらいはいいんじゃないかな？」

「ふあああーっそうだな、明日には戻るから、快適なのは今日までだぜ」

「もう1日くらいゆっくりさせてくれてもいいのに、さー行きますよ2人共」

「あい」

こうしてどんどんおかしな方向へ向かっていく3人は、何年も過酷な状況で生き抜き、ついにその日を迎えた

「数十年ぶりに会った感じがします、会いたかったです神様」

「そうですね、実際はどのくらい振りなのか分からなくなってますけど、お久しぶりですへステイア様」

「毎回事じこと言ってるぜ君達、それにしても、今回はなんか見るからに壮絶な生活を送ったみたいだね、ステイタスを更新しなくても分かるよ」

実際は1か月ちよいぶりです、こまめに更新したかったが、ヴェルフの件があつて更新が頻繁には出来きなかったのだ

「仕上げの段階に近いからな、やれることは全部やったつもりだ、恐らく今回で全員が仕上がったはずだ」

順番にステイタスを更新していき、全員のステイタスを確認すると予想通り全員が仕上がっており、これで一旦修行は終わりにする事にした

マファイ Lv7

力 I 0

耐久 I 0

器用 I 0

敏捷 I 0

魔力	I	0
幸運	S	S
耐異常	S	S
治療	S	S
耐環境	S	S
魔防	S	S
物理防	S	S

スキル 大魔導士オーバーロード

魔闘気操作マジックオーラマスター
完全領域支配者パーフェクトタクト

ベル・クラネル Lv7

力	I	0
耐久	I	0
器用	I	0
敏捷	I	0
魔力	I	0
幸運	S	S
耐異常	S	S
逃走	S	S
耐環境	S	S
魔防	S	S
物理防	S	S

スキル 憧憬一途リアリス・フレーゼ

英雄願望アルゴノート
大魔導士オーバーロード

リリルカ・アーデ Lv7

力	I	0
耐久	I	0
器用	I	0
敏捷	I	0
魔力	I	0
耐異常	S	S
魔防	S	S
耐環境	S	S
神秘	A	
腕力	S	S
物理防	S	S

スキル

縁下力持アーテル・アシスト

大魔導士オーバーロード

聖獣奏者セイントサモナー

魔闘気操作マジックオーラマスター

これ本気でLv公表する気なの？ってくらいバカげている状態だ、スキルの追加は今回は無い、Lvとステイタスを上げるのを主目標にしたからだ、っていうか次のスキル何を目指せばいいかが分からなかった事もある

3人と1柱で色々協議した結果、無駄なスキルを増やすと隠すのも大変だと、ヘステイア様に言われた事も理由の1つだ

それと2人にはベル君に隠していたスキルについても説明をした、理由は効果が著しく低下したためだ、後半の修行が始まって暫くは「アイズさんを追い越して彼女を助けたいんだろ！だったらLv7を目指すしかないだろ」とか言って誤魔化してたが、やはり気が付いちやうんだよね、そこまでベル君はバカじゃない、なのでスキルの事を教えてやり、「英雄になるんだろ？、アポロン戦でベルは英雄になるんだ、その為の作戦をお前にだけ教えてやる」と言いどうにかスキルの維持を図った

しかし結局効果は薄れていくばかりで、こればかりは仕方が無いと諦めたのだ、チートタイムは終わったが、どうにか全員Lv7に漕ぎつけただけ有難いと思うしかない

りりと何度か話し合って、憧憬一途リアリス・フレイゼの効果を魔法で作れないかと、研究しようとしたが、残念ながらタイムアップだ、下手に研究なんかをしてステイタスが上がってしまうのは避けたいので、戦争遊戯の後にアスフィを入れた3名で研究しようという事で話は纏まった

「さて、戦争遊戯終了し審査が入るまでの期間なにもするな、ステイタスの変化が出ない様にしてくれ」

「そう言われるとなんだか寂しいですね、仕方が無いのでりりは家事をしながら過ごしますね」

「アスフィさんはどうなってるんですか?」

「まだ神秘と時の部屋かな、ぎりぎりまでかかる計算だ、それで作戦用紙に目を通しておけよ、当日になって勝手に動かれたらたまらん、特に2人は勝手に動かれたら俺ではもう簡単には止められん」

「先ほど拝見したんですけどマフィ様、本気なのですか?」

「いたって本気だけど?」

「りりは構いませんが、お二人は戦争遊戯の後大変な事になりますよ」
「僕はこれでいいと思うよ、なぜかやれる気がするんだ、生意気を言ってる様だけど、どう言ったらいいのかな・・・」

「それはベルが最後まで修行をやり遂げたからだよ、自信が付いて貫禄が出たってことさ」

「うん、まだそう言うのは良く分からないけど、そうかもしれないね」
「ではお前らは、前に少し言ってたが、ウチの新たなファミリアのメンバーになった2人に、今夜歓迎会をするから身支度を整えてこい、今夜6時からこの建物で行う、準備は留守番してくれたメンバーがやってくれてるそうだが、アスフィは来れないが今日くらいは羽目を外していいぞ」

「はい」「了解です」

そして歓迎会と、小遠征からの無事帰還を祝して祝賀会は盛大に執り行われた

「はじめまして、この度タケミカツチ・ファミリアから、皆様の力になりたくて来ました、ヤマト・命と申します、ヘステイアファミリアには1年間だけになるかと思いますが、精一杯務めさせていただきますので、よろしくお願いします」

盛大な拍手で迎え入れられ、彼女は照れ臭かったのか、そそくさと元の席に戻って行った

「俺はヘファイストスファミリアから正式にヘステイアファミリアへ来たヴェルフ・クロツゾだ、鍛冶の事なら何時でも俺に頼って来てくれ！、若干マフィの奴に乗せられた感はあるが、後悔はしてない俺は俺の道を行くと決めたからな、これからよろしく頼むぜ！」

ここでさらに大きな拍手で全員から祝福を受けるヴェルフ、物作りをするメンバーが多いので鍛冶師の登場に、盛大過ぎるほどに歓迎され、ヴェルフはもみくちやにされた、結局俺達の話に行く隙はこの祝賀会&歓迎会の間は全く無かった

「さて、アスファイ副団長は現在も猛特訓中の最中で、俺達3名だけが祝賀会をして頂き大変恐縮なのですが、俺達3名は一足早く修行を終え戻ってきました、これだけ順調に修行が出来たのは皆の協力があってこそでした、長い期間ファミリアを任せっきりにした事深く詫びると共に、深く感謝するありがとうお前ら最高だ!!愛してるぜーっ!!今夜は好きナだけ騒げ!好きナだけ食え!好きナだけ語り合え!完全無礼講だ!」

地鳴り声と共に皆の声が鳴り響き、宴は始まった

翌日、ヴェルフ、命を含む主要メンバーが全員集まり、話し合う事になった

「さて、せっかく来て貰ったのに待たせて悪かったな」

「それはいいけどよ、修行つてのはもう大丈夫なのか？あと3日あるつてのに」

「大丈夫だ、完全勝利つてのを見せてやるさ」

「ったく何が1%だよ、完全に騙されたみたいじゃねーか、っていうかどれだけ強くなつたんだ？」

「時期に公表されるが、俺達3名はLv7だ」

「はああああ？」

「公表はおそらく明日か明後日になる、この後にギルドへ申請に行くからな、たぶんそうなると思う」

「いやいやいや公表の時期とかそういう問題ではないのです、マフィ殿！Lv7って本当なのですか？」

俺はスキルを完全に偽造した状態のステータスを移した紙を渡してやる、2人は自分の眼を疑うような数値に驚きを隠せないでいた
「それでも信じられないなら背中見せてやるよ、にわかには信じられんだろうが事実だ」

「何をしたんだ？」

「うくん、適切な運動と、適切な食事、適切な休養かな？」

「全くこの悪魔は何言ってるんだい、あれが適切ならオラリオの住民は全員がLv10だぞ君は」

「あははは・・・あれつて適切だったんだ・・・」

「そんな訳ないですベル様、目を覚ましてください！マフィ様もバカな事言つてないで真面目に答えてあげてください」

「俺の魔法を使つて修行した、これ以上は言えん」

「なるほどな、命はともかく俺はその修行は出来るんだろうな？マフィ」

「あつずるいですよヴェルフ殿、私にも是非お願い致しますマフィ殿！！」

「えくくくつ・ヴェルフはいいかな、戦争遊戯終わったら、時期を見て手伝つてやるけど、常に死と隣り合わせとだけ言っておく、命は残念だけど機密的部分が大きすぎて、すぐには答えは出せないかな」

「そうだよヴェルフ、無謀ともいえる修行なんだ、一時的な感情とかの

考えだと本当に死んじゃうからね」

「まじかよ、おいおい楽しみになって来たじゃねーか！期待して待つてるぜマファイ団長！」

「まあ、命は普通に鍛えてやるよ、それでも十分強くなるさ」

「は・はい！よろしくお願いしますマファイ団長殿！」

その後、居なかった間の処理についての話し合いや、ギルドでの報告する時の打ち合わせなどを行った後、3人と1柱はギルドへ向かった

「エイナさーん、お久しぶりです」

「ベル君!!」

エイナさんを早速呼び出して、Lv申請の用紙を提出すると

「神へスティア様これは一体・・・」

「じゃく君、申請の方頼んだよ、信じられないのなら、ウラノスの爺でも呼んで来なよ、私らは戦争遊戯の準備で忙しいんだ、手短に頼むよ」

「はい、申請しておきますが、呼び出しには応じてくださいね、必ず呼び出しがあると思いますので」

「そうかい、けどこのメンバーが全員集まれるのは今日だけだぞアドバイザー君」

「それでしたら個別でとなりますがよろしいでしょうか？」

「それも戦争遊戯の期間は無理だぞ、受理されずに戦争遊戯中に変な言いがかりは嫌だからな、もしそうになったらギルドを告発する」

「は・はい！もちろんへスティア様が嘘を仰ってるなどとは思っても居ませんが、理解が追いつかないというか、ベル君このLvは本当なんだよね？」

「そうですよエイナさん」

「分かりました、責任をもって戦争遊戯までに必ず受理します」

そして帰って暫くすると、ギルドからへスティア様だけが呼び出しを受ける、そこでウラノスつてのと話し合いをし、正式に受理されることになった

翌日からはオラリオ中の冒険者は掲示板に群がり大騒ぎとなったが、俺達は他人事のごとく、のんびりと過ごす事になった

次の日にアスフィは修行を終えて、騒ぎの合間を縫ってLvUPの報告をするが1つしか上がって無い事もあって、そこまで騒ぎになる事も無く、騒ぎを横目に知らん顔で戻って来た

「おつかれさま、ギルドはどうだった?」

「面白いほどに騒ぎになってるわね、同時にLv7が3名、しかも全員少し前までLv1だったんですから」

「でしょうね、明日はいよいよです、作戦概要書は?」

「読みましたけど、本気なのですか?」

「大マジだよ、その為の準備も出来てますし」

「完全に見世物ね、私は出る意味あるのかしら?」

「いいじゃないですか、アフォロンのメンバーが驚く姿を目の前で見られるんですから」

「驚く暇があるといいわね」

「それはちゃんと仕込んであるんで大丈夫ですよ、アスフィの修行からの無事帰還を祝う祝賀会は、今夜の前夜祭と同じになってますけど大丈夫ですよね?」

「私の修行はこれからよ?アレは体を作っただけなんだから」

「それは勿論ですよ、けど皆はアスフィの帰還を心待ちにしてたんですし」

「そうね、分かったわ」

そしてついに戦争遊戯の幕があがるのだった・・・

大魔王降臨

都市が賑わいを見せている

オラリオ全体が待ち望んだ戦争遊戯当日、尋常ではない熱気と興奮が貯め込めきれず随所で暴発するほどの興奮状態

昨日正式に発表されたマファイ、ベル・クラネル、リリルカ・アーデの3名がLv7へ到達したという情報も合わさって賭場場も大騒ぎだ、真実ならばヘスティアファミアリアが勝利虚偽ならアポロンファミアリアの勝利という事で場は何度も荒れに荒れ最終的に4：6でヘスティアファミアリアに軍配が上がっている

一方の現地では既に準備が整い、戦いの合図を待ってる状態だ

「よし、ベルもリリも様になってるぞ」

「もう最悪ですよ、動きにくいしリリの趣味にあいません」

「すごい格好だねマファイは、物語に出て来る魔王のイメージそのものだよ」

そう、俺達は全員どっかの物語かゲームに出てきそうな物々しい姿の魔王といった感じにコスプレしている、俺の座ってる椅子もとてつもなく大きく作られており、両脇にはメンバーの女性2名がでっかい団扇で俺をゆつくりと仰いでくれている

ちなみに片方は命だけどね

そして赤いじゅうたんが数十メートルまで続き両サイドには石柱が並べられている、ちなみに俺達が攻め手であり、3日間俺が戦闘不能にならない限りゲームは続行、3日過ぎて攻め切る事が出来なければ俺達の負け

けど俺達の姿を見て果たしてどっち側が攻めなのか理解に苦しむだろうけどね

そして実況者が紹介され解説なんか色々が紹介されて、待ってるこっちはうんざりしながらも待ち続けた

そして

「・・・頃合いだな」

飾られた大きな時計が正午を迎える直前に男神が宙にむかつて話しかける

「ウラノスよ、「力」の行使の許可を」

「――許可する」

ギルド本部の方角より、重々しく響き渡る神威の籠った宣言を聞き届けたかのようにオラリオ中にいる神々が一斉に指を弾き鳴らした

その瞬間、各所に浮かび上がる鏡が出現し、都市の至る場所で無数に現れた窓に人々は色めき立った、要は遠く離れた場所を中継する為の施設って事だ

あの程度の事を神威を使わないとできないのかとマファイは思いながらも、自分に視線が合うと不機嫌そうにした

当然、この異様な姿にアラリオの神々を始め、人々も注目を集めるマファイは視線がおおよそ集まるのを待ってから、すーっと立ち上がり

オラリオ全体に響き渡るかの如くの大声が神々や人々の心の芯にまで響き渡る

『オラリオに住むくだららない愚神共及び、愚民共よ、余が大魔王マファイである！』

『貴様ら愚神、愚民共よく聞くがよい！今日は貴様らに力と言う物を特別に見せてやろう、今日この日この時をもって大魔王降臨の生誕祭である

貴様らは我々が、先日においてLv7へと至った事は周知の事実であらう。

ではなぜ我々は短期間の間にこれほどの力を得たのか、それは神の恩恵を頂くという概念だけにとらわれず神の恩恵を利用したからである。

これがどう言う意を示すのか、神の恩恵を受けた余は魔界へと至る道を示し、我々に多大な力を与えたのだ、ただそれだけの事で短期の間に頂点を超え貴様らが見えすらしい頂へと上り詰めたのだ。

これを見ている愚民共よ、貴様らは知らぬ間に愚神によって枷を付

けられていたのだ！

貴様らは知らぬ間に愚神共によって遊びの道具とされ愚神共によって管理されていたのだ！

よって貴様ら全ての愚民共に、余はあえて言おう家畜以下の屑である」と！』

『気に食わぬ者は構わん、遠慮なく余に牙を剥くがよい、記念すべき大魔王降臨祭だ、多少の無礼は許そうではないか、余自ら相手をしてやる、但しこのくだらない遊戯が終わるまでだ、それ以降の無礼は一切許さん！神々もろとも消し飛びたくなければ余とその眷属共に無礼を働く事は許さん!!』

『それでは楽しみに待つておるぞ』

この宣言を、神々の大半はバベルで聞き、異様な盛り上がりを見せていた

「大魔王様降臨キターー！」

「ヒヤッハーハー大魔王様バンザーイー！」

「何この大魔王様超かっけー！」

「おい大魔王様はロリ巨乳を下僕にしたのか？大魔王様イケメン過ぎる!!!」

「子供向かわせて大魔王様と戦つて来いよ！」

「お前の所に行かせればいいだろうが」

「俺の所は弱いのかいねーんだよ！誰か行けよ！」

「キヤーーー大魔王様ーっ！魔界へ連れて行ってええええーっ」

「大魔王様ーっ!!服従するので世界の半分をおおーっ!!」

「ちよwwwwおまwwww草しか生えねえwwwwww」

これ以外にも様々な声上がり、もう言いたい放題である、当然だがこの模様は、特別に設置されたモニターでマフィ達が現在見ている「言いたい放題だな、仕方がないけどよ」

「改めて私、大魔王派になるわ」

「ばーか只のパフォーマンスだ、勝手に派閥作るな、それと神共はほつておけばいい、後で痛い目見るだけだ」

そして好きなだけ騒がせると、神々が作った鏡の隣にオラリオの町限定でモニターが現れる、当然仕込みであり鏡より精度は高い

突然現れた画面から、神々のくだらない会話が映し出される、しかしライブ映像ではなく録画映像の為、気が付いたところで手遅れなのだ、大魔王が言う様に神々は我々で遊んでいたという事実を目のあたりにした住民達の一部は怒り心頭である

数分後、バベルに居る神々にその事が伝えられると、一斉にヘステイアの方を向くが、ヘステイアはどこ吹く風のように軽くあしらうだけ

『ようやく気が付いたようだなバベルで高みの見物としやれこむ愚神共、見たかこれが現実だ！層ではなくオラリオの住民でありたいなら怒れ！憤れ！糾弾せよ！余はそんなオラリオの住民を応援しておるぞ』

そしてしばらくして、神々のうろたえる姿に、住民は大爆笑し、もはや神の威厳など無いに等しい状況となった、

中には当然、血の気の多い奴らは居る、その中で神々に対して文句を言いに行く者も現れ、大魔王コールが各所で叫ばれる

「結構な数がバベルに文句を言いに行ってるな、今回の見世物は俺達だけじゃないんだぜあふお神共」

「あまり言いきらない方が、失礼過ぎるよ」

「ベル様は何も感じないのですか？こんな扱いを受けている事に対して」

「少しは思う事もあるけど、やり過ぎないでねマファイ」

「わーってるよ」

ロキ陣営にも、少くない動揺と変化が現れる、主神ロキは塔に居てアフォな事を叫んでいた1柱

そして子供達は、主神の間抜けな姿に呆れる者、頭を抱える者、我関せずの者、と様々な反応を示していた

「あれが本当にマファイ君なの？超ーっかつこいいんだけど」

「ちっ！くっだらねー俺は行くぞ、あの基地害をぶっ殺しに行つて来る、止めたつて無駄だぜ」

「まあーまてベート、もう少し様子を見たら僕も一緒に行く」

「ちよつと団長！本気なんですか？」

「ああ、彼が言つてる強さが本当なら、僕は行くしかないだろう、彼はゲーム中なら無礼講で済ますと言つてるんだからね何の問題もない、それにさつきから疼きが止まらないんだ、まだ何か起こる」

「フィン希望者全員で行くというのか？、私は賛成しかねるんだが」

「いや、僕とベートだけで十分だよ」

「私も行く」

「「アイズ!!」」

「なら私も行きたーい！」

次々に行くと言い出す団員達、確かに何か起こつたねフィン团长……

「まーまてお前ら、まったくフィンよ、貴様が動けばこうなるんじゃ自覚せい！」

「……もう少し様子を見よう、皆も落ち着いてくれ」

そしてフレイヤ陣営では

「オツタルご指名みたいね、どうするの？」

オツタルは握り拳を深く握りながら、答える

「私は護衛の任がありますゆえ」

「我慢しなくてもいいのよ、その握り拳をそんな力いっぱい込めて耐えなくても、それにあの輝きは本物よ、完全に熟してるわ、ついでに持つて来てくれないかしら？」

「仰せのままに」

そして主神に深く頭を下げると、そのまま戦争遊戯の行われている会場へ走りだすのだった

当然この会話も筒抜け、暫くした後には放送され、オツタルが向かつ

た事による騒ぎで、ちよつとからかいに行くつもりだった冒険者達は足を止めて

「こりやだめだ、行くまでに終わってるな帰ろうぜ」

「そうだな、せっかく遊びに行こうと思つたのによ、もう少し後から行けつての」

「なんだよ、つまんねーの」

次々に引き返していく冒険者達、その間を縫つて、冒険者たちを抜き去り走り抜けていくオツタル

大魔王陣営も当然だが察知しており

「動くの早すぎ、向かつて来てる奴ら帰ちやつたじゃん、オツタルの動きを見てない奴らは向かつたままだけど」

「どうするんです?」

「想定範囲内なのに聞く意味ある?」

「一応聞いてあげたんじゃないですか、りりのこの優しさが分からないんですか?」

「わーったよ悪かったよ、速度から考えて始まってからになりそうだな」

そして暫くすると運営よりアナウンスが流れる

『 戦争遊戯開幕です! 』

マファイファミアミア発足

『 戦争遊戯開幕です！ 』

その開始と同時に、俺の居る場所から真つすぐ大きな光の柱が天を突き抜ける

『余に牙をむく愚か者共よ、この光の柱に向かって来るがよい、余みずから相手してやる』

そう言い放つと、再び椅子に座り肘に頭を乗せてふんぞり返る、両サイドの女性2名は順番に交代をしながら俺を大きな飾り扇子でゆつくりと仰いでいく

あまりの態度のでかさに、オラリオでは様々な反応を見せていた

さて、かなり目立ってないアフォロンの連中はと言うと、主神はバベルで頭から煙を上げて怒り心頭だ、始まる前から3名のLv7の話を聞き冗談にしてはやりすぎだとギルドに掛け合うが相手にされず、開始直前の大魔王宣言で完全にアポロンファミリアの存在は消え失せた

回りの神々はあざ笑うかのように、アポロンを見ている、次にこの男神が何をやるのか期待してるのだ、先ほどの中継で自分の姿も放映されオラリオ中から笑われたのだ

さらに最終オツズは8:2にまで下がり、完全に咬ませ犬の状態になってしまったのだ、追い打ちをかける様に、フレイヤ陣営の場面が映し出され、フレイヤの反感を自分が買ってる事まで晒された、しかしオツタルが大魔王討伐へ向かったのを見て、いささかの溜飲を下げたが、それでも気がすまない

廃城のアポロン陣営では、映像は流れておらず、馬鹿でかい大魔王の音声だけしか聞こえず、団員達に動揺が走りはしたが、団長であるヒュアキントスによって抑えられ、どうにか持ちこたえていた

その後開始の宣言と共に、光の柱が現れ、再び大魔王の言葉の後、完

全に罨ではなく舐められてる事に怒り心頭だが、ヒュアキントスは团长だ冷静に指示を出す

「あの光へ向かって偵察を10名出せ、オラリオから、あの大魔王に攻撃を仕掛けてきそうかの確認と戦いの様子を探れ、手は出さなくていい、他は現状維持で城を守れ」

「来ると思うか？ヒュアキントス」

「多少は来るだろう、あれだけ大口叩いたんだ、祭り好きは必ずいる」
「そりや楽しみだな、勝手に自滅してくれるんだ頑張っしてほしいもんだな」

「それもあるが、ギルドが正式にLv7などと言う戯言を信じてる訳じゃないが、勝手に相手は自滅なり、手の内を晒してくれるんだ、動くのはそれからでも十分だろ」

「そりやそうだ、さてそれまで俺達は暇だな」

しかし偵察に出した10名はすぐさま戻って来る

「团长！空を見てください、大魔王の様子が映し出されてます」

ヒュアキントスは、すぐに扉を開けて外を見ると、馬鹿でかい画面が空に出ており、その映像には、漆黒の鎧とマントに身を包み、馬鹿でかく禍々しいまでの椅子にふんぞり返る男が

「あれが大魔王だというのか？」

『ようやく気が付いたか、アフォロン团长ヒュアキントス、貴様の主神である、ひまわりの紙ちやまは醜態をさらして笑えたぞクツクツ、その映像見るか？ひまわりの紙ちやまの間抜けな姿を見せて貰った礼だ、受け取るがよい』

そして映像の半分から、主神のリプレイ映像が流れ出すと、大魔王の大笑いに加え、団員の一部が堪え切れず噴き出す事となった

このヒュアキントスは、主神に心から心酔している男だ、あからさまな挑発とて怒りが抑えきれず

「きつ貴様ー！っ！！我が主神を汚した罪は重い！死をもって贖え！」

『余の犠牲第一号だ目立つように飾っておくがよい』

そう言われ、周りに居た数名が男を十字架に貼り付けにすると、俺の席の後ろに突き刺し飾る、その時に血のりのサービスの行いより目立つようにした

ちなみに何をしたかは、指を弾いて魔力の玉を飛ばしただけ、しかしLv7へと至ったマフィの実力からすれば当然の結果である

しかし会場では何が起こったのか分からず、大騒ぎとなったのだ

「大魔王様は一体何をしたんだ?!おい誰か分かる奴いるか?」

「それよりも相手の奴はLv4の邪龍剣王クラファイルク・ロンファードだぞ、おいおい!大魔王様の實力やベーンじゃねーのか?!」

「オツタルが向かったんだ、到着すれば分かるはずだ」

「おいおい十字架に張り付けてやがるぞ奴ら、いよいよもって大魔王様らしくなつて来たじゃねーか!」

ロキファミアリアのホームでも、突然の出来事に皆が啞然とするしかなかった

「見えたか?」

「わからん、ワシには何が起こったのかさっぱりじゃ」

「私行くね」

「待てと言ってる、全員動くな!」

「フィンいいかげんにしろつての、テメーの弱腰のせいでオツタルが向かっちゃまったじゃねーか!!」

「君はオツタルが、あの大魔王を倒すとも思ってるのかい?」

「ああん?!んなもん当たり前だろうが!」

「君はどう見る?アイズ」

「オツタルは負けるんじゃないかな?」

「アイズには見えたのかい?大魔王の攻撃が」

「ううん見えなかった」

「僕もオツタルは負けると思ってる、奴が大魔王と戦った後に動こう」

その後も数名が立ち向かうが、ことごとく大魔王は動く事無く吹き

飛ばされ倒されていった。

次々と冒険者が十字架刑にされていく、その数30を超える事となり、そしてついにオツタルが登場した事で会場は今日一番の盛り上がりを見せる

『久しいなオツタル、余をまずはここから動かして見せよ』

「フン、調子に乗り過ぎだ貴様は、死をもつて贖うがいい！前の様には手加減はしてやれんぞ？」

そしてオツタルが俺に向かって攻撃を仕掛けて来る、当然指に込められた魔力の玉が発射され頭部に当たったが、吹き飛ぶことはなく俺に再び襲い掛かる、そして次々と魔力の玉が彼を襲うが、やはり倒し切ることは出来ない、そしてオツタルが攻撃を見切り始めた所で

『良く分かったな、さすが余を差し置いて頂点などという、舐めた二つ名を持つてるだけはある、よかろう少しだけ本気で相手してやる』

俺は、ゆつくりと立ち上がり、大きな禍々しい椅子の周りに並べられた様々な武器の中から、オツタルの持っている武器と同じ系統の武器である大剣を選び出し、鞘を取って隣に居る女性に手渡すと、オツタルに向き合った

「そのうぬぼれが、貴様の死となるのだ、死んでもらうぞマファイ！」

そしてオツタルの早く重い攻撃が、俺を襲うが何度オツタルが剣を振り回しても、俺に当たる事は無く柳の様に受け流していく、それでもオツタルは怯む事無く剣を何度も俺にたたきつけて来るが結果は変わる事なく受け流されていく

オツタルの攻撃が大降りになったのを、見極めてオツタルが剣を一気に振り下ろしたと同時にオツタルを後方へ吹き飛ばす

『気がすんだか？オツタルよ、そろそろ後が使えておるのでな、貴様との遊びもここまでとしよう』

その瞬間オツタルの前から風が吹き抜けると、その先に大魔王が、そして剣を振り血をぬぐうと、ゆつくりとオツタルの方へ歩いて行く
そしてオツタルの頭部が吹き飛び空へ舞う、その頭部を大魔王が掴むと

『この程度か、さして強くもないくせにLv7などと言うからだ』

そして自分の椅子に戻り、椅子の周りにある数々の武器の中から槍を手にすると、頭部を柄から突き刺して、バベルに向かって投げ飛ばした

オツタルの頭部の突いた槍は、音速を超えた速度で突き進みフレイアの居る部屋の壁に突き刺さる

フレイヤによく見える位置に、無残に切り落とされたオツタルの生首が女神フレイヤに醜態をさらす

『粘着駄女神フレイヤよ、色々貰った礼だ、受け取るがよいククック』
女神フレイヤは、そのまま膝をつき崩れ落ちるのだった

その様子も当然中継されており、オラリオ中が恐怖に包まれた瞬間でもあった、あろうことかオツタルが負けるだけではなく、首を切り落とされ主神に投げつけるという常軌を逸した行為

各所で悲鳴と絶叫が鳴り響く、中には狂喜乱舞する者も居たが、それでもオラリオのほぼ全ての人々は大魔王に恐怖するのだった

一方のロキファミアリアでは

『おいおい冗談だろー！なんだよ、あのでたらめな強さは!!』

『行くのか?』

「ああ、皆も行くのなら覚悟して来てくれ、あの強さだ勝てる見込みなどない、それでも行くのなら止はしない」

そして数名が立ち上がり、大魔王が居る光の柱へと走り抜けていくのだった

『ロキファミアリアの諸君、来るのはいいが、我の力をほんの少しだったとしても与えてやった恩を裏切るというのか?、その力の御蔭で未到達領域に無事到達出来たというのに残念な話だ、それでも来るというのなら止はせん来るがよかろう』

ここで大魔王からの爆弾発言が飛び出し、ロキファミアリアが大魔王の力を借りたという話は全ての人を知る事となり、主神のロキも危険な状況を察知し急いでファミアリアへ戻って行った

「まさか見張られていたとは、動くのは不味いぞフィン」

「分かっているさ、これで僕たちは大魔王の手先になってしまった様だね、ほんとやってくれるよ」

「つたく、どうするんだコレ！俺はもう興が覚めた、勝手にしろ」

「私は行くね」

「アイズーっ不味いって!!」

アイズは誰の声にも耳を貸さず走り抜けていった、しかしその後続く者は誰一人おらず、戦意の失った幹部達は、再び画面を見守るのだった

アイズが飛び出して、ホームの門の前で、アイズの主神であるロキと遭遇し

「ロキ、加護を外して」

「どう言う意味や！アイズたん」

「私は彼の元へ行く」

アイズの状態とこれまでの状況と彼女の目を見て、アイズの事を理解したロキは

「あかん！それだけは許さへんで、ウチもホームへ向かう所や一緒に戻るでアイズ」

しかしアイズは、主神ロキに立ちふさがり剣を抜く

「本気なんやな？、あの大魔王の所へ行ったら、ウチらとは敵同士や、殺し合いにだってなる、仲間をその剣で殺す言うんか？」

「うん」

アイズにとって強さとは絶対なのだ、彼女がロキファミリアに居るのも、感情を出さないのもそれが理由の1つになってる部分もあったりする

その事を察しているロキにとっては、最悪の状況だ、ここで無視しても自分は確実に殺される、かといって行かせても最悪だ、ようやくファミリアもアイズの事も、徐々にうまく行ってた矢先のこの出来事に怒りを覚えるしかないロキだったが

「分かった、アイズ背中を出し」

こうしてアイズはロキに一礼をしてから走り出そうとした・・・が

『アイズ・ヴァレンシユタインよ、余が軍門に下ると言うのなら、そこにいるロキを捕縛し、余の元へ持ってこい、少々話があるのでな』

この発言に、ロキファミアリアは騒然となった

「うそ・・・どうするのよ！団長」

「アイズを止めるぞ！すぐに向かう!!」

一斉に動き出すロキファミアリアの団員達は、足早に向かおうとする
と

『ロキファミアリアの諸君、動けば主神は天界に帰る事になるぞ？その行為は宣戦布告と同義だ』

「あーもう！完全に見られてて動きようがないじゃーん」

「くそっ！」

「アイズの野郎裏切りやがって、ただじやおかねーぞ!!」

「アイズさん、お願い戻って来てください・・・」

「やれやれ、こんな事になろうとはな、ワシはもう引退するぞフィンよ、後は好きにせい」

「そうだな、私も予定を早めて旅に出よう」

その発言にフィンは俯き、自分達が敗北したのを痛感するしかなかった

（よし、ロキとフレイヤは抑えた予定通りだ、次の段階までゆっくり出来そうだな）

そして、ベルはゆっくりとした歩調で城壁へと、たった一人で歩いていた、今の所、アフォロン達は、ベルが向かって来ているというのに捕捉すら出来ずにいた、いや1名だけは補足しているが語る事も無く押し黙って太陽が沈むその時を待っていた

（ああープリンス様、そのお声を聴くたびに、体の芯から貴方様を感じられずにはいられません、どうかこの淫らな私を許してくださいプリンス様）

日に日にかなりヤバイ方向へ思考が向かっているカサンドラ、大魔王の宣言時、その能力と病的までに愛してしまった事によって、大魔王の正体に誰よりも早く気が付き歓喜を上げていた、すでに崇拜まで

しているカサンドラの様子をダフネは何度も注意するが、最終的には友にまで牙を剥き始め

「あのお方の邪魔をするというのなら、たとえダフネちゃんとして許しはしません、私と一緒にマフィ様の神声を体で受け止めて心の底から感じて祈るのです、そうすれば、もしかするとダフネちゃん無礼も許して頂けるかもしれません」

この発言で、ようやくダフネもカサンドラの想い人が大魔王と気が付き

「どうして言わなかったの！あの基地害大声ヤローが、あの夜の男なんですよ?!」

「なんてことを言うの？あの崇高なる神をも超越されたマフィ様に向かって、死にたいのですか？」

そしてカサンドラは一瞬で友であるダフネをねじ伏せてしまい、そのまま崇拜を始める、ダフネも気絶しそのまま戦争遊戯が終わるまで目を覚ます事は無かった

ちなみにこの辺りで、マフィはカサンドラの様子に気が付き、隣で団扇を仰いでいたアスフィに耳打ちだけで誰にも聞こえない様子にして話しかけた

「あの・カサンドラちゃん、正体に気が付いてるばかりか、なんか俺の事を崇拜しちやってるんですけど、どうしたらいいですか？」

「いいんじゃないかしら？それならそれで扱いやすくて」

「他人事だと思って、酷過ぎない？」

「対策なんかないわよ、せいぜい後ろから刺されない様に気を付ける事ね」

（あー・・・俺終わった、やべえく・・・暗い未来しか見えてこない）

今日一番の大ダメージを追ってしまい、立て直すだけで必死で、次に来た冒険者を八つ当たりのごとくいたぶり続け殺してしまう、哀れタイミングの悪かった者よ・・・

（あれって絶対にヤンデレだよな、何なんだよせっかく彼女が出来るかもって喜んでいたのに、ヤンデレとかどうするんだよ!!手に余り過ぎるわー！！！）

(しまったなあ・・・ベル達にも説明しちやってるから殺すのも不味いし、個人的に初めて好かれた子だから殺すの嫌だし、あーもう！どうしてこうなった!!)

そして夕方になり、ベルが城壁に到着すると、ファイアボルト1発でとんでもない大きな風穴を開ける、轟音と土煙の中、ベルは何も障害物が無かったかのように、ゆっくり進んでいく

扉に入った瞬間一斉に攻撃が始まるが、ベルはすり抜ける様に全て躲していく、しかも動きが早すぎて普通の人には見えず、ただ障害物がいないかのようにすり抜けてる様にしか見えず、アポロンの団員達に動揺が広がったが、それでも必死で矢を魔法を使い攻撃するが全く当たる事は無く、近接部隊がようやく攻撃を開始する

一斉に各所から攻撃をするが、全て躲すだけではなく、次々と天に舞う団員達、そして数メートル飛ばされ落下すると気絶し再び動き出す事は無かった

ベルの攻撃は、全て魔力を一気に吸っているのです、ふっ飛ばされた者達は全員がマインドアウト、しかし見ている者達からは、虐殺が行われてる様にしか見えず、その虐殺ショーに目を覆う者、唾をのみ込み凄惨な光景を見守るもの、様々であった

「ベル君・・・」

ギルドのホールから、真剣な表情で見守るハーフエルフの女性エィナは、ベルの凄惨な戦いに祈るように手を組みつぶやいてた

一方のアイズも、主神ロキを抱えて光の柱へ向けて走り抜けながら、大きな画面でベルの戦いを見ていた

「・・・強い」

「ほんまやなあ〜いったい何したんやろな、あの強さは異常過ぎるって、けど、どうせドチビも知らへんやろうし、丁度良かったわ」

「もう夜になる、自分で歩いて」

「え〜いいやん、おんぶしてえ〜なアイズた〜ん」

強制的に下ろされると、渋々歩き出すロキはアイズの後をトボトボ付いて行く

攻城戦でのベルは、数は徐々に減って来たが、それでも攻撃は続き、日が暮れると

「ここまでにしましょう、一旦戻りますね」

そう言い残し、ベルは光のある方へ一瞬の内に戻って行ってしまう、残されたアポロンファミリアは全員が疲れ果てており、居なくなるのを確認すると全員が腰を下ろすのだった

『さて夜も更けたな、翌朝までこちらは攻撃を止めるとしよう、不作法に攻めて来るのなら好きにせよ一向にかまわんで、では余は休ませてもらうぞ翌朝7時にまた会おう』

そして俺達が出していた映像はすべて消え、映像の明かりで明るくなっていった街も、一瞬の内に夜中の様な静けさとなった

「ベルおつかれ、もうすぐアイズさんが来るはずだ」

「うん、さつき気が付いたよ、それでどうするのマフィ？」

「お前さ、アイズ欲しい？なんかさロキファミリア抜けてしまったみたいなんだよ、欲しけりや上げるけど、要らないなら俺貰うけどどうする？」

「え？ええええーっ！何があつたの?!っていかアイズさんを物みたいに言うな！僕だつて流石に怒るよ」

「悪かったよ、あやまる俺が悪かった、それで返答はいかに？」

「うううう・・・そりゃ・・・」

「しゃきしゃき喋れべる！、男だろうが!!」

「欲しいです！アイズさんと付き合ってみたいです！」

「よろしい、それでいいんだ、もう20分程度で到着するだろう、りりも諦めろつて、それに第三婦人とかあるじゃん」

「分かってます！けど第一夫人はりりですからね、りりと勝負して勝

てたらアイズさんを第一夫人として認めます、いいですねベル様?!」
「えええーっ!! どうしてそう言う話になっちゃうのさ!」

「諦めろ、俺ではもうリリを止める事は出来ん、っていうか俺が無理ならベルくらいかな止められそうなのは、そういう事だ頑張れよハーレム王」

「無理だよ! そんなの絶対に無理だから!」

「明日の余興が1つ増えたぞ、リリとアイズを戦わせる、じゃく各自休んでいいぞ、お疲れ様」

少し離れた場所に、キャンプを用意してあるので各自が、それぞれに割り当てられた場所へ向かい休んでいく

そして20分後、俺達の前にアイズとロキが現れる

「お二人とも長旅ご苦労様、この空間は外部に漏れない様にしてあります、一応ロキ様確認してください」

言われた様に、ロキは鏡を出して映像を確認すると

「随分派手にやったな、おかげでウチのアイズたんが出ていきおったわ、どうしてくれるや」

「どうもしませんか?、俺にかまってられないのはロキ様が一番分かかってるはずだと思ってるのですが?」

「まったく全部お見通しって訳やな、そりやくあんだだけ監視されとったら、そらそうなるか、それであの力はなんや? 裏スキルが発展したただけでは説明にならへんで」

「言う理由も見つかりませんね、話を変えます、アイズ・ヴァレンシユタインさんは、我がヘステイアフアマリアへのコンバートされるつもりと考えてよろしいのでしょうか?」

「うん」

「しかしですね簡単に入れるには問題がありますので、2つ条件があります」

「なに?」

「まずベルクラネルと恋人になって頂きます、彼の奮闘ぶりは?」

「うん、見てた」

「彼の働きに対して褒美として貴方を送ろうと考えています、まずこれが1点ですがどうされますか？」

「うん、いいよ」

「ちよつとまちーや！アイズたん冗談やゆうてーな!!」

「次に明日の朝10時に、リリルカ・アーデと手合わせをして頂きまず、入団試験的な感じですが、実力を見せて貰って、入団後、俺の行う力の譲渡をどうするかも決まりますので、リリルカ・アーデを殺すつもりで戦ってください、殺すか倒せた場合、アイズさんを彼女の代わりに2人だけに与えた力をお渡しすると約束します、負けた場合は普通に強くしてあげます」

「分かった」

「話は以上です、そちらからも何かあればどうぞ?」

「私は強くなりたい理由がある、その為に仲間を見捨ててここへ来た、後悔はしていない、なのでどうかよろしくお願いします」

「……分かりました、コンバートを済ませますので、指定された部屋でお待ちください」

「はい」

彼女達を部屋にそれぞれを案内して、ヘスティアを強制的に連れて来て、説明すると

「なにいいいい！そんなの予定に無かったじゃないか!!絶対にダメだぞ、認めない、何が褒美だふざけるんじゃない!!」

「ベル君が始めて自分から言ったんだぞ、アイズさんと付き合いたって、認めてやれよ、それと明日リリとIvsIで戦って負けた方が第3夫人だそうだ」

「ぬぬぬぬーっ！そんなの勝てっこないじゃないか、そんな勝負インチキだ、可哀そうだとは思わないのかこの悪魔め」

「ひっどい言われようだな、確かにリリはそう言ったが、俺もベルも許可してないそういう事だ」

「本当に悪魔だな君は、どうしてヴァレンなにがしを止めなかったん

「だい？」

「お礼だよ、俺達が強くなれたのはアイズさんの御蔭だしな、まあくなんというか2人には幸せになって欲しい訳ですよ、条件に入れたが後で全て解除するし、その後は好きにすればいいさ、俺が助けられるのはここまでだし」

「はっはーん・ベル君のスキルを再び目覚めさせようって魂胆なんだろう？うまくい話にして纏めようたってそうはいかなぞ！」

「うっ・・・なぜバレタし！」

「いい加減に君のボクたちに対する、嘘の攻略を逆手に取ったのさ、確かに先ほど言った言葉は嘘はない本心だろう、けど奥に隠れている感情を何時までも隠し通せやしないんだからな」

「なにこの神様パワーアップしてるんですけど・・・」

「ふっふふふーっ！思い知ったか大魔王め！」

「やだこの神様ちよーすごーいーそんな凄い神様、アイズさんのコンバートくらい許しますよね、当然ですよね？」

「いーやーだーいーっ！」

「しやくないか、大魔王の恩恵でもいいとしよう、多少の違いは有るけど、なんとかなるっしょ」

「はあ？」

「だから恩恵を再現するんですよ、魔法で理論上出来るんですよ」

「・・・うそ？」

「試してみるんで見に行きますか？」

そしてヘステシアと一緒に、アイズの休んでるキャンプへ行つて中で話す事に

「いやあ〜ヘステシア様が嫌だって言うんだよ、それでさアイズさん大魔王の恩恵でもいい？」

「出来るの？」

「背中出してくれます？」

アイズは俺達に背中を出すと、高速で脳内を動かして魔法を作っていく・・・

「行きますね」

自分の血で、作った盟約の魔法をアイズに使い、続いてステイタスの概念をヘステイアを通じて引き出してコピペする、さらに魂の器に制限解除を盛り込み、ついでに俺の趣味で少し弄る

「よし、出来たよアイズさん、違うか主従関係を結んでるからアイズよ」

「うん、それでいい」

「これがステイタスだ、今までと少し違うのは俺の趣味だ、けど間違はなく表示されているステイタスは、神々の使う代物とリンクしているから間違いない」

「・・・うそ」

驚きのあまり、ヘステイアは目を見開きアイズに渡した紙を奪い取り、彼女の背中を確認する、確かに間違はなく恩恵を受け取っている事に信じられない思いだ

アイズ・ヴァレンシュタイン【剣姫】

種族：ハーフヒューマン（精霊×人間）

肉体年齢：18 18／300

肉体状態：成長期 18／39

異性行為数：0

子供出産経験：0

マフィアミリア所属（解除不可）

Lv：6

力 I 40 計：3959

耐久 I 41 計：3490

器用 I 54 計：3641

敏捷 I 66 計：4568

魔力 I 59 計：4012

狩人 D

耐異常 E

剣士 E

精癒 F

魔防 I

魔法 エアリアル

スキル 精霊加護

精霊抱擁

大魔王の加護

※大魔導士オーバード 120/2400000

※魔闘気操作マジックオーラマスター 30/10000

0000

「おい悪魔くん、なにやら変なのまで記載されているぞ、一体どういう事なんだい！」

「仕方がないだろ、必要な部分なんだから、ヘステイア様だって知っているだろ」

「あーそうだな、確かに必要な部分も見えるね、けど・・・いっいつ異性・・・こっつ行為数・・・はあはあ・・・要らないじゃないか！」

「あーそれは俺の趣味かな、気にすんなって」

「なんだか疲れて来たよ、それでこの娘はハーフヒューマンだったのか」

「うん、けど言わないで」

「分かってるよ、神様ですよ！」

「ボクだって分かってるさそれくらい！」

そしてアイズにステイタスの紙を渡すと・・・今までにない記載がされておき、俺を見ながら再び紙に目を通す

「ねえ最後の所って？」

「下の2段は裏スキルだよ、それをその数値まで溜めると、その記載されているスキルが発現するんだ、分かりやすくしてみました、俺ってやっさしーっ！」

「へえく君って凄いなだね」

「俺に惚れちゃだめだぜ？、世界を分けた戦争になるからな、さすがにベル相手だと俺もヤバい場合がある」

「うん、大丈夫だよ」

「うわー…面と向かって言われるとへこむなあ…やつぱ俺にはヤンデレがお似合いなのか…」

「何の話だい?」

「言わない、絶対に言わない口に出すのも恐ろしいから」

「ふうん…この事はバラしてもいいんだね、さつそくウラノスの爺さんの所へ行つて来る」

「ひどくね?なあ〜大魔王様脅すとかどんな女神だよ、一応まだ俺眷属可愛くないの?」

「どの口が言うんだ君は、まあ〜いいさどうせバレるんだしね、好きにするといいさ」

「へいへい」

この後しばらくアイズがスキルに大魔王の加護とかについて色々聞かれたので、答えていると、ロキの気配がこつちに來てるのを察知「はい、質問はまたあとね、良い子はゆつくり休みましょう、おやすみアイズ」

「はい、おやすみなさい」

この後に俺達とすれ違いでロキが中に入って、恩恵を受けたと説明したが、まさかの大魔王の加護つて話に、ロキも同じ様に、無理矢理アイズの背中と用紙を見比べた

「んなほな、なんやねんアイツ!もうめちやくちやや、あかんウチ頭おかしなつて変な夢見とるのちやう?」

当然の様に俺の所へ問い詰めに来るロキ

「どういうこつちやねん!ウチに分かるよー説明せいや!!」

「あー大魔法の加護ね、あれは…ひ・み・ちゆ・はーと」

「僕も同じ道をさつきたどつたばかりだ、ロキなんというかご愁傷様?」

「あーどちびもおつたんかい!どななつとんねん、はよーしゃきしゃき吐き晒せぼけーっ」

「うるさい奴だな君は、ボクが恩恵を断つたら、この悪魔くんがやったんだ、ボクだつてさつぱりさ」

「どないするんやアレ、ウチのアイズたんががががーっとうとうとううっ」

「さっさと帰れよ、やかましいな、細かい事に一々反応しすぎ、それだから俺のアイズちゃんに嫌われるんだぞ？」

「あああん！死にたいんかワレ！もういつぺん言ってみー！」

「だくかくらく俺のアイズちゅわくくんだぞ？」

「怒りが有頂天や殺す・貴様だけは！」

「もういいか？コントとか疲れるんだよ、せめて戦争遊戯の後にしろよ」

「なんやくつまらんやつちやなあく」

決着

戦争遊戯も2日目に突入し、夜通しにぎやかに盛り上がる、オラリオの街も朝を迎えるが、一向に熱気が冷めることなく繁華街は大賑わいだった

住民達の今一番の関心は大魔王様、これだけで何日も盛り上がる事が出来る、酒が旨くなるわけで、どの酒場も夜通し続け大繁盛となった神々の半数くらいは、大人しくホームへ戻り、子供たちにどやされる事となり、一部では既に、コンバートの話まで出始めている

住民の多くは朝6時に起きて、今か今かと大魔王様の降臨を待っているのだった

翌朝7時に全てのモニターを再度登場させ、昨日思いついたバックミュージックを流しながら映像をさらに引き立てる演出をすると、会場もアツペンポの音楽に合わせてノリノリとなり、昨日同様オラリオの街は大盛り上がりを見せていた

『余が大魔王マファイである！、オラリオに住む屑共、住民共、屑紙共よ！大魔王生誕祭2日目開催を宣言する!!』

この宣言で、一気に街は大喝采が巻き起こり、随所で「大魔王」「大魔王様」の連続コールが鳴り響く

そしてジェスチャーで音を止める様に指示を出す

『昨夜愚かにも、余に夜襲をかけてきた愚か者共だ、今より愚か共の公開処刑を執り行う、朝から刺激的な朝になったのはアフォロン諸君の浅はかな考えゆえだ、恨むならアフォロン陣営を恨むがよい』

ただ順番に首を跳ねてもツマランのでな余興を行う、アフォロンファミリアのアフォ共よ、ヒュアキントスを素っ裸にして裸踊りを1時間続けさせろ、そうすれば処刑は取りやめてやる、これより30分後、外に出てヒュアキントスよ裸踊りをするがよい、このアフォ共の命が要らぬのなら予定通り順番に首を跳ねていくだけだ』

大魔王の席の後ろにある人柱となった十字架に張り付けにされた面々がゆっくり順番に映し出される、順番に長い棒で顔を上に向

けられると、何人かは小さな声で「ヒュアキントス様アポロン様申し訳ございません」と口にした、その演出でさらに異様な盛り上がりを見せる会場

そして待ち時間の間、朝から刺激的な内容を言い放つ大魔王様に、街は騒然となった

「おいおい、あのヒュアキントスが裸踊りだってよ」

「いやゝさすが大魔王様慈悲深いね、中継は城になったな、さて出て来るかな?」

「ここは出てこないんじゃないかね? あいつ等だってプライドくらいあるだろう?」

「じゆるり：美男子の裸踊りとか大魔王様は、私達が考えもしない様な素敵な事を考えるんだからあくもあくきゅんきゅんしちゃうわ」

「流石にやり過ぎなんじゃないのコレ?」

「ルールには違反してないしいんじゃないの?」

「大魔王様があいつ等の首跳ねたら、俺入信するわ」

「いやゝ完全に遊んでますね大魔王様は、アフォロン陣営どうなってるんだろうな」

「ひまわりの紙様息してるかな? ねえ? 息してる??」

ちなみにひまわりの紙様は、戻って来てたヘステイアに土下座をして、どうにか助けて欲しいと嘆願を始めるが、ヘステイアは知らん顔で無視をする

そしてその嘆願は、敵対したくない神々、なんとか媚びを売っておきたい神々は、ヘステイアを助けて、少しでも印象を良くしようと、ヒマワリの紙様を引きずり出す、その時に神々は、何らかのアピールをヘステイアにしていた

(やれやれ、ボクも偉くなったもんだな)

「ほんと楽しませてくれるわね、ヘステイアの子供達は」

「ヘファイストス! 君も来ていたのかい?」

「ええ、ウチからも1人貴女の所へ行ったでしょ、心配して見てくれ

ば、彼出番無さそうじゃない」

「いや、あのセットのほとんどはヴェルフ君の作品だ、デザインは違うけどね、使ってる武器も全部ヴェルフ君のだ、鍛冶屋に戦闘を期待してたのかい君は？」

「なかなか面白い事をするのね、てつきり魔剣を使うと思ってるだけだ」

「彼らは魔剣を使わないよヘファイストス、代わりに面白い物が見られるかもね」

「へえ〜貴女がそう言うのなら楽しみにしておくわ、それで大丈夫なの？」

「あーあの事かい、あれは全部演出さ、けど嘘は言っていないぜ、そういう事だヘファイストス」

「なるほどね、暫く一緒に居てもいいかしら？ここが一番みたいだし」

「ボクは構わないけど、変な疑いが来るかもしれないぜ？」

「もう手遅れよ、昨日の夜から問い合わせが来てるわ」

「そうかい、けど苦情は、あの悪魔君に全部言っちゃって来ていいぜ、作戦立案は全部あの悪魔君なんだからね」

その頃アフロロンの面々は、夜襲に半分の人数を使っており、残った半分も殆どは、ベルに魔力を全て奪われマインドダウンで目を覚まさない、残ったのは13人、その内1名は立てこもってしまい出てこない、呼びに来た団員をこごとく打倒しており、唯一回復魔法が使えるカサンドラがそんな状態で、怪我も回復できないでいた

「カサンドラはどうにもならないのか？」

「はい、立てこもったまま出てきません、呼びに行った全員がヤラれていきます」

「っち、使えん奴め！もういい残った全員で攻めるぞ?!」

「ふぎけるな！ヒュアキントス夜襲をかけた団員を見殺しにする気か!!」

「なら貴様、この私に裸踊りをさせる気か?!」

「やればいいだろ、夜襲もテメーの作戦だ責任とってこい！」

ここでヒュアキントスは団員を斬り伏せてしまおう、そうするといよいよ他の団員も、敵はヒュアキントスとなり一斉に取り囲んで武器を構える

「仲間を切るなんざ許さねーぞヒュアキントス！」

「そうだ、もう我慢の限界だ、テメーに従うのはこれっきりだ、貴様を殺して死体で裸踊りさせてやるよ」

そして内乱が勃発する、さすがに残っていたのはアフォロンの手練ればかり、ヒュアキントスは必死になって対応するが、処理しきれなくなり徐々に押されていく

そして団員の1人が、ヒュアキントスを刺すと、次々に剣が突き刺さり、ヒュアキントスは息を引き取ったのだった

そして時間になると、ヒュアキントスの死体を使い、必死になって裸踊りを始めるアフォロン達

その様子を、全て流していた為、あつけない最後に住民の全てが、ため息を漏らすのだった

そして1時間きっかり、ヒュアキントスの死体で裸踊りさせた団員達は白旗を振って戦争遊戯は、なんともしまらない結末で幕を閉じるのだった

『しかと見届けたぞアフォロンの団員達よ、夜襲を仕掛けて来た愚か者共は解放しよう、さらに白旗の宣言を受理しろ運営共』

少しすると、アナウンスが流れ

『アポロン陣営の白旗を受理します、よって戦争遊戯はヘステイアファミリアの勝利です！』

「おつかれさま、いや〜後1日は持たなかったか、残念だったな、もう少し遊びたかったのに」

「お疲れさまでしたマファイ様」

『さて、戦争遊戯はくだらない結末となったが、最後の余興を見て頂こう、ロキファミリアより、我らが眷属となるべく駆けつけた、アイズ・ヴァレンシユタインの眷属に相応しいか問う試験を執り行う、最後のLv7であるリルルカ・アーデの実力知りたくはないか？、特別に今

から披露してやる』

「余の前に両者来るがよい！」

いきなりのサプライズに、会場は再び盛り上がりを見せた、そして剣姫が登場すると、さらにヒートアップする

「おいおい本物の剣姫じゃねーか、まじか大魔王様の所へ行つたのか！」

「あれって、パルウムか？随分かわいい子じゃねーか」

「これってどうなるんだ??」

「あのちっこいのがLv7だと?」

「やっぱ大魔王様の部下だしLv7って言うし剣姫でもやべーんじやねーのか?」

「剣姫を知らないから言えるんだ、アレが負けるなんざありえねーよ」

そして両者が顔をあわせると

『最善を尽くせ、勝敗によって眷属にするかどうか決める訳じゃない、余に相応しいかどうかだ』

「よろしくおながいしますアイズ様、私が勝つたらベル様の第一夫人の座は私がもらいます、アイズさんが負けたら第三婦人ですいいですね?」

「うん、いいよ」

2人の温度差は少しあるが、アイズは昨日言われた様に、殺す気で倒しに行く決めていて、一方のりりは、マフィに時間を少しだけいいから稼げと言われており、それを実行するだけだ

『始めっ!』

開始の合図と共に、アイズは自分に風の魔法を使い、一気に距離を詰めて攻撃を仕掛ける、一切の迷いもなくりりを殺しに向かった

相手のりりは、ハンマーを片手にぐるぐる回しながら、動きをとタイミングを合わせて、カッキーンホーンホーンムラーン!

とんでもない威力で殴られたアイズは吹き飛ばされ、空高く舞うとそこから一気に風の魔法でブーストし超加速でりりめがけて突撃

しかしリリは、残念そうな顔をしながら、アイズに向かって

「これが劍姫アイズ・ヴァレンシユタインですか、思ってた以上に弱いんですね」

その声がアイズに届いたのかは分からないが、さらに加速して突撃すると、当たったと思つた瞬間に避けられ、地面へと激突してしまう「無様ですねアイズ様、これでもう終わりですか？」

そう言われると同時に、アイズは近接戦闘に持ち込むが、遥かに重いはずのハンマーで簡単に全て受け流していく、それでも攻撃を止めずにひたすら自分の剣を信じて必死に切り込んでいく

この様子を固唾を飲んで見守る冒険者や住民達、とりわけロキファミアリアでは

「このパルウムちゃんすごいね、ハンマーで全部受け流しちゃってるよ」

この様子を一番面白くない様子で見ているのは、ロキファミアリア団長のフィン・デイルナだった、自分こそは架空の女神フィアナ様に愛され、パルウムの再興を目標に何十年も頑張つて来たというのに、ひよっこり現れたパルウムの少女に全て奪わそうなのだ、歯を食いしばりながら見つめる先で、アイズと戦うパルウムの少女のあまりにもかけ離れた強さに畏怖すら覚える自分が恨めしくて仕方が無かった「ほお、あのアイズを子ども扱いか、ありやフィン、おまえより遥かに強いぞー！ぐあつははははははは」

「黙れ腐れドワーフ殺すぞ？」

空気が一瞬にして凍り付き、団員達の視線がフィンに注ぎ込まれる「それにしたってさ、アイズも冷たいよね、結局私達を捨てて行っちゃうんだもん」

「ティオネ黙ってなさい」

「空気悪くしたって仕方ないじゃん、もうこうなったら楽しく見るしかないんだしさ」

「そうじゃのおくティオネの言う通りじゃて、フィン殺せるもんなら殺して見よ、ちびっこにやれるならな」

戦いはアイズが必死に剣を振り、突破口を開く為、諦める事無く攻め続けるアイズ、それを退屈そうに受け流し、時折カツキーン！
ホーームラーション！

をやってアイズを吹き飛ばしていた

「すごいですねアイズさんは、全然かなわないのに、全然諦めていません」

「そうだな、剣姫の強さは、ここにあるんだろうな」

「やっぱり僕の目標はアイズさんだと改めて思いました」

「あははは、お前の方がもう強いというのに、アイズが聞いたら怒られるかもしれないぞ？」

「それでもやっぱり憧れですから」

「ならそれでいいんじゃないか？」

「うん」

そして、戦いは終わりを迎えようとしていた、魔力が尽き、鎧もボロボコになり、剣も不壊属性が付いているにもかかわらず、途中で折れてしまい半分なってしまった剣

アイズ自身も、心が折れるのをじっと我慢し続け、相手の視線から目をそらさず、睨み続ける

リリもアイズの目の奥の闘志が消えていないのが見えるが、同時にアイズの体の状態を正確に見極めている彼女は、俺の方を少し見て合図を交わすと

「もういいんじゃないですか？次に攻める時は覚悟して来てください、本気でやりますんで」

そう言うとりりは、次々に強化魔法を使って自分を強化していく、そして鬼の形相となり、とてつもない殺気が一面を覆いつくす

そのあまりの殺気に当てられた、アイズは涙を流しながら剣を下げ「参りました」

と言つて深く頭を下げるのだった

『素晴らしい戦いだった、劍姫アイズ・ヴァレンシユタインよ、最後まであきらめる事のない強い意志、強い心、折れぬ刃、見事であった、よつて正式に大魔王の幹部眷属としての所属を許す、貴様の二つ名はこれより、劍皇を使うがよい、さらに後日貴様の剣を打たせ褒美として下賜させよう、大儀であつた』

「うん」

『ベル・クラネル前へ！、貴様はたった一人で城を落とした褒美を与える、二つ名に、英雄王を使う事を認める、そして劍皇アイズ・ヴァレンシユタインとの交際を認めてやる、但し劍皇アイズが良いと言えはだ、さらに一夫多妻も同時に認めてやろう、大儀であつた』

「はっ！有難き幸せ」

『リリルカ・アーデ前へ！、劍皇アイズとの戦い見事であつた、魔王に相応しい戦いをした褒美だ、貴様には余から、小人戦女神メルトの二つ名を与える、さらに今後は名を改め、リリルカ・フィアナ・アーデと名乗るがよい、そして小人族パルウムの復権と復興をここに宣言し、これを認めよう、大儀であつた』

「はっ有難き幸せ！」

『ヴェルフ・クロツゾ前へ！、貴様は余と魔王達が使つた見事な武器などを打つた褒美だ、貴様には二つ名として、魔界鍛冶士デモンズミスの名を与える、そして劍皇に与える剣を打つ権利をやろう、劍の素材としてオリハルコン50キロを貴様に与える、余の名に恥じぬ剣を打つがよい』

「はっ有難き幸せ」

オラリオの住民は、まさか俺がオリハルコンを50キロもあるとは思つてないだろうと思ひ、わざわざ団員に持つてこさせ、しつかり

アップさせ見せびらかした後、ヴェルフに手渡した、ちなみにダンジョンで鉱脈を見つけたり、モンスタードロップで結構溜まって100キロ程度あるので懐は痛まない、幸運のアビリティを2人もが持っていれば、この程度はスグに溜まるのだ

『これで大魔王生誕祭は終わらせてもらう、大魔王生誕祭中に余に牙を剥く事の出来なかった者共に言っておく、今後は余と余の眷属らに、いかなる無礼も今後一切許さん、無礼な者には死をもって償ってもらう。』

この世界に住む全ての知恵ある者達よ、この大魔王に、恐怖するがよい！、平伏すがよい！、畏れるがよい！』

『余らはこれよりオラリオの街へ凱旋を行う、歓迎を持って迎え入れるがよい』

そして俺達大魔王軍は凱旋パレードをしながらホームへと戻る、俺達能通过る場所には道が出来ており、誰も邪魔する者などおらず、ゆっくりと移動した、メンバーは誇らしげに胸を張り、手を振り、知り合いの名前を呼んだりと様々だった、俺達の行く道の両脇には大勢の人々が声援を送ったり、叫んだり、拍手をしたり、手を振ったりと各々が自分の出来る方法で俺達を歓迎した

俺達がホームへ入り、門を閉じると、各所のモニターが消えていったが、それでも街の人々の興奮は覚める事無く続いて行くのだった

その頃バベルでは、ヘステイアがひまわりの紙様から勝利の賭け皿を受け取っていた

俺達が決めていた要望通り、死亡したヒュアキントス・クリオの件以外を全て要求し、誇らしげに帰っていく神ヘステイア、その様子を神々は思い思いに見守るのだった

た こうして戦争遊戯はヘステイアファミリアが完全勝利するのだっ

新たな世界へ

戦争遊戯が無事終わり、ヘステイア様も貰う物を貰ってとっとと俺達と合流して、夕方に再びヘステイアファミリア全員で、祝勝会へと向かったが、未だにホームの周りには人だかりが出来ており、未だにお祭り騒ぎだ、仕方が無いので隠し通路からこっそりと向かう事となった

戦争遊戯の祝勝会をバベルの会場で行う事になっていたので分散して向かった、バベルでの会場をアスファイが事前に手配しており、今回の作戦を聞いて、用意してしてくれたのだ、それで関係ファミリアも呼ぶとの事でタケミカツチとヘファイストスそしてミアハの3つまでは聞いていたし当然構わないが、なんでテメーらが来た！

そう当たり前の様にロキファミリア一行が、酒や食べ物を大量に持って来て当たり前の様に、居やがったのだ

「なぜテメーラが居る！呼んでないだろうがロキ共！」

「なんや、大魔王様口調おかしーで、どないしたん？」

「しかも宴が始まつてるし・・・とりあえず貧乳百合女神をつまみ出すところから始めようか」

「ああん！誰が貧乳や！それに百合ってなんや？」

「ホモが薔薇、レズが百合だつての、ここでは違うのか？」

「なにゆうてんのや、ウチは両方いけるで？」

「なるほどひまわりの紙様と同じなんだな、バイセクシャル同盟でも組んでただろうに、潰しちやつてオコなの？オコなのか？」

「あのひまわりと一緒にすんなや、ぼけえーなんやねんバイセクシャル同盟って、めっちゃくちゃ言うなく自分」

「なあやっぱひまわりで定着しちやつたの？」

「せやで、もう誰もアレの事アポロンなんて言う奴おらへんでー、いや〜ひまわりの反応めつき楽しくってな、大魔王様々やな」

「そっかそれだと、オラリオから叩き出したのは失敗だったな」

「せやで、惜しい事をしたなく居ったら毎回会うたびに笑いの種になったのになあ」

それから少しロキと話していると、アスフィに呼ばれ

「それでどうするんですか？このまま始めてしまっても？」

「しゃーないじゃん、せっかくな色々アスフィが用意してくれてたみたいだけど、適当に飲んで騒ぐしか」

「分かりました、けど団長の挨拶が無いと始まりませんか？」

「へいへい・・・」

部屋に聞こえる範囲での大声で、祝勝会の挨拶を壇上に上がって始める事に

「今日は戦争遊戯の勝利を祝して多くの方に集まって頂き感謝します、今回の戦争遊戯で協力して頂いた、ヘステイアファミリア、ミアハファミリア、ヘファイストスファミリア、タケミカツファミリアの皆さんお疲れさまでした。」

ヘステイアファミリアの代表として感謝を申し上げます、今夜は貸し切りです、思う存分楽しんで行ってください、ちなみにロキファミリアはおまけですので空気と思って接していればいいです、ではかんぱあー！ーい！」

乾杯の音頭と共に、料理や酒が運ばれてくる、各自が思い思いに語り騒ぎ飲み明かす中

「タケミカツ子様、命ちゃん大切に1年間預かりますね」

「いや〜断腸の思いで送り出したのに要らぬ世話だったようで、すまんかったなあ」

「いえいえ、彼女が来てくれたのは励みになりましたよ、ただ修行に行つて、彼女だ来たのを知ったのが遅すぎて作戦に組み込めなかつたんで悪い事をしたなど」

「それは仕方のない事だ、君が気にする事ではない、命の事よろしくな」

「はい」

そして次にヘファイストス様の所へ、数名と一緒に来たようで、お

れが挨拶に行くと、主神よりも早く団長の椿・コルブランドに捕ま
た

「おおー大魔王殿、この度の戦い素晴らしかったですぞ、それにし
てもヴェル吉めにオリハルコンを50キロとは、あのオリハルコンの
塊を見た時、うちでは大騒ぎになりましたぞ、よくあれだけの量を
持っておられた」

「いやあちよつと自慢したかったので、わぎとアップで映像に出した
んっすよ」

「それにしたつて、あの量だと何本も打ててしまふ、羨ましい限りだ」
「まあヴェルフも扱った事のない金属らしいので、練習用も含みで
すよ、だから色々教えてやってください椿さん、一応剣皇の剣を打た
せないといけないんで」

「それは構わんのだが、アイズの剣は元々神ゴブニユ様が専属で打つ
てたはずだったが、何か言ってくるかもしれないぞ?」

「まあ言われても問題ないでしょ、メインウエポンじゃないとかつて
言えばいいだけだし」

「あれだけのオリハルコンを用意して、メインウエポンじゃないとか
贅沢過ぎやしないか?」

「まあそうなんですけど、まともな剣を作る気は無いですよ、設計を
俺とヴェルフがやりますし、おおよその設計はある程度出来てますん
で、完成したらヴェルフが見せに行くと思うんで、ダメ出ししてやつ
てくださいよ」

「ふむ、楽しみにしていよう」

「ここでもうやくへファイストスが口を挟む」

「この大魔王君は、スキルスロットの概念を既に理解してるのよ、椿が
思ってるような駄目出し出来るような剣を持って来る訳ないでしょ」

「あらら、やっぱバレてました?」

「当たり前じゃない、それに何か隠してるでしょ?」

「へファイストス様が怖い件について・・・」

「いいから言ってみなさいよ、面白そうな事なんですよ?」

「あの槍が最終進化しました、その時発現した概念を使おうかな?」

て・・・」

「なっ！なんですって?! どうして持ってこないのよ」

「だってヴェルフに女神様を超えさせないといけないし、かなりぶっ壊れた性能だったし、売りませんからね?」

「ほらね、こういう奴なんだよ椿、ひどくない?」

「がっはっははは、そーでござったか、こりや騙されるところでした大魔王様」

そしてミアハの所へ行くと、ナーザーさんと一緒に居るので話しかけると

「マファイ君、随分派手にやったようだな、色々忙しくてあまり見ている時間が無かったが、戦争遊戯の勝利おめでとう」

「そういえば明後日でしたよね? 初のポジション作成体験講座は」

「そうなのだ、それで準備で追われていてな、応援には行けなかったのだ」

「そういえばひまわりのホームの件ですけど、正式に手に入ったので2回目以降は其方になるんですけど」

「本当にいいのか? たったの100万で?」

ひまわりのホームに関しては、アスフィや他の面々とも話し合っ Mia ハファミリアに格安で譲る事に前から決まっていたのだ、誰もひまわりホームを使いたがらなかったのだ、俺達も随分贅沢になったもんだ、少し前まで廃墟だったのに

「はい、むしろひまわりの使っていた場所を誰も欲しがらない可能性があるあるので、そっちの方が心配ですけど」

「いやいや、相当な施設だぞ、誰が使っていたとか関係なからう」

「じゃ〜100万でいいっすよ、けど店はあるそこでは無理があるかもですけど住宅街ですし」

「そうだな、それは今後ゆっくりやっていこう」

最後に元の席に戻ってゆっくりしようとしたら「ガッ」と掴まれ連れ去られた

「なんだよ、もういいじゃんロキ」

「なんでウチだけ呼び捨てなん？おかしい？」

「尊敬できる個所を自分で言ってみ？」

「ひどいやつちやなー大魔王様のせいで、うちの子達いなくなってもー悲しんどるのに、その扱ってあるう？」

そうなのだ、アイズを皮切りに、フィン、リヴェリア、ガレスが先ほどオラリオを出て行ったのだ、なのでここに居ない、来てるのは知らないメンバーだけでアイズも見送りへ行ったので居ないのだ、ロキは退団式とか送別会はしなしいたくなーいと言ひ張り、俺の所へ来たのだ

「なら送別会に行けよ、可哀そうに何十年もこき使ってポイとかひどくね？」

「いややもん、泣いてまうやんそんなのいやや」

「はいはい、だからって俺に絡むなや」

それから暫くロキに絡まれながら飲んでいると、ロキの所の団員の1人が爆弾発言をする

「ロキ様、そういえば次の団長って誰になるんですか？」

「おーそれって気になるよな、それで次の団長は誰なんだよ？」

「うーくん・・・誰やろ？誰がいい思う？」

「僕達はティオネさんかなって話してたんですけど」

「ティオネさん？ツンデレ狼とか百合エロフだと・・・いや百合エロフありじゃね？」

「なんやねんそれ、百合エロフってレファイナの事かいな？」

「こそ、百合ファミリアとして主神共々ガンガレ！エンブレムのピエロに百合持たせたりしてさ」

「最悪やああーないわあー・・・けど面白ろいかもな？」

「だろお？絶対に面白い事になるぞ、特別にLv6まで俺が面倒見てツンデレ狼より強くしてやればもつと面白くならね？」

「乗った！それでいいこう、大魔王様頼んでー！」

「ちよつと待ってください、お2人方共本気なんですか??ですよね？ですよね？嘘だと言ってくださいいよおおおおおーっ！」

「大マジやで？」

「これって話を振った僕の責任問題になりかねないですよ！」

ギャハハツハツハハ！x2

ロキの所の団員は、うかつな事をこの場で言った事に、人生最大の失態になってしまったと泣き始める始末に、俺達は大爆笑して大いに盛り上がった、こうして本人の与り知らぬ所で、恐ろしい事が決まったのであった、哀れレフィーア

「じゃーアイズと一緒に鍛えるから、明後日からレフィーアを暫く貸してくれよ」

「任せときー、それでレフィーアの貞操は絶対にやれんで？」

「何の話だよ、そんなの本人次第だろ？」

「レフィーアの貞操はウチが守るんやあーっ！」

「いいけど、俺とロキの与り知らぬ所でやってるかもしれねーだろうが」

「アホいうなや！そんな子ちやうねん、ウチのお気に入りやで？」

「はいはい・・・」

その後元の席に戻り、翌朝まで色々な奴らが入れ代わり立ち代わり、様々な事を語り合い騒ぎ、飲みまくった

「ふあああーっってまだやってるんだけど、アスフィどうしよう？」

「何の話です？」

「・・・カサンドラちゃんとプラス1名が、なんかしらないけど祈ってるんだよ、かれこれ6時間くらいは」

「うわーっ知ってて放置したんですか？」

「さつき出た時にサーチかけたらまだいた」

「行ってきてあげてください、後は私の方で大丈夫ですから」

「あい」

カサンドラちゃんの居る場所へ、すぐさま彼女達が何やら祈ってる場所へ向かうと、俺は宴の時に着ていた衣装に着替え、空からゆつくりと降りると

「待たせたかな？」

「ムーンライトプリンス様、また会えてうれしいです」

「うひゃくく本当に来たー！！」

「太陽は沈み背の呪縛から、ようやく解き放たれました。約束通りプリンス様にだけ夢を語り続けますので連れて行ってくださいませんか？」

そして俺はシルクハットとマスクを剥ぎ取り、深くお辞儀をして

「はじめましてプリンス、ヘステイアファミリア団長のマフィと申します、俺が貴方に近寄っていたのは、貴女的能力を知って利用したからです、その様な男に付いて行っても利用するだけですでお勧めしませんよ？」

「ほ…本当に、本物の大魔王じゃん！って利用ってなに？なんなの?! 大魔王様もしかしてカサンドラの夢の事信じてるの?？」

「もちろんですよ、まあくあの連中には手に余る代物で扱いきれなかったから、今回の作戦は、俺のやりたい放題できたんですがね」

「知っていました、けどマフィ団長だけでした、私の事を信じてくれたのは、お願いします私はマフィ団長様についていきたいです!!、私の夢も含めて全ては貴方に捧げたのです。私でよいなら存分にお使いくださいませ」

「なら遠慮なく使わせてもらおう、俺専属になって貰うから本当の眷属にするが、いいのか？」

「はい、生涯を賭してマフィ様にお仕えいたします」

「わかったよ、背中を出せ」

「え？え？何が始まるの?？」

話しに付いて行けず、オドオドし始める一緒に付いてきたダフネ、そっぴやカサンドラが濃すぎて彼女が空気になってたわ・・・

そしてカサンドラはいきなりワンピースを穿けると脱ぎ始める

「ちよつとまったー！何してるのかな?？」

「ダメですか?」

「ダメです、背中出すだけにしておきなさい、いつもそうなの?」

「まさか、あのヒマワリに肌を見せるなどありません、マフィ様に恩恵を頂ける喜びでつい・・・」

「え? ひまわりって何もしてこなかったの?」

「あーあまり知られてないんだっけ? あの神様って不能だよ? 自分の周りに気に入ったのを侍らせるのが趣味なんだよ。ってそんなことよりもさ、色々話に付いて行けてないんだけど!」

まじか! 不能のひまわりかよ! どんだけ笑いを作り出すつもりだ、ロキに今度聞いてみよつと

「なるほどね、俺のは少し時間がかかるから我慢しろ」

「はい!」

「おーい、2人して無視? 虫なのですか?! うわああーん!」

「悪かったよ、泣く事無いだろ? カサンドラの友達さん」

「どうやらウソ泣きだったようで、カサンドラに「放置していいですよ、だよねくくダフネちゃん」とか言ってって黒いオーラ出してるしダフネも何度も頷いて・・・ガクガクブルブル状態に、なぜに付いてきたし・・・」

そしてカサンドラに恩恵を刻むとステイタスが現れるが・・・

真名：カサンドラ・イリオン

種族：ヒューマン

肉体年齢：15 15／65

肉体状態：成長期 15／19

異性行為数：0

子供出産経験：0

マフィアミリア所属（解除不可）

Lv：2

力 I 41 計：520

耐久 I 77 計：659

器用 H 154 計：978

敏捷	I	51	計：609
魔力	G	259	計：1214
治癒	H		
魔法	ソールライト		
	キユア・エファイアルテイス		
スキル	焦愛呪魂縛ヤンデレ		
	大魔王の加護		
	※星読法皇ハイエロフアント	11734	／25000

0

うん、ステイタスは散々だな、よくLv2になれたなって感じだ

スキルは決して有ってはいけないのがあるのですが……

焦愛呪縛ヤンデレの効果は想う相手の事を焦すほど愛し続ける限り効果は持続、愛い焦がれるほどに効果は向上し、普通の愛や愛情などでは効果は発揮しない、どちらかの感情が憎しみに変わり1年継続すると急激に老衰し始め死亡する、焦るほど愛した相手と性行為をする度に魂が双方強化されていく、性行為初体験を愛焦がれた同士の場合に限り、種族の位が1段階上がる

どうするんだよコレ！見せれないやん、怖えーYO！下手したら俺死ぬじゃん！

うん、危ないし表示しないように設定しよう……こういう事が出来るのも恩恵を魔法で再現した俺の特権だ、ヘステイア様みたいに最初から設定されているのを使ってるのとは違うのだよ、スキル自体を無効には出来ないのは一部を神々の作ったシステムに同期させてるからなんだけど

星読法皇ハイエロフアントは俺達の裏スキルみたいな感じなんだろう、現在は発現してないので詳細分からないけど、おそらくは予知

夢の完成した姿だと思う、これとヤンデレが完全に重なる時・・・俺
終わる気がする

「カサンドラ終わったよ、紙に移したから確認してくれ」

「はい、マフィ様」「本当なの？カサンドラ見せてよ！」

「うん、ダフネちゃんにも見せていいですよね？マフィ様」

「カサンドラが良ければいいんじゃないかな？」

「はい、ありがとうございます」

そして渡されたステイタスをはしやぎながら2人で見てる、どうやらステイタスはうまく表示されているようで良かったが、項目が増えているのと、大魔王の加護の所で2人は驚きを隠せ無い様で、ダフネは俺と紙を双方何度も見て、目を丸くしている

「マフィ様ありがとうございます、項目がいろいろ増えてて分かりやすくなってます、本当にありがとうございます、これで名実共にマフィ様に仕える事が出来ると思うと、胸がいつぱいです」

「いやいやソレは、そうなんだけど、気にする方は、大魔王の加護の方じゃないの？」

「そうでした、私にもスキルが発現したのです、これもマフィ様からの恩恵なので大切にします」

「それで大魔王の加護ってなんなの？」

「大魔王の加護は、魔力の回復速度微UPと、特定のスキルが若干発現しやすくなるかな」

「へえ〜特定ってどんなスキルなんですか？」

「通称裏スキルってなので、極めるとスキルが発現する、この辺りは機密部分で俺達の強さの秘密になってる部分だな、まあ俺が知ってるのは2つだったけど、カサンドラのハイエロファントが同じはずだから、3つ目になるのかな？」

「あ〜この項目ですね、それってすっごくくない？ハイエロファントってどう言う効果なんです？」

「始めて見るスキルだし、発現前だから効果も分からないけど、たぶん予知夢の完成形だとは思うんだけど」

「すっごいじゃんカサンドラ！あれってスキルとして発現する前の段階だったて事じゃん！」

「うん！やっぱり私は今日こうしてマフィ様に出会う為に産まれて来たのだと確信させられました」

「スキルも凄いなんだけど、なぜに性行為回数とか出産回数とかが出る訳？」

ダフネに言い寄られ、すっごい冷たい目線が突き刺さる・・・助けて！カサンドラっ

ってステイタスの紙を抱きしめてうつとりしてて俺達に気が付いてくれない、仕方が無いので言い訳する事に

「そ・その2つは、とあるスキルに関係してるんだよ聞くなよ恥ずかしい」

「へえくもしかしてさあ〜大魔王様なのに経験ないんだあ〜？」

「いいだろ別に、それよりもホームへ戻るぞ」

「まってよ、ウチも大魔王様の眷属にしてよ、お願い！マフィ様」

「まじかよ！どう思うカサンドラ？」

「う〜くん、私がいいと思うよ〜ダフネちゃんなら、けどマフィ様が嫌なら断わってもいいですよ〜？」

「カサンドラが良いというならいいけど、特別に何か項目も増やしてみろ？例えば・・・性癖とか」

「何言ってるのよ！ダメですよ、いくらマフィ様でも恥ずかしすぎます！」

「へいへい、素っ裸にならなくていいから背中出せよ」

「カサンドラと一緒にしないでよ！」

真名：ダフネ・ラウロス

種族：ヒューマン

肉体年齢：16 16／68

肉体状態：成長期 16／19

異性行為数：0

子供出産経験：0

マフィアファミリア所属（解除不可）

Lv：2

力 H 168 計：1103

耐久 H 157 計：1025

器用 I 59 計：781

敏捷 H 125 計：1055

魔力 I 25 計：658

耐異常 I

魔法：ラウミュール

スキル：大魔王の加護

うーくん・・・ぶつちやけ残念としか言いようがない、魔法持つてるのに魔力は低いし、ステータスもカサンドラ同様に残念としか、スキルも無いので今後どうするのが鍵だろう

「意外だったな、0とは思わなかったよ、俺にあんなこと言う割に」

「悪かったわね！しょうがないじゃんヒマワリ様は、処女厨でもあったから団員も手出しできないでいたし」

「うわ・・・何というか、ついにダフネまでひまわり呼ばわりか、やっぱオラリオ追放するんじゃないかった、元子供にひまわりと呼ばれる所見たかったなく・・・」

「もういいじゃない！ウチ達の事はさー！、それ・に・ウチはマフィ様にしか体許さないから心配しなくて・い・い・い・よ♡」

「はいはい、そういうのは本当に好きになった人に言っただけよ、このファミリアは基本的方針も何も今の所なものもないし、2人共その辺は好きにしていぜ」

「何を言ってるんですかマフィ様、このファミリアはマフィ様のハーレムなのでしょ？」

「ナニソレ怖い・・・」

何を言い出すんだカサンドラは、まさかヤンデレの癖にハーレム認

めるとはこれ如何に??逆に怖いんだけど

「うううう・・違うんですか?」

「違うけど?なにか夢でも見たのか?」

「はい、薄っすらとですけど・・その・・あの・・マフィ様が・・」
「え?」

あかんやつや・・これ絶対あかん夢やで!相変わらず口調がロキヤで!

「ちよつと後で聞くから、いい子だから黙っててね!」

「はい!カサンドラはいい子だから黙ってますね、マフィ様」

「よし、これからの予定だけど、2人はヘステイアファミリアのホームへ行つて、部屋が割り当てられてるはずだから、今日はそこで休んで明日から、副団長のアスファイに従つて動いてくれ」

「は〜い」「はい!」

ホームへ戻り、アスファイに2人の事を任せて、魔界で寝たらすぐ戻り、今日の予定を進めていく、明日ミアハファミリアのポーション作成体験の初の授業になるので、最終打ち合わせに行ったり

魔界に居る時に確認していたファミリアの報告書に対して簡単な指示を出したり

2人の事をファミリアの人達に紹介したり、歓迎会の日取りを決めたり

募集もしてないのに何十人も人がファミリアに入りたいと言ってきたので、後日正式に募集するので来てほしい旨を伝え

アイズ、ベルの2名が魔界へ行かせろと言い出して、このクソ忙しいのにと蹴り飛ばしたり

とおもったら、りりが泣き付いて来て「私だけ除け者にするんですベル様は!」とか言い出して、とりあえず再度ベルを蹴り飛ばし

ヴェルフの予定を抑える為に、あれこれ手回したり、新たな鍛冶場を魔界に入れる為に、建築屋に簡単に鍛冶場を移動できるように作って貰ったり

ホームの設計図を渡して、細かい打ち合わせをしたり

拡大に伴う土地の買収書の最終契約に向いたり

つとまあ大忙しの1日の最後は、2人の歓迎会で、また宴となり大騒ぎをして、ようやく1日が終わった

そして数日を魔界でリフレッシュして再び戻り、今日からの予定を進める準備をしていると

「1人だけ魔界で休むとかどう言うおつもりなんですか？」

つとアスファイが準備している俺に嫌味を言ってくるので

「いいでそ別に！俺の能力なんだし、それでアスファイは仕事溜まってるの？」

「えーそれはもう、数日寝ておりませんよ、いいな〜うらやましいなあ〜これじゃ倒れちゃいそうです」

「わーつたよ、鍵貸すから行って来いよ、けど数日にしておけよ、予定がこの後あるんだから」

「さっすが！じゃく先に行って待ってますねマファイ団長♡」

「ふざけんな！この後にロキ達も来るんだし対応しろし！」

「大丈夫ですよ、もう後の事は全部任せてありますから、それでは失礼しますね」

そう言つてアスファイは俺の部屋にある扉へ向かって行った、なんつー女だ、仕事がキツチリやってある分何も言えない事をいい事に・・・むむむっ！

俺の準備がおおよそ終わった頃、今度はヘスティア様が来て

「おーい悪魔くん、もう行く準備できたのかい？」

「出来ましたよ、それでその背中に背負ってる荷物は何なの？嫌な予感しかしないんだけど」

「ヴァレンなにがしがベル君に早まった事をしないか見張りに行くのさ」

「そしてあわよくばベル君と甘い生活再びか？」

「そう！そうなんだよ、だから今回も頼むよ悪魔くん」

「別にいいけどさ、ロキには黙ってるよ、言えれば必ず付いてきやがるぞ」

「当然さ！何が楽しくてロキなんかと一緒に行かないかなきゃならないんだ
い」

そしてカサンドラ組が俺の所へ来る

「おはようございませすマファイ様、今日からアスフィさんの元で指示を
仰ぎたかったのですが、どこにも見当たらないのですが、どうしたら
よいのでしょうか？」

「昨日は何か聞いてた？」

「いえ、今日の事は何も聞いてなくて、何かあったらマファイ様に頼れと
だけ」

あんにやるー！魔界から追い出してやる

「分かった、少ししたら戻ってくるはずだ、それまで部屋で待機して
ろ」

「はい！」

そして魔界から強制帰還を果たしたアスフィは、どうやら風呂に
入っていたようであらぬ姿だ

「きやあああああああー！ーっ！」

「うん、朝から素敵な姿だな、俺を誘惑してるのか？」

「何てことするのよ！私が強くなったら絶対に大魔王討伐に名乗りを
上げてやるんだから！」

「それは好きにしろ、それよりもカサンドラ達の今後のスケジュール
どうして何もないんだ？」

「あー！だって私はヘステイアファミリアですし、マファイファミリア
は関係ないですから、ご自分でなんとかしてください」

「そういう冷たい事を言うんだ、なにになにアスフィちゃんは、やきもち
なの？だから彼女達放置で魔界生活エンジョイなんだ、ひっ
でえーっ！」

「とにかく、マファイファミリアに関してはご自分で世話してください、
私も手がいっぱいなんですから」

「そう言う事を言うんだね、いいもん、おいらは自分のファミリア達だけを必死に鍛えるから、そうだ、魔界をバージョンアップさせてもう一つ作ろう！そうすればヘステイアファミリアとマファイファミリアで別々に過ごさせてプライバシーも守れるいいな！そうしよう」

「別にいいわよそれで、それでは前のバージョンはヘステイアファミリアに頂けるのですよね？」

「カギは一つしか作らないぜ？それでもいいならどうぞ」

少しした後、ヘステイアメンバーは数名をアスファイが引き連れて魔界へと向かった

その後、昼少し前にロキがレファイアを連れて来たので、少なくなってしまったヘステイアホーム内に俺自身が案内をして応接室に通すと

「なんや、人少ないんやな、アイズたんひさしぶりやなあ」

「数日ぶりなのに何言ってるんだよ、メンバーは色々忙しいから出かけてるんだよ、それで期間は3カ月になるけど大丈夫なのか？」

「ええで、それで加護はどうするんや？」

「無しでも行けるし、1年とかの縛りもないし好きにすればいいぜ」

「そやな、それでウチも付いて行ってええか？」

「なぜそう言う話になるんだよ」

「ドチビも付いて行ったんと違うか？魔界に」

「魔界？あれはネタだぞ、信じてるのか？？」

「それはないな、魔界の言葉が出た時に全員が真偽を見極めてたんや、だけど神々の誰も否定できなんだちゅーことは存在するんやろ？」

「俺が名付けた地域をそう呼んでるだけだ、想像する様な場所は無いぜ？」

「せやから、その魔界って名付けた場所に連れて行ってほしいんや、おもしろそうやん！」

「メレンに居酒屋魔界ってのがある、ゆっくりとしてくるといい、俺達は修行に行くしファミリアのメンバーと騒ぎに行くといいかと思うぜ」

「地域やゆうたやん！なんで居酒屋やねん！自分神々にうまいこと言い逃れする術持つてるようやけど、ないわー」

「ったく・・・条件がある」

「ゆうてみ！なんや??」

行けるかもしれないとまへのめりになって聞いて来るロキ

「何があっても俺達の秘密一切を漏らさない事、魔界での生活の家事雑用すべてをロキが行う事、魔界では俺の指示に絶対服従する事、魔界の事に関する質問には一切答えない、これを守るなら連れて行ってやるよ」

「なんやめちやめちや条件おおすぎひん？」

「それじゃく暫くレフイーアを預かりますので、今日はご足労ありがとうございました」

俺は早口でそう言って立ち上がり、ロキを叩き出そうとすると

「まってー！条件飲むから、ちゃんとやるから！連れて行ってー！今なら特別にウチの体好きにしてもいいから連れて行ってー！な！」

「うわくはないわあ・・・ロキって女性としての価値を自分であると認めてるんだ、引くわ・・・めちや引くちゅーねん。さてこの痛い女神は無視して行こうか」

そう言つて、ロキ以外で部屋を出ようとすると、ぎやぎやうるさいので

「あーもう煩いな！発情期ですか?！」

「せや発情期やから連れて行ってー！なー」

「追加で条件だ、俺達の事を魔界以外で喋れない様にする結界をロキの口の中に入れるぞ?」

「よっしゃー！乗ったええで、これで行けるんやな、準備は出来てるんや、今すぐ取つて来るから待つときー！」

そう言つてロキは玄関に勝手に置いていた荷物を引きずりながら持つて来る

「なあこの間に逃げたいんだけど、ダメかな?」

俺がレフイーアにそう聞くと

「ダメですよ！神との約束を破ろうなんて、失礼過ぎます」

なんだよ女版ベル君かよ・・・

「しっかしよく納得したなレフィーアは」

「はい、厳しい道のりになるとは思いますが、アイズさんと一緒に修行できると聞いて、昨日から嬉しくってなかなか眠れなかつたです」

「ふうくん、他には・・・そうだな新しい団長の件で話はあつたのか？」

「あくそれでしたら、半年後に勝負して優勝したら団長とは聞きました、なので皆さん朝早くからダンジョンとかへ向かって行きましたけど、私には色々無理ですので、自分のペースで頑張ろうと思ってます、そんなことよりもアイズさんと3か月も一緒に居られる方が重要ですし、マファイ君ありがとね」

盛大に勘違いしてる・・・うん・黙っておこう！

こうして新たに作った世界へ向かうのだった

永年の旅

「さて魔界へ行くぞ、はぐれない様に付いて来いよ！」

「まてまてまてー！なんでそない軽装で近所に行く感覚なん？おかしいやん」

「うるさいのは置いて行くから、行くぞ」

「「はい」」

「自分らもおかしいと思わへんの？なあゝアイズたん、レフィーアたん」

「思わない」

「ロキ様あまり騒ぐと置いて行かれちゃいますよ」

俺の部屋の新たな扉から、新しく作った世界へ向かう、そこには新たに建てられた建物などが完成しており、俺達の到着に気が付いたヴェルフが

「よおく遅かったじゃねーかマファイ」

「悪かったなヴェルフ、駄女神がうるさくてな、それにしてもよく1人で建てたな」

「おう、要望通り出来てるぜ見てくか？」

ヴェルフだけは俺預かりにしろと言ってあったので、先にヴェルフに材料と共に行ってもらったのだ、アイズの剣の事もあるのですんなり受け入れられ、ヴェルフも問題ないとの事でこうして先に来て貰って準備してもらったのだ

「いや、先に色々説明してからの方がいいなヴェルフもあまり良く分かかってないだろ？」

「そうだな、時間の事しか聞いてないな」

そして全員に色々説明していく、途中ロキが煩過ぎるので隔離はしたけど、大概は説明して、ロキの口の中に約束通り情報を外へ漏らさない様に施して、ここに慣れる為に1日の猶予を与え、部屋割りや色々な事を決めていった

「さて、カサンドラとダフネは本来は俺達の世話をさせる為に連れて

来たんだけど、ロキが代わりをするから、どうする?」

「私達は一緒に修行できないんですか?」

「いいけど厳しいぞ?俺的にはカサンドラに手荒な事はあんまりたくないんだけどな」

嫌われたら俺の生涯が終わるからな・・・危ない橋は渡りたくない
「そ・そんなあくけど私も冒険者の端くれです、マフィ様にされる事でしたらなんでも受け入れますわ」

ですよねえ・・・どうやって断ればいいんだ?・・・思いつかない、隔離して育てる他ないな

「カサンドラは、俺とマンツーマンで修行する、皆を鍛えてる時は、ロキの手伝いを、皆が休んでる時に一緒に頑張ろう」

「ほ・ほんとうですか?!あゝ私幸せ過ぎて・・・もう死んでもいい」
駄目だからね!主に俺の命掛かってるから駄目だからね!あーそれは関係ないんだっけ?もう訳分からん!

「なんでカサンドラだけマンツーマンなのですか?」

少々怒り気味の、メンバーを代表してダフネが問い詰めて来る

「なんでって、唯一俺が選んだファミリアメンバーだぞ?勝手に無理やり入って来た奴らと対応が違ってても問題あるとは思えんが?」

「それでも、ずるい」

「アイズさんの言う通りです、特別扱い反対!」

「めんどくせーな、じゃー帰れよ、仕事ならいっぱいあるし」

その一言で黙らせると、さっそく訓練メニューを行っていく

まずは裏スキルの開発から初めて、手合わせも息抜きがてらにやっていく、前回と同じ方法だ、多少効率化を図って色々やったけどね

そして各自に課題を与えて行わせると、カサンドラを呼び出して2人で別の世界へ

「色々あるんですね、やっと2人きりになれて嬉しいですマフィ様♥」
すっごい色目使いで見えて来るカサンドラはやや興奮気味で、ぺったりとくっつき纏わりついている、この状況に嫌だとは言えない男性・・・うらめしい

「それじゃ〜一緒にやっていくぞ、まずはコレを受け取って指に付け

ろ」

そう言つてカサンドラに指輪を渡すと、受け取つたカサンドラは眼をウルウルさせて

「はい、旦那様♡」

なぜか勝手に結婚指輪化しちゃつた！違うからねそれ成長期維持とかの為だからね

「勘違いしてるみたいだけど、それは成長期の体を保つためのマジックアイテムだから、他のメンバーの一部にも以前までは持たせてあつたし」

そうなのだ、もう下手に持たせておくと色々和不味いからと、ベルトリリからは奪つてあるのだ、アスフィは頑なに拒んだし、彼女自身が作る事は可能なのでそのままだけど、それでも魔界は老化しないんだし十分だとは思うんだけどね、ちなみに俺は常時装備してるけどね「そんな凄いマジックアイテムを結婚指輪に頂けるのですか・・・カサンドラは幸せ者です旦那様」

あーあ・・・聞いてないや、だめだこりや

「せつかくオリハルコンで自作した指輪を用意してたのになあ・・・仕方ない」

ここでカサンドラが動きを止めて、俺の方を向くと

「うううう・・・意地悪ですマフィ様は、けど私はこれで大丈夫です、大切にしますね旦那様」

「まず旦那様って気が早すぎませんか？カサンドラさん」

「もう、私の事をそんな他人みたいに呼ばないでください、ぶんぶん！」

そういつて甘えて来るカサンドラ、あく駄目かも、すっげーいい匂いするしDTには耐えられそうにもありません

それから修行つて何それ美味しいの？と言わんばかりにイチヤイチヤし始める2人、性行為こそはしないにしても、甘い甘い時間を過ごしてると設定してあつたタイマーが鳴り響く

「あくカサンドラ時間みたいだ、戻らないと」

「嫌ですうう旦那様と永遠にここで一緒に居ましょ、お願いもつと好

きにしていいいから♡♡♡」

カサンドラは俺の首に手を回して、体を俺に絡ませキスの嵐をしてくる、あくもう・・いつか？

この空間と他の魔界などは時間の流れが同じ、なので今俺達2人の居る世界の時間を停止させて、思う存分にカサンドラと楽しむことに

数年後

「もう流星に戻るぞカサンドラ、いい加減にしないとご褒美はお預けにしてしまうぞ」

「んにゅぽにゅぽにゅりゆるぼうすこじだけでんんんー」

肉欲に完全に溺れる新たな女神がそこに居た、初体験のみに効果があるはずの種族の位上昇は時間を停止した状態では何度も初体験だったのだ、時間停止空間と、ヤンデレの効果でカサンドラと俺は最上位の位にまで達してしまい

俺は、大魔王から時空と魔法を司る大神マフィへと変化、カサンドラは、ヤンデレのスキルが限界突破して消えた瞬間に光り輝き始めて、予知と焦愛を司る女神カサンドラへと変化し家名などを持たない只の女神カサンドラへ至ってしまった

カサンドラが今までにない光り輝き神々しくなつて進化した時にステイタスを表示した時は、色々な意味でオワタ・・・って感じた
神へとクラスアップすると、それ以降は何も変化はなくなったのも関わらず、ずーっとお互いを求めあう生活を続けた

「時間を停止した空間とて、いつまでも続けていてもお互いの為にはならんだろ、俺は出るぞカサンドラ」

「はい、では付いて行きます大神マフィ様」

部屋から何年ぶりなのか分からないが、久々に外に出ると、再び時間の流れを感じる

「待たせたな、修行の続きをするぞ！」

カサンドラを待らせ、何もなかったかのように外へ出ていく一行

「まちーいーいや！流石に今回は言わせてもらうで！なんや自分ら完全に神になつとるやないか！何があつたんや一体！」

やっぱスルーさせてくれないロキに、俺とカサンドラ以外は、よく言ったロキ！と言った表情を浮かべる

「進化して神に至った場合は、制限ないよな？ロキ」

「さてや！まずなんでいきなり2人共が神に至った事から説明してーな！」

「うくん・時間停止した空間で色々してたらそうだった、以上」

「まったく前代未聞やで、なにがどうなつとるんや」

「まあ〜オラリオへ戻って何かと制限があるなら、俺達は別の世界へ行く事になる、だから修行は、この数年が限界と思つて頑張つてくれ」

「はい！」「うん」「おう！」「え？ええええええええっ！」

こうしてオラリオの時間で2週間をみっちり修行し、各自がそれぞれに力を得た

帰り際に、アイズには出来上がった最強最悪の剣を渡した

「これが神の剣エクスカリバーだ、鞘を持つて戦えば常に体は最高潮の状態を維持できる、剣もネオオオリハルコンという合金が使われており、たとえ損傷しても鞘に入れておけば最高の状態を維持する、切れ味もアイズの意味に反応して切れ味が変わるようになっていて、それとまだ目覚めていないが剣事態に生命が宿っているからその内話しかけて来るだろう、パートナーとして扱うといい」

「なんつーーもん作るんや！反則過ぎるわ！へフアイストスとか鍛冶神どもが激怒するちゅーねん！」

「ありがとう、大切にするね」

「まずは剣に真に主人として認められる様に、今後も努力するといい」
「だからーら！アイズもそないなもん持ってたら、やばいちゅーねんー！」

「剣に認められたら人格が出て来るの？」

「たぶんそうなるはずだ、そうなたらアイズの力は、何倍にもなるはず」

「分かった、今日までありがとう」

「じゃー行くといい、俺達は他の世界へ行く、お別れだ」

「マファイ、また会えるよな？」

ヴェルフが俺に詰め寄り涙を滲ませながら、そう言って来る

「お前だけであのエクスカリバーを超える武器を作ったら会いに行くよ」

「ふん、上等だぜ！達者でなマファイそしてカサンドラ様」

「うううカサンドラ様、」

別れを惜しむダフネはどうにもカサンドラが神に至った事で、変化があり様をつけて呼ぶのには抵抗あったので、何度も別にいいとカサンドラと俺とで説得したが、それでも必死に様を付けようとしていた「ダフネちゃん、離れていてもずっと友達だから、心配しないで」

「う・うん、またいつでも会いに来てね」

「うん、ちよくちよく会いに行くね」

「レフィーナLv7おめでとう、たぶん戻ったらロキファミアリアの团长になるだろう、その姿を何時か見に行くからしつかりな」

「はい、マファイ様もカサンドラ様もどうか達者で、本当に色々ありがとうございました」

「最後までやり抜いたんだから、簡単に死ぬなよ？」

「はい！」

そして最後にロキに手紙を渡すと

「これをそれぞれに渡してやってくれ、嫌な事を押し付けるかもしれ

んが、頼む」

「わーっただで、任せとき」

「それと、アイズに関しては何れに任せ、戻らせるもいいし、ヘスティアファミリアへ移籍させるもどちらでもいい」

「わかったで、ウチに戻って来てても文句言うなや？」

「言わねーし！、けど元に戻る方がいいだろうな、ただその場合に団長候補戦には参加させるなよ？死者が出かねん」

「せやな、アイズさんの事やから手加減が出来ずに殺してまうかもしれへん」

とはいうものの、レフイーアの方が強かったりする、これはLvと言う概念が縛りとなって制限がかかり、俺達の訓練方法はLvが低く成長期真っ只中であればあるほどに強くなるからだ

そして別れを済ませて、彼女達は魔界から出ると、扉を消していく
ヘスティアの一行も部屋を出るので、扉を消してオラリオからの扉は全て消すと

「カサンドラ面白そうな世界を見つけたんだ、付いて来てくれるか？」
「はい！マフィ様の居場所は私の居場所ですから、何処へでも付いて行きますわ」

こうして2人は永遠の時間を旅するのだった